

有明工業高等専門学校紀要

第 4 号

昭和 43 年 12 月

Research Reports
of the
Ariake Technical College

No. 4

December 1968

Published by the Ariake Technical College
Omuta, Japan

次

—— 肥後連歌史のうち・桜井素丹伝資料(1) —— …………… 棚 町 知 弥 ……… 93

本校学生の性格検査に基づく考察

寺 本 匡 謨
荒 尾 章 三

＜昭和43年9月3日受理＞

A report of the results of the three personality tests.

We gave the three personality tests—Yatabe-Guilford T., Rorschach T. and Kraepelin T.—to all the students with the intention of getting some data available for the guidance. And here we—the reporters—will set against the analysis of the data our own views of the behaviours of the average students and of the students who belong to the sports clubs, and will consider the relation, the difference and so forth between them.

Masaaki Teramoto

Shozo Arao

はじめに

性格の発達変化に順序があるようだ。それぞれの段階で多様な個人差が認められるが、それでも1、2年生らしい性格があり、4、5年生は4、5年生らしい性格特徴が認められる。性格がいかにつくられるかという問題を論ずるためには、それぞれの段階における性格の姿について一応の知識をもっていなくてはならないと思う。私達が日頃考えていた性格検査の結果によるスポーツとの関係、又性格検査の分析指導及び観察指導との関係についてまとめる時期が来た。本校では学生指導の資料を得るために全校生に昨年矢田部ギルフォード性格検査（YG）とロールシャッハ及びクレペリン検査の3種の検査を実施したが、検査の結果と私達が日頃学生の日常生活での観察指導した印象との間に関係が深いように思われる。勿論観察指導は視診（言語、態度、その他）と多年のカンでの判断であるので差異はあると思うが一応何にかが得られると考えた。

第一章 本校クラブ（体育）員の性格について

〔1〕 目的

本研究は、体育指導（カウンセリングを含む）の一助とするため（Yatabe-Guilford）性格検査により運動選手を中心として調査した。

性格的に望ましい人間を形成する事は、体育の主要な目標の一つに上げられているが、特に運動選手にかなり性格的に予想に反した者を見出す事がある。

いわゆるスポーツと云う特殊環境に於いて、すべて良好なる方向へのみ生れるとは考へられない。

そこでスポーツ選手が特殊なスポーツ集団の経験を経て如何なる性格特性の傾向を有するかを見出し、パーソナリティ形成の指導上からも、学生の精神生活指導に鋭い観察をする事が、大切であると思われる。

もし結果としてあらわれた特性が何か問題があれば、その原因、理由を追及し、指導の参考と成る糸口をつかもうと考へこの調査を実施した。

〔2〕 調査方法

1. 昭和42年運動クラブ員 261名（S42.6）

集団的競技 ラグビー（38名）サッカー（53名）
バレー（20名）バスケット（16名）
硬式野球（26名） 計153名

個人的競技 柔道（26名）剣道（14名）
陸上（16名）テニス（27名）
卓球（25名）計108名

2. 昭和43年度運動クラブ員（一年生は除く）157名（S43.7）

集団的競技 ラグビー（20名）サッカー（26名）
バレー（15名）バスケット（5名）
硬式野球（14名） 計80名

個人的競技 柔道（18名）剣道（12名）陸上（16名）
テニス（20名）卓球（11名）
計77名

昭和42年度1年生より5年まで全学生567名を調査し運動部員261名を抜き出して整理した。昭和43年度は2年～5年までの運動部員157名を選び出して調査した。それと同時に新2年の非運動部員（58名）も運動

部員と比較して見るために調査を行った。

〔3〕 ① Y-G 性格検査類型水準の判定

タイプ	尺 度		情緒安定性 D C I N 抑 気 劣 神 うつ 分 等 経 性 変 化 質	社会適応性 O Co Ag 客 協 攻 観 調 撃 的 性 的	向 性 衝動性、活動性、主導性 G R T A S 活 の 思 支 社 動 ん 考 配 会的 的 き 的 性 外向	別 名
	典 型 準 型 混 合 型					
平均型 Arerage Type	A 型	A A' A''	平 均	平 均	平 均	ありふれ型
右 寄 り 型 不安定、不適応、積極型 BlackList Type	B 型	B B' AB	不 安 定	不 適 応	外 向 (積 極)	暴 力 型
左 寄 り 型 安定、適応、消極型 CalmType	C 型	C C' AC	安 定	適 応	内 向 (消 極)	鎮 静 型
右下がり型 安定適応、積極型 Director Type	D 型	D D' AD	安 定	適 応 又は平均	外 向 (積 極)	代 表 型
左下がり方 不安定、不適応、消極型 Ecceentric Type	E 型	E E' AE	不 安 定	不 適 応 又は平均	内 向 (消 極)	ノイローゼ型 変 り 者
疑問型 False Type	F 型	分類不可能	結果に大きな歪みをもった型でおそらくテストの 受験態度によるものか、その人自身のへそまがり によるものであり精密検査を必要とする type			へそまがり型

② Y-G 性格検査プロフィール (12因子)

S：社会的内向 (social introversion) “誰とでもよく話す”、“新しい友達はなかなか出来ない”などによって表出される社会的接触を好む、またはさける傾向を測定するもので、この得点が高ければ、恥ずかしがり、隠とん性などの行動があらわれることになる。

T：思考的内向 (thinking introversion) “深く物事を考える傾向がある”、“たびたび考えこむせがある”などによって示される思索的、反省的傾向の強弱に関する項目。

D：抑うつ性 (depression) “たび鬱憂になる” “自分をつまらぬ人間だと思ふことがある”などで示される悲観的性質、または罪の意識を抱きやすい傾向を示す。

C：回帰性傾向 (cyclic tendency) “気がかわり易い”、“感情的である”などによる情緒の不安定性、気分の変化が著しい傾向を示す。

R：のんきさ (rhythymia) “人と一緒ににはしゃぐことが多い”、“よく考えずに行動してしまうことが多い”などで測定される気軽な傾向、衝動向な性質、のんきな性質の項目

G：一般的活動性 (general activity) “仕事 が速

い”、“動作がきびきびしている”など活発な性質、身体を動かすことが好きな性質などを測定する項目。

A：支配性 (ascendance) “会やグループのために働く”、“引込み思案ではない”などの社会的主導性である。この反対は服従性、指導性の欠如を示す。

I：劣等感の強いこと (inferiority feeling) “劣等感に悩まされる”、“自信がない”などの自己の過小評価、自信欠乏の傾向を示す。

N：神経質 (nervousness) “心配性”、“神経質である”、“些細なことに拘泥する”などいわゆる神経質の傾向を示す。

O：客観性がないこと (lack of objectivity) “空想にふける”、“わけもなく喜んだり悲しんだりする”などの空想性、主観的過敏性を示す。

Ag：愛想が悪いこと (lack of agreeableness) “気が短い”、“正しいと思うことは人にかまわず実行する”、“人の意見をききたがらぬ”などの攻撃的な性質、社会的活動性を示す。

Co：協調性がないこと (lack of cooperativeness) “不満が多い”、“人を信用しない”、“秘密主義の傾向がある”など、不満性と不信性を示す項目。

以上12の性格特性を測定する項目から構成されている。

〔4〕 スポーツマンの性格 (personality)

一般的な スポーツマンの 性格的特性を 論ずる まえに、性格について考察してみると

気質……………情緒的側面

特性……………社会に対する適応の仕方などの行動的側面

態度……………ある物事に対する好き嫌いといった行動的側面

自我……………意識的、意思的側面

以上の4つに分けて考えることが出来る。又もう少し簡単に云へば性格とは個人の独特の行動様式であると言うことができよう。又性格づくりと関係のあるものは無数にある様に考えられる。良く性格は遺伝か環境か、と云う言葉を聞くが、一口に性格と呼ばれているもののうちのある一面は遺伝的なものにより作られているが、それとは異なる他の一面には後天的な環境の変化によって作られたものもあると云う事で、自分自身の性格を分析して見てもだれしもこの二面ある事に気づくと思はれる。所でスポーツマンにより多く見られる性格のタイプはどのような性格であるか、スポーツマンは明朗で、ものごとにこだわらず社交的であるなどよく云われているし、各スポーツの選手はそれぞれの種目に応じて独特の性格をもっていると思われる。果してスポーツマンと呼ばれるものが、他の人と区別される様な性格をもち、それがスポーツマンの種目によって違うものであろうか。又スポーツの特性とは無関係にスポーツマンに共通する性格もあるのではないだろうか。スポーツマンの性格検査の資料は多く出されているが、この多くの資料をまとめ共通する性格特性を上げて見ると気質の領域では抑うつ性は、少く、神経質でなく、明朗であり、意志的、知的領域では、深く思索する傾向や、劣等感は少く、独断的な所が見られる。態度あるひわ行動の領域では常識的な行動を取り、社会的には外向性を示し、活動的、攻撃的で支配的傾向があり男性的であると云う事に成る。もっと集約すると、情緒的には安定しており、思考的には外向性を示し、態度はひっ込み思案ではなく社会的外向性を示し、行動では活動的で男性的であると云える。上記の様な事柄から考えて果して本校学生(運動選手)の性格の特性は以上の結果に類似しているであろうか。

〔5〕 本校(運動選手)の性格傾向について

本校スポーツマンの姿を(性格)大まかに見出すために表1を作成した。(考察)表1が、本校運動部員の性格特性の12因子に別けたプロフィールである。運動選手のパーソナリティの特性は運動種目、スポーツ

表 ー 1

標準点 特性	1. 2	3	4. 5
D	32.5%	41.3%	26.0%
C	21.0	44.0	34.8
I	26.8	47.5	25.6
N	20.6	50.1	29.1
O	24.9	46.3	28.7
Co	35.6 ⁽⁺⁾	38.6	25.6 ⁽⁻⁾
Ag	27.5	49.4	22.9
G	22.9	47.8	29.1
R	26.4	41.3	32.1
T	21.8	43.2	34.0
A	19.5	49.0	31.4
S	17.6 ⁽⁻⁾	43.2	39.0 ⁽⁺⁾

(注) 標準点1、2、3、4、5の段階の3を中心として1、2を一諸に4、5を一諸に考え標準点を1、2、3、の3つの段階にした。

※以下の表についても同様である。

集団の性質、集団内の位置、役割や個人的構えによって異なるために共通した特性を取り出すことは困難であるが、本校内の大まかな線は表1から考察して見れば、(1) D. C. I. N. (情緒的安定) は、全般的に見て普通(平均)を入れて好ましい標準点の方にあるものが%を示している。と云う事は%が情緒不安定に入る事で自分をつまらぬ人間だとしばしば思う事があるなどの非観的又は罪の意識をいだきやすい傾向を示している。特に気がかわりやすい、感情的であるなどによる情緒的不安定、気分の変化がいちぢるしい事、又心配性いわゆる神経質な点も見すぐすわけにはいかない。

(2) O. Co. Ag. (社会適応性) について考察して見れば、スポーツは闘争の原理が基本的なものになっているが、この闘争の原理は個人的にはもちろん社会的技術を発展させる基本にも成る。私はこの O. Co. Ag. がスポーツマンには大切な様に思われてならない。本校に於いてはクラブ員の%が客観性がなく主観的過敏性であり愛想が悪く気が短く人の意見を聞きたがらない性格をもっていると云う事は一考を要するし指導が必要な感がした。

(3) G. R. T. A. S. (向性) 衝動性、活動性については本学のクラブでは大体良好の様に思われる。特に社会的に外向であると云う事は(全体の39%平均と合せて82.2%) 誰れとても良く話し、新しい友人も良く出来、人の前に出ては恥ずかしがる事もなく、いわゆるスポーツマンの特性である明朗な人柄に育っている様に思われる。

表 - 2

型	A	B	C	D	E	F
N	112	34	12	61	39	3
%	42.9	13.0	4.5	23.3	14.9	1.1

表-2が性格型を5類型に別けた表である。A、B、C、D、E、F、は次の様な各内容を含む。

A型…… (平均型)

B型…… (情緒不安定、社会的不適応、積極型)

C型…… (情緒安定、消極型)

D型…… (情緒安定、社会適応性、積極型)

E型…… (情緒不安定、社会的不適応、非活動的、消極型)

F型…… (判定不可能、疑問型)

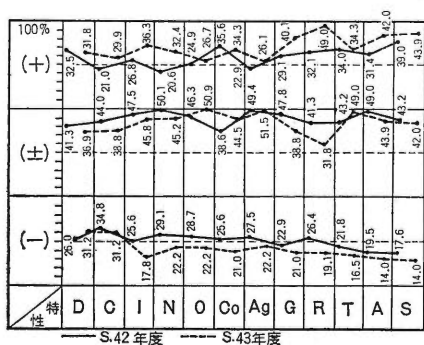
(考察) 本校の運動部ではA型(平均)が約42.9%を示している。ここで考へなくてはならない事は、スポーツはただやらせるだけで効果があると云う様な甘い考へを捨てて、スポーツをどの様に指導したら良いか、又はスポーツの良い面のつかみ方、考へ方等を個人的に適切な指導(カウンセリング)を行へば、まだまだ良い特性をあらわす事が出来るのではないかとと思われる。全体的に見て約80%の学生については性格的に問題に成る様な者は見あたらなが残りの約20%の学生は、今後の指導が必要と感じた。

〔6〕 体育クラブの特性(性格的)と変化の推移

私が一番ここで考えた事はクラブ活動における性格教育についての教育的可能性に関する事である。はたしてクラブ活動と云うものは少しでも個人の性格にプラスに成るだろうかと云う事である。一年間の追跡的資料で確実なものではないとわかっているけれども一応ここにその資料と考察を上げたいと思う。なほ毎年運動部だけでもやっていきたいと考へている。

イ、運動部全体の性格と推移

図 - 1



(考察) 本高専運動部の所属者には高専に来て始めて

運動部に所属したものもあろうし、それをすべて運動部のパーソナリティの特性として考える事は問題があると思うが一応出して見た。この様な事から特性D: 抑うつ性たびたび憂鬱になる。“自分をつまらない人間だと思ふ事がある”などで示される悲観的性質、または罪の意識の抱きやすい傾向を示す特性だけが(マイナス)で他は多少にかかわらず(プラス)の方向を示している。クラブ活動が性格の形成に効果があるかと云う事はこれだけでは云い切る事は出来ないけれども、我々クラブ経験者は少くとも運動した後のさわやかな気持は幾度も体験しており、スポーツ活動のもつ緊張の開放つまり情緒的安定をもたらす効果をも知っているし、それがさらに調和のある豊かなパーソナリティ形成へ貢献している事実もわかっている。又スポーツマンシップとかフェアプレーの精神などはスポーツとは切りはなせないものであり、スポーツをする事によってこの様な精神からでもパーソナリティ形成には少しは好ましい方向に影響するものと思われる。少くともスポーツを行うと云う事は性格特性にはプラスの面が出来るのではないかと考へられる。

ロ、団体種目と個人種目との性格特性の比較

(考察) 前項までは、大まかな本校スポーツマン性格の特性を述べて来たが、選手の性格もスポーツの種目によって違う様に思われる。スポーツの範囲を個人種目と団体種目に別ける事により、より具体的な性格特性の差異もつかむことが出来ると思う。又実際の指導の段階においても具体性が出て来る事は、有用性も大なるものがある様に感じる。

表-3を見れば、性格特性の因子、(イ)D. C. I. N (情緒安定性) (ロ)O. Co. Ag (社会的適応性)

表 - 3

特性	団体種目 (N. 153) (ラグビー、サッカー、野球、バレー、バスケット)			個人種目 (N. 108) (柔道、剣道、陸上、卓球、テニス)		
	(1.2)	(3)	(4.5)	(1.2)	(3)	(4.5)
D	34.6	41.8	23.5	29.6	40.7	29.6
C	23.5	45.0	31.8	17.5	42.5	39.8
I	28.1	47.7	24.1	25.0	47.2	27.7
N	23.5	52.2	24.1	16.6	47.2	36.1
O	28.1	43.1	28.7	20.3	50.9	28.7
Co	38.5	35.9	25.4	31.4	42.5	25.9
Ag	28.1	47.7	24.1	26.8	51.8	21.2
G	20.9	49.0	30.0	25.9	46.2	27.7
R	26.7	39.2	33.9	25.9	44.4	29.6
T	20.2	43.1	36.6	25.9	43.5	30.5
A	16.3	48.3	35.2	24.0	50.0	25.9
S	14.3	44.4	39.8	20.3	41.7	37.9

表 ー 4

部 格 型 (%)	ラグビー N.38	サッカー N.53	野球 N.26	バレー N.20	バスケット N.16	小計 N.153	柔道 N.26	剣道 N.14	陸上 N.16	テニス N.27	卓球 N.25	小計 N.108	総計 N.261
A	31.5	33.9	50.0	60.0	56.2	41.8	46.1	50.0	36.0	40.7	36.0	44.4	42.9
B	15.0	9	11.0	5.0	18.7	11.7	7.6	21.4	12.5	18.5	16.0	14.8	13.0
C	0	7.5	3.8	10.0	6.2	5.2	3.8	0	6.2	7.4	0	3.7	4.5
D	39.4	28.3	23.0	10.0	6.2	25.4	30.0	14.2	12.5	14.8	24.4	20.3	23.3
E	10.5	20.0	11.0	15.0	6.2	14.3	7.6	14.2	12.5	18.5	24.0	15.7	14.9
F	2.6				6.2	3.8	3.8					0.9	1.1

い) G. R. T. A. S {向性 (衝動性、活動性、主導性)}
について見ると、個人的種目と集団的種目では、C、N、A、S、に於いては、多少の差異は見られるが、他はほとんど見られない。傾向は同じ様な線を示しているが、比較した場合団体競技の方が、性格的に社会性があり神経も太い様に感じられる。その点個人的種目の方が、内攻的で非社会的、神経質な傾向が強い様に感じる。表一4で見て理想的な性格型 (D) が、わずかではあるが団体種目の方が多く、悪い性格型 (E) についても同様な事が云へる。このことは集団的種目の方が、自分の自由をある程度そくばくされる事が多いので、クラブ活動を通しての自主性の確立、や自己形成を助成するいろんな要素が多く含まれているのではないかと考へられる。

ハ、各種目による性格の特性と推移

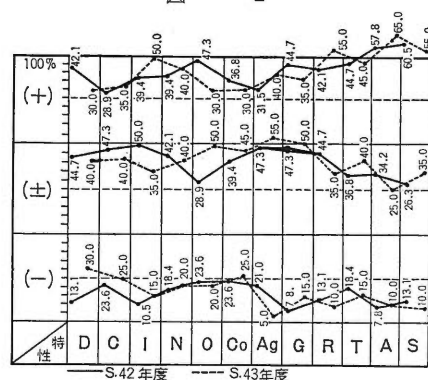
種目ごとによる性格は、次の資料だけでは充分とは云へないが、ある程度の傾向は見られる。そこでこの項では、少しでも各部の指導に役立てたいために次の様な主旨で調査した。

1. チームの特徴を知るために 成員の 性格を知りたい。
 2. 選手を指導する時の効果的な助言の仕方や、コンデショニングに適用したい。
 3. 試合の場での作戦の上に利用したい。
- と云う事で今後の練習、あるひは試合の場での言動、及び試合振りなどと、この資料とを充分つき合せ、検討し—その効果を期待し、実際の場面に役立つ様にしたい。

(1) ラグビー

(考察) (D. C. I. N) について云へる事は、昨年度と比較して、特に抑うつ性をもつ学生が30%近くも居ると云う事である。練習と勉学の両立が原因ではないかと思う。他のスポーツと比べての体力の消耗度が多く又そのために気持の上での競技に対する徹底が出来

図 ー 2



ないための様に思われる。

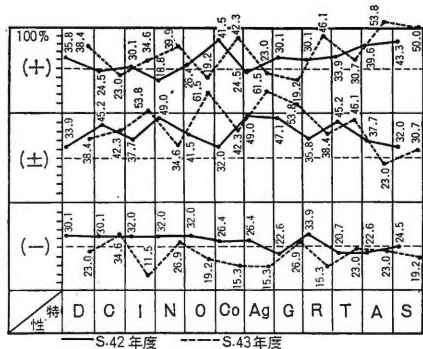
(O. Co. Ag) では、部内のまとまりもあり人を信用し、愛想が良く他人の意見も良くきいてくれる温厚な人柄。即ち社会的活動性が非常にある様に見受られた。

(G. R. T. A. S) では、大体良好である。特に社会的外向も良く、指導性に富み、一般的活動性 (動作がきびきびしている様な活発な性格) を有している。又昨年と比較して性格の推移は大体好ましい様だ。ただ問題は最初にも述べた様に抑うつ性大の者が多い事だ。昨年度は五年生部員が多く部のリード、まとまりと云うものが自然に出来上っていたが本年は、四、五年が少い、そう云う事が原因に成っている様に思はれる。ともあれこの事については今後の指導を考へるべきである。

(2) サッカー

(考察) (D. C. I. N.) では、(C) の気分の変化、気が変りやすい、感情的である。などによる情緒的不安定性がめだつ。しかし劣等感をもたない、何事にも自信をもって立ちむかうと云う特性も出ている。(O. Co. Ag) では部内でのまとまりも見られ人を信用し、愛想が良く、他人の意見も良く聞く温厚な人柄。即ち社会的活動性が非常にある様に見受けられる。(G. R. T. A. S.) では、大体良好な傾向を示している。特に

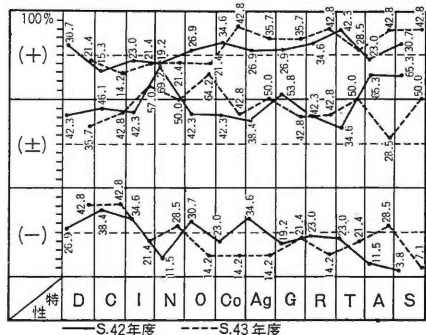
図 - 3



社会的向性も外向を示し、指導性もある様に思われる。ただ情緒の不安定性が目だつ事について考えられる事は、部員数が多い事と部の結合状態が、学年単位の5つの集団から構成されているために、各学年の結合に問題があるのではないかと考えられる。今後の指導が、必要と思う事は(C. 気分の変化)の特性のみであると思われる。

(3) 野 球

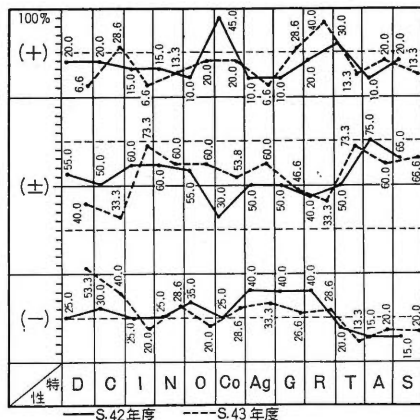
図 - 4



(考察) (D. C. I. N.) では、抑うつ性及び気分の変化の多い選手が、40%強を示している事である。部内の統一は、特に(C)の項目が左右する様に思われるために何か個人的に指導するカウンセリング的なものが必要ではないだろうか。(O. Co. Ag.) については、非常によい傾向を示している。客観性があり、チーム内の協調性があり活発な社会的活動性を有している。(G. R. T. A. S.) では社会的外向も良く、支配性も大で何事も良く考へて行動する特性が見られる。ただ(D. C.)の項目で指導が必要と思われる事は、他のクラブと比較した場合4、5年の学生が少く、下級生が多い事に何か原因があるのではないかと考えられる。

(4) バレー

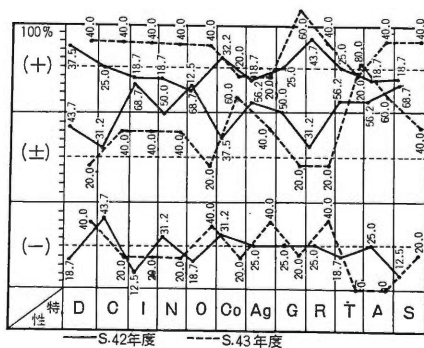
図 - 5



(考察) この部は、非常に前年度の選手の性格特性と、本年の性格に何か、変動が大きい様に見うけられる。特に(D. C. I. N.) 抑うつ性、気分の変化大いに、悪い特性が、あらわれている様である。(O. Co. Ag.) は他の部と比較して見て低い値を示している様に感じた。(G. R. T. A. S.) についても平均型が多い、ただ(R. のんき) 行動を起す場合によく物事を考えて行動し、衝動的な行動を起す人が少いと云う事は云える。この部に於いては、技術的な指導者がいないために、何か精神面、技術面に於いても適切な指導がなされていない様で、何か学生の気持の上にも不安なものがありこの様な結果が出たのではないかと考えられる。

(5) バスケットボール

図 - 6



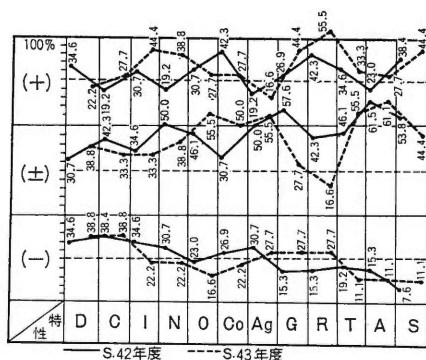
(考察) この部に於いても、昨年の選手の性格特性と、本年度選手の間に他の部と比較して見た場合、変動が多い様だ。(D. C. I. N.) を昨年と比較して見れば抑うつ性などで示される悲観的性質をもつ選手が40%もいるという事である。

(O. Co. Ag.) については、(O. Ag.) で平均型が少く、好い悪いの両極端に別れている事が注目される点である。

(G. R. T. A. S.) については、支配性が大で、思考的にも外向を示している。なほこの部は計画的な練習を行っている。そのために当然激しい練習に成って来る上級生が部のために思い下級生に技術的な面及び精神面の向上も、早急に望むため下級生に負担が多くなり悲観的性質を作る原因にもなる様な気がする。又 (O. Ag.) についても云へる事で、それに耐える得る学生は好ましい特性を示し耐え得ない学生が悪い特性を示すのではないかと考える。いずれにしても今後の指導は必要と考へる。

(6) 柔 道

図 - 7



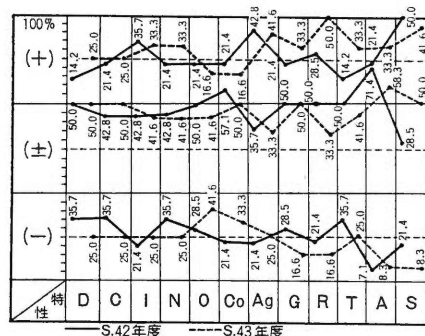
(考察) (D. C. I. N.) については、劣等感が少く神経が大いである。少し抑うつ傾向が見られるのが心配である。(O. Co. Ag.) については、攻撃的な性格をもっていると思われる者が、いがいに少い感じがする。(G. R. T. A. S.) について云へる事は楽天的であると言う事が見られる。以上の事から柔道の選手は道徳的で真面目である。外面上は、どうしても格技としてあらわれて来るので、やゝもすると斗争の縮図のようにとられがちであるが、むしろ社会的態度、協力の態度が好ましく自閉的傾向をもつものが多い様だ。推移は目だつ所は認められない。

(7) 剣 道

(考察) (D. C. I. N.) については、昨年より良い傾向を示して居る。しかし個人的指導がまだ必要な気がする。(O. Co. Ag.) では、物を主観的に考へやすく、協調性に欠けている様だ。攻撃的で男性的な性格は非常によい。

(G. R. T. A. S.) について云へる事は、のんきで活動的であり、社会的外向性はあるが、思考的内向の人が若干居る様だ。昨年と比較して (O. Co.) に注目

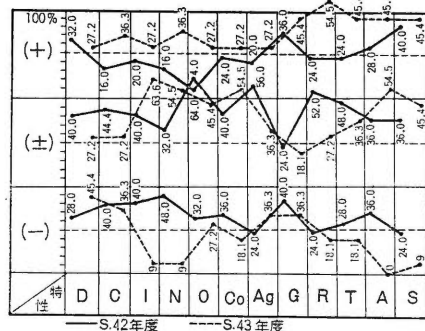
図 - 8



しこの点指導を考えるべきと思う。柔道と比較して、男性的で、外向的で社交的傾向が強い様である。

(8) 卓 球

図 - 9

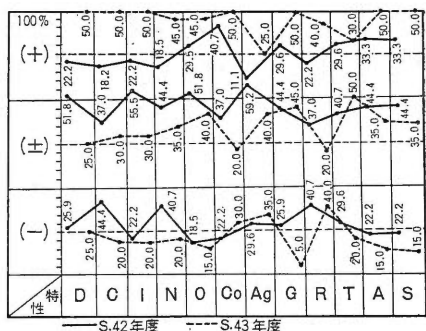


(D. C. I. N.) については、抑うつ性をもっている人が少し多い様である。しかし劣等感に悩まされたり、自信をなくしたりする人が、昨年と比較し非常に少くなり、神経が太くなった様だ。(O. Co. Ag.) についても、個人種目にありがちな自分勝手な行動もなく、協調性に富んで来た様だ。この事で感じる事は本年度より、若い先生の指導のもとに統一の取れた練習と部に育ったためと思われる。本年度は上学年はこの計画的な練習についていけず退部した様子も見られ、その事が一そう部の統一に好結果をもたらした様に思う。(G. R. T. A. S.) については、協調性はついて来たが、まだまだ自分から卒先して、仕事をしたり、動作がきびきびしている様な活発な性格に欠けている様に見られる。しかし社会的外向の特性は非常によく出ている。

(9) テ ニ ス

(考察) (D. C. I. N.) では昨年とは、かく段の進歩が見られ、非常に情緒が安定している。(O. Co. Ag.) については、攻撃的な所がなく、少々男性的な

図 - 10

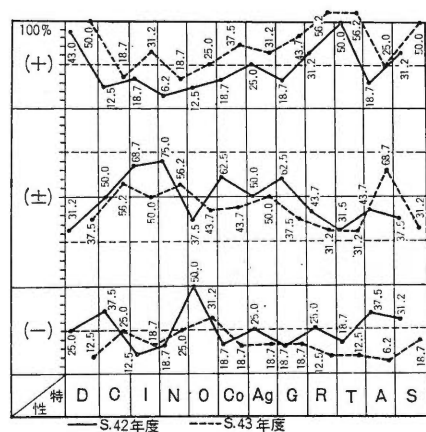


面に欠け、部の内部に於いても不満を持っている人が少々居る様な感じがする。(G. R. T. A. S.) では、(G)の一般的活動の特性をもっている人が非常に多いことで、テニス部内の統一されている事が目に見える様だ。

その反面 (R) のマイナスの特性を有している人が、40%も居る事は、今後の指導が必要と思われる。

10 陸 上

図 - 11



(考察) 昨年は全般的に見て、性格上問題に成る様な項目もある様に見うけられたが、本年はすべて、好ましい方向に移動している。陸上部で問題にする事は、(O) 主観的、すなはち客観性がないと云う性格を有している人が若干いる事である。陸上部は五年生が多いため、個人個人が自覚して練習をするため下級生もその雰囲気になじみ、本年の様に好ましい部に成長したものと思われる。勿論顧問教官の指導も大なるものがあると思う。

※以上の10の部を全般的に見て感じる事はいつれの部にも個人的にカウンセリングの必要のある学生が居る事を忘れてはならない。

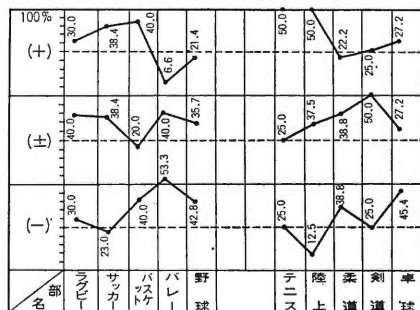
又スポーツ選手は、一般的に活動的、攻撃的で、支配性が強く、男性的傾向をもって居り、神経質傾向や、抑うつ性が低く、明朗で、情緒的に安定している者が多い様である。又スポーツの種目、あるひは選手のポジションによっても、性格特性に相違が見られる様である。

しかし現在の所これだけの資料から、クラブ活動を通してどんな性格の人が育つか、どんな性格の人が優秀なプレーヤーに成る事が出来るのか、どの種目ではどんな性格の人が成功するかという結論を云う事は出来ない。しかし今後は、これを資料の一つとして、体格、体型、基礎体力、知覚などの適性との関連で、総合的にとらえる事は出来るのではないかと思う。又そうする事により、本校クラブ活動の前進が期待されるものと思う。

ニ、特性ごとに比較したクラブの性格(昭和43年分)

図 - 12

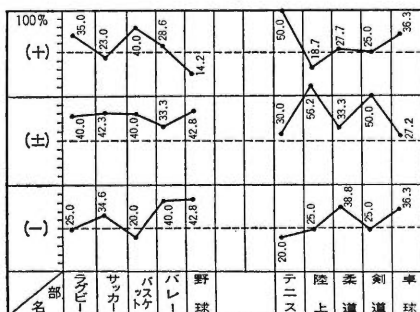
(D. 抑うつ性)



※団体種目ではサッカー部が好ましい傾向を示し、個人種目では、陸上が良い。バレー部が好ましくない。

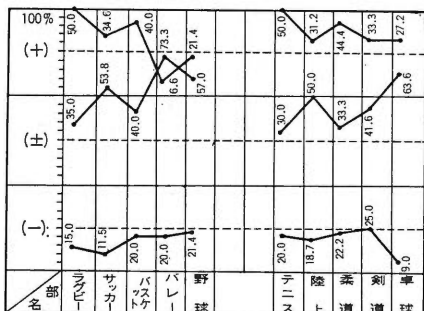
図 - 13

(C. 回帰性傾向)



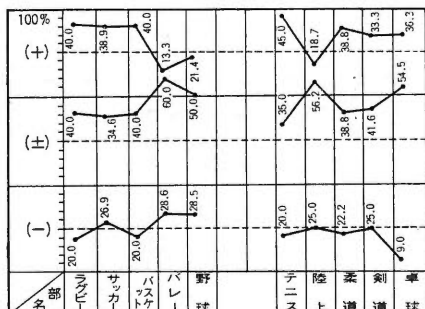
※団体ではバスケット部、個人では、テニス部が好ましい。野球部が好ましくない。

図 - 14
(I. 劣等感)



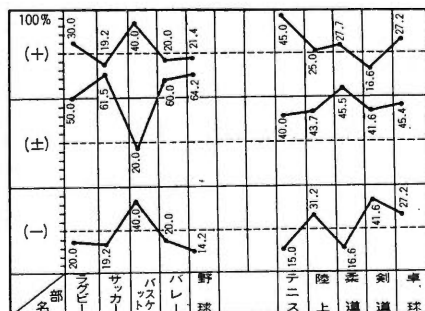
※個人では卓球部が一番好ましい傾向を示し、団体ではラグビー部も好い。バレー部があまり好ましくない。

図 - 15
(N. 神経質)



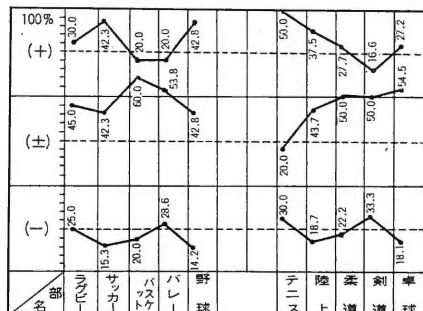
※個人では卓球部、テニス。団体ではバスケット、ラグビーが好ましい傾向を示している。バレー、陸上が好ましくない。

図 - 16
(O. 客観性(+) 主観性(-))



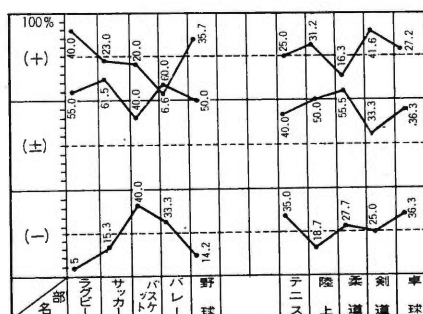
※個人ではテニス部が好ましい傾向を示している。団体では野球部が好ましい。バスケット、剣道部が好ましくない。

図 - 17
(Co. 協調性(+) 非協調性(-))



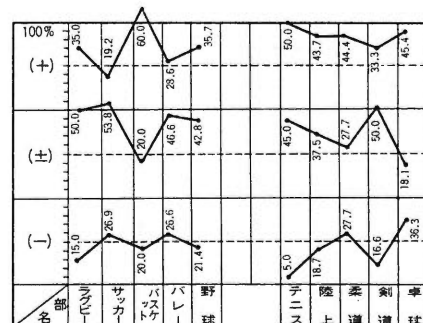
※個人ではテニス部が好ましい傾向を示している。団体では野球部が好ましい。バスケット、剣道が好ましくない。

図 - 18
(Ag. 攻撃的(+) 非攻撃的(-))



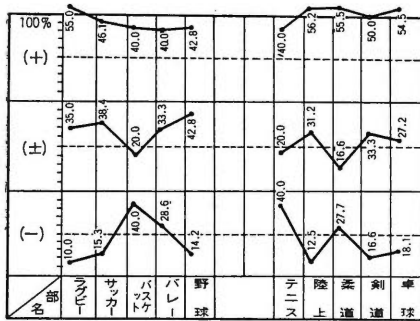
※団体ではラグビー部が好ましい傾向を示している。個人では陸上が好い。バスケット、バレー、テニス、柔道があまり好ましくない。

図 - 19
(G. 一般的活動)



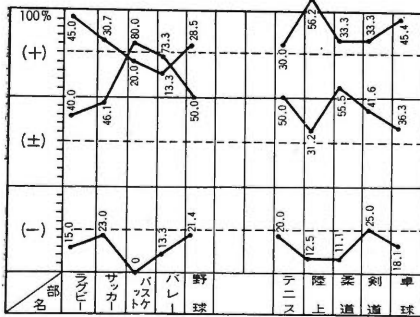
※個人ではテニス部が好ましい傾向を示している。団体ではラグビー、バスケットが好い。サッカー、卓球部が好ましくない。

図 - 20
(R. のんき)



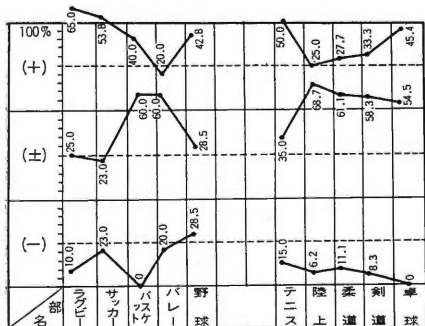
※団体ではラグビー部が好い傾向を示している。個人では陸上部が好い。
バスケット、テニス部が好ましくない。

図 - 21
(T. 思考性 外向(+) 内向(-))



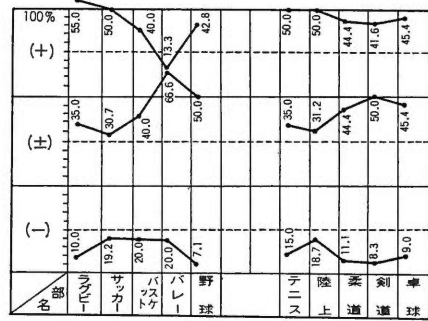
※団体ではバスケット部が一番好ましい傾向を示す。個人では陸上、柔道が好い。
バレー、野球、剣道部が好ましくない。

図 - 22
(A. 支配性)



※団体ではバスケット部が好ましく、個人では卓球部が好ましい傾向である。
野球部が余り好ましくない。

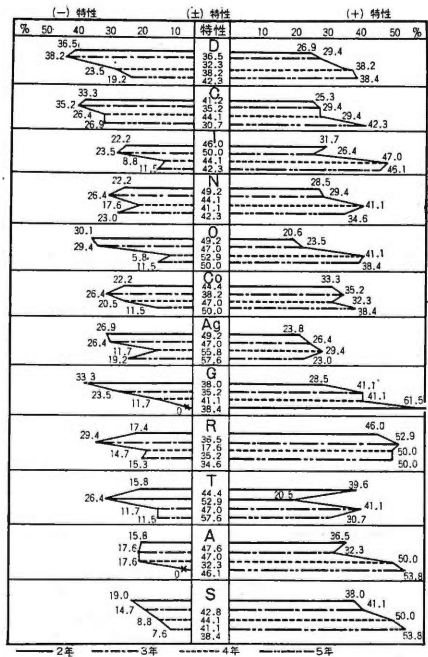
図 - 23
(S. 社会的 外向(+) 内向(-))



※団体ではラグビー、野球が良い。個人では剣道、卓球が好ましい。
問題になる様な部はみあたらない。

〔7〕 学年別による性格の特性
昭和43年度運動選手 (1年生は除く)

図 - 24



(考察) のと図は、本校スポーツ選手が、学年を追うにしたがってどの様に性格的に変化したかを示した表である。

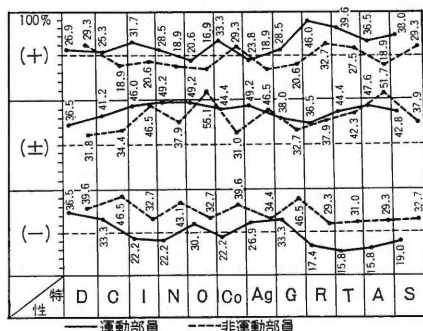
即ち、スポーツを長い年月やる事によって、性格の上に何か変化が見られるものだらうかと云う事で調査した。この表で見れば、経験年数1年部員より、3年及び4年部員の方が、どの性格的特性に対しても、好ましい傾向を示している。具体的に云へば経験の長い

部員の方が、社会的外向性を示し、抑うつ性も少く、活動的で、指導性に富み、劣等感が少く、攻撃的で、神経質でないと云う事である。この資料だけでは、完全な結論を云う事は出来ないが、最初に思っていた「クラブ活動における性格教育についての教育的可能性」については、多少なりとも貢献していると言っても過言ではないと考えられる。

〔8〕 運動部員と非運動部員の性格特性の差異

昭和43年度2年生121名について（運動部員63名、非運動部員58名）

図 - 25



（考察）上の図は、第2学年（121名）対象にし、運動部員と非運動部員のプロフィールを比較したものである。

本校に於いては、すべての項目で運動部員が、より高い値を示し、社会的に好しい資質を備えている事がわかる。又周囲の状況に対しても好ましい態度を身につける社会的適応性も備えている。

クラブ活動は正課体育では得られない何かのをもち、又これを補足する重要な教育的価値があるという事を再認識し、この性格検査で得た事実を、今後如何にクラブ活動に生し、指導していくかは、我々指導者の大きな課題であると同時に、一そうの責任を感じるものである。

総 括

1. 本校全体のクラブ員の性格特性について

全体の66%は好ましい性格特性を示し、残りの34%が指導を必要とする特性をもっている。特に（D）の項目に於いては、32.5%の高い値を出している事が、注目される。なお、一年間の性格推移を見れば、すべての項目で、プラスの傾向を示し、クラブ活動を通しての性格の教育的可能性が充分うかがえる。

2. 団体種目と個人種目の性格傾向について

両種目を比較した場合、団体の方が、社会性があり、精神的にも太い面が見られ、個人の方が、内向

的で非社交的、そして精神面に於いても神経質の様である。しかし我々が考えていた様な大きな差は、どの特性を見ても感じられなかった。

3. 各クラブの性格特性について

一般学生とクラブ員の性格を比較しても、クラブ員の方が好ましい傾向を示している。この事はスポーツのもつ緊張のあとの開放、つまり情緒安定をもたらす効果で、各々のクラブに共通していえる事である。

各クラブ共に社会的適応性及び社会的外向性は、好ましい傾向を示しているが、気分の変化、抑うつ性については、指導を必要とする学生が少数いる事を忘れてはならない。我々指導者は、今後ますますクラブを通して、スポーツ活動への欲求を正しく指導し、性格的に望ましい人間を形成する事に努力していきたいと思っている。

4. 学年別及び運動部非運動部の性格的差異について

本校では、上学年部員の方が、下学年部員よりも、より好ましい社会性を備へ、運動部員もすべての特性で非運動部員より好ましい値を示している。

第二章 性 格 検 査

ロールシャッハ

◎ KeY—（表1）

理論的に好ましくない反応及び非行少年や問題児によくみられる反応である。つまり問題徴候の指標として用いる。KeY—（5）は理論的にも統計上も好ましくない反応、（8）は理論的には好ましくないが集団法として統計的に処理すると必ずしも好ましくないとはいえないものである。

◎ KeY—（5）（8）ともに3以上 } の場合はチェックする必要
 ◎ KeY—（5）が4以上 } がある。
 ◎ KeY—（8）が4以上 }

◎ C（平凡反応）

各図のそれぞれにおいて最も多くの人を選択した答である。社会生活をしている人間にとって、ある程度共通した認知の成立することが必要である。P反応が0の時チェックする必要がある。その他の診断項目（数字1～14で表わしている）

1…（F、L値がマイナスのもの……Form—CereL-Rating）選択した部分の正確さ明細さ、あるいは組織化の程度をあらわすものである。これが不自然な場合F、L値はマイナスと評定され好ましい反応とはいえない。

◎—1.0を2ヶ以上 } ケの場合チェックされる。
 ◎—2.0を1 }

表 ー 1 ロール・シャツハー KeY

診断項目	5						8					P								
	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	6	7	8	9
A 班	14	9	4	11	2		18	11	5	1	3		12	18	7	4	2			
B //	8	10	3	3		1	8	7	8	4	3		5	6	7	9	7	2	1	
C //	11	10	2	1			8	10	3	2			3	8	9	9	3	3		
D //	12	12	2			1	16	9	6				3	3	8	14	7	2		
E //	10	11	3	2	1		10	14	5	2			4	9	11	10	1	5		
F //	12	8	2	5	2	2	9	13	4				5	5	16	6	4	1		
G //	13	8		2			12	5	3	4	3		4	3	8	6	5			1
H //	8	5				1	12	12	2	4	1		3	5	8	13	2	3	2	
I //	9	6	1	2	1	1	8	9	4	7			5	7	5	11	4	3	1	
J //	18	3	1				11	14	2				2	6	10	12	5	1	1	
K //	12	7	7	4	1		18	11	3	3			2	6	6	10	5	2	1	1
L //	5	10	5	5	1	1	9	11	7	1	1		5	5	6	10	5	4	1	1
M //	10	3	2		1		5	13	5	1				2	6	10	13	4	1	1
N //	10	5	2	1			13	7	1				2	2	4	5	7	6	1	
O //	14	6	2		1	1	12	10	4	3			2	4	9	6	8	3	1	2

2…… (F、L 平均値)

F・L の平均値が89以上の場合不自然な反応が多いという意味でチェックされる。

3…… (KeY⁻)

4…… (P 反応)

5…… (FM)

動物が運動しているようにみえる反応をFM反応という。未熟な発達段階にあるものに多い反応で衝動傾向が疑われる。FM 反応が5以上の時チェックされる。

6…… (CF+>2FC)

反応部分を選択する場合のきめ手に形が優先しているか色彩が優先しているかによりその人の性格の傾向をみようとするものである。F は形 C は色彩を意味するが、情緒の未成熟な場合 CF、C が多く表わされる。したがって上記の関係になる場合情緒不安定としてチェックされる。

7…… (F 13以上)

6と同じ意味でこれは形にのみとられやすい人で性格的に硬さのある人である。情緒的に安定した人力動的な適応力のある人は適度な CF 反応が表われる。(6の項と反するようであるがこの辺の総合的判定はむづかしい) F 反応が13以上の場合チェックされる。

8… (FC'+C'F+C'+C'SYm 3以上) C' はインクプロットの黒い色が主体となって選択された反応である。これは不快感、憂うつ感を表わす。

9…… (KF+K 2以上)

インク・プロットの明暗が拡散の印象をあたえたもので雲や煙の反応に多いこれは不安感を表わす。

10…… (CF+C 2以上)

インク・プロットの明暗が物表の面や材質の印象をあたえたものである。(ザラザラした感じがするといった反応はこれである。)これは小児的愛情欲求のある人で依頼心が強い。

◎ (11~14) は好ましい反応で特に問題のない人については分析していないものが多い。本校学生には皆無であったので除く。

ロールシャツハの総括しての所見をみるに「やや抑うつ傾向が見える」が一番多く49名、次に「安定性に欠ける」が15名、「安定性に欠け力動的なものに欠ける」14名、「安定性に欠けて自己中心的考え方が見える」及び「抑うつ性がうかがわれる」が各々12名である。以下の所見項目は一桁の数で終わっている。一番多い項目は全体の約10%強である。この所見をもっと分析してみるため次の五段階に分ける。

(イ) 64名 12%

やや抑うつ傾向が見える。抑うつ性がうかがえる。抑うつ性が認められる。

(ロ) 41名 9%

安定性に欠ける。安定性に欠け自己中心的考え方がみえる。安定性に欠け力動的なものに欠ける。

(ハ) 9名

やや不安定な抑うつ傾向が見える。安定性に欠け抑うつ傾向が見える。

(ニ) 5名

やや衝動的傾向が見える。

(ホ) 432名・約70%

異状なし

表 - 2 ロールシャツハ

区 分	計	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O
所 見 項 目	班	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
やや抵うつ傾向がみえる	49	2	3	2	2		6	6		5	1	8	5	3	1	5
抑うつ性がうかがえる	12	1	2		1			3		3	1					1
抑うつ性が認められる	3		1						2							
やや不安定な抑うつ傾向がみえる	7	1	1			1	1				1		1			1
安定性に欠けて自己中心的考え方がみえる	12		1		2	3			3	1		2				
安定性に欠ける	15	1	3			2	5			1				2	1	
安定性に欠け力動的なものに欠ける	14		1		2		1			2	3	2	1		1	1
安定性に欠け抑うつ傾向がみえる	2		1												1	
不適応を起しやすい	1			1												
やや衝動的傾向がみえる	5							1	1	2			1			
判 定 困 難	7	2		1			1	1	1	1						
異 状 な し	432	37	27	31	32	36	30	22	31	23	29	25	32	25	23	29

ギルフードY-G

各性診断項目の評点をしらべるが、青年期にあるものは一般的に自分を悪く評定しようとする傾向があることは充分留意しなければならない。したがって全般的に問題がありそうな結果があらわれやすいが、その中でも特徴的なものをチェックする態度で判定洞察しなければならない。表3の類型中A類（平均型）は平均的な状態を示す人で、万事につけて平均的、調和的で適応的であるが、積局的な診断は下しにくく、臨床心理学的には問題の少いタイプとされている。情意性は安定しており、家庭的にも恵まれており、非行も未だ軽微な段階にある。表5にあるAA'A'が大体それである。B類（右好み型）は情緒不安定 社会的 不適

応、活動性、外向的でパーソナリティの不均衡が直接外部えられるものであり、このため反社会的行動に出やすく、環境が悪いと非行に向いやすい。表5は分析したBB'B'が大体それである。C類（左寄り型）安定消極型で、良いこともなければ、悪いこともしない型と考えられ、非行と一番反対の極にあるものと考えられる。表5のC・C'が大体それである。D類（右下がり型）最も理想的な人格の持主で、情緒的に安定し、社会的適応もよく、活動的で、対人関係もうまく行くタイプで、知能高く、情緒的にも良好な傾向を示し、家庭状態も良い。表5のDD'が大体それである。E類（左下がり型）はいわゆるノイローゼ型で、自らの内部に問題を持ちやすい 適応力の弱いタイプであ

表 - 3

類型	E 類 (左下り型)	C 類 (左寄り型)	A 類 (平均型)	B 類 (右寄り型)	D 類 (右下り型)
診断項目	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10	1 2 3 4 5 6 7 8	1 2 3 4 5 6 7 8 9
A 班	8 8 2 6 5 3 1 3 2 1	5 9 5 10 12 2 4	2 5 10 8 5 4 5 1 3	5 8 7 3 11 5 4 1	9 2 4 2 4 4 6 3
B 〃	10 3 3 2 2 4 5 1 3 2	13 2 6 6 7 2 1	2 2 3 11 3 7 4 1 3 3	8 4 6 4 5 4 3 2	11 10 3 5 4 2 1
C 〃	5 6 4 8 4 1 1 2	5 11 6 10 2 1 1	2 4 7 5 6 4 7 2 1	3 11 7 8 1 7 1	5 5 6 2 6 1 1 4 1
D 〃	6 9 3 2 5 3 5 2	7 6 8 5 3 2 3 1	1 3 11 7 2 4 4 6	6 3 5 9 6 2 4 3	5 7 10 5 2 2 1 1
E 〃	6 8 2 5 4 4 1 2 2	6 8 2 8 8 5 2 1 1	1 6 6 5 7 8 2 1	4 9 7 6 6 3 2 2	4 1 9 5 7 1 5 2
F 〃	7 7 4 4 6 2 3 2 2 2	6 7 8 7 6 3	4 2 5 9 6 6 3 4 2 2	6 9 3 5 4 4 3 2	11 4 6 6 2 2 2 2
G 〃	8 3 8 2 1 2 1	3 8 3 5 4 3 3 1	2 1 2 7 4 8 4 3 2	3 6 8 3 5 2 1	3 4 2 8 6 5 2 2
H 〃	6 4 8 5 2 1 1 2 1 2	5 4 5 10 2 8 3	1 2 3 9 11 2 2 4 4	5 4 10 7 4 3 2	7 7 5 1 5 1 4 2
I 〃	6 5 2 5 5 3 2 1	4 8 7 5 5 4 2	2 2 4 1 2 7 5 2 2 1	6 11 5 4 5 3 2	6 7 8 5 5 3 3 1
J 〃	9 2 5 5 1 2 2	4 6 5 4 4 3 3	1 5 3 8 2 4 5 2 2 1	5 2 8 6 5 3 2 1	5 4 4 7 2 1 2 4
K 〃	11 5 5 3 3 6	4 9 5 6 8 3 1	4 2 6 3 6 9 3 3 1	3 6 6 6 7 5 2	8 5 4 3 3 4 1 2
L 〃	8 5 5 4 4 2 2 6 2	7 9 6 5 7 1 3 1	1 8 10 7 7 3 3 1	7 4 7 3 6 2 5 3	6 6 5 2 5 5 2 3
M 〃	12 9 1 3 1 1	5 10 1 3 3 5 4	2 6 7 4 6 2 2 2 2	3 4 6 5 6 1 1 4	3 4 2 5 5 2 3 5
N 〃	2 6 2 6 3 2 2 1	3 4 10 1 3 5 2 1	2 2 3 5 5 5 4 1 1	2 6 7 7 3 2 1	11 2 2 1 2 2 3 1
O 〃	7 5 4 3 4 3 1 1	7 5 6 3 7 5 1 1 1 1	2 2 6 3 8 8 1 4 2	3 8 5 4 6 5 1	2 2 7 3 4 4 6 2

り、内向的、非活動的なため問題性が発見されにくいものである。5表のE・E'が大体それである。

判定と所見の考察（表4と5）

前述の類型から見て、表5のAA'A''DD'B混合大部分が表4の別に異状なしの組に入り401名となり約70%である。次に多いのがEE'と混合の部分で情緒不安定がうかがえる。安定に欠ける。やや情緒の不安定のみえる等である。合せて131名で約20%になる。このF類の多いのは一寸困ったことである。然し考え方によってはY-Gの始めに述べたように青年期にあるものは、一般的に自分を悪く評定しようとする傾向があるように、自己評価の方法のため自意識過剰の表出ではあるまいか。次はBB'、である消極性が目立つ。消極的傾向がみえる等である。総体的に見て選抜

されて入学した者であるので大体良いようである。前に述べたようにE類の一寸多いのがどうしても気がかりである。

クレベリン（表6）

n……（初頭努力）

作業に対する興味関心がわくのかどうかをみるもの、つまり意志の緊張のメカニズムをみるものである。問題のある場合+（以下同じ）

S……（動揺率）

作業量にむらがあるかどうかをみるものである。情緒に安定性のない人はこの動揺率が高い。

V……（V字型おち込み）

ある特定の行のみ作業量が低い場合をV字型おち込みという。これはSにほぼ似かよった心理構造をもった

表 一 4 YG

区 分	計	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O
所 見 項 目	班	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
消極性目立つ	7	1	1	1		1				1					1	1
情緒の不安定がうかがえる	89	5	5	2	14	16	11	1	3	3	3	8	7	2	5	3
安定性に欠ける	37	2	3	3	2	1	4	2	3	2	4	3	2	2	3	1
消極的傾向	23		2	3	2	3	2		3	1	1	2	3	3		
劣等感安定性に欠ける	5		1	3			1									
神経質的傾向がみえる	2		1	1												
安定性に欠け消極的	1		1													
やや情緒の不安定がみえる	5			5												
別に異状なし	401	35	26	23	19	22	24	30	21	32	26	27	28	25	21	32

表 一 5 YG 判 定

区分 記号	計	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O
	班	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
A	44	4	7	2		1	5	2	3	4	1	2	2	5	2	4
A'	56	3	1	7	6	3	10	6	4	3	3	3	3	1	1	2
A''	94	6	8	10	7	8		2	7	8	8	9	8	4	8	1
B	17		1		2	2	2	2				3	1	1	1	2
B'	53	3	4	2	5	3	4	2	5	2	5	2	10		2	4
B''	1						1									
C	11		1	1	2	1						1		2		3
C'	24		1	1	1	1	1	5	4			3	3	1	2	1
D	25	4	4	1	1	4			1		2	1	1	2	3	1
D'	26	11	2	5	3	3	4	4	5	4	5	5	4	9	3	9
E	40	3	4	2	2	2	6	1	5	2	3	2	2	1	3	2
E'	47	6	5	1	6	4	4		3	3	1	7	3	1	2	1
AB	21	4				3	1			2	3	1		5	1	1
AD	18			1	1	2		5	1	3	1	1	2			1
AC	12					1	3	2		2				1		3
AE	8						2			2		1	1			2

人に多いが中には意識がその時とぎれたとみなされる特殊な病的な人にも表われる。

f……（誤びゆう量）

不正確ななげやりな人に誤びゆう量は多いが中には分裂病等特殊な病気のある人がいる。

t……（休憩効果率）

正常な人であれば前半の作業量より後半の作業量が多い。持続性に欠ける人、情緒の安定度の近い人は休憩効果率は低い。

表 - 6

	n	S	V	f	t
A 班	3	3	18		
B //	4	5	20		
C //	3	6	15		
D //	2	8	11	1	
E //	1	5	21		
F //		3	20		
G //	1	1	16	1	
H //	6	7	26		
I //	8	2	24		
J //	2	1	26		1
K //	4	3	16	1	
L //	5	6	9		
M //		2	9		
N //	2	1	14		
O //	1	2	10		

曲線型（表7）

u 型……標準型で力動的な適応性がうかがわれ、情緒も安定している。能率もあがりやすい。

H 型……意志の緊張弛緩がゆるやかな人である。したがって大きいあやまちはないが反面、大きい成果もあがりにくい人に多い。リーダーにはなりにくいメンバーとしては被影響性の強い人ともいえる。

M 型……H 型に準ずる人といってよい。

L 型……持続性に欠け意志薄弱型の人である。能率もあがりにくい。被影響性はいいよ強い。

E 型……仕事えのとりつきが悪く場面々々へ直ちに適応することは困難であるがなれば案外うまくやっていくというタイプである。したがって仕事もじっくりかまえさせると能率があがっていく。但し、大きい成果が期待できることがある反面、大きいあやまちをおかすことがある。

W 型……情緒の安定性に欠ける。問題をおこしやすいタイプである。社会生活に適応しにくい傾向があるし、仕事の能率もあがりにくい。

混合型……上記の型が前半後半混合した曲線型である。（Mu、Wu 等）これは左が前半右が後半の曲線型をあらわすが後半の曲線型を主体として判定してよい。

判定（表9）

a・a'・a''・aF・aP の順に良好な性格の段階づけをする。a'' はやや難点があり aF は問題のある性格といつてよく他の面からもっと深く調査の要あるものとして

表 - 7 クレペリン曲線

区分 記号	計	A 班	B //	C //	D //	E //	F //	G //	H //	I //	J //	K //	L //	M //	N //	O //
u 型	342	26	24	25	22	24	24	18	29	25	17	22	22	17	23	24
H //	2								1			1				
M //	21	1		2	1	3	3	1		3			4	1	1	1
L //																
E //	8					1	1			1		2	3			
W //	22	1	2		1		2		1		9					6
uM //	116	9	11	8	10	12	8	9	2	7	4	12	7	10	4	3
uH //	9	2		1			1	1	2	2						
uL //																
uE //	11	2			3		1		2	1				2		
uW //	7	1	1	1			2	2								
MH //	5		1			1		1			1		1			
WM //	6					1					2			1		2
ME //	3					1						1	1			
WE //	2							1							1	
AM //	1											1				

よく aP は異常者としてよい。

曲線と判定 (表 7・8・9)

全体的に見て非常に良 好な結果である。一応予想した通りである。特に異状なしの 496 名は大体曲線の u 型、H 型、uM 型が大勢である。所見で多い仕事へのとりつきからうまくない 18 名は E 型、uE 型で一応心配だが仕事の要領がわかりじつくりかまえさせると

能率も上り成果が期待出来る。一番心配なのは大体 W 型になる 22 名及び uW 型 7 名、WM 型 6 名、WE 型 2 名計 37 名、所見項目の、安定性に欠ける 8 名、動揺しやすい 7 名、やや安定性に欠ける 14 名、やや不安定な情緒が見える 7 名、情緒の安定性に欠ける 4 名、計 40 名、両方の計を見ると大体合致する。この面の指導を如何にすべきかが問題である。

表 一 8 クレペリン

区 分 所 目 項 目	計	A 班	B 〃	C 〃	D 〃	E 〃	F 〃	G 〃	H 〃	I 〃	J 〃	K 〃	L 〃	M 〃	N 〃	O 〃
安定性に欠ける	8	1	3	1		1	1									1
動揺しやすい	7		1			1	3					2				
持続性に欠ける	4		2			1		1								
力動的なものに欠ける	1		1													
やや安定性に欠ける	14			3	2	2	2	1	1		1	1	1			
仕事へのとりつきがうまくない	18			2	1	1	2	2		1		1	3	3	1	1
やや不安定な情緒がみえる	7	1				1	3				1					1
情緒の安定性に欠ける	4					3	1									
能率が上らない	3				2		1									
不安定な情緒で不適応を起しやすい	1										1					
異状なし	496	42	31	32	32	33	30	28	36	38	33	34	36	29	26	86

表 一 9 クレペリン判定

区 分 記号	計	A 班	B 〃	C 〃	D 〃	E 〃	F 〃	G 〃	H 〃	I 〃	J 〃	K 〃	L 〃	M 〃	N 〃	O 〃
a'	183	11	13	14	12	16	17	7	16	11	7	12	14	10	5	18
a'	122	16	9	10	7	11	5	8	4	9	12	7	7	5	4	8
a''	54	4	5	4	6	6	5	3	4	6	3	3	3	1		1
au	86	6	5	5	6	2	4	6	7	6	5	6	7	7	11	3
au'	63	5	1	3	2	4	6	5	1	4	6	5	5	7	6	4
au''	16	1	1			1	1		3	2	1	1	2		2	1
aF	6		3			2										1
aP																
b	12	1	2		1	1	1	2	1			1	1			1
b'	8				4				1		1		1	1		
b''	11		1		1		4	2		1		2				
bF	2			1					1							

第三章 観察指導の一般的理念

(1) 観察指導による性格

われわれは、ある人の振舞い方、考え方、話し方、感じ方、などを通して、その人の性格を判断する。歩き方、趣味、体格、人相、筆跡、声、接する態度などが判断の手がかりになることもある。いずれにしても何らかの形で表現されたものを通して、このような特徴

をもつ人は、このような行動をするだろうと考えているのである。ところで、人の行動は、一般にその場面場面によって影響をうけ、規定されている。たとえば嬉しいことがあれば、表情も明るく、胸をはって歩くであろうし、初対面の席では控え目に振舞ってあまり自分の内部を見せないであろう。しかし他面、これらの環境の諸条件が似たものであったとしても、その場面における各人の行動には、かなりの相違が認められる。つまり、嬉しい時に有頂天になって喜ぶ人もあれ

ば、その様な感情をあまり表現しない人もあり、はじめて会った時から、古くからの友人のように親しく話し会える人もあれば、十年つきあってもその正体がはっきりしない人もいる。すなわち、人の行動はそのときそのときの状況によって異なるが、さまざまな行動のあらわれの中に、いかにもその人らしい独自の傾向を認めることが出来る。このように、人の行動のいわば背後にあって、特徴的な行動の仕方を生み出しているものを性格というのである。個人に一貫した特徴は、ある時期を限ってみればかなり安定した持続性をもっている。あの人はこういうときはこうするだろうとか、こう言えばきっと怒るだろうとか、自分の知っている人について、行動の予添ができるのは、性格に持続性とまとまりがあるからである。性格を記述し、描写するには、普通快活とか正直なというような形容詞を用いる。しかし、人の性格はこのような特徴の並列的な寄せ集めではなく、ある構造をもったものと考えられる。このことはAとかBとか二人をくらべてみて、礼儀正しく仕事に熱心である、という点では似ていても、Aには暖かみがありBには冷たい、という特徴があると、二人の印象がかなり違ってしまうということからも察知することができる。また外づらはいいが内づらは冷たいとか、本心はなかなかいわない人だと言うような日常の表現の中にも、性格が構造をもっていることが示唆されている。これを表面と裏面として学生の日常生活をながめてみたい。学生の年齢的分布より見て、人生の中で一番変化の多い青年期であるので、その人の一場面を見てあの学生はこうだと判断するのは早計であり、可哀相である。いろいろな場面、行動、言語、特に態度の表現を重視しそれを積み上げて慎重に判断している。

(2) 本人と家庭環境

(1) で述べた観察による性格の根っ子になるのはやはり家庭環境が一番問題になる。人間はまったく宿命的にある家庭に、何番目の子供として生れてくる。その家庭には、独自の「ふんいき」がある。家庭という集団の中で、家族相互の交流によってつくり出される場面があり、これが持続すれば「ふんいき」となる。そして性格づくりの過程にある子供にとっては、この「家庭特有のふんいき」が大きな影響をもっと考えられる。家庭の中心はやはり父母である。この父母の性格、指導方針、態度、などによりその家庭の「ふんいき」は大きく左右される。口やかましくて苦虫をかみつぶしたような顔をして、お説教をする父親とか、つまらないことを何回も注意したり、いつもぐちをこぼしている母親がいた場合、子供は子供なりに迷惑をこくり、自然に両親を意識して特別の防御対策を考え出

すようになる。そしてこのような関係が長くつづけば、両親対子供の間の一つの「固定したふんいき」が出来上ってしまう。又逆に両親が自由放任で子供の生活「しつけ」にも、これという指導をしなければ、またそれはそれなりのふんいきが出来上る。ということになる。いづれにしても、両親のあり方、家庭のふんいきは大きく左右されることになる。しかし父親が頑固であろうと、母親が口やかましくあろうと、他の家族も自由な発言ができ、相互に批判もできるという力をもっていれば、比較的家庭は民主的に運営されるわけで、必ずしも一人の権力者に家庭が握りつぶされてしまうことはない。これが戦前の封建的な家庭と戦後の民主的な家庭のふんいきの差だろう。これについて、4つのタイプが考えられる。父親が絶対的支配力を持ち、他家族がそれに従う「父権家族」また母親が権力者の「母権家族」あるいはおとなが支配者で子供は従属者の「大人中心家族」また家族がそれぞれにふさわしい役割りと地位と責任をもつ「民主家族」とがある。だが最近では、これに加えて子供が大人を牛耳っている「子供中心家族」もあるようだ。このような関係の差はそれぞれ異った家族ふんいきをつくり、またそこで育つ子供の性格づくりと深い関係をもっている。中でも子供の性格に見られる協調性、責任感、親和感などは、この種の影響の大きいものと思われる。一般に近代的な家庭では、家族の年令、家族の智的水準、家族の性格、生活信条、家族の親和度、家庭の教育方針とその技術などの内部条件によって、「その家庭のふんいき」が形づくられると考えられる。またふんいきをつくる外部条件としては、家庭の職業、経済状態、社会的地位、文化的設備、住居、清潔、整頓、近隣および知人との交際の状態、娯楽、行事、に対する態度などが考えられる。すべての子供が家庭に生まれた最初のときから、成長するまでの長い間にわたる家族との交流が性格づくりに最も大きな影響をあたえている事実、ゆがんだ性格、を持つとけなされる子供の背後には、きまって病的な家庭環境が見られる。

(3) 本人と社会環境

戦後の時代の流れは本当に目まぐるしい社会変化をなしている。その中で育つ子供は一面可愛相であり一面将来に向うのに役立つとも考えられる。その中で性格づくりも又おのずと、社会変化に従い変っている。都会に於ける労働闘争、交通地獄、公害問題、遊ぶ所もない、そして遊びを知らない子供、学校から帰ると「教育ママ」より何時も勉強、勉強とおいまわされる。子供は日常生活の中で強く不安を感じて、イライラ、ドキドキ、している。そこから生れる性格も利己主義、冷酷さ、無気力、暗さがあり一面に於いては勞

働きらいて欲求不満で、刹那的享楽性を求める。無責任さ、夢のなさ、不道德と悪い面ばかりが出ている。本当に「不安定な社会」というほかはない。一方さかのぼってその時代を考えて見ると、その時代の社会環境にあった性格の日本人があるように思う。今年は明治百年にあたるが、明治に生れて明治、大正に育った60才台の人、大正時代に生れ大正、昭和の前期に育った40才台の人、を考えて見れば、当時の社会環境のしからしめるように何にか現代の考とは変った一本筋の入った性格がうかがえる。現代の者と明治、大正の人が何がどうかという事は別にして、その時代の社会環境、教育が如何にその時代の日本人自身の性格に影響するかが思われる。そこで子供の教育の場である学校と家庭教育を含む社会を考えて見ると、家庭以外の社会環境が直接子供の性格に対する影響は、それほどつよくない。もちろん、ある成長の時期には、重要な意味をもっていることは隣近所の仲間との遊びが少年を不良化するという研究結果などにあらわれている。また、学校で成績のよい子供と不良な子供とは性格がちがってくる。成績不良の子供は男子の場合はおもに攻撃的、利己的で、人との間に親しみを失いやすく、女の子の場合は内向的、空想におちいりやすく、失望的になりやすいという。成績のよい子は、能力にくらべ学業がやさしすぎる場合、急げぐせがつき、いたずらっ子となり、ときには空想的または攻撃的な傾向をあらわすことがある。社会的、経済的、環境が家族学校を通じて子供に多分影響をあたえ、習慣、態度、価値観、を決定するという事はいうまでもない。

(4) 個人差の判別方法

日常生活の中で、われわれがあの人性格がどうだなどという場合も、素朴な形で判別を行っているわけであるが、それは結局、日常生活の中でその人の行動の特徴を観察していることから始まることはすでにのべた。専門的な立場から行れる判別は、勿論もっと組織化された方法によらなければならない。その方法には観察、実験、面接、検査、作品の分析などの方法がある。これらの方法はそれぞれ一長一短があり、適当に併用されなければならない。観察による方法は、めんどろな設備を要しないし、日常いつでも行っている。何げない日常の些細な行動の中に、その人の特徴があらわれることも少なくない。ただこの方法にはこちらの都合のときに行なえるとはかぎらないし、同じ事態が二度くり返されることもない。またとすれば表面だけの行動力をみることにともなかなない。さらに記録を計画的にとることがむづかしいのも難点である。これらの難点をさけるため、一定の事態での観察をこころみようとする、実験方法に近づいてくる。

特別の行事の際などにこころみることも勿論可能であるし、さらにそのための事態を設定することができなければいっそう有効であろう。しかし学校生活の中では厳密な実験条件を設定して観察することなどは、なかなか困難である。面接法もまた有効な方法の一つである。面接といっても、もちろん漫然と話し合うことではない。一定の調査項目を用意して次々と質問していく方法もあるが、自由に話し合いによる方法もある。質問項目をきめておいて、答えさせていく方法は質問紙による調査法に近く、この場合には質問項目の選択が重要になる。自由な話し合いによる方法の特徴は、答えの内容ばかり話している相手の感情や態度をも知ることが出来る点にある。意見の打ちつけあいという面接でなく、相手のいっている言葉を相手のいっている意味で理解するという心構えが出来ていれば、自由な話し合いによる面接方はきわめて有効な方法になるだろう。面接にしても観察にしても、その項目の選択もたいせつであるが、その記録の方法もたいせつである。イエス、ノー、わからない、の三分類のどれかに入れさせる方法もあれば、評定尺度法というものもある。これは、性格のある性質について一方の端から他方の端まで数個の段階にうけて面接あるいは観察の結果をそのどこかに位置づけるものである。段階の設定のしかたは、イエス、ノー、の二つに分けさせるよりむづかしいのがより豊かな結果を生むことが多い。

(5) 観察類型

性格をいくつかの類型に分けることは古くから試みられた。紀元前400年頃、ギリシャの Hippocrates が体液の4種、血液、黒胆汁、黄胆汁、粘液のうち、いずれが支配的であるかによって多血質、ユウウツ質、胆汁質、粘液質の四つの気質に分けたが、これは今日まで行われてきた気質の四分法の起源である。しかし性格の分類は若干の科学性の上に多分に哲学的な思弁によってなされたものが多い。総合的多面的にできあがっている人間をいくつかの類型の中にすっきりした形でふるいわけるということはまず不可能といってもよい。人間はそれほど単純にはできていない。従って性格検査、も数が多く、またそれぞれの検査は主としてみようとする人間的側面を異にしているのでは注意を要する。しかし困難であるからといって放ってはおけない。そこで東京教育大学小林晃夫教授は性格を10の類型に分類した。この際の指標となったものは社会、仕事ぶり、物の考へ方、情意の状態、気候への適応性、1日の調子、食物の嗜好、睡眠や疲労の傾向、技術の上達ぶり、体育の被影響性などである。これらの要因を総合し、相互の相違を注意深く比較検討した結果、誰にでもわかることを主眼として次のように名づ

けた。(i)おだやか型、(ii)経神質型、(iii)躁うつ型、(iv)強気敢行型、(v)地道粘り型、(vi)あっさり実行型、(vii)内的安定型、(viii)分裂型・熱中型・無関心型・自閉型・敏感型、(ix)自己顕示型、(x)粘着型

おわりに

以上の研究資料で、性格特性の変化を規定し、断定する事は出来ないが、運動部生活は、一つの好ましいパーソナリティ形成の条件として考える事が出来るであろう。しかし、考え方によってはしばしば危険を伴うものではないだろうか。スポーツをやると言うその事は、好ましい人間を作る多くの場面や、方法をもち、人間形成の場としては、他のあらゆる形成部門に何らまさるとも劣るものではないと思う。この様にスポーツは人間形成にきわめて役立つものであるが、良いからといってやりさえすれば好ましい人間が形成出来ると思う事には問題がある様に感じられる。即ちこのスポーツをどの様に指導すればよいかという問題に成ると思う。例えば体の調子がおかしいからと云って薬をてたために飲んだらかえって体に害を及ぼすと云うことと同様である。私はスポーツを通して人間的に教育する前の時点で、あらゆる教育の場（教室での教科の場、体育の場）で少しでも精神を健康にするためのカウンセリングの機会を多く持ち、日常生活を正し、健康な精神の持ち主にしておくことが先決であると思う。その後でスポーツを指導すると云う事が、一そう効果を上げるものであり、一番大切であると考えられ

る。この事を抜きにして如何にスポーツをやってもその効果はないと云う事である。あるいは効果がないばかりか、かえって好ましくない人間性をつくる事さえあるような気がする。例えば慎重に、確実にことをしなければならぬ競技から、無鉄砲さが生まれたり、協調し責任を重んじるチームプレーからエゴイストが生まれたりすることがあるであろう。この事について研究された文献を見れば、体力も増加し、運動能力も向上し、技術の習得の速度も、好ましい傾向をもっていると言う事が発表されている。そこでただスポーツを通して好ましい人間性を作る事は出来ないとは云わないが、出来る事なら、スポーツによって人間の教育をする以前に、健康な人間にしておきたいと云う事である。最初にも云った様にする事で一そうの効果がある様に感じる。云いかえればスポーツをやる前に又はやっけていても良いから常に人を健康にするためのカウンセリングをおこたりなければ、スポーツを通しての Personality の指導はまだまだ良い結果を得る様に思えてならない。次に性格検査と観察指導との関係についてもっと具体的に事例を挙げて考察するよう計画していたが、資料を整理し、深く考察すればする程個人的にさしさわりが出来、その本人のプライバシーにも関係するので今回はそこまではやらなかった。全体的になんとなく尻切れとんぼみたいな結果に終わった事は残念だ。しかし次の機会に是非もっとほり下げて最初の計画通り具体的事例をあげて発表したい。

参 考 文 献

- (1) スポーツ科学講座（スポーツの心理）松田岩男
- (2) 体育科教育（1965. 11）（1966. 10）
- (3) 体力測定と健康診断 水町四郎
- (4) 現代スポーツ心理学 松田岩男
- (5) 体育心理学（上） 末利博
- (6) 性格 宮城音弥
- (7) 性格はいかにつくられるか 詫摩武俊
- (8) 性格はどんなものか 宮原誠一、大浜英子、早川元二

根軌跡の数値解法(其のI)

木 村 剛 三

<昭和43年10月4日受理>

Numerical Solution of Root Locus (Part One)

When we analyze the automatic control systems, we sometimes need the roots of the higher order equations. But it is generally impossible that we solve the higher order equation algebraically. For this reason, W.R. Evans discovered the root locus method, one of the most useful methods of today, but it is not a very exact method because of a graphical one.

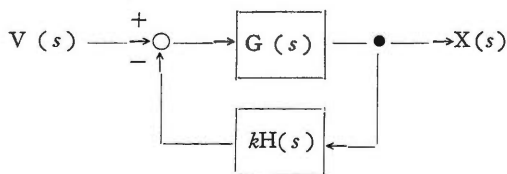
On this paper, we try to make the gain constant "K" variable, deriving the simultaneous differential equation both for the real part and for the imaginary part of the root, asking for the root of the necessary value of "K" by numerical integration with the electronic digital computer.

1. まえがき

自動車制御においては暫々高次方程式の根を求める必要に直面するが、一般には、一般には高次方程式を解くことは不可能な場合が多い。このため W.R. Evans より根軌跡法が考案され、有力な手法の1つになっているが、これは図式的解法であるために精度の点において問題があった。ここではゲイン定数 k を変数とし、根の実部、虚部に対する連立微分方程式を導き、それを電子計算機で数値積分することにより必要な k の値に対する根を求めることを試みる。

§ 1. 特性方程式

第 一 図



第1図のようなフィードバックのある系の伝達関数は

$$\frac{X(s)}{V(s)} = \frac{G(s)}{1 + kH(s) \cdot G(s)} \quad (1.1)$$

で表わされる。ここに s はラプラス変換におけるパラメーターであり、 k はゲイン定数である。この系の応答を明らかにするためには特性方程式

$$1 + kH(s) \cdot G(s) = 0 \quad (1.2)$$

を解かねばならないが、 $H(s)$ 、 $G(s)$ は一般に有

理関数なので (1.2) は更に

$$f(s) + kg(s) = 0 \quad (1.3)$$

の形にすることができる。但し $f(s)$ 、 $g(s)$ は整関数とし、また一般の根軌跡の例に従い (1.2) の極、すなわち、開ループ伝達関数の極

$$f(s) = 0 \quad (1.4)$$

の根は判っているものとする。

今回の計算では複素極から出発した軌跡を求める。そのため

$$s = x + iy \quad (1.5)$$

とおき、(1.3) に代入して整頓すれば

$$u(x, y; k) + iyv(x, y; k) = 0 \quad (1.6)$$

とすることができる。云うまでもなく u 、 v は x 、 y 、 k の実関数である。故に

$$\left. \begin{aligned} u(x, y; k) &= 0 \\ y &= 0 \end{aligned} \right\} \quad (1.7)$$

又は

$$\left. \begin{aligned} u(x, y; k) &= 0 \\ v(x, y; k) &= 0 \end{aligned} \right\} \quad (1.8)$$

とすることができる。ところが (1.7) は、実は (1.3) が実根を有する場合に他ならないので、ここでは (1.8) について考えることにする。

§ 2. 連立常微分方程式の導入

(1.8) は k をパラメーターとする x 、 y に関する連

立方方程式であるから、代数的に解ければそれにしたことはないが、それができない場合、(1. 8) から

$\frac{dx}{dk}, \frac{dy}{dk}$ を求める。即ち、

$$\begin{aligned} \frac{\partial u}{\partial x} &= u_x, & \frac{\partial u}{\partial y} &= u_y, & \frac{\partial u}{\partial k} &= u_k \\ \frac{\partial v}{\partial x} &= v_x, & \frac{\partial v}{\partial y} &= v_y, & \frac{\partial v}{\partial k} &= v_k \end{aligned}$$

の記号を用い、(1. 8) より

$$\left. \begin{aligned} u_x \frac{dx}{dk} + u_y \frac{dy}{dk} + u_k &= 0 \\ v_x \frac{dx}{dk} + v_y \frac{dy}{dk} + v_k &= 0 \end{aligned} \right\} \quad (2. 1)$$

を得るがこれより、

$$\left. \begin{aligned} \frac{dx}{dk} &= -\frac{u_k v_y - v_k u_y}{u_x v_y - v_x u_y} \\ \frac{dy}{dk} &= -\frac{u_x v_k - v_x u_k}{u_x v_y - v_x u_y} \end{aligned} \right\} \quad (2. 2)$$

を導くことができる。これは x, y に関する連立常微分方程式であり、 $k=0$ とそのときの (1. 4) の解の実部、虚部を初期値 x_0, y_0 として電子計算機により必要な k の値まで数値積分すれば目的を達することができる。

§ 3. 例題

例として、

$$(s+2)(s^2+2s+2)+k(s+3)=0 \quad (3. 1)$$

を考えよう。まず、 $s=x+iy$ を代入して

$$\left. \begin{aligned} u(x, y; k) &\equiv x^3 - 3xy^2 + 4x^2 - 4y^2 \\ &\quad + 6x + kx + 3k + 4 = 0 \\ v(x, y; k) &\equiv 3x^2 - y^2 + 8x + 6 + k = 0 \end{aligned} \right\} \quad (3. 2)$$

これから u_x, u_y 等を求めて (2. 2) に代入すれば、

$$\left. \begin{aligned} \frac{dx}{dk} &= -\frac{x+1}{15x^2+3y^2+40x+26-k} \\ \frac{dy}{dk} &= \frac{3x^2+3y^2+18x+18-k}{2y(15x^2+3y^2+40x+26-k)} \end{aligned} \right\} \quad (3. 3)$$

となる。又 $k=0$ のとき、

$$(s+2)(s^2+2s+2)=0$$

より

$$\left. \begin{aligned} s &= -2 \\ s &= -1 \pm i \end{aligned} \right\} \quad (3. 4)$$

を得るが、ここでは初期値として、 $s=-1+i$ 即ち、

$$\left. \begin{aligned} x_0 &= -1 \\ y_0 &= 1 \end{aligned} \right\} \quad (3. 5)$$

をとることとして、これから (3. 3) を k の刻みを 0.1 として積分してみた。結果を $k=0, 5, 10 \dots 50$ の場合について第 1 表に示したが、なお解の精度を示す目

第 1 表

k	x	y	$u \times 10^6$	$yv \times 10^6$
0	-1.0	1.0	0.0	0.0
5.0	-0.70652	2.61636	-0.56	0.10
10.0	-0.64152	3.47886	-0.60	0.16
15.0	-0.60889	4.15223	-0.46	0.40
20.0	-0.58883	4.72541	-0.97	-0.63
25.0	-0.57514	5.23368	-0.85	-0.43
30.0	-0.56516	5.69534	-0.60	-0.13
35.0	-0.55755	6.12145	-0.83	-0.27
40.0	-0.55155	6.51922	-1.85	-2.33
45.0	-0.54669	6.89370	-2.83	-4.11
50.0	-0.54268	8.24859	-3.61	-6.48

安として、得られた $s=x+iy$ を (3. 1) の左辺に代入して得られた実部、虚部即ち、 u, yv の値も計算しておいた。表の右側の 2 行の数値がそれである。出発した初めは実部、虚部がそれぞれ $0.3 \times 10^{-6}, 0.5 \times 10^{-7}$ 程度だったのが、徐々に増大して $k=50$ では $0.4 \times 10^{-5}, 0.6 \times 10^{-5}$ 程度になっている。また、計算の所要時間は $k=50$ まで、5 分であった。

2. あとがき

今回は $k=0$ のときの複素極から出発して無限遠に発散する根軌跡について計算したが、この方法は逐次計算を進める方法であるため、 k の大きな値に対しては誤差が増大する恐れがあるし、また軌跡は必要なく、ある大きな k の値に対してだけ根が必要なときは、途中の計算が余分のもののように思われるであろう。そのようなときは、別の工夫をしなければならない。(註)

また、将来は軌跡が実軸と交わる場合、系が無駄時間を含む場合について計算を進め、更にカーブプロッターを用いて直接、計算機にグラフを描かせることを予定している。

最後にこの研究について懇切な御指導を賜った九州大学の高田教授に深く謝意を表します。

(註) 例えば、Bernulli, Newton, Bairstow 法、Mc-Auley 法 (培風館、山内二郎、森口繁一、一松信著電子計算機のための数値計算法 I、P49) や九州大学応用力学研究所所報第 29 号、2 元連立方程式の電子計算機による 1 解法

Fe₃O₄ の電流電圧特性について

中 村 安 生

<昭和43年10月5日受理>

On the Current-Voltage Characteristic of Fe₃O₄

Magnetite, Fe₃O₄, is a semiconductor. In general, the current-voltage characteristic for the contact layer between a semiconductor and a metal is either a rectifier type (*non-linear*) or an Ohmic type (*linear*). It is the rectifier type if a metal is in contact with ZnO or Cu₂O, but the symmetric non-Ohmic type, in our experiment, if a metal is in contact with Fe₃O₄.

Then, by using Fe₃O₄, we can make the symmetric varistor.

Yasutaka Nakamura

1. はじめに

Fe₃O₄ の結晶構造は、逆スピネル型と決定されている。これは、他の逆スピネル型結晶構造をもった物質と異なり、半導体で、抵抗率は非常に小さく $10^{-2} \Omega \text{ cm}$ 位と測定されている。4 個の酸素で囲まれた Fe³⁺ と 6 個の酸素で囲まれた Fe²⁺、Fe³⁺ とが組合わさった結晶構造をしており、6 個の酸素で囲まれた Fe²⁺ と Fe³⁺ とが電子を交換しても型は同じであり、電子を移動させるのに要するエネルギーが小さくてよいからであると説明されている。

Fe₃O₄ を簡単に作るには、空気中で鉄を強熱すればよい。表面に生じた Fe₃O₄ 層の中には、原料の鉄の中に含まれている不純分、空気中にある分子、原子が拡散し、又、急冷すれば、多数の格子欠陥ができていであろう。又、ガス炎等で加熱すれば、これらの中の分子、原子も格子欠陥を作る原因となるであろう。これらの欠陥は、半導体の場合、フェルミ準位、障壁に、又、抵抗率に影響する。

Fe₃O₄ を金属酸化物の半導体であるとし、他の金属酸化物 ZnO、Cu₂O と I-V 特性（電流-電圧特性）を比較した実験を行なった。

2. 試 料

〔I〕市販のトタン、針金、釘等をエメリー紙で表面を良く研磨し、表面層を取り去り、これを LPG 炎、及び電熱にて加熱して、鉄の表面に Fe₃O₄ 層を作ったものである。温度は 750~850°C 位で加熱時間は約 5 分である。長時間加熱し続けると Fe₃O₄ 層の厚味は増すが、Fe₃O₄ 層と地金との間に巣ができて、簡

単に剥離するようになる。LPG 炎と電熱と二通りしたのは、LPG 炎中の元素が格子欠陥を作る原因になり、特性に影響すると考えたからである。加熱後は、空气中で自然に冷却した。このようにして作った Fe₃O₄ 層の表面を顕微鏡で見ると小さな結晶が集まって層を作っているのが見える。中には一辺が 0.1mm 位の大きさに結晶が成長している所もあるが、大部分は 10^{-2} mm 前後である。第 2 図はこれの顕微鏡写真である。

〔II〕天然の Fe₃O₄ である砂鉄を集め、この中から、一辺 0.9mm 位の一部破損はしているが、正八面体をした結晶を見出したので、これを使用した。又、集めた砂鉄粒を顕微鏡で観察すると 1/20~1/50 の割合で正八面体をした結晶があるが、一辺が 0.1mm 位である。正八面体をした小さな結晶をも含めて、無作為に取り出して、その I-V 特性を調べて見た。

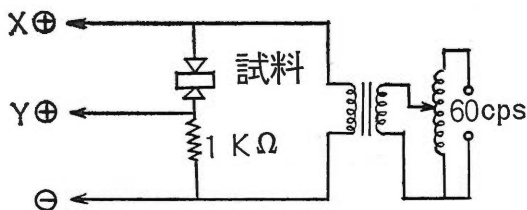
〔III〕鉱石としての磁鉄鉱を岩石カッターで厚さ 2mm 程に切り出し、切り口を研磨して、Fe₃O₄ の結晶が見えるようにしたもので、拡大して表面を見ると小さな Fe₃O₄ の結晶が島状に含まれているのが見える。大きい結晶は、一辺 0.7mm 程度である。大部分の結晶の切り口は色々な形をしており、一定の形をしていなかった。

3. 電極、測定回路

半導体に接触する金属の種類によって、接触層の特性がオーム性になったり、整流性になったりするので、ここでは Fe、Al、Cu、Zn を用いた。試料 I の一つの電極は地金の Fe をそのまま利用した。他の試料については、上記 4 つの金属を組み合わせ使用した。

測定回路

電源としてラジオ用電源トランスを通してスライダックにより電圧を加減できるようにした。又、一部は低周波発振器を用い、周波数特性も調べて見た。直流特性は測定しなかった。回路を第1図のように組み、



第 1 図

負荷抵抗 $1\text{K}\Omega$ による電圧降下より電流は求めた。第1図の $X\oplus$ 端をシンクロスコープの X 軸に、 $Y\oplus$ 端を Y 軸に接続し、 $I-V$ 特性は写真撮影して観測した。

4. $I-V$ 特性曲線

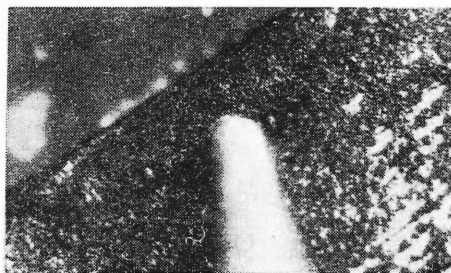
試料別に特性曲線を述べる。

試料 I

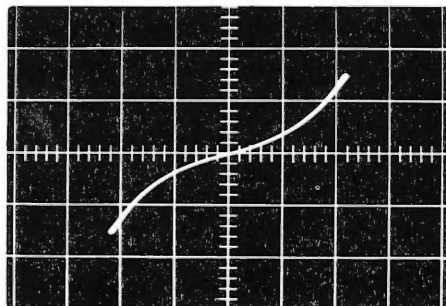
一方の電極は先端を針状に磨き、試料に接触させた。その時の $I-V$ 特性は、 $I=AV^n$ の形になり、対称非オーム性を示すが接触圧に A 、 n が敏感に関係する。又、接触する点によっては、直線性になる所もある。そこは Fe_3O_4 層が他の所と少し異なっているように見える。ガス炎により生成したものと、電熱で生成したものとの違いはほとんど見出すことができなかった。その理由は、いずれの場合も接触圧に特性が大きく影響を受け、圧力を同じにして測定することができなかったからである。第4図は他の試料の特性曲線であるが、この図と同じようになる。トタン板、針金等の原料による特性の違いも見出すことができなかった。電極の金属による違いはほとんどなく、電極を接触させる場所によって、 Cu はオーム性に近いこともある。周波数特性は $30\text{cps}\sim 100\text{kc}$ の間は大体一定であるが、これ以上になると電圧が大きい時、電圧の増加時と減少時とはずれが生じ、特性曲線の先端部がループを作る。この試料 I の顕微鏡写真が第2図(a)で、この試料のシンクロスコープによる $I-V$ 特性曲線が第2図(b)である。 X 軸は 2v/cm 、 Y 軸は 1v/cm 、入力は 1kc である。第1図よりわかるように試料にかかる電圧は、入力電圧から負荷抵抗 $1\text{k}\Omega$ による降下電圧を引いたものになる。電極は Cu 、試料はトタンを LPG 炎で加熱したものである。

試料 II

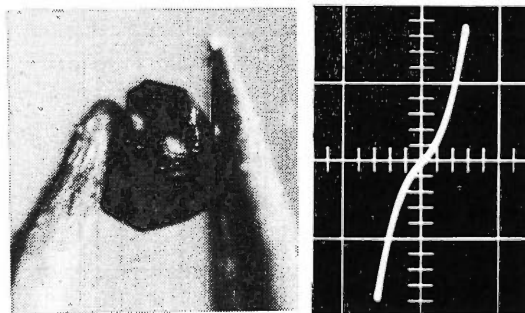
正八面体をした結晶の同じ面、異なる面に電極を接



第2図 (a) (50倍)

第2図 (b) ($X\ 2\text{v/cm}$ 、 $Y\ 1\text{v/cm}$)

触して見たが、電極の位置を変えても、 $I-V$ 特性は対称非オーム性である。この試料についても、又、他の一般の砂鉄についても特性は接触圧に大きく影響される。一般の無定型に見える砂鉄の $I-V$ 特性もやはり対称非オーム性である。周波数特性は試料 I より悪く、試料が大きくなるに従ってループがでる周波数は低くなる。第3図は試料の写真、特性曲線である。 X 軸は 10v/cm 、 Y 軸は 2v/cm である。

Cu- Fe_3O_4 -Fe (50倍) $X10\text{v/cm}$ $Y1\text{v/cm}$ (60cps)

第 3 図

試料 III

電極の一方が Fe_3O_4 の上であれば $I-V$ 特性は対称非オーム性になる。両極が Fe_3O_4 の上にある時は勿論対称非オーム性になる。両極とも Fe_3O_4 の上にない時はオーム性になる。一方の電極が多くの Fe_3O_4

の結晶が集まっている所にある時は 300~400 V位まで大きな抵抗を示し、一旦電流が流れ出せば急激に抵抗は減少して行く。I-V 特性は他の試料と同じく接触圧に影響され、周波数特性は 2 KC 位からループになる所もある。

5. 考 察

半導体と金属との接触は多くの人々によって研究されている。半導体が Se、Cu₂O では電流密度 J は

$$J=f(\psi_s, \psi_m, \psi) (1 - \exp -e\psi/kT)$$

と表わされる。 ψ_s は半導体の Fermi 準位、 ψ_m は金属の仕事関数、 ψ は金属接触後の半導体内部の価電子帯の上端から Fermi 準位までのポテンシャルである。n 型半導体と金属との接触では $\psi_m > \psi_s$ の時整流性であり、P 型半導体との接触では $\psi_m < \psi_s$ の時整流性で、この条件が満足されない時はオーム性接触になってしまう。半導体に接触させる金属を変えれば、 ψ_m が変わるので J は異なる。一つの半導体に仕事関数の異なる整流性接触になる二つの金属をつけ、これを直列にしてバイアスをかければ、逆向きの整流器を二つ直列に接続したことになり、I-V 特性は、二つの逆方向特性をつないだ型になると考えられ、印加電圧が小さい時は相当大きな抵抗値を持つと考えてよい。印加電圧が大きくなれば、半導体表面に生じている barrier をキャリアがトンネル効果、電子雪崩効果で通過し、又電流による発熱作用も加わって、抵抗は急激に減少する。同種の半導体を接触させた時は、表面層が接触するから barrier は対称型になり、接触は広い範囲にわたって整流性ではなくなると考えてよい。

試料 Fe₃O₄ の I-V 特性は、いずれの場合も対称非オーム性であったが、これはどのように解すればよいだろうか。まず考えられるのは、二つの整流器を並列又は直列に接触した型である。試料 I の Fe₃O₄ 層の厚さは 10^{-2} mm 程度、電極の接触面は一辺 $2 \times 10^{-2} \sim 5 \times 10^{-2} \text{ mm}$ 程度である。この試料 I の特性は、整流器を並列に逆向きに接続した時の特性に似ているので、電極と接している Fe₃O₄ 層の性質が一樣であれば、同種の金属を接触した時はオーム性であると同時に整流性であるとしなければならないことになってしまう。Fe₃O₄ 層が小さな結晶が集まってできているとし、各結晶が n 型になっていたり、P 型になっていたりするとすれば、対称非オーム性は説明がつく。このように考えた時、特性曲線が、電極の接触圧により大きく変わるのとはどのように考えたらよいかが問題になって来る。この問題について外見上から、接触圧が大になれば接触面積が増大するということと、加熱に

よって作った Fe₃O₄ 層は剝離しやすいから、地金と層との間に一部空隙ができていであろうということが考えられる。この二つが問題を解く鍵ではなからうか。この二つが問題ならば、試料 II の場合、正八面体をした結晶には、試料 I のような大きな空隙は考えられない。すると、次は接触圧が増大すれば、結晶内の格子欠陥が移動して、この欠陥が電気特性に影響するとも考えられる。

Fe₃O₄ 層や結晶で、酸素、不純分の分布が一樣であるとは考えられないから、n 型部分、P 型部分があると考えるのは無理であろうか。

Fe₃O₄ の電気特性が温度変化により対称非オーム性になるとするならば、試料 I では 10^3 kc 位までは周波数に関係しないから、温度変動は電圧変動に瞬間的に追従するとしなければならないことになり、これからは説明できそうにもない。

Fe₃O₄ は強磁性体であるので、磁氣的性質が電気抵抗に影響するとも考え得るが、試料 I の場合、厚さは 10^{-2} mm 程度であるので、影響が大であるとは考えられない。電圧、電流が大きい時、特性曲線にループができるのは、この磁氣的影響、誘電分極、発熱等が考えられる。

一方、同じ酸化物半導体である、ZnO、Cu₂O はどうであろうか。試料 I のトタンの Zn 層を取り去らずに加熱し、表面を ZnO 層にしたものに、電極を接触させ、特性を調べると、整流比 3~10 の整流性特性になっている。銅の場合も同様で、銅を加熱し、表面にできている CuO 層を取り去り、下地の Cu₂O 層に電極を接触して、I-V 特性を調べると整流性になる。いずれの場合も、特性は接触圧にはあまり関係しないが、あまり大きな接触圧、電圧をかけると、オーム性になる。これは、圧力、電界により薄層であるので、層が破壊される。オーム性になった時、接触点を調べると破壊されているのがわかる。ZnO は、n 型半導体であり、Cu₂O は P 型半導体で、整流方向は逆に実験上からもなる。

Cu₂O、ZnO と金属との接触が整流性になり、Fe₃O₄ が対称非オーム性になるのは、結晶のでき方が異なるためであろうか。ZnO と Fe₃O₄ とは同時に生成したのであるから、作る時の状態により異なる特性を持つという結論は出されない。加熱時の酸素の拡散は、鉄、銅、亜鉛では異なるであろう。

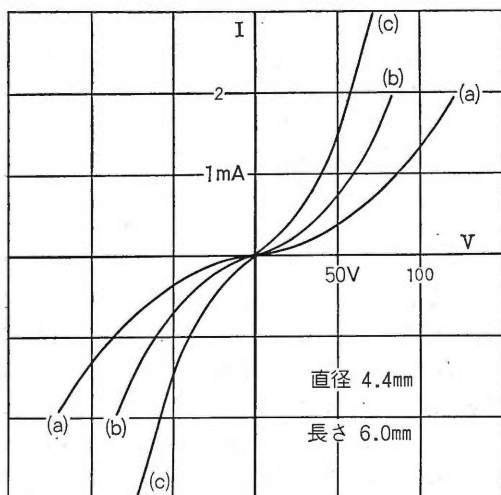
Fe₃O₄ が対称非オーム性になる原因が、結晶内部にあるのか、表面にあるのか、又、I-V 特性が接触圧に敏感に影響する原因、その他の現象の原因は今後の研究にまつ。

Fe₃O₄ の I-V 特性が対称非オーム性であること

は、今までの実験から間違いない事実と思えるので、これを使って対称バリスタを作ることは可能はずである。現在バリスタの原料として使用されているのは SiC、ZnO だけで、ZnO を使用したものは昨年松下電産 KK により開発、製品化された。

砂鉄粒を絶縁円筒に入れ、両端に電極を挿入して、電極間圧力を加減すると、I-V 特性は大きく変わる。圧力が小さい時は 500V 位まで、ほとんど電流は流れない。それで、適当な絶縁体を混合して、砂鉄を成型すれば対称バリスタを作ることができるはずである。

絶縁体である有機接着剤と砂鉄粒を混合して、圧力をかけ成型してみた。直径 4.4mm、長さ 6mm であるが、成型時の圧力、砂鉄粒の大きさ等は不明である。これに Al 箔を圧着して撮った I-V 特性曲線が、第 4 図である。

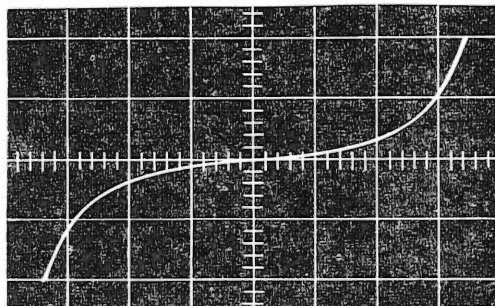


第 4 図

曲線 (a) は Al 箔の接触圧が小さい時、(c) は大きい時、(b) は中間の時であるが、接触圧は具体的に測ってはいない。電極の接触圧によって特性が違うのは、接着剤が乾いても固体にならず、砂鉄粒同士の接

触圧が変わるためと思われる。

次にセメントを使って成型してみた。砂鉄とセメントの重量比は 9.5 : 1 で、作製成型後 5 ヶ月経過したものの I-V 特性は第 5 図である。この試料は直径 6



第 5 図 (X 50 v/cm、Y 1 v/cm 60cps)

mm、長さ 6mm の円柱で、両端を磨き、Al 箔を圧着させた。このセメントを使って成型したもの、I-V 特性は電極の接触圧の影響がほとんどないが、試料によって特性曲線は大きく異なる。これはセメントの混入の度合、成型時の圧力によると思われる。一度固化すれば、大体一定の特性を持続し得ると考えられる。しかし、発熱作用で水分が失われ、特性が変わる欠点がある。

一定の状態、特性を保持させ得る方法を発見すれば、望みの特性を持った対称バリスタを製作することは可能はずである。SiC によるバリスタと自作したバリスタとは、共に $I = AV^n$ の式で表わされる。有機接着剤で成型したものの n は 1.5~2、セメントによるものは 1.8~2.5 である。

Fe_3O_4 に電極を接触させた時の I-V 特性が対称非オーム性である原因、 Fe_3O_4 を使用して対称バリスタを製作した時に、A、 n が何によって決まるか、一定の特性を持ったバリスタを作るにはどのようにすればよいか等は今後の課題である。

参 考 文 献

ショックレイ著 半導体物理学 (吉岡書店)
シャイプ著 半導体工学 (岩波書店)
植村、菊池著 半導体の理論と応用 (裳華房)

酒井著 新しい半導体素子 (誠文堂新光社)
半導体ハンドブック (オーム社)

基礎課程の化学教育に関する一考察

樋 口 大 成

〈昭和43年10月15日受理〉

Although the trend of re-examinations on the methods of teaching fundamental chemistry has recently been pervading Japan, many discussions about them have been carrying out separately in junior high schools, senior high schools, or universities; they have no systematic relation to each other.

Now, the most important thing for us to do is to seek for the systematic relation of the methods of teaching basic chemistry in each step to entrance examinations.

This problem, we think, has an indispensable relation to the education of basic chemistry in technical colleges.

1. はじめに

わが国において、基礎課程の化学教育の再検討が考えられて数年になる。いま筆者は高専に奉職しているから高校や大学入試の化学に関心をもたなくてもよいようなものの、次の二つの観点から無関心では済まされない気がする。

一つは、日本の化学工業や化学研究の発展に思いを致せば、一国民として化学教育全般を考えることは大切なことであろう（特に高専にいれば客観的に見れるし発言しやすい）、もう一つは大学入試の出題のし方が中、小学校にも支配的影響をしているので、高専にくる学生にも、科学に対する態度に影響しているということ（好奇心を失い、化学は暗記物と考えている）である。ここに日本化学会の再検討の気運に合わせて一私案を述べたい。

2. 中学校の化学教育批判

大学は大学、高校は高校、中学校は中学と別個に理想論を称えても、連けいがなければ、こと教育に関する限り机上の空論に終るだけである。日本における化学教育論議がから廻りしがちなのは、大学は高校に、高校は中学に対して関心がなき過ぎるからである。

最近の化学教育（高等学校）研究発表の記録は、昭和43年6月号の「化学教育」誌⁽¹⁾に見られる。ここには、46都道府県の教育研究の集大成が、同誌の135頁から179頁にわたってとりあげられている。これを見ると、高等学校で新しく改良すべき化学教育の骨子は、物質の構造と、化学変化のエネルギー的とり扱いが二大支柱であるべきだ、という意見が全国の高校

教師方の大部分の意見を占めているのがわかる。

だが、一方中学校の内容はどうであろうか。そこには H_2 、 O_2 、 Cl_2 、 NH_3 、 CO_2 、 C_2H_2 、身近かな酸、アルカリなどの製法や反応が示され、また白色沈澱として $AgCl$ 、 $CaCO_3$ 、 $BaSO_4$ の三つがあげてあり、化学式50余、反応式50余が出てくる。この化学式を書くのに原子価については簡単な程度でも全く触れていない。また、反応式も、言葉のかわりに式で書いておくだけで、暗記の必要はないことになっている。だから、高校や高専の入学試験問題は、たとえば、「砂糖、食塩、アルコール、石けん、米等のうち、炭素を成分として持っていないのはどれか」などであり、これでは、学問としての化学の基礎には全然なっていないのである。雑然とした暗記物に過ぎず、むしろ、化学の本質を誤るものである。科学の否定である。

いささか古くて恐縮だが昭和38年9月号の「化学教育」誌⁽²⁾で船元氏が発表せられた資料のうちから引用させていただくと、その以前2カ年の文部省学力調査結果から伺い得た事を、鹿児島市立の14の中学校に関して示されたものがある。それによると

内 容	正答 %
$2H_2 + O_2 \rightarrow 2H_2O$ の示す意味(燃焼)	15.1
$2H_2$ の小さい方の数字の意味	32.9
$2H_2$ の大きい方の数字の意味	12.1
アルカリ性を示す物質はどれか	14.1
酸性を示す物質はどれか	11.3
亜鉛と希硫酸とで生成する気体	38.0
二酸化炭素の捕集法	30.2

全部で41項であり、正答率が70%を超えているのは、試験管立ては図のうちでどれか (96.5%)、上皿天秤は図のうちでどれか (94.1)、漏斗は (86.7) ビーカーは (93.0)、中和生成物 (70.9)、—— (筆者註、おそらくこれは「塩」と答えるだけで正解なのであろう、塩がどんな定義によるものかは知らずに)。

もう一つ、昭和39年12月号の「化学教育」誌⁽⁸⁾で、三上氏が学習を終った範囲で中学生に同じような調査を試みておられるが、それによると

質問 次の物質は、水に溶かされたとき、どんなイオンになっているか			
結果	Ca(OH) ₂ について		解答%
	Ca ²⁺ , OH ⁻	正答	18
	Ca ⁺ , Ca ⁻ , Ca ² , Ca など		30
	(OH) ₂ ⁻ , OH ²⁻ など		23
	Ca ⁺ と (OH) ₂ , Ca ⁻ と OH ⁻ など		29
	H ₂ SO ₄ について		
	H ⁺ , SO ₄ ²⁻	正答	12
	H ₂ ⁺ , H ²⁺ H ⁻ など		34
	SO ₄ ⁻ , SO ₄ , SO ²⁻ など		24
	H ²⁺ と SO ₄ ⁻ , H ²⁺ と SO など		0

という報告が見られる。実に情ない実情ではある。

上の調査は筆者がおこなったものではないが、教壇に立って高専や高校の一年生に接するとき、まさにこれと同じ感じを受ける。筆者の調べたところでも、高等学校一年生58人について、中学校から来た第一時間目の授業で、酸素ガスの化学式を書かされたところ、O₂と書いた者は12人で、実に46人がOと書いた経験がある。

以上を総合すれば、中学校では、化学など全然やらなかったに近いという結論である。

もちろん、中学校は義務教育であって、その生徒の幅は非常に大きい。それを考慮した上でも、物理は化学に比して驚くほど程度が高く、また定量的である。それに、化学に対して、前記のように科学的な態度で中学生に接していないところに重大な問題があるのである。

これを換言すれば、中学校という記憶力の盛になるころに、科学的でない化学教育を3年間おこなうことは、実に、時間や費用の浪費であって、生徒にとっても、国家にとっても、教育の上からも、まことに惜しむべき問題である。こんな中学校の実情から改良することなく、物質の構造とか、反応のエネルギー論を高校だけで考えることは無意味で危険なことだと思う。

3. 大学入学試験の教育界全般への影響

高校生が大学入試を目標に全力的な勉強をすること自体は尊い人生経験であり、その意味で筆者は大学入試の肯定論者である。また、いい問が作製されていることが多い。また、筆者は出題に選択枝形式を否定する者でもない。

撰択枝から選ぶやり方を否定できない例として、筆者の試みを提示すると、基礎の化学を一応終った高校生の138人に対して、突然、次の問題を提出したことがある。

Le Chatelier の法則について説明せよ

これに対して、

一応正しく表現したもの 45人 (33%)

正しく表現できなかったもの 93人 (67%)

つぎに、

下の平衡にある系に () 内の条件の変化を与えると平衡はどちらに移動するか

$N_2 + 3H_2 \xrightleftharpoons{\text{触媒}} 2NH_3$ (冷却) 等の問題10題

その結果

Le Chatelier の法則を正しく表現することができなかった93人のうち、下の問題を8題以上正しく答えたもの78人 ($\frac{78}{93} \times 100 = 84\%$)

Le Chatelier 法則を正しく表現することができた45人のうち、下の問題を8題以上正しく答えたもの33人 ($\frac{33}{45} \times 100 = 73\%$)

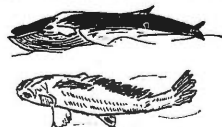
これから言えることは、選択枝式や○×式が悪いという結論は出ない。正しい表現はできなくても本当はわかっている方を多とすべきである。しかも、論文形式には採点者の主観がはいり、また同一採点者でも疲労により主観の変化を生じるという欠点がある。

しかし、現在見受ける大学入試問題にともなう大きな欠点も見逃がせない。その欠点が中学、小学校にも及んでいるのはゆゆしき問題である。その欠点とは、小、中、高校の生徒から感動とか自分でものを考える力を消滅させている面である。高専へはいつてくる中学卒業生もこの洗礼を受けている。ここに、ある大学入試と、小学校一年生のテスト (毎日のように施行される) を挙げよう

例1、昭和40年九州大学入試 (国語) 問題より

次の中から谷崎潤一郎、佐藤春夫、堀辰雄の作品を一つずつ選べ 1. 行人 2. 出家とその弟子 3. 春琴抄 4. 伊豆の踊子 5. 菜穂子 6. 戯作三昧 7. 田園の憂鬱 8. 雁

例2、小学校一年生のテストより、くじらはどちらか



この二つの例題には共通の欠陥がある。共に教育を阻害すべく働く。菜穂子が圭介の去るのを一人見送ることから得る感動を覚えてこそ教育であり、鯨は大きな、泳いでいるのにお魚じやないっておかしいなという感動を覚えてこそ教育である。堀辰雄と菜穂子と結びつけたり、鯨と鯉が同じ大きさなのは、ただナンセンスというほかはない。だが親も子も今では大学に行かせたい、行きたい、そして、このような問題ばかり追わざるを得なくなり、いつしか、感動と思索を抜きにして、片断的な知識をやたらにつめこむことが教育だという錯覚におちいる。さきに中学校の化学教育を批判してあげた諸種の例も、実は、大学の入学試験の性格のうちの非教育的な面の悪影響にほかならない。教育ママも学生の暴動もこんなところに根を持ってはいないだろうか。大学入試を教育的立場から考えてもらいたい。小学校一年生には、上記のテストをする暇には水族館へ連れていくことになり高校生には文学に親しむ喜びを与えてこそ教育であると思う。こうしてみると高校だけの問題ではなく、日本中の教育の問題である。大学側に注文をつけたい事である。

本題の化学教育についても、全く同じことが言える。たとえば、次の問題はすべての大学入試に共通のこととあって、特定校の問題とする必要はないが、

問題 つぎの反応で発生する気体は何か
二酸化マンガンに塩酸を加えて加熱する
亜鉛に希硫酸を注ぐ
塩素酸カリウムに二酸化マンガンを入れて加熱する
銅を濃硝酸中に入れる

等々、これらに対する答は、高校生の方では、実験を通じることなく、既に用意されている。どんな試薬とおして、どんな気体が発生するとか、どんな沈澱がでるとかは英語の単語帳と同じである。教師の側でも大学入試を考えれば、これらの単語帳を作らせておけば、もたもたと実験してみせたり、実験させたりするよりも、はるかに効果的なのである。だが、これらの単語帳を作ることと、もたもたと実験する間の試行錯誤とどちらが、より教育的であるだろうか。

撰択枝式の枠内で、出題を、より教育的にくふうし得る余地は充分にあると思う。たとえば、「発生する気体は何か」ではなくて「二酸化マンガン Ag に B_N 塩酸を加えて加熱したとき、何が何 ! 発生するか」「また、こうして発生した気体を次のどの溶液に通じたらどのような変化が起こるか。そのときの化学反応式はどれか」「このときの装置や、各器具の目的は何か」「この実験で何々の量が少いときと多いときとの現象はどうか」等々、「中学校や高校では実験をしない」という前に、実験せざるを得ないように追込むく

ふうは多々ありはしないか

4. 中学校化学教育の試案

筆者は中学校の課程をむつかしくしようとは考えていない。ただ、中学卒業してから、何か一つでも残っているようにしたいのである。

(1) 中学生一年に、元素周期表の第3周期までまづ暗記させる。

	I	II	III	IV	V	VI	VII	O
1	H							He
2	Li	Be	B	C	N	O	F	Ne
3	Na	Mg	Al	Si	P	S	Cl	Ar

小学校からはいったすぐに、これだけの暗記をさせることは、決して難解とは思われない。この間に元素や原子の意味と、単体の形を教える。この配列は軽い原子から重い原子へと並べ、不活性ガスを折目とした表であるとしておけばよい。そして、これらのつくる単体の標本を示せば、左側が金属、右側が非金属であることも一目でわかる。そして、それら単体の物理的性質を教え、つぎに、これらの単体どうしの化学反応を実験しつつ示し、その実験の過程で、化学反応の意味、化合物、簡単な原子価を教える。化学反応としては、特に左側(金属側)と右側(非金属側)が反応しやすいことに注目して、

Na を空気中にさらす、 Na を Cl_2 中にいれる。

Mg を燃やす。 Al を酸素中で燃やす等の反応、また、 H_2 が陽性として働くことを、 H_2 と Cl_2 の化合、 H_2 と O_2 の化合で示す。

また、 O_2 の支燃性を P や S や C の燃焼で示す。

(2) 中学二年生では、これをもう少し延長する。しかしその主眼とするところは、やはり陽性と陰性の考えにもとずく、すなわち、

NaOH 、 LiOH (KOH もいいだろう) はアルカリ(水溶液のアルカリ性)、また $\text{Mg}(\text{OH})_2$ 、 $\text{Al}(\text{OH})_3$ もアルカリ類似の物質(総称して塩基)、一方、 HF 、 HCl 、 H_2S 、 HNO_3 、 H_2SO_4 、 H_3PO_4 は酸(溶液の酸性)、アルカリ性、酸性の原因、すなわちイオンに触れ、中和反応を教える。また、陽性の、 Mg 、 Al は酸に溶けること、同様にして、 Zn Fe も酸(陰性物質)と反応する(その結果 H_2 が出る)、さらに陽性の強い Li や Na (K) は水にいても反応すること、また、中和の結果できる塩を含めて、電解質であることを数える。

(3) 中学三年生では、この考えを更に延長する。すなわち、第3周期まで K 、 L 、 M 各電子殻に2、8

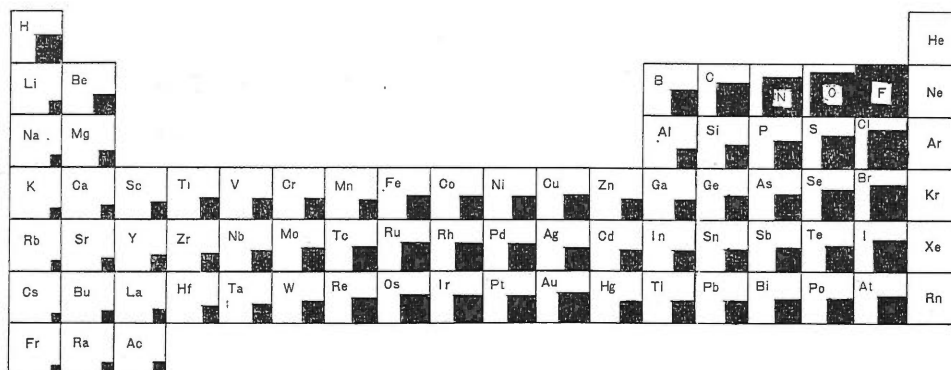


図1. 元素の電気陰性度

～と電子が充てんされていくこと、それから Na が Na^+ になったり Cl が Cl^- になったりするときの電子の出入りぐらい教えても少しも無理ではないと思う。これを用いて、すでに示された周期律表の意味の再整理、陽性陰性元素の意味の確認、電解質溶液、電池、電解へ言及する。

化学は、物理のように、光、音、力、仕事、電気等と分離して説明できる学問ではなくて、物質の相互作用の学問である。したがって、化学について物質各論を中心としてその量を増しても、化学の程度が上がるというものではなく、雑然とした暗記することが増すだけである。

今の中学校の化学は各論の暗記である。中学校の内容を高めるということは、各論を増すことではなくて系統的な考えを植えつけることだと考えている。せめて周期律と、元素の陽、陰性を頭に残したいものである。

5. 高等学校課程の化学教育の試案

高等学校の課程ではどうあるべきか、ということ意識して、九州大学理学部化学科教授・松浦良平氏と共著で筆者は「基礎化学」⁽⁴⁾ という本を出したが、この稿で筆者の私見をもう一度まとめるとつぎのとおりである。

(1) 物質の本性

原子説、分子説、粒子概念の基礎（化学史）、原子核、元素の周期律（思考の過程と変遷を含む）、原子模型、イオン、化学結合、物質の相変化。

ここで、物質というものは、粒子だけを考えた概念ではなく、その集合状態と気圧・温度による相変化を含んではじめて成立することを強調したい。また、従来の高等学校の過程では、沸点や融点、蒸気圧等の Table がほとんどなく、一般に、化学とは暗記物という概念があるので、これを打破するために、Table を

たくさん設け、その利用法を教えつつ、物質の概念をつくっていく。

つぎに、周期律表を電気陰性度表におきかえる。従来電気陰性度は数字のみで表現していることが多いし、これを周期性ありとしてグラフで書いてみても、その利用価値が低い。筆者は、元素の電気陰性度を一辺とする正方形の面積を用いて視覚に訴えつつ、周期律表に組みこむことを提案する（図1）。こうすれば、1. 面積が小さいほど陽性で陽イオンになりやすく、またしたがって還元作用が強い。2. 面積が大きいほど陰性で陰イオンになりやすく、また酸化作用が強い。3. 面積が小さいものと大きいものの間がイオン結合しやすい。4. 陽性元素では面積が小さいほど、陰性元素では面積の大きい単体ほど塩の水溶液中での置換反応を起し易い、などとあとあとまで、化学変化の示唆に役立つ。視覚的に役立つことに（ただし、かなり大まかだが）意味がある。

(2) 化学量論の基礎

式量（粒子の相対質量）、モル（粒子の数の単位）、気体の諸法則、化学反応式を用いる計算（ここで、化学反応は物質各論の提示がなければ化学反応式そのものに興味がないのはわかるが、各論の扱いはあとで述べる）および、化学平衡（Le Chaterier の法則）

ここで強調したいのはモルの扱いである。筆者はさきにモルという言葉は排してアボンという数の単位を提唱した⁽⁵⁾が、本稿では従来の慣習でモルを用いる。ただし、グラム原子、グラム分子、グラムイオンは完全に廃止する方がよい。これも筆者の提唱するところである。

原子の1モル＝N個原子の集団 → 原子量に g

分子の1モル＝N個分子の集団 → 分子量に g

⇒ 気体では 22.4 l (STP)

イオンの1モル＝N個イオンの集団 → 式量に g

⇒ 電気量として何ファラデー

電子の1モル＝N個電子の集団 → 1ファラデー
陽子の1モル＝N個陽子の集団 → 1ファラデー
(ここで、Nは Avogadro 数、→はそれに当たるの意)
筆者はさきのアボンの提唱でも述べたが、簡単に従来のモルの概念の混乱を繰返すと

第一に単位上の混乱がある。

O₂ の1モルといったら、32g のことなのか、
6×10²³ 個のことか 22.4ℓ (STP) のことか、
第二に定義上の多義性がある。

1モルとは1グラム分子の言いかえなのと、も
っと広く、原子やイオンについても、1グラム
原子や1グラムイオンのことも1モルと言いか
えるものがある。

第三に、上記二つの混乱の間の錯綜がある。

したがって、この混乱を整理せずしては、化学量論の
最初から学習する学生の方は、出発点から化学が全く
わからなくなり、興味を失うことになるので(現にそう
なっているので) 再びここにとり上げておく。

(3) 酸塩基反応

複分解全般(酸・塩基の中和、弱酸の塩+強酸、弱
塩基の塩+強塩基、沈澱反応、錯体形成反応、加水分
解反応)、酸塩基塩の当量、濃度、中和、pH の計
算。酸化物関係反応(酸性酸化物+塩基、塩基性酸化
物+酸、酸性酸化物+塩基性酸化物)

これら一群の反応は、原子価(酸化数)が変化しな
い反応であることを特長として次項の酸化還元と区別
する

$$\text{酸の1グラム当量(g)} = \frac{\text{酸の1モル(g)}}{1 \text{ 分子が出す } \text{H}^+ \text{ の数}}$$

$$\text{塩基の1グラム当量(g)} = \frac{\text{塩基の1モル(g)}}{1 \text{ 分子が出す } \text{OH}^- \text{ の数}}$$

なお、たとえば例題として、0.08N 塩酸 70ml に、
0.04N カセイソーダ 130ml を混ぜた液の pH 値を
求むという問題ができれば、一般に、強酸と強塩基の
間の中和滴定曲線を具体的な濃度について理論的に描
くことは可能のはずだから(筆者は本校一年生に毎年
これをさせているが、確実に可能である)宿題などで
これを作製させておいて、この場合は指示薬としてメ
チルオレンジ(酸側変色)でも、フェノールフタレ
イン(アルカリ側変色)でも使えることを暗示してこれ
を実験(生徒各自による実験)で確かめ、更に、ガラ
ス電極の pH 計に連結して、実際にその目盛の動き
でこれを確かめることを高校で実験させるよう勧める
(図2)

(4) 酸化還元反応

1. 酸化剤・還元剤間の酸化還元反応(電子の授受に
よる説明に及ぶ)、酸化剤・還元剤の当量、濃度、標

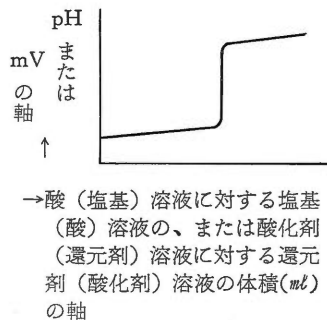


図2. 滴定曲線

準酸化電位の Table(上の酸化剤・
還元剤に限る)。

2. 金属単体の酸
素、水、水蒸気、
酸、アルカリとの
反応。標準酸化電
位の Table(金属
単体に限る)。金
属単体の塩水溶液
との反応(電池へ
の示唆)。

3. 電池の原理、標準酸化電位と起電力の原因。

4. 電気分解、ファラデーの法則、過電圧を Tableに
よって定性的に説明。

$$\text{酸化剤の1グラム当量(g)} = \frac{\text{酸化剤の1モル(g)}}{1 \text{ 分子が得る } e^- \text{ の数}}$$

$$\text{還元剤の1グラム当量(g)} = \frac{\text{還元剤の1モル(g)}}{1 \text{ 分子が出す } e^- \text{ の数}}$$

現在の高等学校には、この酸化剤・還元剤の当量は
記述せず、入試の範囲から除外され、標準酸化電位の
表もない。一方、電池の定性的説明、電気分解のとき
の当量は記されているがこれは片手落ちであり、とか
く、電池・電解と酸化還元とが別の概念のように与え
られている。

そこで、ふつうの酸化剤・還元剤間(例、KMnO₄
と FeSO₄ 等)の酸化還元滴定をも各自に生徒実験を
させ、さらに、中和滴定の場合と同じように mV 計
に連結して実際に電位の動きでそれを確かめれば、つ
ぎの電池の概念と密接に結びつくのである(図2)。
今の化学にはそれが無い。要するに、高等学校で中和
反応と酸化還元反応に関する電位差滴定の実験をする
ことによってはじめて pH や mV の実感を得るもの
であるが、現在の高校の、または大学受験下の化学で
はこれらは観念上のことである。このことはエネルギー
一論より先決問題であると思う。

(5) 物質各論

筆者の主張は、現在の高等学校の教科書が、各論と
理論とが雑然といり交っていて(もちろん充分くふう
されているけれど)、化学は各論の暗記物との観が深
いのと、各論で出てきた内容と理論的に整理すべき個
所との重複を避けるために理論が中途半端になってい
ることを改めるべきだということにある。したがって、

各論は一種のハンドブック的なものと考えて、教科
書の最後(上記の(1)～(4)のあと)にまとめ
て、整然と羅列する。内容は、主要物質、H₂、O₂、
SO₂ 等工業的製法、実験室的製法、物理的性質、化学

的性質、用途、検出法、の項目にしたがって整理する。

この内容には、さきの(3)酸塩基反応、(4)酸化還元反応を利用する事項が非常に多いと思う。教師は授業に際して(3)、(4)と関連の上で指導する。

(6) エネルギー論

さきに提示したように、高等学校の化学にエネルギー論をとりいれるべきだという主張は全国的傾きのようである。これはCBAやケムスに多分に刺激されている結果と考えられる。筆者は先に述べたように、中学校から来た高校生や高専生に、エネルギー論をとり上げることに急で、酸塩基反応(pHの概念)や、酸化還元反応(mVの概念)がそのためにまよりのつかぬものとしてボヤけてしまうことには反対である。またそれを裏付けるように、エネルギー論の提案者自身が具体的な方法に触れておらず、逆に「それは大へん困難なことだ」という批判、どういふふうにエントロピーに触れるのかという苦慮の言葉が目につく。

「化学教育」誌にエネルギー論を言うはやさしい。しかし、日本中の高校の先生達はどんな具体策を考えておられるのかよくわからない。筆者はここに、もしエネルギー論というものをとりいれるならばこんな形にならざるを得まいという例を挙げ、エネルギー論者の論議の端緒を提供しよう。

(a) 化学変化の方向と速度

ある系が変化しようとするときには、かならず秩序正しくなろうとする要因(筆者はordinationの方向としておき、図でOとする)と、乱雑になろうとする要因(randomnessの方としておき、図でRとする)があるが、この両方への動きが同じ速さであるときを平衡状態という。図3には、各平衡状態におけるOとRの要因を示す。ordinationのためのエネルギー

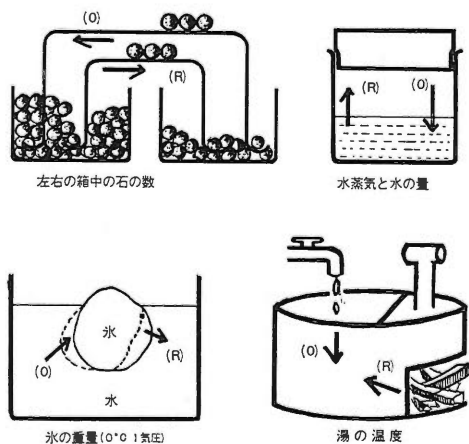


図3. いろいろな平衡状態

ー変化をエンタルピー変化(一定圧力下で) ΔH で示し、 T_0K での randomness のための変化をエントロピー変化 ΔS で示せば、平衡状態は

$$\Delta H = T\Delta S$$

で表わされる。もし、平衡状態でないときには、この両者の間に差を生じ、その差が、平衡状態になろうとするまでの仕事能力、すなわち自由エネルギー変化 ΔG となる。 $\Delta G = \Delta H - T\Delta S$

エネルギー(ΔG)は高いところから低いところへおちつこうとするから平衡状態でないならば、 $\Delta H \neq T\Delta S$ で $\Delta G < 0$ のとき変化が(反応が)起こる。すなわち、

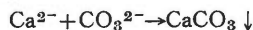
$$\Delta G = \Delta H - T\Delta S < 0$$

のとき反応が feasible である。

これを化学変化にあてはめるには、まずつぎの二つの Table が要る。一つは、標準生成エンタルピー、もう一つは $T^\circ K$ における絶対エントロピー値である。または、反応熱に関する data が必要である。

例1、 $25^\circ C$ で $CaCl_2$ と Na_2CO_3 両溶液を混合する。この場合 1M 溶液ずつの混合で $1.4^\circ C$ 冷える。そこで $\Delta H_{298} = +2.9 \text{ kcal}$

また、絶対エントロピー値(S_{298})は $Ca^{2+} = -13.2 \text{ cal/deg}$ 、 $CO_3^{2-} = -12.7 \text{ cal/deg}$ 、 $CaCO_3 = 22.2 \text{ cal/deg}$



$$\Delta S = 22.2 - (-13.2 - 12.7) = 48.1 \text{ cal/deg}$$

$$\therefore T\Delta S = 298 \times 0.0481 = 14.3 \text{ kcal}$$

$$\therefore \Delta G = \Delta H - T\Delta S$$

$$= 2.9 - 14.3 = -11.4 \text{ kcal} < 0$$

したがって、この反応は実現可能(feasible)である。そして、イオン反応だから、実現可能な限りは、特別なエネルギー(活性化エネルギー)は要らないので、ひとりてに起る(spontaneous)反応である。

(図4)

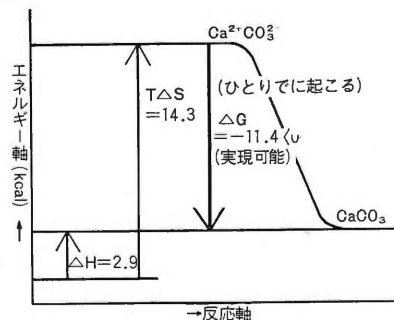


図4. 反応エネルギー (1)

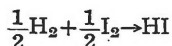
この反応では、 Ca^{2+} 、 CO_3^{2-} に水和していた水和水が放れるところに(R)の要因、両イオンが結合するところに(O)の要因がある。

例2、25°CでのH₂とI₂の化合

HIの生成エンタルピー (ΔH₂₉₈) は6.3kcalの吸熱

$$\Delta H = +6.3 \text{ kcal}$$

また、S₂₉₈ は、H₂=31.2cal/deg、I₂=27.9cal/deg、HI=49.5cal/deg だから



$$\Delta S = 49.5 - \left(\frac{31.2}{2} + \frac{27.9}{2} \right) = +19.9$$

$$\therefore T\Delta S = 298 \times 0.0199 = 5.9 \text{ kcal}$$

$$\therefore \Delta G = \Delta H - T\Delta S$$

$$= 6.3 - 5.9 = +0.4 \text{ kcal} > 0$$

したがって、この反応は25°Cでは起らず、この逆の反応の方が (HI → ½H₂ + ½I₂) 起ることを示している。(図5)

ところが、この逆反応の場合、feasible ではなく、spontaneous ではなく、そこに活性化エネルギーが必要である。この活性化エネルギーに関して、触媒にふれることができる。触媒がないときの

図5、反応のエネルギー (2) のHI 1モルについて 図5、反応のエネルギー (2) の活性化エネルギーは22kcal、金触媒で12.5kcal、白金触媒で5.5kcalであることがわかっている。(図6)

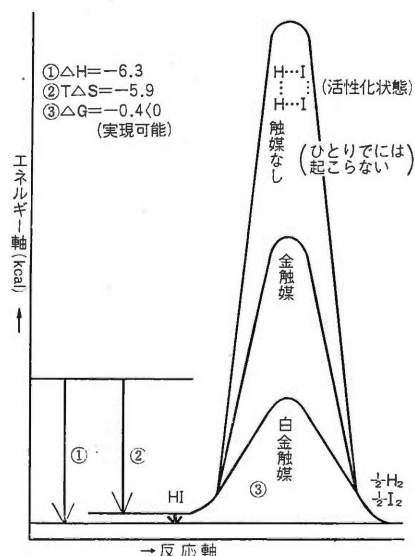


図6、反応のエネルギー (3)

高校の先生が現在進んで言われるエネルギー論とは、以上の内容を有するものであろうことは想像に難

くない。

もちろん、エンタルピー、エントロピー、自由エネルギーという用語を用いるか否かは別問題であろうが、さて、このエントロピーを高校生にどうやって指導されるかが問題である。定性的に randomness の要素というのはやさしいが、それだけでは実際上役に立たない。観念的な randomness だけでは反応の方向がわからないので上記ぐらいの定量的な記述を必要とするであろう。そのためには絶対零度におけるエントロピーはすべてゼロであり、T°Kにおける絶対エントロピー値Sは、定圧下で測った物質1モルの比熱C_PをTで割ったC_P/Tの0°KからT°Kまでの積分値であることに言及せざるを得まいが高校生に

$$S_{298} = \int_0^{298} \frac{C_P}{T} dT$$

と教えることが可能であろうか。あるいは図7における面積の総和という表現で説明して高校生に納得がいくであろうか。しかしこの図7はきわめて説明不足であって固→液、液→気相

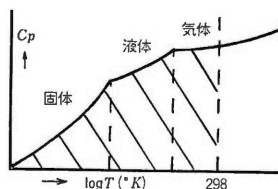


図7、C_PとTの関係 (1)

の転移点の吸熱の部分のエントロピー変化を考えれば(図8)、Sは面積の総和ではないのであって、それに、各転移点の吸熱量qをその温度で割ったq/Tを加えなければならない。図9は酸素のC_P vs log Tの曲線である。

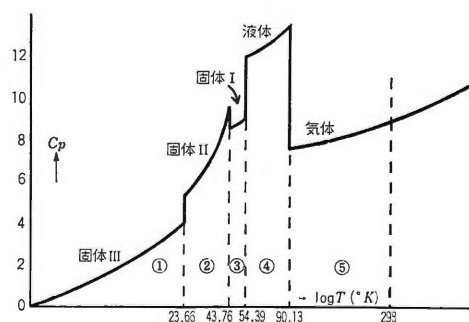


図8、O₂のC_PとTの関係 (2)

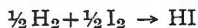
化学反应のエネルギー論というのは必然的にこのような内容を持つことになると思う。このためには、生成エンタルピーと絶対エントロピーのTableが要るが、数値を利用して化学反应の方向を求めさせることは、高校生に、推理の学問としての化学を示すには興味ある分野になるかもしれない。しかし、問題はいつか残る。なぜエントロピー (randomness) が q/T で示されるのか、また、これらが単に断片的なエネルギー論に終らず、化学反应全体に普遍性をもって意味

があるのか（すなわち電圧や平衡定数と結びつけないで、これら熱力学に意味があるのか）というような問題は充分検討されなければなるまい。

つぎに活性化エネルギーもエネルギー論のうちだから反応速度定数を k 、活性化エネルギー E^* の間に

$$k \propto e^{\Delta E^*/RT}$$

の関係があり、これからさきの



の無触媒の反応では、 $E^* \approx 20000 \text{ cal}$ 、 $R \approx 2 \text{ cal}$ と近似においたとき、

$$T = 5,000^\circ \text{K} \quad k_1 \propto e^{-\frac{20,000}{2 \times 5000}} = e^{-2} \approx 10^{-0.9}$$

$$T = 500^\circ \text{K} \quad k_2 \propto e^{-\frac{20,000}{2 \times 500}} = e^{-20} \approx 10^{-9}$$

だから、 $5,000^\circ \text{K}$ で10秒かかる反応ならば、 500°K では実に 10^{11} 秒すなわち、約3千年かかる反応だというような説明をとりいれるのも面白いと思う。

(b) エントロピー説明の一私案

さきに、変化があるならエントロピー(randomness)はどんなときでも増大すると言ったが、それだけでは何のことかわからない。そこで一例ではあるが、エントロピーと、その増大することを示すわかりやすい熱力学的説明を筆者は次のようにくふうしてみた。エネルギー論をとりいれるにはとにかくこのような例は必要であろう。

例、円筒に理想気体がいっている。この円筒にはピストンがついていて、圧縮、膨張をさせることができる。また、摩擦はないとする。

この円筒の壁は熱を吸わず完全に通すと仮定し、大きな水槽に多量の氷と水とをいれてこの円筒を浸しておく

(A) 1気圧で封じられて1モルの気体がいっている。これを A 状態とする。以後 (A) と称する。

(B) 上を外から10気圧で圧縮した状態を B 状態とする。以後 (B) と称する。

(A) を (B) にもっていくためにかける圧力は、大きい方なら限度はなくて、いくら大きな圧力をかけてもよい。いま10気圧で圧縮すれば気体がなされる仕事は

$$P \Delta V = 10 \times (22.40 - 2.24) = 201.6 \text{ l} \cdot \text{atm} \\ = 20422 \text{ joule} = 4878 \text{ cal}$$

すなわち気体は外から 20422 joule の仕事をされ、なおそれが 0°C に保たれるためには 4878 cal の熱が円筒の壁をとって、周囲の水をその分だけ触かすことになる。

(A) を (B) にもっていくためにかける圧力には、小さい方には限度がある。0.5 気圧などの圧力をかけたら (A) はもっと膨張してしまう。圧縮するための最

小限の圧力は 1 気圧 + ΔP ($\Delta P \neq 0$) 気圧から始め、円筒内がその圧力に達したら、さらに ΔP だけ加えるという方法である（これには無限の時間がかかる）これは可逆圧縮といわれる。このとき気体がなされる仕事は

$$\int_{V_A}^{V_B} P dV = nRT \int_{V_A}^{V_B} \frac{dV}{V} = nRT \ln \frac{V_B}{V_A}$$

で、いま $n=1$ 、 $R \approx 1.987 \text{ cal}$ 、 $T=273^\circ \text{K}$ 、また、 $\ln \frac{V_B}{V_A} = 2.303 \log \frac{2.24}{22.4} = -2.303$ であるから

$$\int_{V_A}^{V_B} P dV = -1150 \text{ cal} = -4807 \text{ joule}$$

すなわち気体は外から 4807 joule の仕事をされ、なおそれが 0°C に保たれるためには 1150 cal の熱が円筒の壁をとって、周囲の水をその分だけ融かす。

こんどは逆に (B) を (A) にもっていくためには、外の圧力をできるだけ減圧する分には限度はないが、圧力を大きくする分には限度がある。(B) を (A) に膨張させる限度は、はじめ10気圧 - ΔP 気圧から始め、円筒内がその圧力に下がったら、さらに ΔP だけ減するという方法で可逆膨張といわれ、無限の時間がかかる。このとき気体が外にする仕事はさきに述べたものと同じで

1150 cal、 4807 joule

すなわち、気体は外に 4807 joule の仕事をし、なおそれが 0°C に保たれるためには 1150 cal の熱を氷水槽から吸うために氷水槽にその分だけ氷が張る。

(B) から (A) に膨張させるのにかける圧力は小さい方には限度がない（真空が限度である）。いま (B) の外側を 1 気圧にすれば

$$P \Delta V = 1 \times (22.40 - 2.24) = 20.16 \text{ l} \cdot \text{atm} \\ = 2042 \text{ joule} = 488 \text{ cal}$$

すなわち、気体は外に 2042 joule の仕事をし、なおそれが 0°C に保たれるためには 488 cal の熱を氷水槽から吸うために、氷水槽にその分だけ氷が張る。圧縮するための仕事、膨張したために気体が外へする仕事の範囲をまとめると図9のようになる。

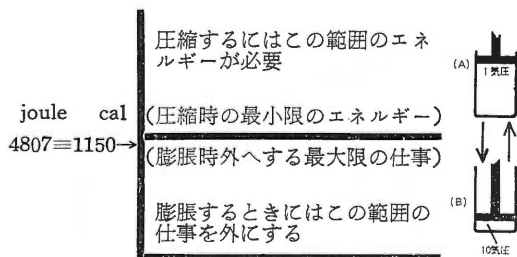


図9、圧縮、膨張のエネルギーの範囲

実際問題として可逆膨張や可逆圧縮は不可能だから、結論として圧縮に要するエネルギーだけの分は膨

腹に際して決して戻って来ないということである。上例のように (A) を (B) にするのに 10 気圧で圧縮してから次いで 1 気圧で (B) を (A) に膨脹させれば

$$20422 - 2042 = 18380 \text{ joule} \quad \text{または} \\ 4878 - 488 = 4390 \text{ cal}$$

だけのエネルギーの損失をする。80 cal が 1 g の水を融かすから、(A) → (B) → (A) の場合には、無駄なことに $4390 + 80 = 55 \text{ g}$ の水を融かすために使われてしまったのである。

さて、エントロピーであるが、これは注目する系の“粒子の乱雑さ、randomness”を内容にもっている。(A)の方が(B)より気体のエントロピーは大きく、(水)の方が(氷)より H_2O のエントロピーは大きい。しかも (A) と (B) のエントロピーの差は圧縮と膨脹の方法と関係なく、それぞれの状態で決まっている。

エントロピーの差を ΔS 、そのときの温度を T とすれば、 $T\Delta S$ は (A)、(B) 間では一定値であり、これは可逆変化をするときに出入する熱量 1150 cal に等しい。この 1150 cal は、圧縮に必要な最小限の、膨脹するとき外にする最大限のエネルギーであった。可逆変化は、平衡を保つての変化だから、氷の融解、凍結にも $q_{\text{可逆}} = T\Delta S$ が適用できる。したがって

$$\Delta S = \frac{q_{\text{可逆}}}{T} \quad (\text{cal/deg or e.u.})$$

これをまとめると、次のようになる。

- (1) 10 気圧で (A) を (B) に圧縮するとき円筒の中の気体のエントロピーの減少は

$$\Delta S_{\text{気}} = -\frac{1150}{273} = -4.2 \text{ e.u.}$$

一方、氷の中に流れ、氷を融かした熱は 4878 cal だから、氷水槽で増えたエントロピーは

$$\Delta S_{\text{氷}} = +\frac{4878}{273} = +17.9 \text{ e.u.}$$

したがって、全エントロピー変化は

$$\Delta S_{\text{全}} = \Delta S_{\text{気}} + \Delta S_{\text{氷}} = -4.2 + 17.9 \\ = +13.7 \text{ e.u.} > 0$$

- (2) (B) の外を 1 気圧にして膨脹させるとき円筒の中の気体のエントロピーの増加は

$$\Delta S_{\text{気}} = +4.2 \text{ e.u.}$$

一方、水の中から吸い上げられた熱は 488 cal で、これだけの分の水が凍ってエントロピーが減るから

$$\Delta S_{\text{氷}} = -\frac{488}{273} = -1.8 \text{ e.u.}$$

したがって、全エントロピー変化は

$$\Delta S_{\text{全}} = \Delta S_{\text{気}} + \Delta S_{\text{氷}} = 4.2 - 1.8 \\ = +2.4 \text{ e.u.} > 0$$

- (3) 10 気圧で (A) を (B) に圧縮し、ついで 1 気圧で (B) を (A) に膨脹させるとき

気体のエントロピーは (A) → (A) 間では同じだから

$$\Delta S_{\text{気}} = 0$$

一方、(A) → (B) のとき 4878 cal の熱を氷水槽に注ぎ (このとき 61 g の氷を融かし)、(B) → (A) のとき 488 cal の熱を氷水槽から奪う (このときは 6 g の氷ができる) から

$$\Delta S_{\text{氷}} = +\frac{4878 - 488}{273} = +16.1 \text{ e.u.}$$

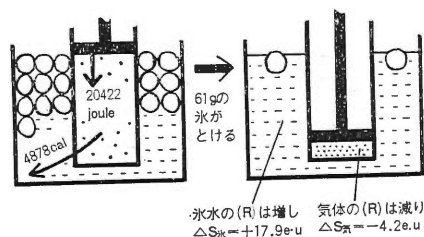
したがって、全エントロピー変化は

$$\Delta S_{\text{全}} = \Delta S_{\text{気}} + \Delta S_{\text{氷}} = 0 + 16.1 = +16.1 \text{ e.u.} > 0$$

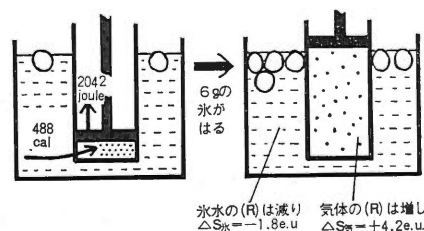
結論としては、いつでも全エントロピーは増している。

以上を視覚的に図 11 に示す。(R) は randomness.

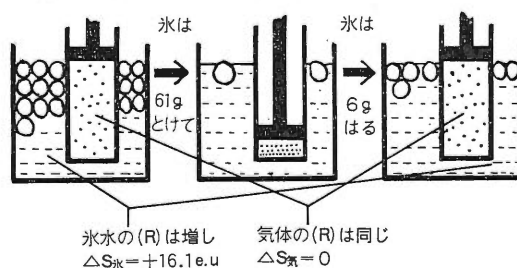
- (1) (A) → (B)



- (2) (B) → (A)



- (3) (A) → (B) → (A)



(気体がもとの戻ったとき、氷は 55 g とけている)

図 10、エントロピー (randomness) の変化図

6. 工業高専での一貫教育とその可能性

高専と高校の、勉強の姿勢に対する現象的な違いの一つは、大学入試を控えているか否かにある。それが高専にどう影響しているかといえ、悪い面は大学入試を控えていないため、ともすれば下学年で必死の全

力的勉強をおこたりやすく、英語の単語や化学式を暗記しようとしないう癖がつき（本を見ればわかるとして）その集積が学問に対する自信や興味を自ら放擲する結果を招きやすい点にある。このことは高専の教官として、常に反省しているところである。

一方、よい面を考えてみるに、**学習意欲の原動力は、大学入試ではなくて、個人の心にひそむ好奇心であるはずだ**。筆者はさきにこれを感動と表現した。あらゆる発明も発見も、原動力は好奇心とこれにともなう空想であろう。大学入試の勉強は、出題範囲がきまっているから高校では、ともすれば、入試出題範囲外のことに関する生徒の好奇心を教師が抑圧し、生徒自身も抑圧する習慣がつく。（原子はどうしてそんな形をしているのだろうとふと思いかかっても、それはこの入試前には考えるな、入試に関係がない。時間が無い。考えまい、あとにしよう）。しばしば、高校卒業して浪人を多年重ねるほど、大学にはいつてからの伸びが悪い学生になるということを聞く、それは、浪人を長くするほど、自ら好奇心を圧殺する習慣をつけてしまうからにほかならない。高専で恵まれているのは好奇心を抑圧させる必要がない点である。そして、高校の範囲の学習から（筆者は前記のごとく授業をすすめているが）大学の範囲へとわりあいスムーズにすべりこめる気がしている。二年生の（高校二年と同じ年令）中期に、きわめてゆっくりと熱力学的な考え方、さきに出したエネルギー論について、さきに出した通りの話を進めているが、抵抗はないように思う。それに実験が自由にできる点が有利である。

それから、筆者は、化学に関する法則の結論だけでなく、それに関する化学者の紹介に努めることにしているが、たとえば、あの重大なボルツマン定数の Boltzmann は世に容れられず自殺していたり、水素の Balmer 系列の Balmer が女学校の老先生であったりということは学習に対する親しみを覚えさせるであろうと信じている。

ここに、筆者が現在の本校 2 年工業化学科の学生に出題した、第一学期末（10月）の問題の一部と、これに対する学生の正答率をあわせて発表してみる。

問 1、外側を 0°C に保ったシリンダーにピストンがついていて、中に 1 モルの気体が 1 気圧に保たれている。このピストンを外から 10 気圧で圧縮

し、圧縮後、外を 1 気圧にして、ふたたびもとの状態にまで膨張させた。この間に、外へ散逸した熱は何 cal で、増大した全エントロピーは何 e.u. か。

問 2、前記の問題で、圧縮前と圧縮後の両状態における気体のエントロピーの差は何 e.u. か

問 3、 $2\text{HCl}=\text{H}_2+\text{Cl}_2$ の反応は 25°C で左向きに起こるか、右向きに起こるか。ただし、

$\text{H}_{\text{生成}298} \quad \text{HCl} \quad -22\text{kcal/mole}$

$\text{S}_{298} \quad \text{HCl} \quad 45, \text{Cl}_2 \quad 53, \text{H}_2 \quad 31 \text{ e.u./mole}$

またその向きに活性化エネルギーが 18kcal/mole を知り、反応のエネルギーを反応座標に対して示せ

30分間の試験だが、この範囲に10時間授業している。

〔正解〕問 1. 73%、問 2. 68%、問 3. 85%、高校二年生にも、能力的には十分であることはこれでもわかるが、本校では、高校の化学の範囲を一年半学習したあとのことである。参考までに挙げた。

3. おわりに

いろいろな角度から述べてきたが、本稿の目的は、筆者は殊更に高等学校の教育だけに関心をもって書いたのではなくて、小学校から大学までの教育に思いを及ぼせば、それら各段階の学校でおこなわれている教育が、現在非常におたがいに無関心のままおこなわれているので教育界のためにこの点を指摘したかったことにある。

それに加えて、現在、高等学校の先生方の関心は、高校の過程に反応のエネルギー論をとり入れることに集中的に向けられている一方、その具体策は現在明示されていないので、参考までに一私案をさしはさんでみたのであるが、これが、具体的な論議の導火線ともなれば幸いと考えたからである。

また、大学入試についても触れたが、高専には関係ない、と言いきれないからである。日本で大学より低段階の学校が大学入試のあり方によって教育がそなわれて、その影響が小、中学校に及ぶとき、それはとりも直さず高専にも及ぶからである。たまたま、今日（昭和43年10月13日）主要新聞に、全国高校長協会が大学入試の珍問、愚問を教育をゆがめるものとして批判している 記事が出たのは、あまりにも偶然であった。

引 用 文 献

- ① 「化学教育」16. No.2. P.133~179 (1968)
- ② 船元重春「化学教育」11. No.3. P.349 (1963)
- ③ 三上信夫「化学教育」12. No.4. P.495 (1964)
- ④ 松浦良平・樋口大成「基礎化学」(広川書店)
- ⑤ 樋口大成・佐々木英人「有明工業高専紀要」2号、9頁 (1967)

送風機吸込側流れの実験的研究(其の1)

＜昭和43月4月15日受理＞

Experimental study on the flow at the suction side of Multi-blade fan. (Part—1)

In the centrifugal fan, the fluids entering into the impeller convert the direction from axial to radial. Therefore, when the axial length of impeller at the entrance is large and the radius of curvature of stream-line is small, the flow separations occur and increase the hydraulic loss.

Especially, in the wide impeller as multi-blade fan, the whole width of impeller does not operate effectively and the efficiency decreases. In this experiment, the test has been carried out to clarify the flow condition at the inlet and the exit of the impeller by the taft method attaching the various types of inlet guide to the suction side of the fan.

As the result, the best performance was obtained in the case of the suction pipe with bell mouth, but the details have not been perfectly clarified.

Kounosuke Kiyomori

1. ま え が き

遠心送風機では流体が羽根車に流入するとき、軸方向から半径方向へ曲げられるが、一般に入口幅が広いときは、その曲りの際にシュラウド側で流線の曲率が小さくなければ、流れの剥離を起し損失を伴う。特に羽根幅が広いときには、羽根の幅全体が有効に作動せず、効率の低下をも伴う。本実験ではシロッコファンについて、羽根車前後の流れの状態をタフト法により定性的に調べると共に、吸込口に数種の形状の導き板を取付けて、特性試験をおこなった。結果的には、ベルマウスつき吸込管が最もよい性能を示したが、これらの定性的実験では明確な説明が得られず、結論を得るには、今後さらに定量的実験をおこなわねばならぬ。

2. 試験装置及び試験方法

図1は供試シロッコファンの配置写真、図2はその駆動部分の写真で、図3に試験風管の外形寸法図を示す。送風機は誘導電動機で駆動され、Vプーリにより規定回転数まで増速される。被動側Vプーリは送風機軸に連結され、その間にトルクメータを挿入してトルクを求め、また光電式ピックアップにより回転数をよみ、これらの値から軸動力を求めた。

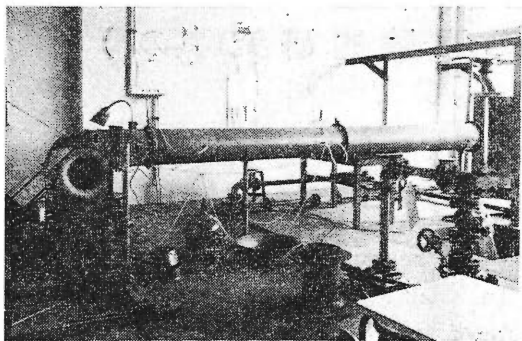
風量の調節は吐出口のダンパでおこない、風量の測定はピトー管によった。静圧の測定は管壁に静圧孔を設け、ゲッチングン型精密圧力計により計測した。性

能計算はすべてJIS規格に準じ指定状態に換算した。また吸込側吐出側の流動状況を調べるため、前者では細い鉄線にピッチ15mmの間隔で長さ30mmの木綿糸を結びつけたものを挿入し、後者では渦形室の出口において軸方向にピアノ線を張り、同様に糸を流して流れの状況を調べた。送風機的设计要目および、諸計器の仕様は次の通り。

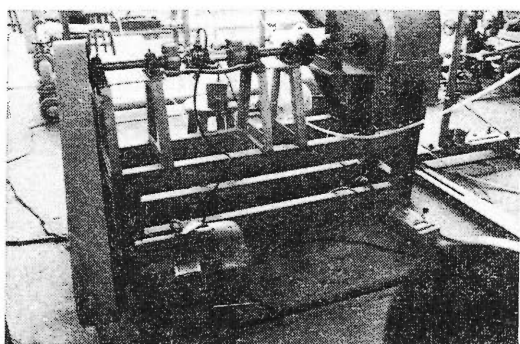
送風機	片吸込形多翼ファン
風量	75 m ³ /min
風圧	85 mm Aq
回転数	1,900 rpm
出力	3.7 kw
電動機	出力 3.7 kw
	極数 4
	電圧 200 V
	周波数 60c/s
	回転数 1,720 rpm
回転力計	抵抗線歪計 トルク 5 kgm
回転計	エレクトロニックカウンター
圧力計	ゲッチングン型精密圧力計

3. 実験結果

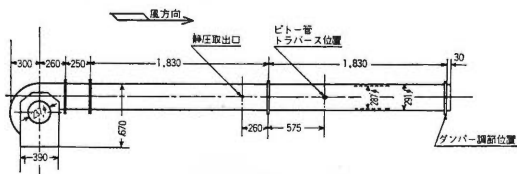
シロッコファンでは軸方向の翼幅が広いので一様流入条件が性能向上の点から問題となる。タフト法により流入状況を調べると、最高風圧点以上の風量の領域では、比較的一様に流入しているが、翼直前における流入域は最高効率点附近で翼側板より70%程度であり、



第1図



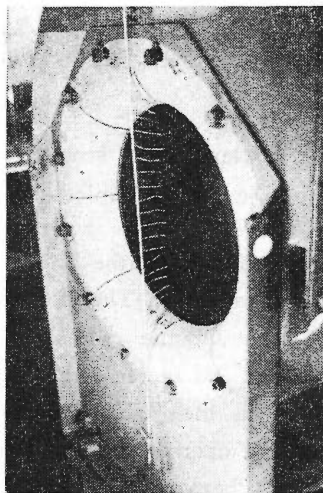
第2図



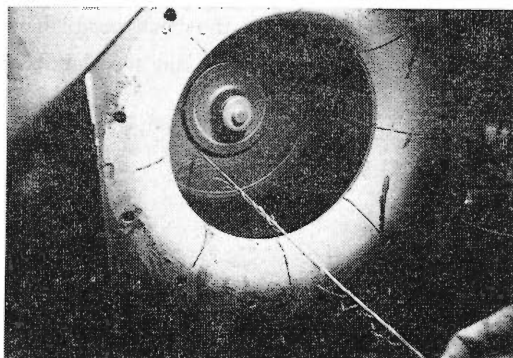
第3図

翼直後の作動域ではさらに狭まることが判明した。

この様子を示したのが図4、5、6の写真である。図5は軸心に平行な線上では、吸込側に近いほど流れが軸心方向に向っていることを示している。図6は渦形室の側壁に観測窓をあけ、プラスチック製窓の外部より撮影したもので、翼の奥の方は風の流れていることを示しているが、手前側では糸が回転方向を向いて風が流れていないことがわかる。図7、8、9、10は特性曲線上の5点をダンパで固定し、糸を流してフローパタンを観察した結果を吸込口よりみて上下左右の90°ずれた軸断面上で、更に半径方向に位置をかえたものについて図示したスケッチである。特性曲線上の5点とは、全開、最高効率点⑦、最大風圧点⑤、失速



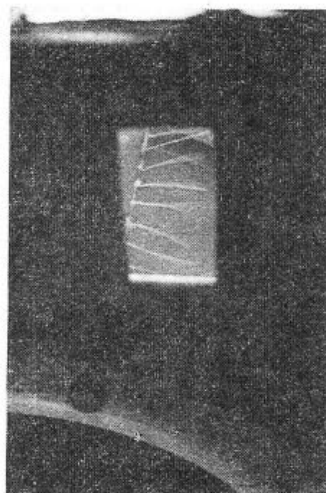
第4図



第5図

において翼に流入する。

(2) 翼の前後における流入流出域は、後者の方が狭くなり、流れは半径方向に加速されている。これを最大流量の上断面についてみると、翼直前で58%、翼

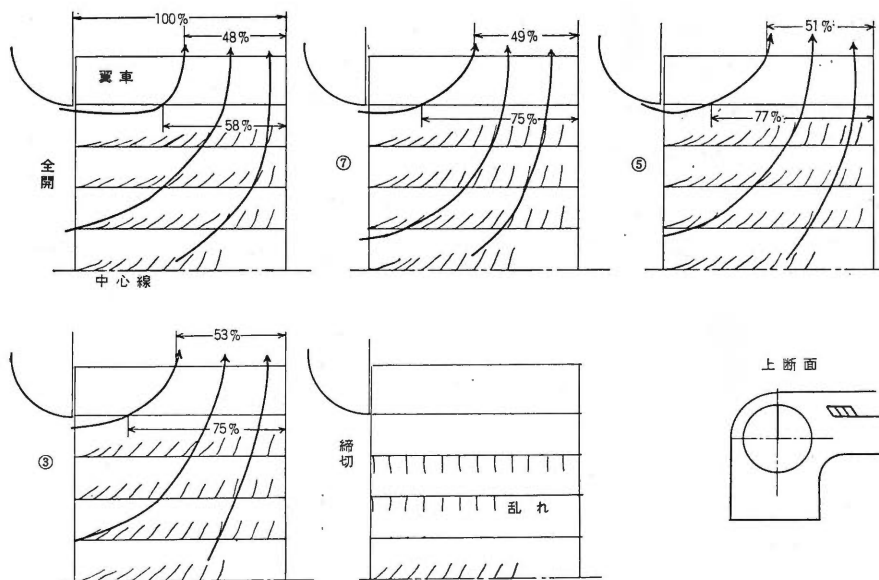


第6図

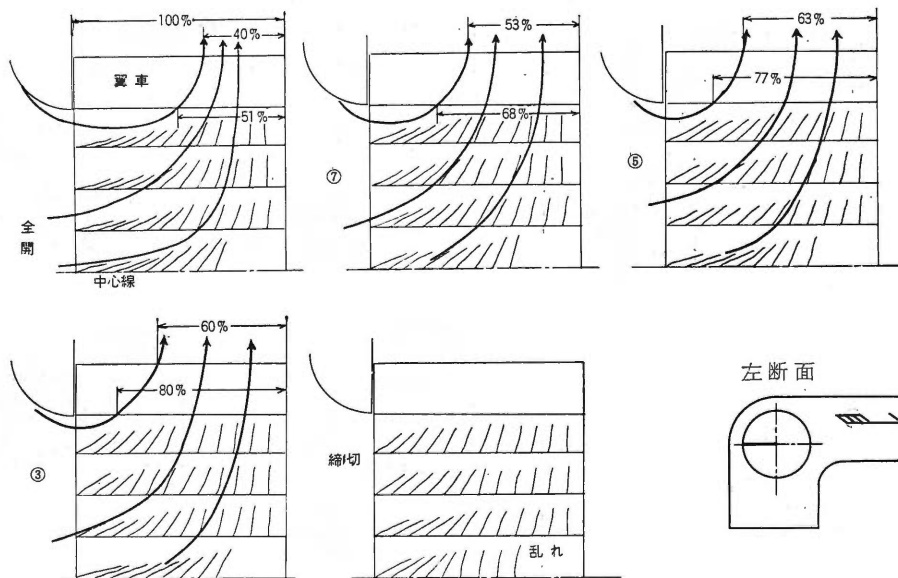
直後で48%で約83%に短くなり、最大効率点では更にこの値が小さくなっている。

点③、締切であり、⑦⑤③はダンパ番号である。その結果を要約すれば次のようになる。

(1) ケーシングの側壁に沿う流れは図7、8、9、10に示すように最初吸込口より翼の幅方向に平行に流れ、即ち、軸方向にある距離を



第 7 図

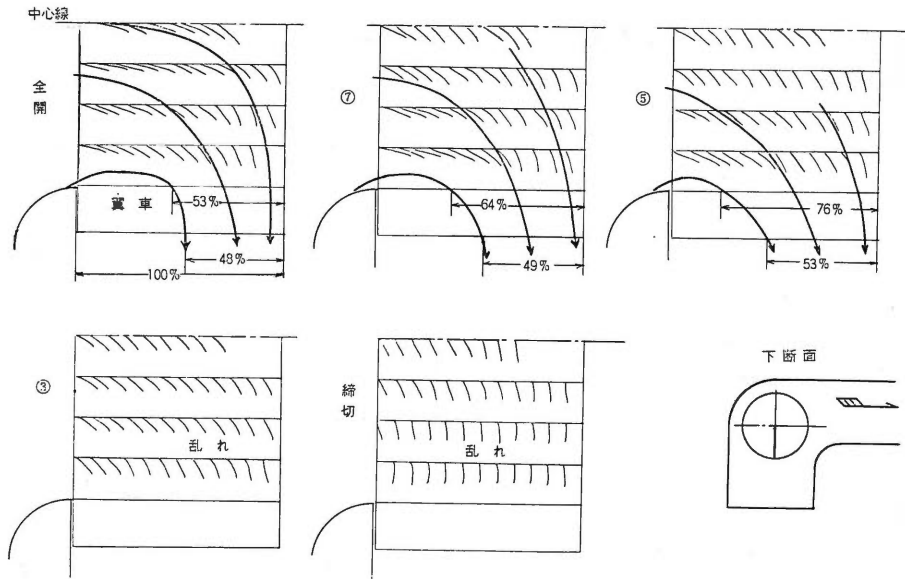


第 8 図

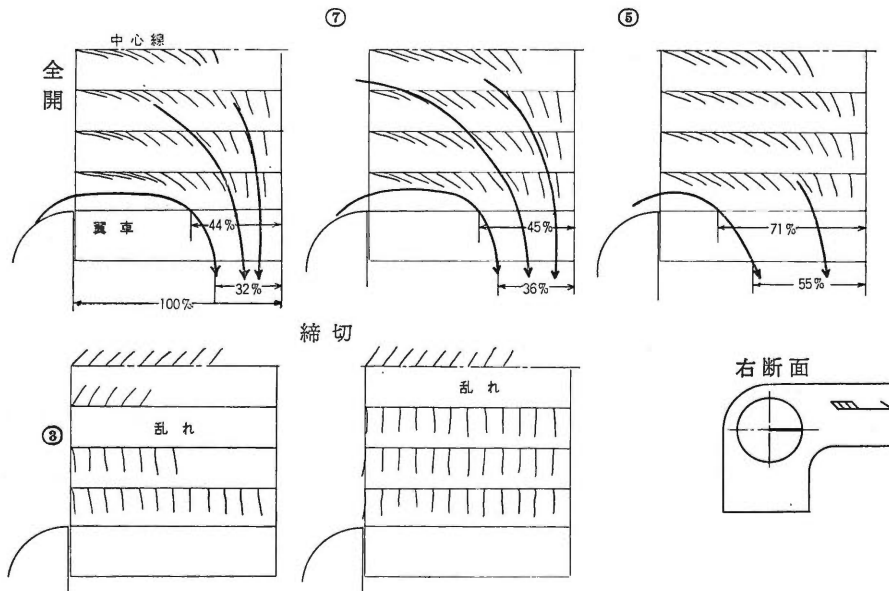
- (3) 風量を減少するにつれて、最初（最高風圧点附近）、右断面の位置（渦形室の捲き始めの点附近）における流れが乱れ始め、さらに減少すると下断面に乱れが波及するが、上断面と左断面とはこの時も乱れがなく、締切り近くでは一様に乱れて概ね回転方向の渦を形成する。
- (4) 流体は翼直後において半径方向と回転方向の分速度をもっているが、吸込側に近づくにつれて半径方向の成分が減少する。翼が作動していない領域

では糸が切線方回をむいており、軸方向の流れは認められなかった。

以上の観察よりファンの性能向上をはかるには、動翼入口側も一様に作動させることが大切で、入口側にも流体が流入する構造にすることが考えられる。したがって、吸込口附近に改造を施して、性能に及ぼす影響を調べた。図11は翼車の軸を含む断面図で図中 No1～No9 は種々の供試吸込ガイドであり、No1、2、3 は同一ボースを用い、そ



第 9 図



第 10 図

の位置を軸方向に移動して特性に及ぼす影響を調べたものである。No 4、5は別の大小2つのボスを図示の位置においたもので、No6、7は翼手前側にも強制的に流れを導くために取付けたガイドである。

No 8、9はベルマウス単体、及びベルマウスつき吸込管を示す。以上本実験では、9種類のガイドを用いて特性試験をおこなったが、これらは流れの特性への影響の程度を調べたものであって、必ずしも特性の

向上を期待したものではない。なお特性試験表中、No 0は供試をつけない実機についてのものである。図12、13、14、15は本実験を整理して無次元化した特性曲線である。特性の無次元表示に際して、圧力係数 ψ には、 $\psi = P_t \frac{\rho}{2} / U_2^2$ を、流量係数 ϕ には、 $\phi = Q / \frac{\pi}{4} D_2^2 U_2^2$ を、また、動力係数 λ には、 $\lambda = L / \frac{\rho}{2} \frac{\pi D_2^2}{4} U_2^3$ を用いた。 $L = Q P_t / \eta$ (L : 軸動力、 P_t : 送風機全圧、 Q : 風量、 ρ : 空気密度、 D_2 : 翼出口

4. おとがき

- (1) 風量が減少するにつれて、翼の作動域が広くなり、翼幅方向における速度差が小さく、速度が平均化されてくる。特に流量が多いほど、流出域流入域の比が大きくなる。
- (2) 吸込口における流れの内、ケーシング外部の側壁に沿う流線は風量が多いほど、半径方向の転向ができず、それ以外の流れを動翼側板の方に移動させ、且つ側板の遠心作用のため、側板に近いほど、流線が密になっているものと推定される。
- (3) No9の吸込ガイドで性能が向上しているのは、

翼直前で流れの転向角が少なくてすみ、翼の作動領域が好転したものと考えられる。

- (4) 翼前後における流れの状況が概略把握できたので、流速の測定計画が容易になった。

終わりに本研究に際し、終始御指導をいただいた九州大学生井教授、本校木本教授、ならびに実験に協力していただいた技能員、学生諸君に厚く感謝の意を表します。

参 考 文 献

生井 送風機と圧縮機（昭和35年）

送風機吸込側流れの実験的研究 (其の2)

＜昭和43年9月30日受理＞

Experimental study on the flow at the suction side of Multi-blade fan (Part-2)

In the previous report, the observation of the flow Pattern at the inlet and the exit of the impeller of the multi-blade fan and the investigation of the general flow conditions by the taft method have been described. Now, to measure the velocity profiles particularly, the test has been carried out by using the 5-holes probe which was made for this experiment.

This probe was previously calibrated in the uniform flow to confirm the characteristics and inserted at the measuring positions of the inlet and the exit of the impeller. The flow conditions was investigated about the main four discharges on fan performance and the six measuring positions of the fan. As the result, the same velocity profiles as the experiment by the taft method were obtained. However, there were some regions of the fan where the measurement by the probe could not be carried out owing to the complex backward flow.

Kounosuke Kiyomori

1. ま え が き

シロッコファンは軸方向翼巾が広いので、翼入口での一様流入が望めない。性能向上の面より考えて、一様流入は重要な問題であるので、タフトを用いて翼前後のフローパターンを観察し、概略の流れの状態を調べたことは前報告で述べた。今回さらに速度分布を定量的に計測するため、5孔ピトー管を用いて実験をおこなった。試作ピトー管は、予かじめ均一の流れの中で検定をおこなってピトー管の方向動圧特性を求めておき、この検定済みのピトー管を供試ファンの測定部位置にそう入し、特性曲線上の主要4点の流量と、6断面の測定位置における流れの状態を調査した。結果はタフト法で示された通りの速度分布が得られたが、ある断面において供試ピトー管では測定不能な領域が生じた。

2. 実験方法

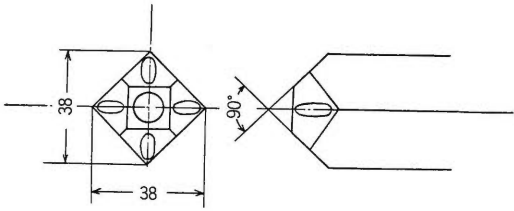
シロッコファンの吸込側では流れは各点で動圧および方向とも異なる複雑な三次元流れを呈している。この流れを解明するために、三次元流れ測定用の5孔プローブを試作した。このプローブは本来は中央の総圧管と周囲に並んだ4つの方向指示管とよりなり、この指示管の指示圧を一致させて方向を求め、さらに総圧管との指圧差から動圧を求める。しかし、本研究では

吸込側の複雑な流れを一つのプローブで測定するのは困難であるため、ピトー管の検定並びに測定においては、yaw angle のみその方向を流れに一致させ、総圧管と pitch angel の差圧から方向動圧とを求めた。

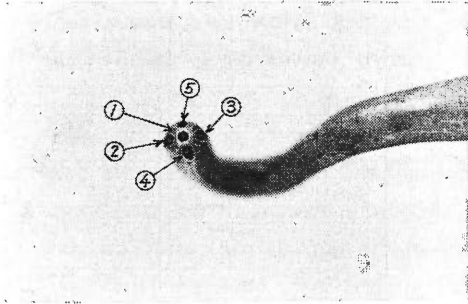
3. 5孔ピトー管の構造

試作5孔ピトー管の外形は図1、2、3に示すようにプローブ部とステム部とよりなっている。プローブ部の正面よりの形は対角線の長さ3.8mmの正形状をなし、先端より丸断面に滑らかに仕上げた5孔式のものである。その構造は内径1mm、外径1.2mmの細ニッケル管を5本十字状に組合わせ、中央の1本を総圧管、周囲の4本を方向指示管とし、間隙を銀ろうで埋めたもので、指示管の先端は何れもプローブ部軸線に対し45度の傾斜角をもち、軸線に対称の位置に配置し幾何学的に正確に手仕上げしてある。特にプローブ部軸線とステム部軸線とは直角になるように入念に製作し、ステム部軸線が計測時の基準線となる故、プローブ部先端とステム部軸線とはできるだけ一致させて、ピトー管検定時の信頼度を高めるようにした。なお計測時の応答を早くするため、ステム内の5本のニッケル管は内径1.2mmと1.4mmの2段継ぎとし、強度をもたせるため外径7.2mmと9.4mmの円形真鍮管で外装した。また前述のように方向指示管(図2参照)の②と③の先端中心を結んだ線をステムの軸線に一致させ、

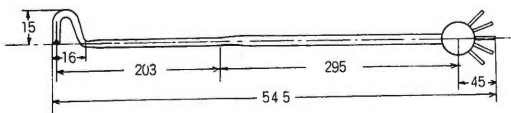
第 1 図



第 2 図



第 3 図



pitch angle測定用とし、④と⑤をそれと直角において yaw angle の測定用とした。5孔ピトー管の反対側端面は、それぞれの取出口を設けて、ビニール管でマノメータに連結した。

4. ピトー管の検定

検定に当っては均一な流速を作るため、ブローア吐出し側の流れの整流と旋回をなくすため、整流格子と20メッシュの金網を設けた。図4に示すように面積比 $1/5.25$ となるように吐出口先端に70φ口径の木製ノズルを取付け、流体に接する部分はペーパー仕上げニス塗装として流れの乱れを少くし、均一な流れの縮流を生ずるようにした。検定装置の概要を図5、図6に示す。図6において①は正規のL形ピトー管、②は検定用ピトー管、③はノズル、④は②を支えピトー管の軸線のまわりに回転できる構造のスタンドで yaw angle をかえ得る装置であり、⑤は④を固定した回転円板で、その回転中心線とノズルの中心線とが交差するように位置をきめた pitch angle の可変装置である。つぎに検定の手順を述べる。

- 検定用ブローアを運転して任意の動圧を作り、J・I・S規格のL形ピトー管で、ノズルの中心線を基準とし、同一動圧の範囲を確認する。
- L形ピトー管を外し、検定ピトー管のプロープ

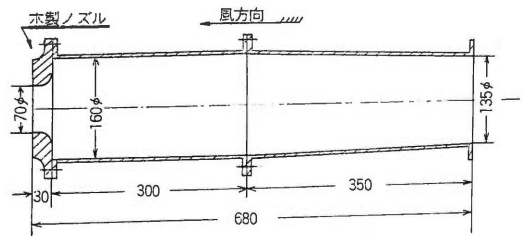
部先端をできるだけ回転円板の中心線上におき、かつノズルの中心線上に幾何学的に正しく向け、yaw angle と pitch angle のそれぞれの指圧が合うように先端を修正し、この位置をそれぞれの基準線とする。

- 円板⑤をこの基準線より回転させて任意の pitch angle に固定し、このとき方向指示管の指圧が一致するまで yaw angle を回転させ、この角度を本実験で補正する。
- 動圧の変更は可変Vプーリを通しての回転数制御と吸込側流量調節板によりおこなう。

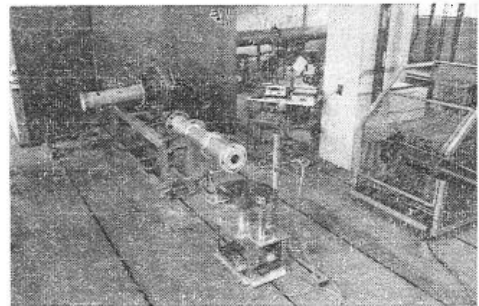
5. 検定結果

ピトー管プローブ軸線が流れの方向とある角度をなす場合、ピトー管の方角指示管相互の差圧及び総圧管と方向指示管の差圧は、その角度と動圧に対し1:1に対応し、それぞれ一定の動圧に対しては一定の曲線

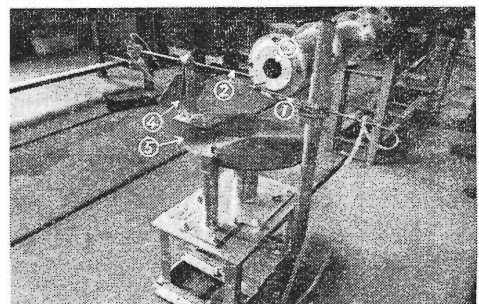
第 4 図



第 5 図



第 6 図



を描く。三次元の流れにおいては、yaw angle と pitch angle との2つの角度がこれに関係する。今回の実験では、ファン吸込口並びにピトー管の形状のためそれぞれの指示圧を一致させて測定することができないので、yaw angle の指示圧を一致させて pitch angle の差圧から動圧とその方向を求める手順をとったことは前述の通りである。

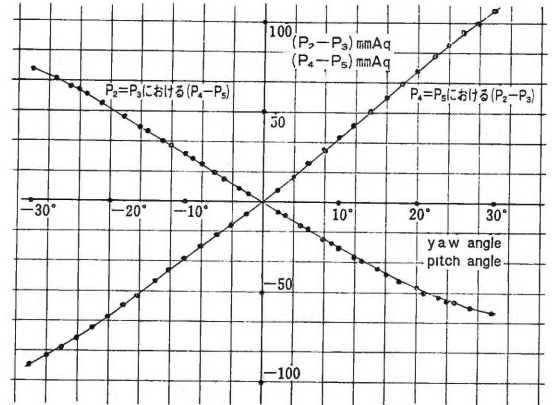
試作せるピトー管の動圧69mmにおける特性を、図7に示す。ただし、yaw angle、pitch angle はともに基準位置に対して時計方向の回転角度を正とし、 $P_2 \cdot P_3 \cdot P_4 \cdot P_5$ は4つの方向指示管の指圧値を示すものとする。図中曲線Aは、 P_4 と P_5 の指示圧を一致させて pitch angle と $(P_2 - P_3)$ との関係を示したものであり、曲線Bは、 P_2 と P_3 の指示圧を一致させて yaw angle と $(P_4 - P_5)$ との関係を表わしたものである。さて、本検定では、yaw angle の指示圧を一致させている故、pitch angle と動圧に関連する要素は P_1, P_2, P_3 となる。よって $P_4 = P_5$ として求め

たデータをもとに横軸に pitch angle を縦軸に $(P_2 - P_3)$ をとり、これを各動圧につきプロットして第1の曲線群をつくる。

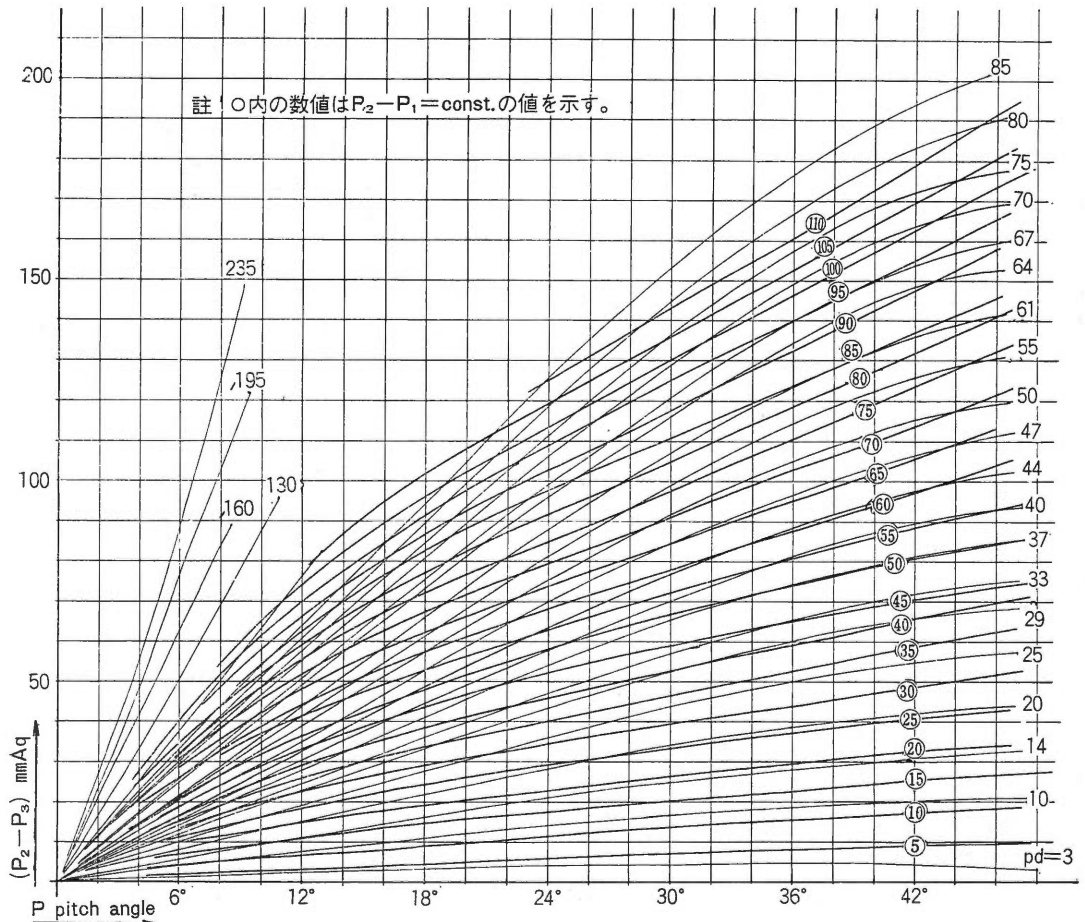
つぎに測定データ中から $(P_2 - P_1)$ の値が同一な

動圧69mmAqにおける5孔ピトー管性能曲線

第7図



第8図



るものをえらび、その動圧と pitch angle を求めて前述のグラフに記入して第2の曲線群をつくり、この2つの曲線群をまとめて、動圧-ピッチアングル一覧表を作成する。この線図を図8に示す。即ち、 $(P_2 - P_3)$ 、 $(P_2 - P_1)$ の値がわかれば、この一覧表から直ちに pitch angle と動圧とが求まる。測定に当っての動圧は、3 mm より 85 mm までとそれ以上は 130 mm、160 mm、195 mm、235 mm、と24種類、また pitch angle は0度より45度まで3度間隔にとった。

6. 本 実 験

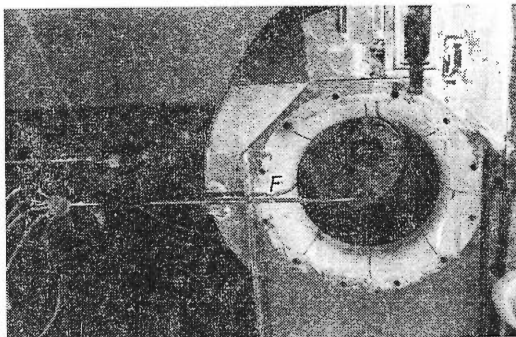
本実験に用いた供試ファン装置は、前回実験のものと同一である。測定風量は全開、最高効率点、最高圧力点、失速点の4通りとし、測定位置は図9、10、11に示すように、A, B, C, D, E とファン軸心方向の5個所、及び吸込口の左水平方向Fの位置の計6個所につきおこなった。

測定装置は図12の写真に示すように、①は5孔ピトー管、②はピトー管上で回転できる指針、③は yaw angle 指示板、④はスライド、⑤はそのガイド、⑥はスタンドで、⑦・⑧はセットスクリューである。③は④と一体となりガイド⑤の上を移動し、④はスライド④の上をガイド⑤の軸線に対して平行に移動できる構造になっている。図12の状態に組立てた装置の5孔ピ

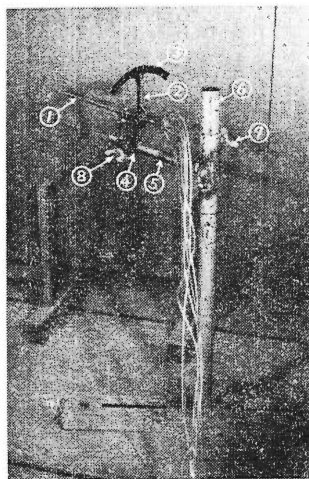
トー管先端を検定風管の軸線延長上に正しくおく。ブローを運転して任意の動圧をつくり、 $P_2 = P_3$ 、 $P_4 = P_5$ なるように yaw angle 並びに pitch angle を測定装置上で調整しながら、その位置をセット・スクリュー⑦・⑧を用いて固定し、最後に指針②を回して指示針の基準線上にセットする。

A・B・C・D と測定位置がかわるときはスライド④を⑤上で90度毎回転させ、また高さを調節するときは⑤を上下させる。つぎに、この状態でピトー管システム部軸線を供試ファン軸線に平行に装着し、所定の位置で10 mm 間隔に移動させて各点を計測する。F断面の場合も上に準じておこなう。なお、ピトー管プローブ先端の位置は、A, B, C, D, では羽根内端より中心にむかい、20 mm、E では羽根外端より 135 mm、F ではベルマウス入口端面より 20 mm 外側の位置をとった。実験にあたっては、まづ $P_4 = P_5$ なるように yaw angle を求め、つぎにその状態で P_1 、 P_2 、 P_3 を測定し、 $(P_2 - P_3)$ 、 $(P_2 - P_1)$ の値と検定一覧表とより pitch angle と動圧とを補間法で求めた。A, B, C, D, E, 各点測定にあたっての yaw angle 基準面はファンの

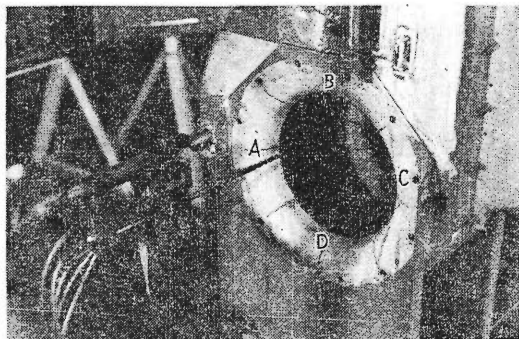
第 11 図



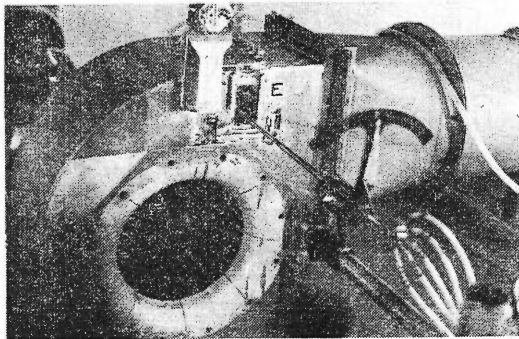
第 12 図



第 9 図



第 10 図



軸線を含む平面をとった。測定数値並びに結果をまとめたものを別表に示す。表中の最後の欄は、測定断面 A・B・C・D・E の各線上における流速の半径方向分速度を、また F 断面では、軸方向分速度を示したものである。測定不可能点とは、pitch angle の最大検定値45度以上に及ぶ pitch angle をもつもので、試作の5孔ピトー管では読みが時間的に変動して測定し得なかった測定点をいう。

註、1、 P_1 、 P_2 、 P_3 、 P_4 、 P_5 、 P_d は mmAq、pitch angle、yaw angle は度、流速は m/s の単位を示す。

2、距離は A・B・C・D 断面では主板より、E 断面はケーシング奥側より、F 断面はファン中心線よりのものを示す。

3、yaw angle は修正値を示す。

7. あとがき

(1) 断面 A・B・C・D における流入角は吸込口に近いほど軸方向をむき、主板に近づくにつれて半径方向に向きをかえることは前回のタフトによる実験で定性的に把握されていたが、今回はさらにこれが明確になった。すなわち、ファン軸線に対して45度前後の流れの傾きをもつ位置は主板より A、B 断面では約50mm、翼巾に換算して33%、C、D 断面では約20mm、翼巾に換算して13%程度であり、これは各断面とも全開より失速点までの4風量点について大体同じ状態である。いっぽういずれの場合も主板の極く近傍においても、なほ軸線に対し80度程度の傾き角をもっている。E 断面の流出角は、全開より最高圧力点までは翼の途中で、pitch angle が0の所があり、ここより主板までは負の値となっている。これは流体が翼通過時に主板に衝突して流れの方向がかわり、負となったものと考えられる。総括的に流れの方向については A・B・C・D 程大きな差異は認められない。

F 断面のピッチ角は、中心近傍が0で外周に近づくにつれて大きな角度をもっているが、中心部は軸方向に流入し、外周に近づくにつれてベルマウスに沿った流れとなるから当然の結果と考えられる。

(2) つぎに軸線を含む平面に対する流線の傾き角、すなわち、yaw angle であるが、A、B、C、D は何れ

も正の値であり、このファンでは回転方向の成分をもって流入していることがわかる。なお A、B 断面とも最大風量るとき最大値をとっており、また位置によりばらつきが少ないようにもみえるが、この測定データだけでは明確な結論は得られず、かなり複雑な要素をもっていると推定される故、さらに今後の実験にまつほかはない。E 断面では、主板より吸込口に近づくにつれて各点は負より正の方向に向きをかえて流出しており、F 断面は各位置とも yaw angle が殆んど一定、つまり10度前後の傾きで回転方向に流入していることがわかったが、これはタフト法によっては認められない所であった。

(3) 動圧は、A、B、C、D 断面では何れも吸込口に近いほど大きいのが、これを半径方向分速度に換算すると主板に近い所が大きく、かつ B 断面の位置が他の断面より大きな値をもち、吸込条件が良好なることがわかる。吐出し側測定点 E の位置は、翼出口直後をとるべきところ、実際の測定点は翼出口より半径方向に135mmのところをとった故、その点は翼直後の流れとはかなり異なったものと考えられる。つまり、この値はその点までの集積された流れの大きさと方向を示したものである。

(4) 動圧、方向一覧表について。 $(P_2 - P_1)$ と pitch angle との関係をみると、 $(P_2 - P_3)$ のときよりはるかに pitch angle 軸に平行になっており、特に動圧の値が小さいときには、この傾向が著しい。従って、 $(P_2 - P_1)$ の値を $(P_2 - P_3)$ 、pitch angle 一覧表に移すとき、作成点が多く、そのカーブをまとめるのに手間どった。また Pitch angle が小さいときは、図の性質上動圧線が密になり、精度は期待できぬ面がある。

(5) 以上のように吸込側流れをかなり定量的に把握できたので、作動有効巾がこれよりわかり、設計上の目安になるものと考えられる。しかしながら、E 断面測定点は前述のようにその位置が適当でない故、翼前後相互の関連が本実験では明確でなく、さらにこれを究明したいと考えている。

最後に本実験を実施するにあたり、終始御懇切な指導を賜りました九州大学生井教授並びに実験に協力して頂きました学生諸君に厚く御礼申し上げます。

参 考 文 献

1. GAS TURBINE LABORATORY MASSACHUSETTS INSTITUTE OF TECHNOLOGY; Aero dynamic Measurements.
2. D. W. B. RYER, A. F. R. Ae. S., D. E. WALSHE, B. Sc. and H. C. GARNER, M. A., of the Aerodynamics Division, N. P. L.; Pressure Probes Selected for Three Dimensional Flow Measurement.

〔I〕測定位置 A

1. 全 開

距離 <i>cm</i>	P_1	P_2	P_3	$P_4=P_5$	P_2-P_3	P_2-P_1	ピッチ アングル	Pd	ヨー アングル	流速
0	-3	21	11	5	10	24	5	29	41	16.35
1	1	37	-2	5.5	39	36	22	28	39.5	15.19
2	8.5	59	-3.5	7.5	62.5	50.5	27	38	40.5	17.06
3	24	80	-6	9.5	86	56	39	40	43	14.50
4	51	98	-7	15	105	47				
5~15				測定不可			能			
0	-4	22	10	5	12	26	6	28	36.5	17.40
1	0	37	1.5	5.5	35.5	37	18	33	39	17.15
2	8	58	-4	7	62	50	27	38	41	16.95
3	25	78	-7	10	85	53	42	36	42	13.92
4	50	98	-7.5	15	105.5	48				
5~15				測定不可			能			

2. 最高効率点

距離 <i>cm</i>	P_1	P_2	P_3	$P_4=P_5$	P_2-P_3	P_2-P_1	ピッチ アングル	Pd	ヨー アングル	流速
0	-1.5	9.5	3	3.5	6.5	11	7	11	25	12.60
1	0.5	17.5	0	4	17.5	17	17	16	25	12.86
2	3.5	24	-2	4.5	26	20.5	26	16	23	13.25
3	8	32	-4.5	5.5	36.5	24	36	19	23	12.43
4	14	41.5	-6	10	47.5	27.5	41	22	22.5	12.16
5	24	50	-6	12	56	26				
6~15				測定不可			能			
0	-1.5	9.5	5	2.5	4.5	11	5	12	25.5	12.58
1	0	16	1	2.5	15	16	16	14	27	12.84
2	3.5	25	-2	3.5	27	21.5	26	18	26.5	12.79
3	10	31	-2	4	33	21	34	17	30	10.72
4	16	41	-3	5.5	44	25	43	20	27	10.76
5	23	50	-2	8	52	27				

3. 最高圧力点

距離 <i>cm</i>	P_1	P_2	P_3	$P_4=P_5$	P_2-P_3	P_2-P_1	ピッチ アングル	Pd	ヨー アングル	流速
0	0	8.5	3.5	2	5	8.5	10	9	26	8.01
1	0	12.5	1.5	2	11	12.5	15	11	20.5	12.11
2	2	17	-1	2.5	18	15	26	12	17	12.10
3	4.5	22	-2	3	24	17.5	32	13	20	11.60
4	10	30	-2	3.5	32	20	40	15	21	10.48
5	14	34.5	-2.5	4.5	37	20.5				
6~15				測定不可			能			
0	0	9	3.5	2	5.5	9	10	9	24.5	10.85
1	0	12.5	1.5	1.5	11	12.5	15	11	22	11.93
2	1.5	18	-1	2	19	16.5	23	13	20	12.51
3	5	22.5	-1.5	2.5	24	17.5	32	13	20.5	11.57
4	8	28	-2	3.5	30	20	37	15	22.5	11.55
5	15	34	-3	5	37	19				

4. 失速点

距離 <i>cm</i>	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄ =P ₅	P ₂ -P ₃	P ₂ -P ₁	ピッチ アングル	Pd	ヨー アングル	流速
0	2	7	4	1.5	3	5	9	5	31.5	7.65
1	0	10	1	1.5	9	10	16	9	21	10.15
2	1	13.5	0	1.5	13.5	12.5	22	10	22.5	10.95
3	3	16	-1	1.5	17	13	29	10	25	10.71
4	5.5	20.5	-2.5	2	23	15	36.5	12	25.5	10.15
5	8.5	23	-2.5	3	25.5	14.5	43	12	26	8.88
6	12	25.5	-3	4	28.5	13.5				
7~15	測定不可能									
0	3	7.5	5	1.5	2.5	4.5	7	5	31.5	7.33
1	1	10	2	1.5	8	9	16	8	22	9.42
2	1	13.5	-0.5	1.5	14	12.5	23	10	21.5	11.01
3	3.5	17	-1	2	18	13.5	29	11	25	10.61
4	4.5	21	-2	2	23	16.5	33	12	26	10.55
5	9	24	-2	3	26	15	43	12	25	9.11
6	12.54	25.5	-3	4	28.5	13				

〔Ⅱ〕測定位置 B

1. 全開

距離 <i>cm</i>	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄ =P ₅	P ₂ -P ₃	P ₂ -P ₁	ピッチ アングル	Pd	ヨー アングル	流速
0	21	50	45	8	5	29	2.5	29	34	18.00
1	3	71	18	8	53	68	15	62.5	23	28.98
2	9	89	7	8.5	82	80	19.5	67	24	28.18
3	20	107	-2	9	109	87	27	66	31	24.44
4	50	140	-2	9	142	90	38	65	39	19.05
5~15	測定不可能									
0	22	51	42	8	9	29	5	34	29.5	27.63
1	4	72	17	7.5	55	68	14	63	17	29.78
2	7	92	5	9	87	85	19.5	70	18.5	29.90
3	25	115	-3	9	118	90	30	60	23.5	25.86
4	56	142	-4	10	146	86	45	63	32	19.21

2. 最高効率点

距離 <i>cm</i>	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄ =P ₅	P ₂ -P ₃	P ₂ -P ₁	ピッチ アングル	Pd	ヨー アングル	流速
0	5	17	14	3	3	12	3	14	22.5	13.95
1	0	27	4	3	23	27	14.5	25	16	18.73
2	4	39	2	3.5	37	35	21	29	18	19.30
3	-1	49	-1	4	50	50	19	44	21.5	23.24
4	23	58	-2	5	60	35	43	27	20	13.90
5~15	測定不可能									
0	5	19	12	4	7	14	7	14	21	14.00
1	0	28	3.5	3.5	24.5	28	15	25	15	19.20
2	3.5	39	1	3.5	38	35.5	22	28	14	19.20
3	-1	48.5	-2	4	50.5	49.5	19	44	18	24.20
4	2.5	55	-2	5.5	57	30				11.55

3. 最高圧力点

距離 cm	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄ =P ₅	P ₂ -P ₃	P ₂ -P ₁	ピッチ アングル	Pd	ヨー アングル	流速
0	-1	9	4.5	2	4.5	10	6	10	2.5	12.70
1	0	13.5	1	2	12.5	13.5	18	11	2.5	12.72
2	2.5	19	-0.5	2	19.5	16.5	25	13	5	13.26
3	7	26	-2	2.5	28	19	35	14	5	12.17
4~15	測定不可能									
0	-1	9	4	1.5	5	10	6	10	0	12.68
1	0.5	13	1.5	2	11.5	12.5	16	11.5	5	12.75
2	3.5	19.5	-0.5	2	20	16	27	13	10	12.78
3	9	25	-1	2.5	26	16	40	13	13	10.28

4. 失速点

距離 cm	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄ =P ₅	P ₂ -P ₃	P ₂ -P ₁	ピッチ アングル	Pd	ヨー アングル	流速
0	4	5.5	5	0.5	0.5	0.5				
1~15	測定不可能									

〔Ⅲ〕測定位置 C

1. 全開

距離 cm	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄ =P ₅	P ₂ -P ₃	P ₂ -P ₁	ピッチ アングル	Pd	ヨー アングル	流速
0	-1	24	8.5	3.5	15.5	25	9	25.5	0.5	20.53
1	3	36	1.5	3	34.5	33	20.5	25.5	0	20.08
2	17	52	-1	4	53	35	34.5	26.5	12	16.08
3~15	測定不可能									
0	-1	22	8	3.5	14	23	9	25	0.5	20.76
1	4	34	1	4	33	30	23	23.5	2	18.18
2	18	53	0	4	53	35	34.5	26.5	12	16.08

2. 最高効率点

距離 cm	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄ =P ₅	P ₂ -P ₃	P ₂ -P ₁	ピッチ アングル	Pd	ヨー アングル	流速
0	-0.5	9.5	3.5	1.5	6	10	9	10	0	11.92
1	1	14.5	1.5	1.5	13	13.5	18	12	-4	13.27
2	6	22	1.5	2	20.5	16	28	13	6.5	12.78
3~15	測定不可能									
0	0	9.5	3.5	1.5	6	9.5	10	10	2	11.88
1	0.5	15	1.5	1.5	13.5	14.5	16	13	-4.5	13.02
2	6	21.5	21.5	2	19.5	15.5	27	12	6.5	12.38

3. 最高圧力点

距離 cm	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄ =P ₅	P ₂ -P ₃	P ₂ -P ₁	ピッチ アングル	Pd	ヨー アングル	流速
0	1.5	8	8	2	0	6.5	0	10	-4	12.76
1	3	11	7	2	4	8	7	9	0	11.35
2~15	測定不可能									
0	0	8	7	1.5	1	8	0	10	-5	12.72
1	7	14	10	1.5	4	7	8	6	0	9.77

4. 失速点

0 ~ 15 すべて測定不可能 ($P_4 \approx P_5$ となる)

〔IV〕測定位置 D

1. 全開

距離 cm	P_1	P_2	P_3	$P_4=P_5$	P_2-P_3	P_2-P_1	ピッチ アングル	P_d	ヨー アングル	流速
0	-1	15	4	2	11	16	10	16	7.5	15.77
1	1	28	1.5	2.5	26.5	27	18.5	23	10	19.05
2	8	45	-2.5	3.5	47.5	37	28.5	28	15.5	17.69
3	36	66	2	6.5	64	30				
4~15	測定不可能									
0	-1	17	6	3	11	18	9	18	7	16.80
1	2.5	29	2	3	27	26.5	18	23	11	18.09
2	11	46	-2	4	48	35	31	26	15	17.04
3	35	64	1	6.5	63	29				

2. 最高効率点

距離 cm	P_1	P_2	P_3	$P_4=P_5$	P_2-P_3	P_2-P_1	ピッチ アングル	P_d	ヨー アングル	流速
0	-0.5	11	2.5	2	8.5	11.5	13	10	21	11.57
1	2	17	1	2	16	15	20.5	12	20	12.28
2	7.5	25	-1	1.5	26	17.5	36	13	26.5	10.41
3~15	測定不可能									
0	-0.5	10.5	2.5	1.5	8	11	13	10	20	11.74
1	2	17	1	1.5	16	15	20	12	22	12.10
2	9	26	-0.5	2	26.5	17	36	13	29	9.56

3. 最高効率点

距離 cm	P_1	P_2	P_3	$P_4=P_5$	P_2-P_3	P_2-P_1	ピッチ アングル	P_d	ヨー アングル	流速
0	-1	8	3.5	1.5	4.5	9	5	10	34	9.97
1	1	11.5	1	1	10.5	10.5	19.5	8	38.5	8.40
2	3.5	17	-0.5	1	17.5	13.5	30	10	38.5	9.17
3	10	21.5	-1.5	2	23	11.5				
4~15	測定不可能									
0	0	8	3.5	1.5	4.5	8	7.5	9	38.5	9.39
1	0.5	12	1.5	1.5	10.5	11.5	16	10	35	9.94
2	4	16	0	1.5	16	12	30	10	40	8.47
3	13	21.5	-0.5	2	22	8.5				

4. 失速点

0 ~ 15 すべて測定不可能 ($P_4 \approx P_5$ となる)

〔V〕測定位置 E

1. 全 開

距離 cm	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄ =P ₅	P ₂ -P ₃	P ₂ -P ₁	ピッチ アングル	Pd	ヨー アングル	流速
0	-116	32	29	10.5	3	148	0	200	-19	54.7
1	-170	15	42	11.5	-27	185	-2	235	-29	54.1
2	-168	16	48	12.5	-32	184	-2	232	-27	54.7
3	-128	27	57	14	-30	155	-2	195	-21	51.5
4	-86	33	66	13.5	-33	119	-3.5	145	-13	47.2
5	-61	43	70	13.5	-27	104	-3	127	-4.5	45.3
6	-63	48	64	14	-16	111	-2	140	0	47.7
7	-62	57	61	14	-4	119	0	160	2	51.4
8	-59	71	40	14.5	31	130	3	160	5.5	51.1
9	-57	86	38	15	48	143	4.5	162	9.5	46.0
10	-62	98	30	15.5	8	160	6	175	33	53.1
11	-73	105	18	15.5	87	178	7	205	16	55.2
12	-86	108	9	15.5	99	194	7	210	18.5	55.1
13	-96	102	8.5	15	93.5	198	7	220	18	56.6
14	-103	88	13	14	75	191	5.5	220	20	56.0
15	-107	67	20	13	47	174	3.5	215	23	54.4

2. 最高効率点

距離 cm	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄ =P ₅	P ₂ -P ₃	P ₂ -P ₁	ピッチ アングル	Pd	ヨー アングル	流速
0	-105	-33	-31	-2.5	-2	72	0	100	-24	36.9
1	-106	-37	-27	-2.5	-10	69	-1.5	100	-29	35.6
2	-99	-35	-23	-3	-12	64	-2	80	-27	32.1
3	-90	-34	-28	-2.5	-11	56	-2	70	-20.5	31.6
4	-84	-26	-23	-2.5	-3	58	-1	77	-16	34.1
5	-81	-26	-24	-2.5	-2	55	0	75	-9	34.9
6	-81	-22	-24	-2	2	59	0	80	-7.5	35.8
7	-87	-20	-30	-2	10	67	2	85	-5	37.0
8	-90	-16	-32	-1.5	16	74	2	95	-5	39.1
9	-91	-9	-37	-1.5	28	82	4	100	-3	40.2
10	-95	-7	-41	-1.5	34	88	5	105	1	41.2
11	-99	-6	-45	-1.5	39	93	6	105	4	41.0
12	-103	-7	-43	-2	36	96	5	105	5	41.0
13	-108	-11	-42	-2	31	97	4.5	110	6.5	42.0
14	-116	-21	-38	-2.5	17	95	2.5	120	6	41.9
15	-118	-27	-34	-2.5	7	91	1	120	4.5	44.0

3. 最高圧力点

距離 cm	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄ =P ₅	P ₂ -P ₃	P ₂ -P ₁	ピッチ アングル	Pd	ヨー アングル	流速
0	-109	-47	-52	-6	5	62	1	78	-24	32.5
1	-127	-53	-49	-6	-4	74	-1	100	-29.5	35.2
2	-118	-56	-47	-6	-9	62	-2	80	-30	31.4
3	-109	-52	-47	-6	-5	57	-1	75	-29.5	29.5
4	-102	-51	-45	-5.5	-6	51	-1	67	-27.5	29.3
5	-89	-46	-43	-5.5	-3	43	-1	60	-23	28.1
6	-85	-43	-44	-5.5	1	42	0	61	-19	29.9
7	-86	-42	-44	-5.5	2	44	0	63	-17	30.6

8	-89	-43	-45	-5.5	2	46	0	64	-14	31.3
9	-92	-44	-43	-5.5	-1	48	0	66	-11	32.4
10	-96	-46	-44	-5.5	-2	50	0	68	-9	32.9
11	-100	-46	-41	-5.5	-5	54	-1	70	-4	33.7
12	-102	-49	-41	-6	-8	53	-1.5	68	-5	33.1
13	-104	-50	-42	-6	-8	54	-1.5	68	-1	33.3
14	-108	-53	-40	-6.5	-13	55	-3	68	4	33.2
15	-111	-55	-42	-6.5	-13	56	-3	68	5	33.1

4. 失 速 度

距離 <i>cm</i>	P_1	P_2	P_3	$P_4=P_5$	P_2-P_3	P_2-P_1	ピッチ アングル	Pd	ヨー アングル	流速
0	-75	-36	-67	-7	31	39	12.5	38	-38	18.5
1	-96	-38	-71	-6.5	33	58	8	64	-40	24.3
2	-99	-42	-66	-6.5	24	57	5	65	-42.5	23.9
3	-84	-42	-56	-7	14	42	4.5	48	-45.5	19.5
4	-63	-40	-49	-6.5	9	23	6	20	-54	13.8
5~8	測 定 不 可 能									
9	-49	-34	-45	-6.5	11	15	10	14	-38	11.6
10	-51	-35	-44	-6.5	9	16	7	16	-31.5	13.7
11	-54	-36	-45	-6.5	9	18	6	21	-26	16.6
12	-57	-36	-45	-6.5	9	21	5	25	-22	18.6
13	-60	-37	-45	-6.5	8	23	4	28	-14.5	21.2
14	-62	-40	-43	-6	3	22	1	29	-10	21.4
15	-66	-42	-43	-6	1	24	0	34	-2.5	23.5

〔IV〕 測 定 位 置 F

1. 全 開

距離 <i>cm</i>	P_1	P_2	P_3	$P_4=P_5$	P_2-P_3	P_2-P_1	ピッチ アングル	Pd	ヨー アングル	流速
0	-6	20	23	5	-3	26	-2	24	12	19.3
1	-6	24	15	5	9	30	3.5	37	12	24.0
2	-6	23	15	5	8	29	4.5	36	13	23.5
3	-5.5	29	13	5.5	16	34.5	6.5	40	11.5	24.9
4	-5.5	29	14	6	15	34.5	6.5	40	11.5	24.9
5	-3	37	9	5.5	28	40	11.5	40	11.5	24.5
6	-3	40	5	6	35	43	14	40	10	24.4
7	-3	45	-3	6	48	48	18.5	42	10	24.4
8	1	53	-1	6	54	52	20.5	44	11	24.6
9	4	57	-3	6	60	53	23.5	43	11	24.0
10	8	63	-6	6.5	69	55	28	41.5	12.5	22.4
11	16	69	-8	7	77	53	35.5	39	13.5	19.9
12	38	76	-5	10	81	38				

2. 最高効率点

距離 <i>cm</i>	P_1	P_2	P_3	$P_4=P_5$	P_2-P_3	P_2-P_1	ピッチ アングル	Pd	ヨー アングル	流速
0	-2	9	9	2.5	0	11	0	16	11	15.9
1	-2	9.5	10	3	-0.5	11.5	0	16	8	16.1
2	-2.5	9	7	3	2	11.5	1	16	9	16.0
3	-2	11	6	3	5	13	3.5	16	11	15.8
4	-2	14	5	3.5	9	16	7.5	17	11	16.2

5	-2	15	3	3	12	17	10	18	11	16.6
6	-1	17.5	1.5	3.5	16	18.5	13	18	9	16.5
7	-0.5	19.5	0.5	3.5	19	20	17.5	18	9	16.2
8	0.5	23	-1	3	24	22.5	21	19	9	16.2
9	2	25	-2.5	3.5	27.5	23	25	18	11.5	15.2
10	4	29	-3.5	3.5	32.5	25	28.5	20	11	15.6
11	7	31	-6	3.5	37	24	36.5	19	10	13.9
12	14	34	-5	4	39	20				

3. 最高圧力点

距離 <i>cm</i>	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄ =P ₅	P ₂ -P ₃	P ₂ -P ₁	ピッチ アングル	Pd	ヨー アングル	流速
0	-1	4.5	4.5	2	0	5.5	0	10	4.5	12.7
1	-1	4.5	4.5	2	0	5.5	0	10	11	12.5
2	-1	6	4	1.5	2	7	3	10	11.5	12.5
3	-1.5	5.5	3	1.5	2.5	7	3	10	11	12.5
4	-1	7.5	3	1.5	4.5	8.5	7.5	10	10	12.4
5	-1	8.5	2.5	1.5	6	9.5	9	10	9.5	12.4
6	-0.5	10.5	1	2	9.5	11	15.5	10	9.5	12.2
7	0	12	-0.5	2	12.5	12	21	10	9.5	11.7
8	0	13.5	-0.5	2	14	13.5	21	11	9	12.4
9	1	15	-1.5	2	16.5	14	24	12	11.5	12.5
10	2.5	17	-3	2	20	14.5	29.6	12	12	11.9
11	4	17.5	-3.5	2.5	21	13.5	36	11	10.5	10.6
12	5	21	-4	3	25	16	38	12	14	10.7

4. 失速点

距離 <i>cm</i>	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄ =P ₅	P ₂ -P ₃	P ₂ -P ₁	ピッチ アングル	Pd	ヨー アングル	流速
0	0	0	2.5	0.5	-2.5	0	0	極小	5.5	
1	0	0	2.5	0.5	-2.5	0	0	〃	8	
2	-0.25	0.5	1.75	0.5	-1.25	0.75	0	〃	8	
3	-0.25	0.75	1.75	0.5	-1	1	0	2	7	5.7
4	-0.25	1.5	1.5	0.5	0	1.75	0	3	4.5	7.0
5	-0.25	1.5	1	0.5	0.5	1.75	0	3	4.5	7.0
6	-0.5	2.5	0.75	0.5	1.75	3	5	3	4.5	7.0
7	-0.5	3	0.5	0.5	2.5	3.5	8	4	4.5	8.6
8	-0.25	3	0	0.5	3	3.25	11	4	4.5	8.5
9	0	4	-1	0.5	5	4	27	4	5	7.7
10	0.5	5.5	-1.5	0.5	7	5	30	7	4.5	9.2
11	1	6	-1.5	0.5	7.5	5	33	7	4.5	8.9
12	2.5	8	-2	1	10	5.5	42	7	4	7.9

Four Quartets : An Interpretation

(I) “Burnt Norton” and “East Coker”

＜昭和43年 9 月30日受理＞

Takehiko Tabuki

T. S. Eliot expresses his lifetime effort symbolically and concretely in his works. Especially in *Four Quartets* he expresses his “autumnal serenity” and “wisdom of age”, which come from his devotion to God in his later years. He loses his will in the will of God in order to realize the eternal pattern in the flux of time, as Thomas does in *Murder in the Cathedral*.¹ So none can deny that *Four Quartets* represents the culmination of Eliot’s craftsmanship as a poet. And he did not set himself such a difficult task as this poem. In the course of my study I was often brought to a *cul-de-sac*, for it seems that there is no association of ideas of each strophe. One of the reasons of this is that each of the Quartets has published separately; “Burnt Norton”, grown out of passages deleted from his first poetic drama *Murder in the Cathedral* and eventually published as the first Quartet, appeared in 1935, “East Coker”, the second Quartet, in 1940, “The Dry Salvages” in 1941, and “Little Gidding” in 1942. Above all the disparity between the first Quartet and the other three is noticeable. As Leonard Unger has pointed out, “Burnt Norton” reveals the theme and elements of structure familiar enough against the background of earlier works. It has affinities of meaning and style with *The Waste Land*, *Ash Wednesday*, and *Murder in the Cathedral*, and also with the play *The Family Reunion*, which came later (1939).² The other three Quartets have published successively in *English Review*. And the other reason is that, as the title itself announces, this is the poem of the “quasi-wholeness” and the “quasi-fragmentariness”. The title *Four Quartets* allows for the separate unity of each of the Quartets, and at the same time makes each a part of the larger whole.³

In order to make a definite study I should have begun with his earlier works. But, as you can see in “East Coker”, Eliot admonishes us that “For us, there is only trying. The rest is not our business”. Encouraged by this admonishment, I dare to “approach to the meaning” of this poem in order to “restore his experience in a different form”.

“Burnt Norton”⁴

Time present and time past
Are both perhaps present in time future,
And time future contained in time past.
If all time is eternally present
All time is unredeemable.

What might have been and what has been
Point to one end, which is always present.⁵

The poem begins with the collapse of the division of time. This suggests that "time past", "time present" and "time future"—namely all aspects of time—may be simultaneous. "What has been" (the past) and "what might have been" (the potentialities of the past) point to the present as their conclusion. If that is so, it makes time "unredeemable". Because the past can be changed and old mistakes and sins can be atoned for only by the division of time. Both aspects of the past—"what has been" and "what might have been"—are included in what we call "Eternal Now". It is a general conception of time that time consists of the temporal succession of the temporal events and things. Against this notion of the temporality of things and events, Eliot sets the idea of the co-existence of the past and the future, of the beginning and the end. This is the idea of "Eternal Now" which appears in the *Four Quartets*. This idea had already appeared in *The Rock*:

There's some new notion about time, what
says that the past—what's be'ind you—is
what's goin' to 'appen in the future, bein'
as the future 'as already 'appened.⁶

In this dimension of time, "Eternal Now", "what did not happen is as true as what did happen", as Harry says in *The Family Reunion*.⁷ The rose garden is inhabited by Eliot's vision of eternity. It is also inhabited by "echoes" of the past of the poet and of the world of "what might have been", and perhaps also his hope for the future. It may be represented by such places as the orchard in "*New Hampshire*"⁸ and the hyacinth garden in *The Waste Land*.⁹

Dry the pool, dry concrete, brown edged,
And the pool was filled with water out of sunlight,
And the lotos rose, quietly, quietly,
The surface glittered out of heart of sunlight,
And they are behind us, reflected in the pool.
Then a cloud passed, and the pool was empty.

"Human kind" cannot live in this rose garden. They can only approach. Because this is the world which can be seen only "in a shaft of sunlight"¹⁰—the world of timelessness. Such a world can exist in any dimension of time, but it cannot become real. It is a beautiful "Reality", though not the ultimate one. Therefore the bird which leads us into the rose garden exhorts:

Go, go, go, said the bird: human kind
Cannot bear very much reality.

(This is an echo of what Thomas has said in *Murder in the Cathedral*.¹¹) Because reality constitutes the "one end which is always present". Thus beginning with the collapse of the division of time, in the first section of "Burnt Norton", Eliot uses the image of the rose garden in order to explain the relation between "time" and "experience". This technical method, using an image such as the rose garden, in Eliot's poetry can be said to form a point of intersection, in which different planes of meaning cross each other.

If everything changes and moves and conflicts only in the dimension of time, such a world as the rose garden which transcends the dimension of time may be the world of stillness and harmony. In the second section of "Burnt Norton", the poet begins with the conflict in opposites, and resolves themselves into a common pattern. "Garlic and sapphires"¹² or "the boarhound and the boar"—examples of opposites—can resolve themselves into beautiful harmony and reconcile in constellation by the eternal pattern—the centre of the wheel. The poet tries to think of how we can apprehend the pattern.

At the still point of the turning world.
 Neither flesh nor fleshless;
 Neither from nor towards; at the still point,
 there the dance is,
 But neither arrest nor movement.
 And do not call it fixity,
 Where past and future are gathered.
 Neither movement from nor towards,
 Neither ascent nor decline. Except for
 the point, the still point,
 There would be no dance, and there is only
 the dance.

Here the poet approaches the still point through paradox and negation. He seems to hint at the idea of "Eternal Now".¹³ Movement reaches the stillness of the still point by the form or pattern of the dance. Though it is the point where there is no movement, it controls all the movement. Thus time and eternity may be said to be reconciled in the dance.

I can only say, there we have been: but I cannot say where.
 And I cannot say, how long, for that is to place it in time.

The idea of the still point thus involves timelessness, and this part of "Burnt Norton" II is a development of the theme of eternity as introduced in the rose garden episode. The stillness is that of the rose garden. In this garden these opposites can transcend the dimension of time. But it is difficult for "human kind" to be inhabitants in this world "for the weakness of the changing body".

Yet the enchainment of past and future
 Woven in the weakness of the changing body,
 Protects mankind from heaven and damnation
 Which flesh cannot endure.

"Human kind" strives to escape from the place where "flesh cannot endure". It is also difficult to be released from the chain of time. "To be conscious is not to be in time", but to transcend the dimension of time. "Consciousness" is no doubt the equivalent of direct apprehension of reality, as Staffan Bergsten says in his *Time and Eternity*. Therefore it is possible to transcend "time past" and "time future" by "consciousness".¹⁴

Though "consciousness" does not belong to time, it is only in time that

the moment in the rose-garden,
The moment in the harbour where the rain beat,
The moment in the draughty church at smokefall
Be remembered; involved with past and future.

Hence the moment in the rose garden, the timeless moment, comes to be involved in time. It is only within the dimension of time that the timeless moment can be approached.

Only through time time is conquered.

In the opening lines of "Burnt Norton" III, we can notice that there is a reminiscence of *The Waste Land* and *The Rock*.¹⁵ London of "Burnt Norton" III is but another "Waste Land", as George Williamson observes as follows;

It is "a place of disaffection" because it belongs to the time before and after such moments. It is "in a dim light" because it has neither the daylight of plenitude nor the darkness of vacancy, the two ways of escaping the limitation of the temporal. There is "only a flicker" of light over "strained time-ridden faces" in this subway world, with its blenching "on unhealthy souls/Into the faded air". Though dim, "this twittering world" lacks the cleansing darkness.¹⁶

The inhabitants of this world are empty and bare of soul and feeling. And "the torpid" are driven by the cold wind "in a dim light". It is the world of "the hollow men". They are given only two ways to salvation. One is to "descend lower, descend only/Into the world of perpetual solitude" and to the world of "internal darkness" that precedes the reception of God's grace. The other is the same, "not in movement,/But abstention from movement." Because, as the poet has said in an epigraph to "Burnt Norton", "The way up and down is the one and the same". A descent into utter darkness is also an ascent of the mount of purgation. The poet takes the negative way (the *via negativa*) in order to be led to union with God, the Eternal.¹⁷ Therefore the only thing for us to do is to move on the "metalled ways/Of time past and time future" in our appetency. Thus in this section the poet develops the theme of time in a gloomy way.

The fourth section of "Burnt Norton" reminds us of the vision of the rose garden in the first section of the poem, though it seems a little different. Here the day and all that daylight brought, "investing form with lucid stillness" and the sense of permanent moving pattern have been buried.

Time and the bell have buried the day
The black cloud carried the sun away.

"The black cloud" that carries the sun away corresponds to the cloud which interrupted the vision of "water out of sunlight" in the beginning of the poem. All are in

the darkness. It may be “the darkness of night”.¹⁸ But it is appropriate to interpret this darkness as “the darkness of God”.¹⁹ In this darkness the poem weighs the hope of life against the terror of death. It asks whether the “sunflower” (a symbol of grace) and the “clematis” (an image of the divine light) will “be curled/Down on us”. It is answered by the vibrating wing of the kingfisher “which has answered light to light”.

After the kingfisher's wing
Has answered light to light, and is silent,
the light is still
At the still point of the turning world.

As in the first section of this poem, a bird, this time the kingfisher, appears. In this section it has the communication with the centre, the vanished sun, which is “the still point” around which the earth turns. After the vibrating wing of the kingfisher “has answered light to light, and is silent”, the light remains “at the still point”, though nothing reflects it. Thus the paradox of the unmoving (the sun) and the moving (the kingfisher's wing) still governs “the turning world”. It is “at the still point of the turning world” that all are redeemed.

Eliot, as a poet, considers the importance and use of words and music in the next section. The consideration on words has been made in the following Quartets except in “The Dry Salvages”.²⁰

Words move, music moves
Only in time; But that which is only living
Can only die. Words, after speech, reach
Into the silence. Only by the form, the pattern,
Can words or music reach
The stillness, as a Chinese jar still
Moves perpetually in its stillness.

Words do not stay in one place. They are perpetually moving. It is only in time that every word can die by use of them. Words which ought to be precise in their use decay with imprecision. They will not stay in place and cannot stay still. Words which live in time die in time like the flower and the kingfisher. They “reach into the silence”. Thus words which move only in time achieve the stillness only by the form and the pattern—the structure of a work of art where “every part is involved with every other part to form an invisible whole.” But the end of every word precedes the beginning of them in this form and pattern. This is the reason why he says as follows;

And the end and the beginning were always there
Before the beginning and after the end.
And all is always now.

The poet thinks the words still move perpetually in their stillness, as the detail of a “Chinese jar” moves perpetually in its unchanging pattern.

The detail of the pattern is movement,
As in the figure of the ten stairs.

"The detail of the pattern is movement". This is explained above by a metaphor of the "Chinese jar". Now it is given another relationship, "As in the figure of the ten stairs". The metaphor of the stairs implies the soul's aspiration towards God. Critics have pointed out that this is a direct allusion to St. John of the Cross.²¹ At the end of *Dark Night of the Soul*, he introduces a new metaphor. The very last part of the road to blessedness is likened to a stair of ten steps. The steps symbolize the mounting degrees of the soul's reception of divine love, and the last step on this stair of love leads to complete union with God.²² The metaphor of the stairs also expresses a kind of synthesis of stillness and movement. The movement implied in the climbing the stair is but a detail in the whole pattern of spiritual purification. And the idea of pattern implies stillness. The antithesis of movement and stillness is further developed in the following lines.

Desire itself is movement
Not in itself desirable;
Love is itself unmoving,
Only the cause and end of movement,
Timeless, and undesiring
Except in the aspect of time

Desire is movement, not an end in itself. Love is not movement, but "the cause and end of movement". Love is timeless and only appears as desire when it is caught in the aspect of time, the realm of becoming, not of being. That is to say, in the aspect of time, love which "is itself unmoving" and leads to stillness is suspended between "unbeing and being". It represents a state intermediary between potentiality and reality, between "unbeing and being". It has been remaining a state of becoming but not a state of being. So to say, it stops in the middle of "ten stairs". Thus the poet tries to explain the antithesis of time and eternity in that of movement and stillness and of desire and love. Yet time is the moving image of eternity. And in the same way desire is the image of love and is love "in the aspect of time".

At the end of the poem the poet reverts to its beginning, the scene of the rose garden. The "sudden moment of illumination" is to be realized at any moment of time. "Here, now, always." It is "not known, because not looked for/But heard, half heard in the stillness/Between two waves of the sea". The bird in the rose garden always exhorts.

Quick now, here, now, always—

If one can live in such a moment of illumination, one will realize how

Ridiculous the waste sad time
Stretching before and after.

The object of the poet in "Burnt Norton" is to transcend or conquer the dimension of time. He tries to look for the timeless moment, which may precede the eternity, "at the

still point of the turning world". The final object may be the union with God, the Eternal, in order to redeem "time past". "time present" and "time future".

"East Coker"

In the first section of "East Coker" the poet takes a familiar place, while in "Burnt Norton" he takes an unfamiliar place, in order to inquire into the theme of time with particular reference to personal history.²³ And in "East Coker" the cyclic aspect of time is emphasized.

In my beginning is my end.²⁴ In succession
Houses rise and fall, crumble, are extended,
Are removed, destroyed, restored, or in their place
Is an open field, or a factory, or a by-pass.
Old stone to new building, old timber to new fires,
Old fires to ashes, and ashes to the earth
Which is already flesh, fur and faeces,
Bone of man and beast, cornstalk and leaf.
Houses live and die:

It is a universal fact that we take houses as an image of "rise and fall". And the bodies of men and beasts as well as houses all turn into ashes and the earth. The earth is already the soil of plants that will nourish future generations.

there is a time for building

And a time for living and for generation
And a time for the wind to break the loosened pane
And to shake the wainscot where the field-mouse trots
And to shake the tattered arras woven with a silent motto.

Corresponding passages are found in *Ecclesiastes*:

To every thing there is a season and a time
to every purpose under the heaven.
A time to be born a time to die; a time to
plant and a time to pluck up that
which is planted.²⁵

In his earlier poem Eliot has made a similar allusion to the theme of time.²⁶ By these references to time he seems to say that there is no end and beginning in the dimension of time. This is ascertained by the following passage in "Burnt Norton".

And the end and the beginning were always there
Before the beginning and after the end.
And all is always now.

This collapse of the relation of time, "In my beginning is my end", makes possible an-

other conclusion that "In my end is my beginning"—the concluding words of "East Coker". In order to clarify these lines the poet uses an implication of his return to the village of his ancestors, as Harry's return to Wishwood in *The Family Reunion*;

Now the light falls
Across the open field, leaving the deep lane
Shuttered with branches, dark in the afternoon,
Where you lean against a bank while a van passes,
And deep lane insists on the direction
Into the village, in the electric heat
Hypnotised.

In what is now an open field, if set in proper perspective, "you" can perceive its buried life. And what "you" will see is the dance of life.

In that open field
If you do not come too close, if you do not
 come too close,
On a summer midnight you can hear the music
Of the weak pipe and the little drum
And see them dancing around the bonfire
The association of man and woman
In daunsinge, signifying matrimonie——
A dignified and commodious sacrament.
Two and two, necessarye coniunction,
Holding eche other by the hand or the arm
Whiche betokeneth concorde.

Here the poet recalls Sir Thomas Eliot's, one of his ancestors', way of talking in such archaic spelling as "daunsinge", "matrimonie", "necessarye", "coniunction", "eche", "whiche", "betokeneth" and "concorde".

Rustically solemn or in rustic laughter
Lifting heavy feet in clumsy shoes,
Earth feet, loam feet, lifted in country mirth
Mirth of those long since under earth
Nourishing the corn.

This implies Eliot's ancestor's springing from and returning to the same soil, "Keeping time and the rhythm in thier dancing/As in their living seasons". The "time" is "that of seasons and the constellations", "of milking and harvest", "of the coupling of man and woman and that of beasts". Thus in a visit to East Coker, Eliot seems to have felt that he had come full circle. Completing a cyclic movement, he suggests the idea of the cyclic movement in history.

At the beginning of the second section of "East Coker" the division of the seasons

collapses, as the division of time collapses at the beginning of "Burnt Norton". In the second section of "Burnt Norton" all the patterns of the universe were "reconciled among the stars". But here is no reconciliation but only conflict and intricate confusion: perpetual strife which produces no harmony.²⁷

Thunder rolled by the rolling stars
 Simulates triumphal cars
 Deployed in constellated wars
 Scorpion fights against the Sun
 Until the Sun and Moon go down
 Comets weep and Leonids fly
 Hunt the heavens and the plains

The poet suggests a violent disturbance of the whole cosmic world. Instead of being part of a "slow rotation suggesting permanence", everything is "Whirled in a vortex that shall bring/The world to that destructive fire/Which burns before the ice-cap reigns". All that are in chaos of conflict, disturbance and confusion in the universe look forward to peace and serenity. And the poet's inquiry develops as follows:

What was to be the value of the long looked forward to,
 Long hoped for calm, the autumnal serenity
 And the wisdom of age?

He says that the wisdom of age, the knowledge derived from experience, does not bear the slightest resemblance to such a serenity and peace as to be looked forward to. We cannot bear such a false serenity of "the quiet-voiced elders". Because such a serenity leads us to a "fixity" in a falsified pattern of knowledge. Why do we call the wisdom of age a falsified pattern of knowledge?

For the pattern is new in every moment
 And every moment is a new shocking
 Valuation of all we have been.

Therefore he says as follows:

The only wisdom we can hope to acquire
 Is the wisdom of humility: humility is endless.

I think that this is the same humility that Lord Claverton begins to acquire in *The Elder Statesman*.²⁸ And there comes the concluding lines;

The houses are all gone under the sea.
 The dancers are all gone under the hill.

At the beginning of "East Coker" the houses and the dancers were the patterns of perpetual recurrence. But here both of them disappear, because that pattern appears to be false. Instead of the beginning of a new cycle in time, the poet is faced with emptiness,

destruction and darkness. It is a general conception that the "autumn" of human life is a period of peace and serenity. The poet denies it together with the "wisdom of age". In such a denial he tries to break down and disprove the cyclic theory of life and history. Thus his return to the point of departure is no real home-coming, no conclusion, no goal. Like Dante at the beginning of the *Inferno* he finds himself "in a dark wood", and the way out of darkness is not through another cycle in time, but through descent into still greater depth of darkness.

In the next section of "East Coker" the poet's attention is directed towards the future, while he considers "time past" in the first section. He finds no hope for the future.

O dake dark dark. They all go into the dark.
 The vacant interstellar spaces, the vacant into the
 vacant,
 The captaions, merchant bankers, eminent men of letters,
 The generous patrons of art, the statesmen and the rulers.
 . . .
 all go into the dark,
 . . .
 And we all go with them, into the silent funeral,
 Nobody's funeral, for no one to bury.²⁹

But this darkness will be the darkness which precedes the reception of God's grace or "the darkness of God". Bearing this in mind, the poet "said to his soul" as follows;

I said to my soul, be still, and let the dark come upon you
 Which shall be the darkness of God.

I said to my soul, be still, and wait without hope
 For hope would be hope for the wrong thing; wait without love
 For love would be love of the wrong thing; there is yet faith
 But the faith and the love and the hope are all in waiting.
 Wait without thought, for you are not ready for thought:
 So the darkness shall be the light, and the stillness the dancing.

Here the poet gives us a little hope for the future in waiting still, for "the laughter in the garden" and the "echoed ecstasy" which were connected with the mystic vision in the rose garden have not been lost, "but requiring". They are also waiting to be remembered at the moment of agony. The idea of waiting in the stillness is what critics call "the negative way".³⁰ This section is concluded with a suggestion of "the negative way" which is found in the actual words of St. John of the Cross.³¹ This "negative way" naturally resulted from "waiting in the stillness".

In order to arrive at what you do not know
 You must go by a way which is the way of ignorance.

In order to possess what you do not possess
 You must go by the way of dispossession.
 In order to arrive at what you are not
 You must go through the way in which you are not.

"The negative way" which appears in the third section is used in discussing sin and redemption in the following section. The supreme archetype of "the negative way" is the Passion of Christ. As man's knowledge of sin increases, he approaches salvation. The poet says as follows;

. . . , to be restored, our sickness must grow worse.

As Redemption was achieved through the Passion of Christ, so at the end of the dark-night, man may hope for grace and illumination. In the fourth section of "East Coker" the poet connects the idea of human suffering with the Passion of Christ. The wounded surgeon (Christ) plies the steel, probing into the distempered soul. But "the compassion of the healer's (Christ's) art" implies that He is suffering along with us for the sin of Adam. The "dying nurse" (the Church) reminds us of our and Adam's curse and what we are. If we do well "in the whole earth" which is our "hospital" endowed by the "ruined millionaire" (Adam), we shall die of the absolute "paternal care" that will not leave us but prevents us everywhere. Grover Smith says in his *T. S. Eliot's Poetry and Plays* as follows:

In this hospital of charity we have two choices. The first is to "do well" by prospering in the worldly sense, so that we shall die in consequence of our father Adam's tyrannous bequest of sin, which will not loose but everywhere hinders and antedates us.

. . . The second choice is just the opposite: to "do well" by heeding Christ, so that we shall be reborn into freedom from insolvent Adam's taint and into the co-inheritance of grace.³²

It seems that the poet urges us to take the latter in order to be redeemed. In the first half of the fifth section, Eliot, as a poet, considers again the use of words, beginning with his comment on the poetic toil in the use of words.

So I am here, in the middle way, having had twenty years—
 Twenty years largely wasted, the years of *l'entre deux guerres*
 Trying to learn to use words, and every attempt
 Is a wholly new start, and a different kind of failure.

The poet spent twenty years in "trying to use words" only to realize that "every attempt is a wholly new start, and a different kind of failure". Because "one has only learnt to get the better words / For the thing one no longer has to say, or the way in which / One is no longer disposed to say it". Therefore "each venture is a new beginning". Viewed as subject to the law of time, words "slip, slide, perish" without "reaching into the stillness". Each attempt is "a raid on the inarticulate / With shabby equipment always deteriorating". What there is to be discovered and expressed in poetry "has already been dis-

covered and expressed/Once or twice, or several times, by men who one cannot hope/To emulate".³³ Under unfavourable conditions, "there is only the fight to recover what has been lost / And found and lost again and again". As the poet says in his essay on F. H. Bradley, "We fight to keep something alive rather than in expectation that anything will triumph". In this fight, perhaps, "there is neither gain or loss." The poet thinks that "For us, there is only the trying. The rest is not our business". For, as he says in the second section of this poem "the pattern is new in every moment/And every moment is a new shocking / Valuation of all we have been". As we grow older, the world becomes stranger, and the pattern becomes more complicated of dead and living. But the moment of illumination is not "intense moment which is set apart from past and future", but a lifetime burning in every moment, not of one man, but of "old stones that cannot be deciphered"—not of one life only, but of many generations. Such a timeless moment as the moment of illumination has to be seen in the view of time and history, of lifetime of a poet and of the history of his family and country. Because "there is a time for the evening under star light,/ A time for the evening under lamplight/ (The evening with the photograph album)". And life must advance incessantly into the future, in a movement that approaches the stillness. The poet urges "old men" to explore into "another intensity for further union and deeper communion" across the eternally fluctuating seas of time. For there is no end in life, and "each venture" is a "new beginning" and a "different kind of failure". Opening with "In my beginning is my end", he concludes this poem as follows;

In my end is my bdginning.

The beginning and end of the cycle is "dung and death". But to Eliot death is not the ultimate answer and solution to the problem of life. For death is only the first step towards the solution. No end within time means a goal or a purpose. The meaning of time lies beyond the temporal dimension. Therefore each end in time means either death or a new beginning. In the end the poet attempts to break through the dimension of time and cyclic recurrence. He tries to transcend the historical and temporal dimension in order to escape from the temporal existence to complete union with timeless deity-God. That is why he instructs us that "For us, there is only the trying, the rest is not our business" and "Old men ought to be explorers".

(To be continued.)

Notes

1. Thomas, confronted by death, says as follows:
 It is not in time that my death shall be known;
 It is out of time that my decision is taken
 If you call that decision
 To which my whole being gives entire consent.
 I give my life
 To the Law of God above the Law of Man.
 (*Murder in the Cathedral*, p.59)
2. Leonard Unger, *T, S, Eliot Moments and Patterns*, p.26.
3. *Ibid.*, pp. 26—7.
4. Burnt Norton is the name of manor house in Gloucestershire, which Eliot visited some time during the summer of 1934. It may be the scene of a memory, or a place where the vision of a “what might have been” formed itself in his consciousness.
5. These lines seem to allude the following lines in *Ecclesiastes*:
 The thing that hath been, it is that which shall be; and that which is done is that which shall be done: and there is no new thing under the sun. Is there anything whereof it may be said, See this is new? It has been already of old time, which was before us.
 There is no remembrance of things that are to come with those that shall come after.
 (*Ecclesiastes*, I, 9—11.)
6. *The Rock*, pp.15f.
7. *The Family Reunion*, p. 79, l, 12,
8. *Collected Poems 1909—1935*, p. 148. The first poem in *Landscapes* is called “New Hampshire”.
 Children’s voices in the orchard
 Between the blossom and the fruit-time:
 Golden head, crimson head,
 Between the green tip and the root.
 Black wing, brown wing, hover over;
 Twenty years and the spring is over;
 To-day grieves, to-morrow grieves,
 Cover me over, light-in-leaves;
 Golden head, black wing,
 Cling swing,
 Spring, sing,
 Swing up into the apple-tree.
9. *Collected Poems 1909—1935*, p. 62. *The Waste Land*, ll. 35—41.
 “You gave me hyacinths first a year ago;
 “They called me the hyacinth girl.”
 — Yet when we came back, late, from the Hyacinth garden,
 Your arms full, and your hair wet, I could not

Speak, and my eyes failed, I was neither
 Living nor dead, and I knew nothing,
 Looking into the heart of light, the silence.

10. The phrase of "in a shaft of sunlight" can be found in his other works. Cf., "Burnt Norton" V, "The Dry Salvages" V, *Murder in the Cathedral*, p. 4.

11. In *Murder in the Cathedral* Thomas says to the women of Canterbury who are in dread of his death as follows:

Peace and be at peace with your thoughts and visions.
 These things had to come to you and you accept them,
 This is your share of the eternal burden,
 The perpetual glory. This is one moment,
 But know that another
 Shall pierce you with a sudden painful joy.
 When the figure God's purpose is made complete.
 You shall forget these things, toiling in the household,
 You shall remember them, droning by the fire,
 When age and forgetfulness sweeten memory
 Only like a dream that has often been told
 And often been changed in the telling. They will seem unreal
 Human kind cannot bear very much reality. (p. 55.)

12. According to Helen Gardner, this "is an image of variety contained in a single sense impression: the soft and the hard, vegetable and mineral, the living and growing and the petrified and glittering, the common and the precious, the scented and the scentless. (*The Art of T. S. Eliot*, pp. 160—1.)

13. Vide supra, p. 2.

14. Steffan Bergsten, *Time and Eternity*, p. 180.

15. *Collected Poems 1909—1935*, p. 63., p. 166.

16. George Williamson, *A Reader's Guide to T. S. Eliot*, p. 214.

17. Critics have pointed out that this idea has come from the teaching of St. John of the Cross, who was a Spanish mystic and poet in the latter half of the 16th century. "... upon this road to go down is to go up, and to go up, to go down..." (*The Complete Works of St. John of the Cross*, transl. by Allison Peers, London, 1935, p. 433. *The Dark Night of the Soul*, II, xiii, 2.) Cf., Grover Smith, *T. S. Eliot's Poetry and Plays*, p. 264. Helen Gardner, *The Art of T. S. Eliot*, pp. 167f. Leonard Unger, *T. S. Eliot*, p. 38. Staffan Bergsten, *Time and Eternity*, pp. 113f.

18. Steffan Bergsten, *Time and Eternity*, p. 185.

19. Grover Smith, *T. S. Eliot's Poetry and Plays*, p. 265.

20. Cf., "East Coker" II, ll. 69—73. "East Coker" V, ll. 176—91. "Little Gidding" II, ll. 120—1. "Little Gidding" V, ll. 218—27. Eliot says that "words are perhaps the hardest of all material of art: for they must be used to express both vital beauty and beauty of sound, as well as communicating a grammatical statement". (from his early essay on "*Ezra Pound, His Metric and Poetry*", 1917.)

21. Vide supra p. 4 His writings include a number of doctrinal works and very limited

number of poems, of which three, *La Flama de Amor Viva* (*Flame of Devine Love*), *Noche Oscura del Alma* (*Dark Night of the Soul*), and *Cantio Espiritual* (*Spiritual Cantic*) constitute some of the most beautiful mystic poetry ever written. (from Collir's Encyclopedia)

22. *The Complete Works of St. John of the Cross*, p.435f. E. Drew, *T. S. Eliot: The Design of His Poetry*, p.161. George Williamson, *A Reader's Guide to T. S. Eliot*, p.261. Steffan Bergsten, *Time and Eternity*, p.190.

23. The title is taken from a small village in Somersetshire where his family lived until its emigration in the mid-seventeenth century to New England Coast.

24. Similiar references can be found in his other works.

"I have been wondering frequently of late
(But our beginnings never know our end!)
Why we have not developed into friends"
(*Portrait of a Lady*, III.)

I believe the moment of birth
Is when we have knowledge of death.
(*The Family Reunion*, p.41.)

I think, that every moment is a fresh beginning;
(*The Cocktail Party*, p.184.)

And this opening line derives from Mary Sturt's motto "En ma fin est mon commencement"—"In my end is my beginning". (Cf., E.Drew, *T. S. Eliot: The Design of His Poetry*, p.165.)

25. *Ecclesiastes*, III, 1 & 2.

26. And indeed there will be time
For the yellow smoke that slides along the street
Rubbing its back upon the window-panes;
There will be time, there will be time
To prepare a face meet the faces that you meet;
There will be time to murder and create,
And time for all the works and days of hands.
That lift and drop a question on your plate;
Time for you and time for me,
And time yet for a hundred indecisions,
And for a hundred visions and revisions,
Before the taking of a toast and tea.
(*The Love Song of J. Alfred Prufrock*, ll. 23—34.)

27. Elizabeth Drew, *T.S. Eliot: The Design of His Poetry*, p.167.

28. This is found in the following lines of *The Elder Statesman*;

Do I understand the meaning
Of the lesson I would teach? Come, I'll start to learn again
Michael and I shall go to school together.
We'll sit side by side at little desks
And suffer the same humiliations

At the hands of the same master. (p.79)

29. Critics have pointed out that this is an allusion to Milton's *Samson Agonistes*.

O dark dark dark, amid the blaze of noon,
 Irrecoverably dark, total Eclipse
 Without all hope of day!
 O first created Beam, and thou great Word,
 Let there be light, and light is over all;
 Why am I thus bereav'd thy prime decree?
 The sun to me is dark
 And silent as the Moon
 When she deserts the night,
 Hid in her vacant interlunar cave.

(ll. 80—89)

Cf., Grover Smith, *T. S. Eliot's Poetry and Plays*, p. 272. Steffan Bergsten, *Time and Eternity*, p. 214.

30. Cf., E. Drew, *T. S. Eliot: The Design of His Poetry*, p. 171., Grover Smith, *T. S. Eliot's Poetry and Plays*, p. 273.

31. As Helen Gardner has pointed out, we can find out similiar lines.

In order to arrive at that wherein thou hast no pleasure
 Thou must go by a way wherein thou hast no pleasure
 In order to arrive that which thou knowest not
 Thou must go by a way that thou knowest not
 In order to arrive that which thou possessest not,
 Thou must go by a way thou possessest not.
 In order to arrive at that which thou art not,
 Thou must go that which thou art not.

(*The Complete Works of St. John of the Cross*, p.59.)

32. Grover Smith, *T. S. Eliot's Poetry and Plays*, p. 275.

33. Eliot surely regards Dante as one of the greatest masters, as one of the "men who one cannot hope / To emulate".

フォークナーにおける南部貴族の解体

——その『響きと怒り』の場合——

西 誠 也

<昭和43年10月15日受理>

A Pattern of the Disintegration of the Southern Gentry

— in the Case of Faulkner's *The Sound and the Fury* —

The Compsons in the Yoknapatawpha saga continue to decline under the pressure of the capitalism and the newly-risen class which appeared in the South after the Civil War, being unable to cope with the change of the situation both morally and economically. At last the Compsons in *The Sound and the Fury* are divided into two groups having antagonism with each other, which is one of the signs of the downfall and makes the fall more tragic. In this essay I want to see the formation of attraction or repulsion among the members, and follow the course of the disintegration of the Compson family, and try to guess Faulkner's decision on the Bascombs' victory.

I

「小説とは幾分社会学的なものでなければならない。形式はどちらかという単純で、筋なども年代記風に順序立って組立てられているべきである。そして書物は、その時代時代の社会機構のなんらかの改良に対する欲求を読者の中にかき立てる必要がある」というそれまでのアメリカ小説の概念を打破して、33才の白痴の独白を含む意識の流れの手法を用い、南部貴族崩壊の挽歌を奏でる『響きと怒り』(*The Sound and the Fury*, 1928) がマルカム・カウリー (Malcolm Cowley) の啓蒙的『ポータブル・フォークナー』(*The Portable Faulkner*) によって読者、批評家の関心を喚起するようになったのは第二次世界大戦後の1946年であった。それはフォークナー (William Faulkner) にとって「最も華麗な、もっとも素晴らしい失敗作⁽¹⁾」であるとともに、南部に対するのと同様「不幸な子供に対する親」の如き愛情と慙愧の念をほしいままにする最愛の書であったのである。南北戦争後の南部が奴隷制解放と資本主義の勃興に伴う北部人の進出によって、音を立てて変化してゆくなかで、かつての奴隷所有の大地主、農園主に代表される貴族階級は、多くは急速に変動する世界に対処し切れず無気力に日を送るか、或は酒色に耽溺しながらその破滅の日を待ったのであった。

「南北戦争の後、旧来の計画に従って、旧来の価値を求めて社会を再建しようとした試みは、北部からの渡り者や、土地を持たない白人の子孫である南部自体の

新しい略奪階級であるスノープス族といったいくつかの力の結合によって、挫かれたのであった。その一方、古い社会秩序の後裔たちのほとんどは、さまざまな点で無力になっている。一つには彼等が古い世界によって定められた行動の規範を、名誉と誠実に関する一つの考えを新しい世界に持込む限り、彼等は規範を持たない、まったくの実用主義者であるスノープス族に太刀打ち出来ないからである。古い社会秩序の後裔たちはしばしば伝統という文字にこだわるだけで、その精神を忘れて⁽²⁾いる」というロバート・ペン・ウォレン (Robert Penn Warren) の批判は、フォークナーがコンプソン家の没落の原因として「彼等は⁽³⁾まだ1859年か60年代の気持で生きている⁽⁴⁾」と答えるのとはほぼ軌を一にしているといえよう。ここに物語られるコンプソンの先祖達は、かつてカロウドン、カロライナ、ケンタッキーからこのジェファースンへ移り住んで来たのであるが、ジェイスン・リカーガス・コンプソンの時代に確立したコンプソン領 (Compson Domain) はいつしかジェファースンの中心部となり、そこに建てられた邸宅は知事の館 (Governor's house) と呼ばれるようになった。しかし、ジェイスン・リカーガス・コンプソン二世が敗戦將軍となる運命を担って戦った南北戦争終結後の1866年には、コンプソン領もようやく抵当に入れられる破目となった。そしてその後、コンプソン將軍がタラハチ河の低地帯の狩猟先で死亡する1900年までの40年間、その抵当を維持するために、土地は小きざみに切り売りされていったのである。

『響きと怒り』の独白者達の父親ジェイソン・コンプソン三世は教育を受けて弁護士となり、屋敷の二階に事務所を置いていたが、コンプソン領は既にコンプソン牧場 (Compson place) と呼ばれるようになり雑草に侵入されてしまった芝生や、プロムナード、ペンキの色褪せた主屋、剥げかかっている玄関の円柱等は衰退の一路を辿るコンプソン家の凋落を象徴していた。ジェイソン・コンプソン三世 (以後単にコンプソンと呼ぶ) はバスコム家の出であるカロラインとの間に三男一女を設け、物語のはじまる1898年、彼等の祖母の亡くなる時点ではクエンティン8才、キャディー6才、ジェイソン四世 (以後単にジェイソンと呼ぶ) 4才、ベンジー3才であった。その他の同居人としてカロラインの唯一人の弟モーリーが居候をしており、またロスカス・ギブソン、ディルシーの黒人夫婦とその子供ヴァーシュ、フローニイ、T. P. がまだ屋内奴隷さながらの忠節を尽していた。

全4章から成るこの作品は、それぞれの章に日付がつけられ、最初の3章はそれぞれ3人の兄弟の独白形式をとる。すなわち第一章は1928年4月7日のベンジーの独白、第二章は1910年6月2日のクエンティンの独白、第三章は1928年4月6日のジェイスンの独白、そして第四章は1928年4月8日の日付となっており作者の視点から客観的に物語られている。そしてコンプソン家の子供達のうち、娘のキャディーだけが独白の章を持たない。しかし、それにも拘らず、物語の進行は常にこのキャディーが中心となっているように思われる。そしてこのキャディーの成長を迎えるとき、この小説ははじめてクロノロジカルな一貫性を持ち、4つの章の配列の根拠ともなっている。

ところで、フォークナーもキャディーについて “To me she was the beautiful one, she was my heart’s darling. That’s what I wrote the book about and I used the tools which seemed to me the proper tools to try to tell, try to draw the picture of Caddy.” と述べ、また “It’s a tragedy of two lost women; Caddy and her daughter.” とこの小説の中心的人物がキャディーにはかならないことを明言しているのであるが、このキャディーとコンプソン家の他の面々との関係をソシオメトリー (Sociometry) 的視点に立って考察することは『響きと怒り』の理解にさきか役立つのではないかと考える。すなわち、キャディーと他の登場人物との関係を相互的牽引、反撥の関係によって図表化するとき、そこに明確な2集団が形成されるのを見ることが出来る。一つはコンプソン、クエンティン、キャディー、ベンジー、Miss クエンティン、ディルシーの集団であり、今一つはカロラ

イン、ジェイソン、モーリーの集団である。前者はコンプソン系、後者はカロラインの出身門閥に因んでバスコム系と名付けられよう。ここには夫婦の間に対立が見られ、子供達の間にも分裂と反目が見られる。そしてこの2集団の代表をなす人物がコンプソン系のキャディーであり、バスコム系のジェイソンであろう。

キャディーの弟ジェイソンは幼年時代既にコンプソン家の子供達のなかで孤立した存在であり、特に人気型のキャディーにとって唯一人の相互反撥の関係にある。祖母の通夜の晩に見られるキャディーとジェイスンの一見無邪気な口論はその後の人生における二人の疎外された関係、さらにキャディー——コンプソン、ジェイソン——コンプソンの関係を暗示するものではなかろうか。子供達を静かにしておくようにとディルシーに命じて立ち去ろうとするコンプソンに対して、キャディーは子供の世界における指導権を彼女に与えてくれるように要請する。

‘Let them mind me tonight, Father.’ Caddy said.
‘I won’t.’ Jason said. ‘I’m going to mind Dilsey.’
‘You’ll have to, if Father says so.’ Caddy said.
‘Let them mind me, Father.’
‘I won’t.’ Jason said, ‘I won’t mind you.’
‘Hush.’ Father said. ‘You all mind Caddy, then. When they are done, bring them up the back stairs, Dilsey.’ (P. 22)

ここに見られる反撥関係の萌芽はその後、相互の家系意識と結合して永久に解消されない対立となってゆく。貴族階級コンプソン家の包含する外部的矛盾と内部的矛盾は相呼応してコンプソン家崩壊の速度を早めるのである。外部的矛盾を処理出来ないコンプソン家は内部的矛盾を強めて家庭内の分裂を深めてゆく。コンプソン系とバスコム系の確執はコンプソン家の末期的様相と言えよう。本稿ではキャディーの処女喪失、ジェイスンの呪咀と復讐に焦点を絞りながらコンプソン家解体の図式を模索して見たい。

II

キャザリン・B・バウム (Catherine B. Baum) は「美しき人」 (“The Beautiful One”) と題する論文において “The beauty of Caddy’s love becomes especially prominent when seen against the background of the other characters’ lack of concern for Benjy’s happiness.” とキャディーの無欲の愛を強調し、ベンジーに対する愛情を基準として他の人物との比較を試み、キャディーが『響きと怒り』の中心的人物であることを論証しようとしている。か

って祖母の亡くなった日、川遊びをして汚したズロースをはいたまま、物おじもしないで木に登り、大人達の世界に何が起ったのかを垣間見ようとしたキャディーはその後順調な成長を遂げ、病身の母親に代ってベンジーの優しい世話係となっていった。ベンジーが13才になるまで、毎晩彼を寝かしつけるのはキャディーの役目であつたし凍えた冷たいベンジーの手を暖めてやる心遣いのキャディーは、ベンジーのこまかい好みや好物までもよく吞み込んでいたのである。

一方ベンジーも、キャディーを「木のおい」として感覚的に嗅ぎ分け、キャディーとベンジーは強い牽引力によって結合していた。しかし、ベンジーが時間と無関係な朦朧たる白痴の世界に低迷している間に、キャディーは少女期から思春期へと近づき、やがて彼女の愛の対象がベンジーやその他のコンプソン家の人人以外にも現われて来るのであるが、この極く自然の事が自然に運ばなかったところにキャディーの悲劇は端を発しているとも言えるのである。キャディーの身に漂う性的雰囲気はベンジーは極めて敏感に強く反撥する。キャディーは14才になってはじめて香水を使うのだがその時ベンジーは泣いて側を離れなかった。ベンジーの反応に気付いたキャディーはその香水の罎をベンジーの手からディルシーへと贈るのである。またチャーリー少年との一件もその例外ではない。ベンジーは森の中のブランコにキャディーとチャーリーの姿を見つけて泣きわめく。キャディーは迷いながら、結局はチャーリーを捨ててベンジーのもとへ走って行くのであった。キャディーはベンジーとともに泣きながら自分の行為を悔めるのである。

Caddy and I ran. We ran up the kitchen steps, onto the porch, and Caddy knelt down in the dark and held me. I could hear her and feel her chest. 'I won't,' she said. 'I won't any more, ever. Benjy. Benjy.' Then she was crying, and I cried, and we held each other. (P.46)

こうして、次第に大人になってゆくキャディーは1909年の夏の事件を迎える。時に、クエンティン19才、キャディー17才、ベンジー14才である。それはダルトン・エイムズという西部から来た男によるキャディーの処女喪失であった。ベンジーの感覚は、キャディーが帰ってきて戸口に立った瞬間、異常な事態の発生を直感するのである。クエンティンはその時の模様を彼の独白のなかで次のように回想する。

...she was standing in the door the next minute

he was pulling at her dress and bellowing his voice hammered back and forth between the walls in waves and she shrinking against the wall getting smaller and smaller with her white face her eyes like thumbs dug into it.... (P.123)

さらに母親カロラインはキャディーが急いで二階へ上って行ったあと椅子によりかかり、樟脳を含んだハンカチを口にあてて気を鎮め、コンプソンはカロラインの手を取りながら身じろぎもしないで妻の側に坐っていた。

長男クエンティンとキャディーの二人が相互的牽引の関係にあったのは、キャディーの私生児にクエンティンと命名したことによっても推察されるように、クエンティンの居るところにいつもキャディーは存在し、キャディーのところにいつもクエンティンがいるといった仲の良い兄妹である。しかし、ここにもちょうどキャディーとベンジーとの間に見られたように、キャディーの男性関係に対してクエンティンは異常な反応を示している。次に引用するのも祖母の亡くなった日の小川における一光景であるがクエンティンとキャディーはキャディーの濡れた服をめぐって衝突する。

'I'll take it off,' she said. 'Then it'll dry.'

'I bet you won't,' Quentin said.

'I bet I will.' Caddy said.

Caddy came to Versh and me and turned her back. 'Unbutton it, Versh,' she said.

'Don't you do it, Versh,' Quentin said. 'Tain't none of my dress,' Versh said. 'You unbutton it, Versh,' Caddy said, 'Or I'll tell Dilsey what you did yesterday.' So Versh unbuttoned it. 'You first take your dress off,' Quentin said. Caddy took her dress off and threw it on the bank. Then she didn't have on anything but her bodice and drawers, and Quentin slapped her and she slipped and fell down in the water. (P.16)

ここに、子供ながらクエンティンのキャディーに対する強い純潔の要求があるのを見逃すことは出来ない。F.L.アレン (Frederick Lewis Allen) は『大いなる変化』(The Big Change, 1952) の中で1900年当時の婦人の服装について「どんな季節にも、婦人は幾重にも下着をかさねてぐるぐると身を包んでいた——シュミーズ、ズロース、コルセット、コルセットカバー、それに一、二枚のペチコートというように⁽⁹⁾」と書いている。従ってこの図は新しく脱皮しようとする女性

と、それを抑圧しようとする保守的男性の暗示的姿をあらわしていると言えるかも知れない。また、クエンティンはキャディーと或る少年との接吻を咎め、キャディーを殴打して次のように責めるのである。

It's not for kissing I slapped you ... It's for lettig it be some darn town squirt I slapped you.... (P.132)

ここに見られるクエンティンのキャディーに対する強い純潔の要求は、対象となる男性の選択についての注文という形をとっている。

一体、クエンティンのキャディーに対する愛情の実態は何であろうか。特に、クエンティンの独白の中心をなすキャディーの処女喪失について彼の反応を検討して見よう。

キャディーの処女喪失を知ったクエンティンは自分との近親相姦をキャディーに無理に認めさせようとする。クエンティンは観念的に、自らをダルトン・エイムズの身代りにしようとするのである。彼はこのことによってキャディーの純潔を取り戻そうと空しい戦いを挑む。彼の前にはもはや地獄の針や紅蓮の炎の恐怖も消滅している。

... I'll make you say we did I'm stronger than you I'll make you know we did you thought it was them but it was me listen I fooled you all the time it was me you thought I was in the house.... (P.147)

しかし、既に女性となったキャディーはクエンティンの近親相姦の作りごとを簡単に受け入れようとはしない。クエンティンはハニサクルの匂いの漂う暗がりの中で幼い日の思い出を語りかけながらキャディーの喉にナイフの切先を突きつけるのである。クエンティンのあまりの哀れさにキャディーは死も覚悟するのであるが、クエンティンには彼女を殺すことも叶わなかった。クエンティンはついに、キャディーに男の名前を告白させるが、彼女のダルトン・エイムズに対する愛情の存在を確かめてはさらに深い絶望の淵に陥らざるをえない。しかし彼はなおも近親相姦の幻想を捨てず、父コンプソンに対して虚偽の告白をし、キャディーを騒々しい世界から隔離しようとはかるのであるがその告白が偽りであることを見抜かれてしまう。クエンティンは最後の手段としてダルトン・エイムズを町から放逐する事を考える。結果的にはダルトンとキャディーの仲を割くことにはなったものの、キャディーとダルトンの別離は結局キャディーの転落の原因とも

なり、クエンティン自身、男同志の戦いに破れてさらにひどい屈辱を受け、ダルトン・エイムズの名はマサチューセッツ河に入水自殺する直前まで彼の脳裏を離れず、最後まで苦しみ続けるのである。キャディーはベンジーのためにチャーリー少年と別れたように、クエンティンのためにダルトン・エイムズを諦めたのであった。

フォークナーはこのクエンティンのキャディーに対する愛情について付録 (Appendix) の中で次のように説明している。

Quentin III. Who loved not his sister's body but some concept of Compson honor precariously and (he knew well) only temporarily supported by the minute fragile membrane of her maiden-head as a miniature replica of all the whole vast globy earth may be poised on the nose of a trained seal. Who loved not the idea of the incest which he would not commit, but some presbyterian concept of its eternal punishment:⁽¹⁰⁾

つまり、クエンティンの関心事はコンプソン家の名誉、極めて抽象的に観念化された純潔、そして近親相姦観念にまっわる自己苦悶なのであって、具体的な対象としてのキャディーの肉体ではないと念を押している。そしてジョージ・マリオン・オドネル (George Marion O'donnell) はこのクエンティンの思想と行動を次のように解釈するのである。

Quentin is attempting to transform Candace's yielding to the amorality of the Snopes world into a sin, within the Sartoris morality; but the means he employs are more nearly pseudo-traditional and romantic than traditional; and he fails.⁽¹¹⁾

かつて、安定した旧秩序の社会にあっては、彼等の子女の接する世界は同質的な社会であり、彼女達の対象となる男性種族もまた彼等の属する上流階級であった。貴族階級の没落と同時に古い道徳の規範が揺らぎはじめた時、婦人はあらためて新興階級の男性達の対象の中に含まれてくるのである。そして「理想の女性とは、絹やモスリンに包まれているばかりでなく、純潔でたしなみのある淑女でなければならなかった」という1900年当時とは異り、シャペロンの看視の目をはなれた若い女性にとっては、対象としての男性の階級性は二次的問題でしかなく、愛の力が素直に女性の心を奪っていった。「エミリーの薔薇」(The Rose of

Emily) のエミリーと北部の男ホーマー・パロンとの組合せに見られるように、野性的な粗野がむしろ無気力になった斜陽階級の男性よりも魅力的であることも想像にかたくない。カーキ色の服を着た西部の男、ダルトン・エイムズが、殴りかかってきた白面の青年クエンティンに見せた力強さと義侠的な挙動、そういったコンプソンの末裔達とは対照的な新鮮味がキャディーの心を捕えるのも無理からぬことであろう。

しかし、旧体制の道德規範に頼るコンプソン夫妻、ならびに若き男性達にとって、娘が、妹が、そして姉が、より下層な階級の男性とねんごろになることは到底堪えられない誇りの喪失となり、また恥辱として受け取られるのであった。ダルトン・エイムズを 'bad blood' と呼び、ジェイスンにキャディーを尾行させる母親カロラインは言わずもがな、自由主義的教育論を吐いて鷹場に構えていた家父長コンプソンでさえも、キャディーの処女喪失以来ますますひどくなってきた飲酒によって余命を縮めてゆくのである。キャディーの処女喪失はコンプソン家の銘々にそれぞれ大きな衝撃を与えたのであった。

ルイス・Y・ゴセット (Louise Y. Gossett) は『現代南部小説における暴力』(*Violence in Recent Southern Fiction, 1965*) においてアングロ・サクソン女性の純潔について次のように述べている。

The high position of the woman set apart to preserve the purity of the Anglo-Saxon became a symbol of the superiority of the white Southerner.⁽¹³⁾

コンプソン家に流れるアングロ・サクソンの純粋性を保持すること、そしてコンプソン家の人種的優越感のシンボルであるキャディーを押し寄せる外部の血に汚れた連中から守ることがコンプソン屋敷に住む人々の強い願望であった。そして、キャディーの兄であり次代のコンプソン家を背負って立つべき長男としてのクエンティンがダルトン・エイムズ、ハーバートに敵意を燃やし、失われたキャディーの純潔を近親相姦の幻想によって奪回しようとする空しい自己斗争は彼の極度に強い使命感と潔癖感のあらわれと見れないであろうか。

III

最初から不安定な要素を孕んでいたキャディーの結婚は結局、父親不明のクエンティンの誕生によってハーバートから離婚される運命にあった。コンプソンはキャディーとクエンティンを引き取ろうとカロライン

を説得するのであるが、カロラインの同意を得ることは出来なかった。コンプソンはキャディーとクエンティンを連れてジェファースンの駅へ帰って来るのであるが、彼女はクエンティンを父に預けて次の列車で去って行ったのである。この事件以来、コンプソンの心労とみに激しく、不眠の夜を重ねながら、それから2ヶ月後に他界してしまう。

ここで、コンプソン夫妻の関係を振り返って見ることにしたい。これまでに二人の間にはかなりの不信感が形成されている。カロラインは結婚当初から、知事や將軍を輩出したコンプソンの家系に対するバスコム家の劣等感に常にさいなまれている。彼女はコンプソンが抱いていると信ずる自分とモーリーへの侮蔑がそのまま子供達 (クエンティンとキャディー) の母親に対する不遜な態度に繋がっていると非難するのである。

How can I control any of them when you have always taught them to have no respect for me and my wishes I know you look down on my people but is that any reason for teaching my children my own children I suffered for to have no respect.... (P.94)

従って、子供達に対する教育についてもコンプソンとカロラインの意見の対立が見られる。コンプソンは紳士の教育を受け、所謂南部貴族のノブレス・オブリージ (Noblesse Oblige) を道德の規範としており、キャディーを尾行することについても、彼はカロラインに対し、“I will not have my daughter spied on by you or Quentin or anybody no matter what you think she has done” (P.94) と彼女の行動をいましめる。それに対してカロラインは “At least you agree there is reason for having her watched” (P.94) と答えるのであった。子供に対する愛情があれば、そんな事をするのは当然だと言うカロラインの教育観である。カロラインはクエンティン、キャディーの仲の良さを一種の警戒の目をもって眺め、彼等はあまりに自由を許されすぎておりまた一緒に居すぎはしないかと心配する。しかし、コンプソンは “... they didn't need controlling, that they already knew what cleanliness and honesty were, which was all that anyone could hope to be taught.” (P.261) と二人の清潔さと誠実さを信ずるのであった。コンプソンのクエンティン、キャディーに対する教育は、カロラインのジェイスンに対する教育が現実的で实际的であるのに対し古き良き時代そのままに余りにも鷹揚な

子供の教育を考えていた。彼には現実に対処して行こうとする意志は見られない。キャディーの子供クエンティンの養育費をハーバートにかけ合なかつたのかと言うカロラインに、コンプソンは “No she shall not touch his money not one cent of it.” (P.197) と怒って答える。キャディーの側に離婚の原因があったことを既に確認している段階で、なお二人の考えは大いに異っているのである。かくしてカロラインはコンプソンの血に対して抱いている劣等感をさらに自分の子供クエンティン、キャディーに対しても抱くようになる。カロラインはこの疑惑について次のようにジェイスンへ訴え、ジェイスンとの連帯を築こうとする。それはカロラインの心に潜む悪魔の囁きにも似ている。

They were always conspiring against me. Aaginst you, too, though you were too young to realize it. They always lookd on you and me as outsiders, like they did your Uncle Maury. (P.261)

カロラインの意識の中には、既にはっきりとコンプソン——クエンティン——キャディーという系統に対抗するカロライン——ジェイスン——モーリーの対立関係が確立しているのを見ることが出来る。カロラインにとって、彼女の唯一の支えとなり救いとなるのはジェイスンだけであり、彼こそバスコム家の血を引く者であると信じているのだが、それでもこのジェイスンにいつしかコンプソンの血が現れはしまいかと密かに恐れているのである。

...I look at him every day dreading to see this Compson blood beginning to show in him at last.... (P.102)

このようにコンプソン夫妻の間には、コンプソン対バスコムの対立感情がかなり強烈に存在しているのである。最後の土地を売ってクエンティンのハーバード行きとキャディーの結婚との資金調達をした際にも、カロラインはコンプソンに対してジェイスンの割前を残しておくようにと進言し、コンプソンはジェイスンの分を他の者と同様に分配しておかなければならなかつたのだが、その後の経済的逼迫によって、残りの土地もそしてさらに家財道具さえ売らなければならない状況に立ち至ったとき、カロラインはキャディーへ手紙を送りジェイスンへの償いをする義務のあることを忘れないようにと連絡をするのであった。カロラインのコンプソン系に対する反撥は、このようにジェイス

ンへの偏愛を助長し、そのジェイスンへの依存はジェイスンをしてますますキャディー、クエンティン、ベンジー、ディルシーその他コンプソン家になじむ一切の者に対し敵意を抱かしめるのである。彼は現在しかない商店の店員として働かなければならない自分の立場と、ハーバードへ行った兄、酒のために身を減ぼした父とを比較するのであった。

...I never had time to be. I never had time to go to Harvard like Quentin or drink myself into the ground like Father. I had to work. (P.180)

ここには、時代の潮流にもまれながら傾斜してゆくコンプソン家の中で、内部分列し、競合し、対抗してゆこうとする変質したバスコム系の出現を見ることが出来る。

彼にとっては、ジェファースンの由緒ある家柄も、否その家柄故に、母の存命中自分の思うように出来ない立場の制約を苛立たしくさえ思うのであった。コンプソン家の過去の栄光は現在の彼にとってもはや迷惑以外の何ものでもないのである。

I haven't got much pride, I can't afford it with a kitchenful of niggers to feed and robbing the state asylum of its star freshman. Blood, I says, governors and generals. It's a damn good thing we never had any kings and presidents ; we'd all be down there at Jackson chasing butterflies. (P.230)

ところで、父ジェイスン・コンプソン三世の死後に残されたコンプソン系の衰えな人々に対するジェイスンの処遇を眺めて見よう。2年間のうちに引き続いておこつたクエンティンと父の死は、コンプソン対バスコムの力関係を完全に変え、ジェイスンは残されたコンプソン系に対して、反感をますます露骨に表現するのであった。

父の死を新聞の記事で知って急ぎ帰郷したキャディーはそれでも人目をさけて埋葬の日直接墓地を訪ねるのであるが、そこでのジェイスンとの出会いで、彼女は娘クエンティンに一目会わせて呉れるようにと哀願する。ジェイスンは幼いクエンティンを馬車に乗せ馬を走らせながら路傍に待つキャディーに子供の姿を見せ、100ドルの形にジェイスン流の約束を果すのである。またキャディーから母に内緒で送られるクエンティンへの小切手や手紙類も、ほとんどジェイスンの手元でくすねられ留保されている。ジェイスンへの疑心を抱いてジェファースンへやってきたキャディーはじかにジェイスンの店へ立ち寄るのであるが、ジェイ

スンは最後には必ず非情な脅迫でキャディーを引き退らせるのであった。離婚後、コンプソン家への出入りを一切認められていないキャディーが、たった一度、ディルシーの手引きでベンジーと会った時も、ジェイスンは次のように言ってキャディーにジェファースンをはなれるように迫るのであった。

So the next time I told her that if she tried Dilsey again, Mother was going to fire Dilsey and send Ben to Jackson and take Quentin and go away. (P.207)

ハーバートが約束したジェイスンの銀行就職が、キャディーの離婚によって成就しなかったことへの恨みと、コンプソン系の人々から蒙った経済的、精神的労苦への補償を、彼は今クエンティンを人質とし、キャディーの弱味につけ込んで経済的、精神的搾取を続けてゆくのである。

1913年、つまり父コンプソンの死んだ翌年、ベンジーが女学生を襲ったという事件の発生を契機として、ジェイスンはかねての考え——ベンジーの去勢をカロラインの了解も受けないで断行したのである。そして彼はキャディー、クエンティン母子についても同様な処置を連想するのである。それはコンプソン系の断絶をも望むジェイスンの飽くなき追及の姿勢と言えるであろう。

I know at least two more that needed something like that, and one of them not over a mile away, either. But then I don't reckon even that would do any good. Like I say once a bitch always a bitch. (P.264)

このように、ジェイスンの目にはキャディーもクエンティンも共にどうしようもない遺伝子を持った‘bitch’として映るのであった。そして、かつてクエンティンがダルトン・エイムズの口から聞いたその言葉をふたたびジェラルドの口から聞いた瞬間、二人の像が重ってジェラルドに殴りかかる原因となったのであるが、この‘bitch’という言葉はジェイスンは繰返すのである。キャディーを‘bitch’として取扱われることに抵抗し、彼女をダルトン・エイムズから奪い返そうと命をかけたクエンティンにくらべ、ジェイスンは自ら姉のキャディーとその娘クエンティンを‘bitch’として蹴落そうとしているのである。ここにコンプソン系のクエンティンとバスコム系のジェイスンの意識にはっきりとした断層を見ることが出来る。ジェイ

スンがクエンティンについて“‘She’s too much like both of them to doubt that.’” (P.262) とクエンティンとキャディーの近親相姦をカロラインにはのめかすとき、そこにはコンプソン系に対する侮蔑の感情が読み取られるとともに、バスコムの人間となることを期待されたクエンティンがやはりコンプソン系列の人間であることを確認した二人の憎しみがこめられているのではなかろうか。クエンティンの“‘Why does he treat me like this, Grandmother?’” (P.259) という悲痛な叫びによっても、カロラインのジェイスンに対する信頼を微塵も揺がすことは出来なかった。従ってキャディー、クエンティンそしてコンプソン家の黒人達に対するジェイスンの卑劣な行為は何等の自尊心も、誇りも傷つけられることなく際限なく続けられるのであった。それらは彼のコンプソン系の人々に対する復讐とはいえないであろうか。それはさながら母体を食い破って生まれ出る一匹の蛇の如くである。

かくして、ジェイスンのますます募りゆく干渉と虐待は遂にクエンティンの家出を招来する。彼女はジェイスンが永年の間かかって貯めたベッドの下の隠し金7,000ドルを盗んで、赤いネクタイをしたカーニバルの男と逃げたのである。南部貴族の娘と名もない旅回りの男、それは親子二代にわたって繰返された転落の様式であった。

1933年、カロラインの死と同時にジェイスンはかねての計画通り、ベンジーをジャックソンの収容所へ送り、同時にディルシーを解雇した。“In 1865, Abe Lincoln freed the niggers from the Compsons. In 1933, Jason Compson freed the Compsons from the niggers.”⁽¹⁴⁾ というジェイスンの言葉は彼が最も恐れていたコンプソン系のディルシーに対する最大の皮肉であったろう。

IV

このようにコンプソン夫妻の間に潜在していた心理的断層は、コンプソン家に起る事件のたびにその間隙を拡げ父系、母系の二つの集団の対立関係をますます浮き彫りにし、その確執の醜さを増し、さらにそれは一家の崩壊に拍車をかけることになった。キャディーとジェイスンに象徴されるコンプソン対バスコム⁽¹⁴⁾の対立関係はクエンティン、コンプソンの死によってジェイスンの家長権確立となり、ジェイスンの復讐へと変わってゆく。そしてクエンティンの家出によってコンプソン家は完全にジェイスンの時代へ移ってしまう。ここにおいてコンプソン家は精神的にも、社会的にも、また経済的にも変質し南部貴族としてのコンプソン家

の解体は完了したと考えてよからう。

ところで、このジェイスンについてフォークナーは“...Jason (who to me represented complete evil. He's the most vicious character in my opinion I ever thought of.)”⁽¹⁵⁾と『長野におけるフォークナー』(Faulkner at Nagano, 1956)において語っているのであるが、一市井人として見た青年ジェイスンの立場には同情すべき点も少からず数えられるのではなかろうか。

コンプソン家の次男として生まれたジェイスンは、兄クエンティンの名門ハーバード大学進学とキャディーの華やかな結婚と、そして父の酒への耽溺に殆んど消費されたコンプソン家の経済力のため州立大学への進学も諦め、高校卒業後、コンプソン家の唯一人の働き手としてすぐ町の商店員として働かねばならなかった。若きジェイスンはコンプソン家の重荷——ヒポコンデリアの母親、年老いたディルシーとその家族、母親キャディーに似て行動性のあるクエンティン、そして今はゴルフ場となりはてた嘗てのコンプソン牧場で「キャディー」と叫ぶゴルフアー達の声に姉を慕って泣き続ける白痴ベンジー——を扶養してゆかねばならなかった。34才になった今でも独身生活を受け、1日10時間の仕事を続けながら、昼食すら外食せず毎日家へ帰って来るジェイスンなのである。そしてこの12年間彼の給料は母の名義でいつも預金されていた。彼は“...I have to work ten hours a day to support a kitchenful of niggers in the style they're accustomed to and send them to the show with every other niggers in the country...” (P. 239) とこぼすのである。時代の流れに適応出来ないカロラインに、殆んど旧態依然たる生活を送らせるためには、彼は同年輩の若者達のような楽しみを一切犠牲にしなければならなかった。若いジェイスンの恋人ローレインヌという売笑婦とのお互いに計算された波の立たない関係は青春の情熱を犠牲にした悲しむべき姿とも言えるのである。こうしたジェイスンが、自分のことを少しも考えてくれなかった父親や、修学の途上挫折して長男の使命をも果せなかった兄や、婚前の誤ちのため折角目前にしたジェイスンの就職をふいにしてしまった姉と考えると、ジェイスンのコンプソン系の人々に抱く呪詛にも一般的には同情をさそう点のあることは否定出来ない。ジェイスンの生き方には時代の流れに余儀なくされた一面があるのであり、ジェイスンの苦衷、負担、不満が彼に現実生きる術を教え込んだと見ることも出来よう。ジェイスンの物の考え方に見られる合理主義、批判精神はより現代的なものとさえ言えるのである。落ちおれたコンプソン家である以上、

昔流の生活は出来ない。経済的にも、社会的にも、生活を変えるのはいわば必然的な事とも言えよう。限りある収入を補うために彼は合法的に株に手を出そうとする。利にさとい商人の感覚、物の不合理を見抜くするどい目。誰れをも信じようとせず、また誰れにも頼ろうとしない強い意地。

それにも拘らず、フォークナーはこのジェイスンを愚弄する。アールから貰った2枚のシヨアのキップを金を持たないラスターに売りつけようとする浅ましいジェイスン。クエンティンと赤ネクタイの男を2日間も尾行し逆に車の空気を抜かれてどじを踏むジェイスン。養育費をくすねて蓄えた大金を、当のクエンティンにまんまと盗み取られるジェイスン。それを盗難として訴えた治安官からクエンティン家出の責任を詰られ、その金についても嫌疑を抱かれるジェイスン。そして二人を追って引き起す力弱き老人との醜い争い。線路で頭を打って、斧で切られたと錯覚し狼狽するジェイスン。北部人、ユダヤ人、黒人、農民に極端な偏見を抱くジェイスン。郵便局員、株の相場師、ペープ・ルースに反感を抱くジェイスン。アールに対する反撥。モーリーに対する不信。虚構の上に築かれたカロラインへの親孝行。——これ等はすべてジェイスンの人間を低俗化し、彼の人格を揶揄するための小道具の役割を果たしているのである。

では一体、フォークナーは何故にこうもジェイスンを愚弄するのであろうか。愛が問題なのである。ジェイスンは人を愛する力をすべて喪失した。のみならず、失われた仕事に執着するあまり薄幸なキャディー親子に対し最後まで敵意を抱き続け、結局二人を不幸に陥れた張本人として彼を愚弄するのである。ジェイスンが如何に苦勞したかではない。キャディー、クエンティンの不幸を導いた人間として彼を弾劾するのである。それはまた、コンプソン家の斜陽化の中でスノーブスと代ることなき役割をはたした人間に対するフォークナーの反撃でもあろう。メルビン・バックマン (Melvin Backman) は彼の『フォークナー：その主要な時代』(Faulkner: The Major Years, 1966)の中でカロライン、ジェイスンを愛情の面から考察し次のように批評している。

Unable to love, Jason and Mrs. Compson have become the antagonists of those who do love. They are, so to speak, the negative and positive poles of a power for evil: Mrs. Compson fails to provide love, Jason hates. Hate is the chief source of Jason's energy.⁽¹⁶⁾

またS. フィンケルスタイン (Sidney Finkelstein) も『アメリカ文学に於ける実存主義と疎外』 (*Existentialism & Alienation in American Literature*, 1965) のなかでジェイソンのスノーブス化にふれ次のように言っている。

The son Jason, who takes over the family reins when the father dies, turns into a hard, shrewd, grasping speculator, the oppsite in spirit to the gentry. He becomes, spiritually, kin to the "Snopes's."⁽¹⁷⁾

フォークナーはむしろスノーブシズムの原型とも言えるバスキュル意識の人々を最も嫌悪すべき人間に仕立てることによって、結果的には、挫折して亡んでいったコンプソンの男達、或は時代の転換期の犠牲者として誤ち、転落し、不幸になっていったコンプソンの哀しい女達が美化され、彼等がかって属していた旧体制下の人間性の昂揚が謳われるという所謂南部神話説の根拠を提供したことになるのではなからうか。

ジェイムズ・ボールドウィンは『私の名は誰れも知らない』 (*Nobody Knows My Name*, 1961) においてフォークナーの南部の取扱いを評し、"He concedes the madness and moral wrongness of the South but at the same time he raises it to the level of a mystique which makes it somehow unjust to discuss Southern society in the same terms in which one would discuss any other society."⁽¹⁸⁾ と述べている。しかし『響きと怒り』の主たる狙いは、心理的独白という一見反自然主義的傾向を持つ手法をもってしても、やはり南部貴族の解体のリアリストックな解析にあるといえよう。

注

テキストは、William Faulkner: *The Sound and the Fury* (Chatto & Windus, 1966) を用いた。引用文の頁数はすべてこのテキストの頁数を示す。従ってここには、テキスト以外の出典のみを挙げる。

- (1) V.O.A編アメリカ小説論 (北星堂、1965) P. 260
- (2) Ed. by Frederick L. Gwynn and Joseph L. Blatner, *Faulkner in the University* (New York: Vintage Books, 1965) P. 61
- (3) *loc. cit.*
- (4) ロバート・ペン・ウォレン著、高橋正雄・武市権夫共訳、現代アメリカ作家論 (南雲堂、1966) PP. 11~12

- (5) *op. cit.* Frederick L. Gwynn and Joseph L. Blotner, P. 18
- (6) *Ibid.*, P. 6
- (7) Malcolm Cowley, *Writers at Work* (New York: Viking Press, 1958) P. 130
- (8) Catherine B. Baum, "The Beautiful One", *Modern Fiction Studies* Vol. XIII, No. 1, Spring 1967 P. 40
- (9) F.L. Allen, *The Big Change* (New York and Evanston: Harper & Row) P. 9
- (10) William Faulkner, Appendix; "The Compsons," included in Robert W. Kirk with Marvin Klotz, *Faulkner's People* (Los Angeles: Univ. of California Press) P. 42
- (11) George Marion O'donnell, "Faulkner's Mythology" in *The Three Decades of Criticism* ed. by Frederick J. Hoffman and Olga W. Vickery (New York: Harcourt, Brace & World, INC., 1960.) P. 85
- (12) *op. cit.*, F. L. Allen, P. 10
- (13) Louise Y. Gossett, *Violence in Recent Southern Fiction* (Durham, N.C.: Duke Univ. Press, 1965) P. 21
- (14) *op. cit.*, Robert W. Kirk with Marvin Klotz, P. 47
- (15) Ed. by Robert A. Jelliffe, *Faulkner at Nagano* (Tokyo: Kenkyusha, 1956) P. 104
- (16) Melvin Backman, *Faulkner: The Major Years* (Bloomington & London: Indiana Univ. Pr., 1966) P. 30
- (17) Sidney Finkelstein, *Existentialism & Alienation in American Literature* (New York: International Publishers, 1965) P. 193
- (18) James Baldwin, *Nobody Knows My Name* (A Dell Book, 1961) P. 101

大慈寺雲龍東堂にて和漢

六三 陰たかし薨に双ふ雪の松

六四 空に聞千鳥の声や天河

六五 半天に乱るゝ雪や山あらし

追善連哥

六六 虫の音もかれ果てうき冬野哉

六七 冬咲や寒さをしらぬ梅花

六八 三輪久左衛門尉直徳興行

六九 来む春を世にしらすや梅花

七〇 梅さきてみな春を待草木哉

七一 春まつや心もなをき宿の梅

七二 咲つゝけ春ちかくなる宿の梅

七三 紅葉はのちにをくれぬ心かな

七四 寿間一回忌に（慶長七壬寅十月八日）

七五 問跡はかれ行草の原野哉

七六 雪山を作りならふる岩は哉

七七 往生院了心御興行

七八 月寒て心もきよし法の水

七九 井河宗為新宅にて

八〇 誰もみよあたらしき庭の雪の松

八一 新造にて（十一月十四日）

八二 葺かへて雪一しほの板屋かな

八三 宗礪両吟和漢

八四 雪にけさ改まる山のすかた哉

八五 江戸へ行人立願

八六 来ん春のかとてに咲や梅花

八七 初雪や夜ふりそめし月の庭

八八 月の行嶺ふりかくせ夜はの雪

八九 萍にこほりも青き汀かな

九〇 空に誰折ちらすらむ雪の花

九一 岩こえて帰らぬ波かけさの雪

「36オ

「36ウ

九二 白衣を水におほへるこほり哉

九三 月の後雪にさたむる高ね哉

九四 春になと心へたつる冬の梅

九五 白河や野山につゝくけさの雪

合志宣頓居士十七回忌周天

興行

九六 冬さくも色はこの花の昔哉

九七 さ夜更てそよく芦鴨の羽風哉

斎藤利宗亭にて

九八 冬や又咲出る雪の花すゝき

九九 春さかむ山口しるし冬の梅

一〇〇 雪うすし色香あらはせ冬の梅

平野寛右門尉長恒にて初雪に

庭にけさ雪をみ初る木すゑ哉

（慶長十二）

兵作敏辰新宅にて

一〇一 冬そ知けに常葉木の深緑

立田社頭にて河嶋越後守

興行（慶長十二）十一月廿一日

一〇二 さやかなる月をみせける冬木哉

祖超にて

一〇三 春はよ所に知やしらすや冬の梅

源正にて興行

一〇四 来ぬ春を春とやおもふ宿の梅

下川兵大夫元智亭にて

一〇五 竹の葉の風にあらそふ敷かな

初雪の日独吟

一〇六 問人もけさは忘れよ雪の庭

一〇七 霜の花さかせて枯る千草かな

一〇八 月やたゝ窓にふり入夜の霜

一〇九 行かへる舟のしるへや雪の松

「37オ

「37ウ

「38オ



六六 木からしや音してみえぬ峯の松

ある所にて

六九 帰らしの心やつもる庭の雪

立田にて

七〇 木々の中に冬とはいかゝ岩根松

以上七百句

「38ウ

冬なから日影は春のこほり哉

早梅発句所望に

春は千々の花咲きかんとや冬の梅

菊咲て秋もまじはる冬野哉

澄行か明かたうすき月の雪

松に梅冬をよそなる宿り哉

朝霜の下葉をおもふ日影かな

冬かれの荒木を松のみとり哉

松杉の木かけを冬の太山かな

風は雲しくるゝ木々の落葉哉

冬なから流るゝ月の水かな

氷るる池の木葉や泊り船

空にをく露やこほりて玉霰

雪ふれはみな白樫のみ山哉

水の音も冬こもりする水かな

空に誰ぬきみたせるそ玉霰

長谷寺ニ一宿して

雪しろき夜は明闇の空もなし

冬まで紅葉のある所にて

散のこる木末や冬のはつ紅葉

鶯もこ蝶にうとし冬の梅

誰うへし花か夜のまの木々の雪

今来んの春をやいそくす水

雪にみな冬籠して山もなし

降つゝく雨は滋木の落葉哉

雪みよと残らぬ山の木葉哉

ひろはゝや浪に浮藻の玉霰

わたつみの雪山なれや沖津嶋

遠山のなかもやうつす庭の雪

簾まけとを山の端そ庭の雪

冬咲や冬うへ置し梅の花

天神法衆

初雪にあらはれ出るたかねかな

雪に明て雪に忘るゝ夕哉

雪ふりて常盤木ならぬ檜原哉

寒き日や山もしらきぬ木々の雪

寒き日や猶咲そふや(る)雪の花

枝も葉もみえぬや雪の花さかり

雪の花に常葉(木)とみる山もなし

松杉にちりなす木々の紅葉哉

明残る月や雲まのみねの雪

おもかりし袖もひとへの霜夜哉

鶯鴨の羽音を池のあらしかな

松杉はしくれにまざる緑哉

冬の野にもえ出る草や小松原

松かせも雪けに曇る塩干哉

山風も雪にしつまるあした哉

木葉ちる音にかくるゝあらし哉

庭にけき雪山つくる木末哉

みかきなす庭や玉篠玉霰

暮るまで朝霜しろき山かな

冬草は春まつ程のすさひ哉

紅葉してちるを忘るゝ木々もかな

声の葉の霜や汀のうは水

雪に(し)もわくれは分る山路哉

水にちりて浮藻を染る紅葉哉

白雲や空に降つむけさの雪

水の音をあらしにゆつる水哉

庭にみて忘るゝ雪の野山かな

限庄吉野雪山寺にて

半天に降つむ雪のたかねかな

雪の日は風のやとらん木々もなし

寒き夜や月さへ雲に冬籠

川かせの音よりこほる汀哉

月さえて松風きよき軒は哉

木からしも時雨も知ぬ太山かな

木葉のみなかれて水の色もなし

月雪の夜はや夕の鐘のこゑ

竹の葉の直きに知し月の雪

萍のこゝろ定むるこほり哉

うき草をさそふ水なき水かな

舟はけき雪よりいつる浦は哉

下水にちらてもしつむ紅葉哉

霜寒て枕に遠き鐘もなし

月はたゝ水にしつめる水哉

月は冬とむかへは夏の夜の間哉

梢より雪ふる松のあらしかな

浪の上に雪を漕ゆく小船哉

霜星をかさねん玉のいらか哉

早梅の心を

手るなよ春をせにまつ宿の梅

八幡宮法衆

陰たのめ冬も木深き神社

ちりやらて時雨を惜む紅葉哉

ふりつくせ月出ぬまのさよ時雨

埋火のほとりに聞る春の風

霜白しなれも時しる庭の松

阿蘇山長善坊御興行

色は猶冬木の中のもみち哉

長尾安右衛門尉善政にて

河音は雪にくはゝる時雨かな

於仙乗坊友順興行

三二 桜色をさなからうつす紅葉哉
 三三 千草にもこれや知人萩か花
 三三 こほるゝや心みしかき萩の露

七夕の連哥に

三三 月にさす舟はまよはし天河
 三三 秋きぬと風にをしふる一葉哉
 三三 雲晴て空にかゝるや夜はの月
 三三 こほるゝやたゝ我からの萩の露

「29才

八月廿五日 斎藤豆州にて

三六 色く心に染る花野哉

三六 秋かせのすかたをみする一葉哉

三六 心より咲初る花の千草かな

斎藤豆州にて

三三 我もとて露や乱るゝ糸薄

十五夜

三三 月の名を新しくなす光かな

桑原小斎にて興行

三三 神垣の幣はさくらの紅葉哉

三三 松虫に身をなさはやの花野哉

十五夜

三三 今夜のみ入さわすれよ秋の月

「29才

七夕に

三三 更ぬまにさすや船長天河

三三 玄仍批判を請たるとて独吟

三三 虫の音を袖にや包む花薄

三三 虫の声うかふ薄のはなみかな

三三 並河金右衛門尉宗為にて

三三 紅葉はや花ともみまし宿の梅

三三 行末の光りやふくむ三日の月

清水久八心助興行に

三二 影清き水にや契る空の月

慶作所にて

三三 こほるゝや花もおしまん萩の露

三三 平野五郎左衛門尉長時にて

三三 誰をさしてまねくか庭の花薄

三三 佐野弥五作重堅八月十六日

興行

三三 今夜さへ昨日の月のひかりかな

三三 日に添てみるや千草の花盛

十三夜

三三 心有てまたれぬ月の今夜哉

三三 於八幡宮七月七日十百韻成就ニ

三三 媒と成や星合のやまと哥

三三 拙者煩氣為立願平野寛右衛門

長恒興行

三三 心あるや月に遠さかる峯の雲

三三 大唐より帰朝の人興行

三三 月そ友もとの湊に泊り舟

新宅にて

三三 霧まより雲井にみゆる藁哉

三三 一月の内に往来はやすき心かな

三三 紅葉はのいろは夕日も時雨哉

十五夜大雨に

三三 名の月をねたむは雨の心かな

七夕の会に

三三 涼しさや今日七夕のわたし船

三三 熊本歴々御方拙者ニ家を造立

三三 し給て給候移徙に皆々申請

一座興行ニ

三三 (慶長十四九月廿五日)

三三 諸人のめくみや千々の宿の秋

学林寺顕光東堂和漢ニ

三三 一本も木々にまされる紅葉哉

三三 并河宗為わたしまし一会

(九月廿一日)

三三 霜八度へぬへき萩の露哉

三三 加藤清左衛門尉三正病患本復ニ

立願成就とて以竹所望

三三 心地よく月も澄ける御池哉

三三 拙身中風の時分立願成就とて

三三 成満坊良珍法印御興行二百韻

三三 幾秋かむすひよるへの水鏡

三三 秋や猶みとりまさこの庭の松

「31才

冬 百六十二句

三三 更て月さやかなれとや夕時雨

三三 心有や月出ぬまの一時雨

三三 冬は月木間にかはる時雨哉

三三 冬こそとおもふや月の一時雨

三三 散かゝる紅葉を松のしくれ哉

三三 松風はもみちをちらす時雨かな

三三 松かせのたえまやめくるさ夜時雨

三三 松風は山のはのみの時雨かな

三三 心有て月にをくるゝ時雨哉

豊後ニ御陣立願

三三 行月の光にはるゝ時雨かな

三三 山は雪ふりわくる里の時雨哉

三三 月みよと落葉にゆつる時雨哉

三三 霜にけさみるや木葉のさ夜

三三 竹の葉に音のみ積る藁哉

「32才

九月九日愚息顯元西吟

四六 つみたむる袖やませ垣菊の花

落木祈禱に

四七 一枝はかれても木々や千世の秋

四八 行帰りみれともあかね花野哉

四九 水に月たゝわだつみの宮古かな

五〇 見るか内に移すは月の都哉

廿三夜の連哥

五一 月を置いてまたるゝ雲の晴ま哉

五二 初秋もをとほ更けり松の風

五三 秋かせのさそひもあへぬ一葉かな

五四 松に萩こゑを合する軒は哉

五五 鹿の音や梢をつたふ山あらし

五六 枯やうて虫の音おしむ薄哉

五七 虫の音も色ある萩の下は哉

七月廿五日法衆

五八 梅もけに好文月の紅葉かな

愚拙病氣本復の時

五九 雨はれてもとの月みる高根哉

六〇 月影を吹出す竹の葉風哉

六一 萩の葉にかゝりてそよく浮藻哉

六二 露に心あひ宿りする花野哉

六三 なひき合て家ちをかくす花野哉

九月十三夜独吟

六四 高き名を又あらはすや空の月

六五 高麗渡海立願に所望

六六 月に船こき出てまつ塩路哉

六七 養田信濃入道栄貞追善

六八 袖にちれ無か形見の萩の露

充可追善

六九 秋の夜も見はてぬ夢は浮世哉

四六 音せぬや一葉をおもふ秋の風

十五夜の連哥

四七 天の戸を今夜ひらくや秋の月

四八 月に雲心に似たる風もかな

四九 朝きりは河門にあまる煙かな

五〇 斎藤伊豆守帰朝にて八月廿五日

五一 萩か花折かへる袖やこま錦

五二 暮るとも帰らしと思ふ花野かな

五三 雪の夜も虫の音しけし秋の月

五四 紫の玉のうへ木か萩の露

五五 汲袖や仙人ならし菊の水

五六 亡父梅心追善(懐旧)

五七 いく秋を経て忘ぬむかし哉

五八 息五左衛門高周三月十三日死去

五九 其年の七月十三日

六〇 此秋はおもはず忍ふ昔かな

六一 江をひろみ月に寄来る千船哉

六二 宇土にて嘉悦勝運興行

六三 遣水もそよや浜への萩のこゑ

六四 延照院頼賢法印にて

六五 月のうちの桂や木すゑ峯の松

六六 手をらしよ袖に匂へる菊の花

六七 九月過ニ宇土寿間にて

六八 秋は行にこゝろはとまる宿り哉

名月

六九 みすもあらずみもせぬ月の今夜哉

七〇 村雲に出入しけし夜はの月

七一 こぼるなよ花こそ手をれ萩の露

七二 水辺にて月をみての会

七三 水にすむ月にはいとふ山もなし

七四 一本のこ萩にこもる千種哉

四九 鹿の音を雲井にさそふあらし哉

五〇 虫の音もなひく薄の末葉哉

等与追善

五一 見し人はたゝ夢露のゆくゑ哉

五二 道はあれとゆくに行れぬ花野哉

五三 萩のさかりなる庭にて

五四 色はいつれあしたの萩の露

五五 散てよりふし糸ならぬ柳哉

五六 うす霧やたゝ草くゝの花曇り

五七 虫の音にぬるまもあらし萩か花

五八 虫の音も色に染なす花野かな

五九 むしの音も又一くさの花野哉

六〇 九月九日の会に

六一 諸人のつむともつきし園の菊

六二 十三夜本郷下総介所にて

六三 夕より出ても月は今夜哉

六四 加藤喜太郎殿追善

六五 なく成をおもへは風の紅葉哉

六六 (慶長四年七月十二日)

六七 清韓東堂和漢

六八 色ふかし千草の中の萩か花

六九 雲の行月にはなれぬ風もかな

七〇 了慶二千句の連哥

七一 袖の露ははかなき影の名残哉

七二 大かたに時雨やおもふうす紅葉

七三 散てしも陰は八千世の柳哉

七四 松に萩いつれか秋の初風

七五 虫の音にをくれぬ萩のそよき哉

七六 山の端をあまたにみする霧間哉

七七 十五夜光園寺法印にて

七八 まちしよりみて猶月は今夜哉

- 三六 松風を月まつ峯のきりま哉
隈庄靈山寺にて一会ニ
- 三九 道さへもふまゝく惜き花野哉
言の葉の種より聞く花野哉
- 四〇 萩のはのこゑに花さく軒は哉
九月九日於木原神主会
- 四一 仙人の手をらはたをれ宿の菊
萩かえに並あまりてや草の露
- 四二 草の露とはいはし萩か花
こほるゝや花のおもはぬ萩の露
- 四三 虫の音もいろなる花の千草哉
朋友あまた同心にて花野の会
- 四四 袖ことにかはりみちたる花野哉
松杉もかたはらに成紅葉哉
- 四五 霧はれて夕に明る外山かな
ちりかゝる柳に茂る草は哉
- 四六 於隈本木庭近江守鎮続
草の露やこゝろを萩か花
- 四七 今日毎にみても見さりし花野哉
於海辺連哥
- 四八 月澄て雁の声そふ海へ哉
大海も霧まは水の細江哉
- 四九 如来寺再興ニ
千世のあき並木の松にはてもなし
- 五〇 千町田のひとつになひく稻は哉
うす霧に遠山ならぬ山もなし
- 五一 千草にもたか言のはそ萩の露
紅葉はも濁りにしまぬ流かな
- 五二 川音はきりの底なる時雨哉
めくるまや軒に時雨るゝ松の風
- 五三 虫の音に乱合たる花野かな

「22ウ

「22オ

- 四三 菊植たる所にて
一本の陰さへふかし菊の水
- 四四 雁なきて明かたさむし空の月
暮るまで花野にやすらひて
- 四五 秋の野やこゝろのかり枕
嶋津中書家久公にて
- 四六 秋の野や人の心の花さかり
虫の音をねたむや庭の萩の声
- 四七 秋の田のはなみの音か湊風
秋や先宿り定むる萩の声
- 四八 鹿の音の跡先に成野風かな
行水をたえゝにみる霧間哉
- 四九 九月九日の会に
摘袖に千年や包む菊の花
- 五〇 九月十三夜宰府にて
月今夜暮ぬまおしき光哉
- 五一 朝霧をわけのほる道は山もなし
月すめと雲にことはるあらし哉
- 五二 嶋津義久公御不例の時分
相良宮内少輔頼房為御立願
- 五三 一万句御興行に萩の題を
萩の葉やあさ夕風の思ひ草
- 五四 高瀬にて
吹わたす秋のあらしや高瀬舟
- 五五 薩摩衆吉松に御陣の折節
歴々の衆鬨とりにて月待の夜興行
- 五六 雲に吹て風も月まつ高根哉
松をうへし庭にて数寄衆
- 五七 始終与久興行
一本や千もとはしめ松の秋

「23オ

「23ウ

- 四〇 天河なかれて尽ぬあふせかな
ある人一周忌に
- 四一 無かけのうつろふ袖の露もかな
萩を庭に植をきし人の身まかりしに
- 四二 うへ置し萩や昔を忍ふ草
萩のさかりなる宿にて
- 四三 露もしれ心に手をはる萩か花
嘉悦右京亮二階にての会に
- 四四 陰たかき露は月の宮古哉
岩田式部入道清円追善に
- 四五 過し世をなれも語るか萩の声
遠からぬ道にも暮す花野哉
- 四六 九月九日の連哥に
菊をおる人にしゆつれ千世の秋
- 四七 流来て水草を染る紅葉哉
宰府天満宮にて薩摩衆
- 四八 肥前衆数寄の仁をえらひ
一会興行有しに(七月廿五日)
- 四九 梅は紅葉松はみとりを姿哉
(コト二句分、切り取り)
- 五〇 同荻茅の関にて俄に
興行
- 五一 かるかやの関戸は露の乱哉
同染河の辺にて
- 五二 心有て染河ちかき花野かな
同箱崎にて
- 五三 箱さきやあけてもくらき松の月
同かつら瀧にて独吟
- 五四 空の海につゝくや月の桂かた

「24オ

「24ウ

「25オ

原田万千世殿追善

- 三〇 袖にちれ世を卯花のけさの露
 三〇 隔つともよりてこそめ杜若
 三〇 卯花や出入わかぬ夜はの月
 三〇 涼しさや峯の松風ふもと河（此二句、切り取り）

於八代小路

- 三二 すゝしさやけに宿くの庭の松
 三三 并河長三郎卯月廿一日会ニ
 三三 橘の五月まつ間や千世の宿
 三三 風の音きかて涼しき端居哉
 三三 夏の日をいたつらになす清水哉
 三三 わか世とや月出ぬまに飛螢

（六月廿五日）

拙身煩氣本復の祝とて

- 三三 平野五郎左衛門耐長時會ニ
 三三 えにしあれや又この宿の門涼み
 三三 あふけ猶ことふき茂る神の庭
 三三 松下弥平次にて

- 三六 夏は月ゆく方ちかき雲路哉
 三六 草くの露にあらそふ螢かな
 三六 高瀬宗賢所望に

- 三三 句ひあらはぬるともいはし梅雨
 三三 けふことに茂りてたかし峯の松
 三三 以竹於立田神前

- 三三 茂りても道は直なる深山哉

秋 百九十六句

於八幡宮

- 三三 紅葉はや神に時雨の手向草

秋はまた萩の葉ならぬ風もなし

- 三三 根にかへる花か桜のはつもみち
 三三 月に紅葉名のみそ夜のから錦
 三三 天神法案

天神法案

- 三三 紅葉はや錦をしける神の庭
 三三 なく雁のこゑ打そよく声へ哉
 三三 松の葉の数やへぬへき宿の秋
 三三 八月十五夜於愚庵
 三三 心なくてみるとも月は今夜哉
 三三 萩原に吹来てかへる風もなし
 三三 ちりて名の木々に越ける一葉哉
 三三 於木原天神法案

於木原天神法案

- 三三 紅葉して幣かくる梅の井垣哉
 三三 千世をふる松いくもとか宿の秋
 三三 露よりも虫の音しけき千草哉
 三三 咲さかず露は隔ぬ花野哉
 三三 神山光蘭寺にて

- 三六 晴て行たかねや汀霧の海
 三六 月やたゝ遠山まゆのあさ鏡
 三六 四方の秋をいふはかりなる一葉哉
 三六 ちりそはぬ心もふかき一葉哉
 三六 於宮内興行

- 三三 千年ふる松にもまさる一葉かな
 三三 筑前荻萱関にて

- 三三 ちらさすもたかかるかやそけさの露
 三三 秋寒み雲の衣やかりの声
 三三 池は月の光にみちて水もなし
 三三 松に月千世のかけすむ砌り哉
 三三 山のはを月にをしふる霧間哉

ある野寺にて

- 三九 月をうき夕は風の葛葉かな
 三〇 明ぬとて月にあつまる光かな
 三一 影にはふ月や桂の花さかり
 三二 月に雲明ぬもあくる光哉
 三三 九月十三夜於花林院

九月十三夜於花林院

- 三三 誰ための今夜そのこれ秋の月
 三三 野遊の会に
 三三 秋の野にをるや五百機から錦
 三三 上落立願に
 三三 行月をおもへは近き雲路哉
 三三 月見の会に
 三六 月はたゝことはの玉の光り哉
 三七 句はぬも紅葉の色や梅花
 三八 八月十五夜

八月十五夜

- 三八 今夜たゝ改まる月の宮古哉
 三九 月出る高根は天の岩戸哉
 三九 田辺の草庵にて
 四〇 あさなく露もほに出る田面哉
 四〇 安心懷旧に

- 三九 月はたゝ昔をうつす鏡かな
 三九 露ことに月の花さく千種かな
 三九 松風のゆくゑや浅み霧の海
 三九 霜しろしけさや咲つく花薄
 三九 萩ある寺にて

- 三九 萩か花手をりてをかん露もかな
 三九 石川備後守にて
 三九 心さへ千々にわけ行花野哉
 三九 八月十五夜

- 三九 高き名やいはゝ海山秋の月
 三九 於隈庄甲斐常陸介興行

於隈庄甲斐常陸介興行

- 三九 高き名やいはゝ海山秋の月

二三 無玉としれば目かれぬ螢かな
「14ウ」

河尻久庵江辺にて

二三 茂りあひて柳もそよぐ声へ哉

二三 夏山の木すゑや天津雲の朶

二三 月の雪に松風寒み夏もなし

二三 風よりも涼しき露の柳哉

二三 松たてるかけや千年の氷室山

二三 風のまもすゝしき松の姿哉

二三 影おちてなれも藻に住螢哉

二三 水底に身をしわけ行螢哉

二三 江の声を茂りこめたる柳哉

二三 五月雨は軒はに近き雲井哉

宇土佐兵衛佐顯孝法楽作代

二三 わか問やたゝ若竹の千世の陰

二三 茂り合て山を砌の並木哉

二三 すゝしとて浪や寄来る岩根松

二三 松風は空に流るゝ泉かな

二三 すゝしさを山よりはこふ流哉

二三 竹の葉の露よりしけき螢哉

二三 みるほとや月の桂の下すゝみ

二三 月に光り消じとすたく螢哉

二三 春と夏のさかひに茂る柳かな

藤崎八幡宮夏連哥蓋脇

二三 松に藤あひおもふ枝の茂り哉

二三 茂らすは春とやいはん藤の花

二三 白雨に日かけもましろ高根哉

二三 涼しやとむすひ結はぬ清水哉

連哥稽古始の会に「朱書」「木々敷」

二三 言のはをきけとや秋（木々）の蟬の声

二三 植て行跡は千里の早苗かな
病氣本復の連歌に

二三 袖のみか心もかろし朝涼み
於社頭法楽

枝／＼のわか葉をあけの井垣哉

二三 麻の葉や御枝に流す青和幣

二三 水底も心も清し御板河

二三 齋藤伊豆守利宗帰朝立願ニ

二三 風をのせて涼しき浪の舟路哉

二三 夏の日を秋にかへたる清水かな

二三 茂あひて流をかくす水草哉

二三 すゝしさをあつめて流す川せ哉

二三 卯花や籬をこゆる夜はの月

二三 松竹にこゝろやわくる下涼み

二三 宗甫孫十二にて死去追善

二三 人の世や雪のまに入夏の月

二三 西光寺了観追善六月六日

名号の連哥

二三 なこりあれや西に涼しき空の月

二三 息五左衛門高周追善

二三 ゆく方に身をしわけはや時鳥

二三 萩原やまだ来ぬ秋の初風

二三 門田よりうへ行末は千里哉

祇園法楽

二三 涼しさや松風よりも岩ね水

二三 千世までと茂りそめたる小松哉

二三 水の音に光りもすゝし空の月

二三 晴まにや日影も匂ふ梅雨

轟御板連哥

二三 諸人の御板によとむ河せ哉

二三 萍は流れて清き早苗哉

端午の会に

二三 軒はにや心をうつす菖蒲草

三九 松風の雨もきほへる五月かな
源氏物語書終祝の会に

三〇 涼しさや影をみづ海の夕月夜

三〇（秋）九鬼四郎兵衛尉広隆七夕ニ

三〇 天河あき瀬もふかき契哉

端午ニ洪水の時

三三 心あてに刈や浪こすあやめ草

田辺庵室にて

三三 植わたし又うへ初る田面哉

往生院仏殿供養に

三四 えにしあれや来迎の門涼み

三三 五月雨はたゝ一年の日かす哉

三三 蟬のこゑ中空にきく高根哉

三三 并河金左衛門尉宗為庭前に

梅の紅葉したるを賞して

六月廿六日ニ御影ひらき

三三 来ぬ秋をいそぐや梅の初紅葉

三三 わか竹とひとつになひく柳哉

（慶長十一）

於高瀬多田茂左衛門尉可氏にて

三三 松の葉や茂るにつけて深緑

三三 同所談儀所快鑒法印にて

三三 風にちらぬ花をみきりの若葉哉

三三 同所願行寺其阿興行

三三 樗さくかけは雲あるいらか哉

三三 同所紹堅にて端午の日

三三 家／＼のかさしや今日の花あやめ

三三 茂り合て下草かこふ柳哉

三三 いつよりか干しほに染し夏木立

三三 植て行跡先とをき田面哉

三三 撫子の花もてつゝむ巖哉

「17オ」

「15オ」

「15ウ」

「16ウ」

「16オ」

「17ウ」

「18オ」

三〇 於高瀬大川長老にて和漢
古声を猶きかまほし杜鵑

— 11 オ

三〇 井河宗為公 斎藤利宗 下川

元智来儀之時興行

三〇 一声や誰にもわくる時鳥

三〇 まつ宵のふくるをしれな子規

三〇 一こゑはたか習はしそほとゝきす

三〇 浪の花に咲そふ池の蓮かな

三〇 水にうつるかけを蓮の下葉哉

三〇 鳥羽玉の闇をほたるの光かな

三〇 山とをく聞さへ涼し滝の声

三〇 夕顔はたゝ白露の宿り哉

於成道寺和漢

三〇 涼しさはいづれ木本岩清水

三〇 ちらすなよ名も常夏の花の露

六月晦日

三〇 川風や心のちりの夏はらへ

三〇 夏の日をへたつる木々や氷室守

三〇 影うつす露（水）は螢のゆかり哉

三〇 風のまは露に乱るゝほたる哉

三〇 涼しさや撫とも尽ぬ岩清水

三〇 雪もいま降かと思ふ氷室山

三〇 夕立はたゝ水無月の時雨かな

於神山本興行

三〇 秋またて扇をゝける木かけ哉

三〇 今こむの秋やいさむる萩の声

三〇 風のときかて涼しき木陰哉

三〇 荊そふるかつみも今日やあやめ草

三〇 露に月秋をあつむる早苗哉

三〇 すゝしきは松一本も深山かな

— 11 ヲ

三三 五月雨に茂るは雲の林かな

三三 涼しさは流て尽ぬ河瀬哉

三三 四方山や麓となりぬ雲の峯

三三 軒はさへ水籠る露のあやめ哉

田辺にて連哥

三三 わか苗も色つく露の夕日哉

三三 巖とやならなむさゝれ石竹

三三 白雲やよそめは雪の氷室山

三三 すゝしきはいく山かけそ庭の松

蓮さかりなる所にて

三三 池水の葉のほる露の蓮哉

三三 夏山のみとりに続く田面哉

三三 茂るより露も数そふ早苗哉

於西三河守興行

三三 今年生の竹に友なふ小松哉

三三 水こえて花の香しつむ蓮哉

三三 秋の色をわきてうかふる泉哉

三三 時しらぬ花も有ける若葉かな

於箱崎興行

三三 夏なから時雨てさむし松の風

三三 日かすふる花や心のふかみ草

三三 あつき日の嶋かくれ行河瀬哉

三三 夏の夜もまたるゝ程や秋の月

三三 橋のわか世とにほふ五月哉

三三 山さむし身は習はしの氷室守

於河尻興行

三三 松ならぬ木々も世をへん若葉哉

三三 植そめて日数かさなる早苗哉

三三 五月雨に太山はもとの滝もなし

於芸州宮嶋田右兵衛尉親尊

三三 涼しさを汀によせぬ浪もなし

— 12 ヲ

三三 つまぐ／をかされる軒のあやめ哉

三三 すゝしさをのこさぬ月の河せ哉

三三 白浪の幣かけそふる御坂哉

加藤清左衛門尉三正公為会尺

近藤太兵衛尉正長興行雖

斟酌申候無理承候間上句如此

八幡宮夏連哥作代

三三 問よりて契りや結ふ岩清水

三三 紅葉せよ木々に時雨るゝ蟬の声

松をあまた植たる所にて

三三 一本に茂るはいく木庭の松

於不動堂

三三 木隠や螢にゆつる夜はの月

三三 白雨に遣水ひろき砌かな

三三 里／＼に荊跡ひろきあやめ哉

三三 橘は雨夜の月のさかり哉

三三 うつし絵の本草風ふく扇かな

三三 曇り日は夕立雲の行衛哉

野山をうつしたる庭にて

三三 野も山もひとつ枝葉の茂り哉

加藤肥後守様御法案に

三三 君か代の数や千座の御坂河

三三 暑日や風もとひよる庭の松

三三 夕立も寒き太山は時雨かな

三三 幾年かおなし川せの幣枝

三三 今日毎にうへも尽さぬ田面哉

三三 あつき日にとめ来て寒き河辺哉

三三 すゝしきや光りにみする空の月

於功德池辺寺

三三 枝ことに玉をぬきとむる櫛哉

孟蘭盆於長照寺

— 14 オ

— 13 ヲ

- 一六 花にたゝ心のかはる風もかな
二三 日つゝきての花見ニ
一七 松浦宗五郎所にて南無妙法蓮華經を句の頭にをきて
百韻所望有しに
一八 名高きは御法の華のうへ木哉
一九 咲さかす人のこゝろや花の宿
宇土寿間にて
二〇 春ことに問ぬはくやし花の宿
二一 花の色にまけて帰らぬ木陰哉
二二 散にしも咲かへる花か人心
二三 花をゝきて匂ひはさそへ春の風
二四 花をふかく思はゝよきよ春の風
二五 みる程はこき花そめの心かな
(慶長十二丁未正月廿七日)
加藤主計頭清孝公九歳の御時江戸にて御他界御追善
祝に興行
二六 井河金右衛門尉宗為土蔵の
祝に興行
二七 千世までの春をこめをく家居哉
天満宮にて
二八 神やしる名は一夜松千々の春
二九 ちらすなよおなし山風山さくら
三〇 梅かゝをつゝむに迫き袂哉
宗碩と両吟の和漢
三一 あさ露を花ともいはん柳哉
三二 月にさへいとほぬ春のこ雨哉
英興道宗居士追善

「 8 オ

「 8 オ

- 一六 見し月の光うしなふ霞哉
一七 春の夜や明行までの夕附(月)夜
一八 藤つゝし心ひとしきさかり哉
藤崎八幡佳例藤の御連哥
加藤清正公御作代
一九 藤並のなみに思はぬ盛かな
同
二〇 松高し世々に咲のほれ藤の花
二一 誰染てこき紫そ藤の花
二二 藤かえのななき日あかね盛哉
二三 藤か枝になひき随ふ柳かな
二四 松かえにつらなる藤のしなひ哉
二五 下もえも小松に茂る春野哉
二六 春の野やなかれぬ水の浅緑
高麗渡海るとき住吉を夢に見待るとて興行に
二七 船出せよこゝも住吉の春の海
下川又左衛門尉元平戸に逗留の時分独吟を送待るニ
二八 海山の春に行かふ心かな
二九 雪とくる野への小篠や秋の露
素丹中風一大事の時千句
立願巻頭(慶長十四年三月十六日)
一〇 老木にも花さく春や神慮
夏 百七十一句

「 9 ヲ

「 9 オ

- 一六 一声やこゝろをさそふ郭公
一七 なかぬ夜や雨もおもはぬ(む)ほとゝきす
一八 音をそへよまつ夜あまたの時鳥
一九 月よりも声やさやけき時鳥
二〇 雲に風おもへ雨夜の郭公
二一 誰ためそまたし今はの子規
二二 契りきや月の入山郭公
二三 一声やまた里馴ぬほとゝきす
二四 名もこゑも雲井に高し子規
二五 有明の月や面かけほとゝきす
二六 一声とわれやはまちし時鳥
二七 時鳥まつ夜は浜の真砂哉
二八 さそひ行心や太山ほとゝきす
二九 一声やうはの空なる郭公
三〇 月をそし心くらへの時鳥
三一 忘れてはまつやみな月の子規
三二 一こゑとまちしやははる郭公
三三 宿りかれ庭も木しけし時鳥
三四 時鳥またしとおもふ夜はもなし
三五 時鳥心にきかぬ夜はもなし
三六 子規ことにはあかぬ初音哉
東彦右衛門行豊追善
三七 時鳥ゆくゑの空を名残哉
三八 えにしあれや一木の陰の子規
三九 一こゑや春のはつ花ほとゝきす
四〇 一声やわかまた知ぬほとゝきす
四一 雨になけまつ夜は知ぬ郭公
四二 時鳥われのみきかんとゑもかな
四三 雨にいつ契り初けむ郭公
於高瀬宗鑑興行
四四 誰もきけ木たかく名のる子規

「 10 ヲ

「 10 オ

充 風による玉のを長き柳哉

言の葉の花は咲ける柳哉

色をくきて花ともいはん柳哉

下草をしたり柳の末葉哉

春風をみとりに染る柳かな

柳を植たる所にて

桜にも思ひけたれぬ柳かな

春ながら柳に茂る声へ哉

風ふけは糸あそふ庭の柳哉

露をさへちらさぬ風の柳哉

青柳にちりかゝる花や糸桜

春風をむらゝになす柳哉

見すはしらじ柳が枝の春の風

こほれても露おもけなる柳哉

水すみて春風しつむ柳哉

於法泉寺和漢に

玉たれをあらたむる軒の柳哉

露はたゝ風に宿かる柳かな

春風のゆく方みするやなき哉

下露の木すゑを伝ふ柳かな

青柳の糸くりかくる柳（離）哉

糸すちを染わくる柳（離）かな

春風の関守となる柳かな

吹をともしかね風みるやなき哉

あさ露を花ともいはん柳哉

乱合て花の香うこく柳哉

枝くゝに風をわけたる柳かな

あつまりて静けき風の柳哉

防州滝の法泉寺にて

木陰行水のひゞきや花の清

有人追善に

4オ

おしまるゝ時とや散し春の花

ちる花ををのか色なる風かな

花を置いて霞にふかき匂ひ哉

春風もしらしことはの花さかり

峯延照院にて

花みつゝ越ればたかき峯もなし

ちり初る木末を花の雲間かな

花毎に心やわくる春のかせ

これはさく花に立かへるころ哉

花ことにとまる心をしをり哉

散花のすかたをうつすこ蝶哉

天神法衆

神やもる盛ひさしき春の花

花さかり宮古の外の都かな

追善

花よりも人といひしを知世哉

面かけの花は常盤の木末哉

風のまは華に立かへる匂ひかな

追善

花は夢したへる闇のうつゝ哉

ことのはに花を残して花もなし

山かせをわけくる花の匂ひ哉

帰らぬをおもへは花の心哉

花ある所夜会に

春の日を今夜にゆつれ花の宿

ませの内の花を見侍て

心をも垣こむる花の園生哉

山くゝの花もと成心かな

色もかもまだみぬ花の盛哉

花をみるほとは我が心のかな

花に風うしろみと成心かな

於杜頭

神やもる風も入たえぬ花の庭

花くゝの色に消行霞哉

山に誰うつす宮古の花盛

花の浪に鳥の音うかふ高根哉

河辺落花の比ある人興行に

花ちりて葬しろき流かな

和田大膳亮宗氏一周忌ニ

昔おもふ心みえけり花の露

急閑宇土へ行侍るとて隈本

府中慶作所に一宿して

帰るさに又彼所に来たりし

時の連哥に

心あるや行も帰るも花の宿

宇土法泉寺にて和漢興行ニ

花に来てかさねまほしき日数哉

同真乗坊にて

みればみし花に定むる宿り哉

杉嶋観音寺立花の座にて

かめにさすや風に知れぬ花盛

福湊寺に一宿し侍りての朝

雨はれければ帰さを急侍るに

しるて一会ありしに

雨はけふ晴てもいてじ花の宿

花にそへてとり返されぬ心かな

連哥執心の人追善に

言のはに名をのこす花の朽木哉

愚息五左衛門顯元三月十三日

三十七にて遠行追善

散果る花におとろく憂身哉

鳥の音をかすめる花のしをり哉

6ウ

5ウ

5オ

6オ

7ウ

7オ

7ウ

7オ

7ウ

7オ

7ウ

7オ

7ウ

7オ

7ウ

7オ

7ウ

発句抄 百七十一句 素丹

春

(巻ノ句数)

- 一 一夜明て去年は千里の心哉
- 二 今日そ春先ひとへさけ八重桜
- 三 一夜かはかすみも去年の隔かな
- 四 おもひ立ていくかに来しそ今日の春
- 五 年こゆる山は守ける関もなし
- 六 色香もやあら玉の年の宿の梅
- 年の内立春ニ
- 七 春は去年たちえやけさの梅花
- 八 雨にさへ日をたかへぬや今日の春
- 九 花もしれけふ立春に今日の雨
- 年の内立春ニ
- 一〇 今日そ春去年立にしや中宿り
- 一 忘ても花さき初よけふの春
- 年内立春
- 二 去年立し春かあらぬか今日の春
- 同
- 三 残りても冬とやはいはんけふの春
- 四 宿毎に誰かはわくる今日の春
- 五 木々はあれと梅にみえけりけふの春
- 六 春たつと霞で出る朝日かな
- 七 梅かゝやけにわか宿のけふの春
- 八 山は雪空よりやたつ春かすみ
- 九 わか宿やゆくてに來ぬるけふの春
- 七十九歳にて
- 一〇 若水をむすふに帰れ老の波
- 二 新年のことはを賓む齡かな

「一ウ

「一オ

ひつしのとし

- 三 荒玉の年はひつしの歩かな
- 三 いつくにか冬は帰て今日の春
- 八十歳にて
- 四 わか水を汲ても年は八十哉
- 五 面影の花はさきけりけふの春
- 六 一むらの霞もけふや四方の春
- 七 今日や先野山の雪を花の春
- 八 名にしおふ若菜や老を忘草
- 九 摘ためぬわか菜もおもし袖の雪
- 七日の子日
- 一〇 二道や子日する野のはつ若菜
- 二 色こきは匂ひや染し梅華
- 三 風に匂ひちりても深し梅花
- 四 一木にも匂ひや千々の梅花の花
- ある人追善に
- 五 言のはの色香やのこす梅花
- 学文初の会に
- 六 色よ香よちへまさる梅の盛哉
- 江辺に梅花ある所にて
- 七 梅かゝに遠く入江の小舟哉
- 八 春風に江をわたる梅の匂ひ哉
- 聖廟法案に
- 九 陰高しこれや神代の梅花
- 一〇 色よ香よ梅にかよへる花もなし
- 齋藤伊豆守利宗高麗より
- 帰朝の連哥ニ
- 一〇 さかふるや立かへる宿の梅花
- 二 松梅のえたもてかこふ軒端かな
- 法案に
- 三 この花のあるしもおなし盛哉

「二ウ

「二オ

- 一 梅一木わけなは千々のにはひかな
- 二 問人に改まる梅の色か哉
- 三 松に梅えたうつりする匂ひかな
- 四 詞にもよはぬ梅の色香哉
- 五 色に香にこゝろやわくる梅花
- 六 立こめて明ほのおしむ霞かな
- 七 遠山はかすみにまかふ霞かな
- 八 幡宮にて
- 九 陰ふかし神の井墻の八重霞
- 一〇 出て月あらはす夜の霞哉
- 一 遠山は風にも消ぬかすみ哉
- 二 川かせにかすみ流て水もなし
- 三 河音のうかひ出たるかすみかな
- 如来寺にて和漢ニ
- 四 鐘は楼に月より霞む響哉
- 五 かすみより流れ出たる河瀬哉
- 六 風のをとも月より霞む夕かな
- 松橋海辺にて
- 七 海山のなかもやねたむ朝かすみ
- 八 鶯のこゑやあやをるいとさくら
- 九 うくひすの声はみたれぬ柳哉
- 一〇 鶯はみ谷の花のあるしかな
- 一 花ならぬ鶯の音もさかり哉
- 二 鶯のはつ音やけさも夕月夜
- 三 下川又左衛門尉元臣病患本復ニ
- 四 鶯にさそはれ出る戸はそ哉
- 五 うくひすの声を花なる木陰哉
- 六 春風やゆくも帰るも柳かけ
- 七 青柳のまゆすみけふる霞哉
- 八 あをやきの糸もてゆへる離哉
- 煩氣快然之連哥ニ

「三ウ

「三オ

翻 刻 『素 丹 発 句』

— 肥後連歌史のうち・桜井素丹伝資料 (一) —

△昭和43年10月20日受理▽

棚 町 知 弥

Adaptation of Data : "Sotan Hokku" (a Collection of Haikai)
A History of Renga in the Province of Higo :
for a Reference to a Biographical Study of Sakurai Sotan — Part One —

は じ め に

太宰府天満宮連歌史の研究において、御祈禱連歌論としての究明より視点をかえ、地方連歌史という視点に立つとき、宗祇と交渉深かった相良為統より加藤正方・宗因までを通観した肥後連歌史の構想が、筆者の心をひきつける。阿蘇氏の連歌については白石悌三氏が「九州の文学 阿蘇——その風土と文学」(文学語学 46号)にその一部を紹介したが、文明年間に一日一万句興行の記録を伝える菊池氏の連歌や、熊本市藤崎八幡宮の藤連歌のことなども、まだ連歌史としてまとめられていない。

肥後連歌史の近世初期において最も興味深い人物は、肥後国侍より連歌師に転身、加藤清正に仕えた桜井素丹であり、本誌第二号に紹介した木山紹宅と同時代、そして極めて類似した経歴を持つ。素丹については野間光辰先生が「宗因と正方(白)」(国語国文 昭27・12)に紹介されたところが現在最も詳しいが、宰府と熊本のちょうど中間に住む筆者としては、彼の詳伝を目下の課題としている。ここに素丹伝記資料の第一として、大阪天満宮襲蔵の写本『素丹発句』(ハレ3・20)全文を翻刻する。野間先生が「三籟集について」(連歌俳諧研究 6号)に御紹介の、宝暦十四年四月西山宗珍が向來庵文庫「什物目録」のうち、第九番の棚中段に『風庵発句』とならんで著録されている一冊である。

横本一冊、タテ約16・5センチ、横約22・5センチ。表紙とも四十丁のう

ち、墨付三十八丁の写本で、後人の手により外表紙を附す。原表紙ハ38ページ写真参照▽には「素丹発句」の標題があるが、走り書きで、あるいは後人の筆かと思われる。「肥後国熊本八代之住人ト見ユ／慶長年中宗因ヨリ以前ニ見ユ」の註記、裏面に「滋岡庫」の印記、墨付第二丁表に「肥州之人／加悦式部少輔入道／桜井素丹」の貼り紙がある。

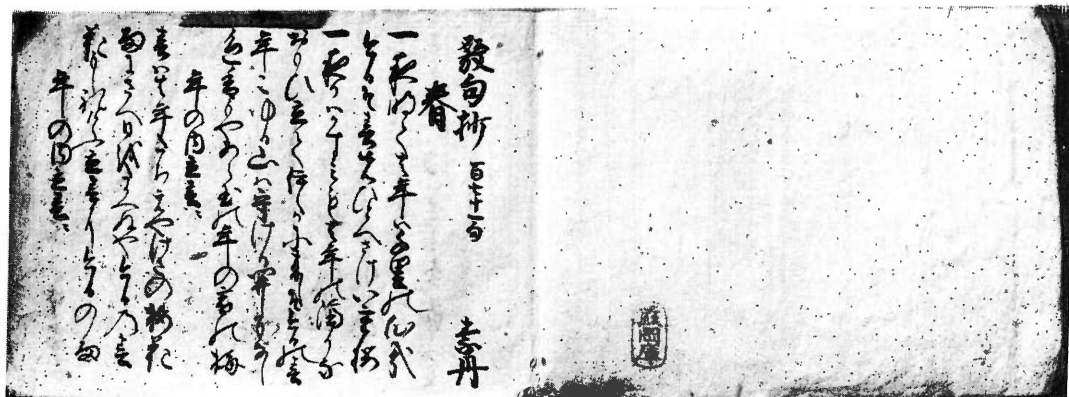
各部の首に記する句数と、実句数とは左の相違がある。

	△春▽	△夏▽	△秋▽	△冬▽	△計▽
記事	一七一	一七一	一九六	一六二	七〇〇
実句数	一六八	一八四	二〇八	一四〇	七〇〇

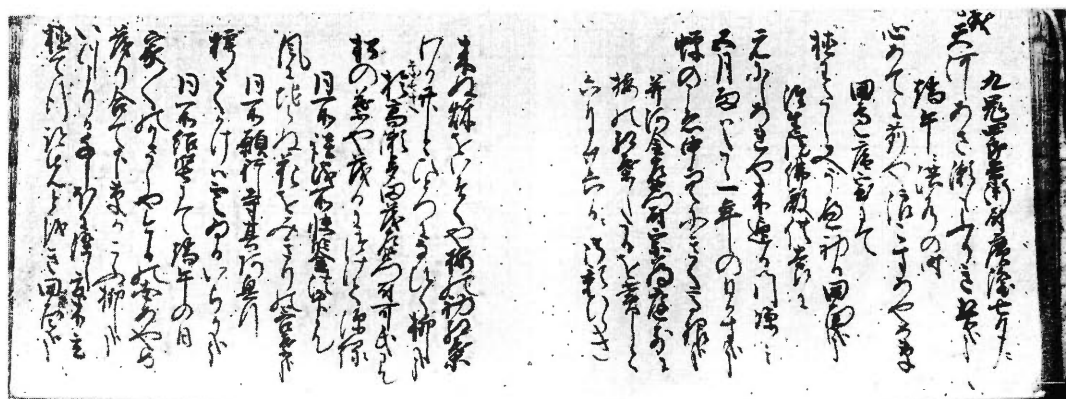
ただし、秋二〇八句は、二ヶ所三句分の切り取り(三五五ハ口絵写真参照▽四五〇・四五一)を含めた句数である。この切り取り、三二一句目の天河の句の上に「秋」と註記してまた消していることハ口絵写真参照▽、各処の年月日の書き入れ、そして筆写訂正の模様などから、編者による自筆稿本であり、あるいは素丹の筆かとも思われるが、比較すべき素丹真蹟を未見である。

変体仮名・片仮名を平仮名に、漢字を当用字体に改め、検出の便のために一連番号を附したほかは、行うつりも原本のままとした。(ハ)は書き入れ。

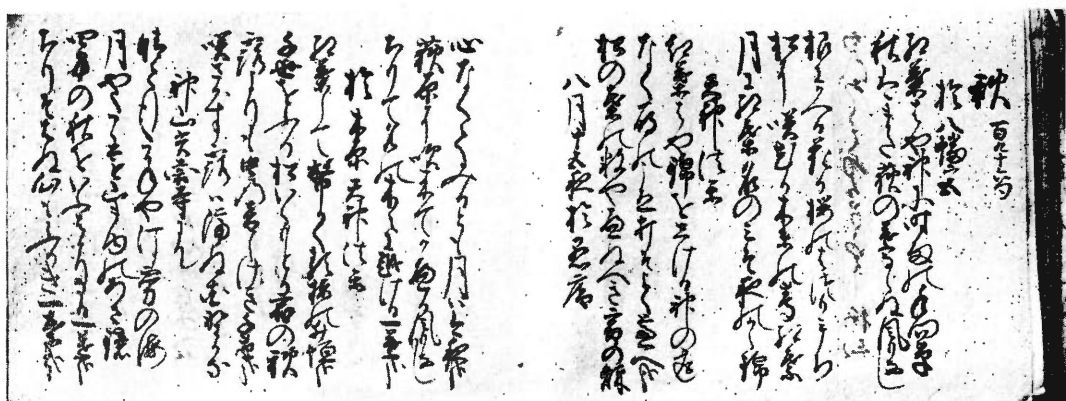
本句集の翻刻を許された大阪天満宮の寺井宣司、調査のお世話になった同宮の梅林権禰宜に深謝申し上げる。また、種々御教示を賜った野間光辰先生・島津忠夫先生に厚く御礼申し上げる。(本稿は昭和43年度科学研究費による研究の一部である。)



第一丁表 (Nos. 1~9)



第十七丁裏・第十八丁表 (Nos. 321~335) No. 321 註記



第十九丁裏・第二十丁表 (Nos. 353~372) No. 355 切り取り

[The page contains dense handwritten Japanese calligraphy in two columns, written vertically from right to left. The ink is dark and the paper appears aged.]

[The page contains dense handwritten Japanese text in cursive style, organized into several vertical columns.]

候為 御祝義上之

廿八日 玉松院侍従参上 一昨日御祝義頂戴御礼也

三月三日 宮仕能調参上 会式も相済候ニ付 近日勢州へ罷下候 為御暇

乞伺公仕候由也

四日 会式中廻り人之羽織御挑灯式張目代より返弁

十八日 文字願上差上写如左

(15)

乍恐言上

神楽所 尊神之檀前々よりしつらい置候得共 見分鹿抹ニ而如

何ニ奉存候ニ付 今度少々取繕 先御忌中すへ置申候 尤懸はつ

しニ仕置候得共 神楽之度々ニ取しつらい候義 人数かゝり候而

難義に奉存候 其儀常々すへ置申度奉願候 被為 仰付被下候

ハ、難有可奉存候 以上

御寺務様御内

御坊官中ノ御家老中

右之段相願候得共 只今迄無之 神前無用之由ニ而御許容無之

四月朔日 御発句百韻連歌懷紙宮仕中上之 手櫓式ツ 昆布一折同上之

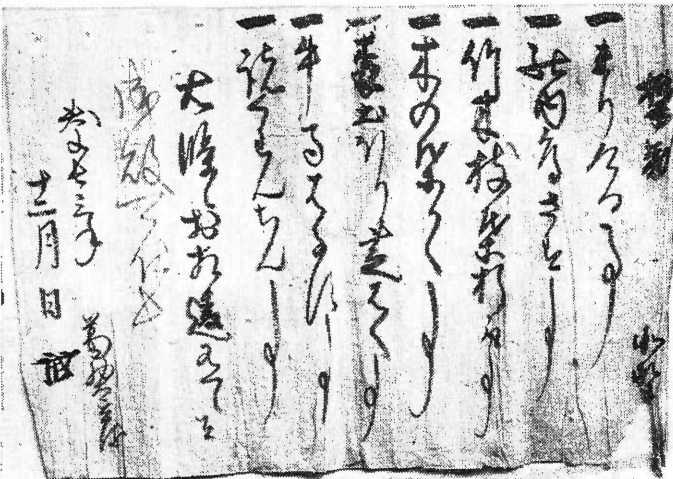
右御寺務御記録拝借之写畢

寛延二巳十一月

目代 孝世 (以上)



天正19年5月24日 禅昌日記 <本文13ページ>



葛西太兵衛禁制 (北野天満宮蔵)



綾子補任状 (北野天満宮蔵)

右之通申上候ニ付 先年茂浄衣着用仕相動候ハ、如先年相動可申候
旨被仰付 併会式中着用可仕旨申渡ス

廿三日 今度聖廟御忌連歌執行ニ付 先例之通 当門様御発句頂戴仕 万
句仕度由 先達而宮仕中より内々相願候ニ付 今日被下之 其御句ハ

梅か香を松にしめ野や神の庭

ト也 是ハ密々風早実種卿ヲ御頼被成 宮仕中へ被遣也 先年七百五
十年忌ノ時ハ 良尚親王被遊下也 其御句ハ

さく花も天満神の光哉

と有之也 又目代家ニ而万句仕候 良尚親王被遊下也 其御句ハ短尺
ニ御自筆ニ被遊也

万木に梅や初花神の庭

と有之也 則目代家ニ有之也

廿七日 今度御忌会式 於北野何事か執行候哉 書付上候様 先達而松梅
院へ被仰渡候処 則今日書付持参 如左

(14)

寛

一 廿三日より廿五日まで神供献上 法華奉納仕 連歌之義ハ願主
有次第興行仕候由申候

妙藏院

玉松院

徳勝院

一 朔日より廿五日まで毎日献神供 挑万灯候 連歌之儀者願主有次
第追々執行仕候由申候

目代

宮仕中

宮仕中

一 朔日 十五日 廿五日 大々百味 御湯 願主 有次第大々神楽を
も執行仕候由申候

右此度奉加を以執行仕候分

一 法事 朔日

一同 一七ヶ日(自十九日至廿五日)

右懺法錫杖或唄散華等執行仕候 以上

午正月

松梅院

二月(日不分明) 西京神人願申候ハ 来廿五日之朝 社頭広板敷ニ而奉幣

仕候歟 又祝仕候歟 御供ヲ上申候歟 此三色之内仕 度由申上候
色々評議候へ共 先例無之故不成也

朔日 今日北野会式開闢ニ付 山本大炊助参ル

二日 山本大炊助北野へ参ル

三日 北野へ西池和泉守参ル

四日 宮仕能歴子豊久丸入工 御補任頂戴

十一日 西池和泉守北野へ参ル

十四日 田中主馬北野へ参ル 北野ニて今日御湯上候節 庭上ニ机ヲ設備

神供 且又神子真剣ヲ拔異形成事共有之由 神楽所ニて半太夫浄衣ニ
木綿手襪ヲ掛居申候由 主馬見候て帰ル

十五日 山本大炊助北野へ参リ 松林坊ニ申付候ハ 此中御湯上候節 庭

上ニ設机備神供 且又神子真剣ヲ拔異形成事共有之由 又神楽所ニ而
半太夫木綿手襪ヲ掛居申候 御免許も無之 所作も無之候ニ掛申候事
無用ニ候間 今晚目代亭江半太夫呼寄 右之三ヶ条無用ニ致候様ニ可
申渡之由 松林坊ニ申含候也

十八日 西池和泉守北野へ参ル

廿一日 千種宮内卿北野へ参ル

廿二日 田中主馬北野へ参ル

廿四日 西池和泉守北野へ参ル

廿五日 北野江千種宮内卿 西池和泉守被遣 御奉納金子五百疋目代へ納

御家中よりハ三貫文遣也 坊官家老より五百ツ、也

廿六日 松梅院参上 会式相済候御届也

徳勝院参上 会式相済候ニ付 御菓子一箱献之

妙藏院参上 同断 杉折献之

宮仕惣代兩人参上 同断 羊羹廿棹献之

御菓子袋一折 文子献之

会式首尾好相済候為御祝義 一社中江赤飯(荷桶一荷) 杉折(三重煮
染一組) 御樽一荷被下之 目代迄為持遣

廿七日 松梅院 徳勝院 宮仕惣代参上 昨日御祝儀頂戴御礼也 目代松

林坊参上 御祈禱之札御供物上之 くわへ一折 菓預一折 会式相済

目代書付如左

指上ケ申口上之覚

(6)トホボ同文ニツキ略ス

文子書付如左

差上申口上書

(3)トホボ同文ニツキ略ス

旧例書如左

七百五十年御忌之時相勤候覚

(5)トホボ同文ニツキ略ス

廿二日 来ル午年

天神八百御忌奉加之義 公儀へも相願候処 無別

条相済候由 則公儀江差出候口上書之写共 桐官中 宮仕中 目代

文子差上ル

桐官書付如左

(11)

乍恐言上

一 来ル午年北野天満宮八百御忌ニ付 如先例以檀縁奉加仕度奉存候 執行之趣者

一 法華經奉納

一 連歌

一 大々御神供

右之通ニ御座候間 御断申上候条 被為聞召分被下候ハ者 忝可奉存候 以上

庚辰二月廿一日

北野祠官

妙藏院

同

玉松院

御奉行所

同

徳勝院

宮仕書付如左

(12)

乍恐言上

一 来ル午年天神八百御忌ニ付 如先例以旦縁奉加仕度奉存候 其節相勤可申趣者

一 連歌(万句) 御神供(大々百味) 灯明(多少ハ奉加寄次第相勤可申奉存候)

右之灯明之義ハ社遠くともし 尤火用心堅慎可申候 猶以及其刻何事をも可奉窺候 此段被為聞召上被下候ハ、難有可奉存候已上

辰二月廿一日

北野宮仕中

目代書付写如左

乍恐言上

(7)トホボ同文ニツキ略ス

文子書付之写如左

差上申口上書

(8)トホボ同文ニツキ略ス

元禄十五年正月廿一日

当年聖廟八百御忌ニ付 去々年より公儀江も其段申入 方々奉加をも仕也 則当月十八日 又公儀江申入候処 今日社中被呼候て 先例之通可相勤之由被仰渡候也

廿二日 今度天満宮御忌会式ニ付 文子願書差上写如左

(13)

覚

一 今度之神事先規之通諸事本式ニ執行仕候ニ付 祢宜役之者任其式

法 淨衣着用仕候 併近來ケ様之「神事稀々ニ而中絶仕候間 御断申上候 以上

午正月廿二日

文子

御寺務様御内

御坊官中

御家老中

一 右之御返事 尤ニ思召候 御年忌之間ハ御断申上候事御免被遊候 御年忌過候ハ、急度前方之通ニ慎可申候由申渡ス也

一 同十三日 能案 能什兩人来ル口上 今度妙藏院方ニ板木や勤兵衛と申者ヲ家来分ニ被致 奉加杯ヲ被勸候」由ニ候 又御年忌ニ付 宮仕能松江戸へ罷下り候道中宿々ニ奉加帳ヲ指おき通り可申由也 中ノ成申間敷候由申渡スニ付 妙藏院へも右之様被成候事ニ候間 不苦儀と存候得共 無用と御申付候上者 少もノ仕間敷候由也 右勤兵衛と申者ハ第一惡敷者ニ候 世流風有之者也

一 十四日之晚 年預能觀方ニて寄合

德勝院 目代友世 周世

能順 能東 能觀 常円 能実 常久 能通

右之衆中寄合 とかく妙藏院方ニあしき」勤兵衛ヲ家来ニ被致候事心得かたく候間 德勝院 妙藏院へ御出 内意御申入可然とて 則德勝院 妙藏院へ被參(勤兵衛御かゝへ被成候事 いかゞニ候間 御無用ニ可被成候と御申候) 処ニ 様々有之候 追付德勝院寄合所へ被帰候追付其跡へ妙藏院家来基七と申者来ル 妙藏院口上 只今德勝院御出御申候者 勤兵衛儀(あしき者ニ候間) 家来ニ仕方々奉加仕候事如何ニ候 無御用之旨御申候 如何様儀ニ候哉 此方ニハ勤兵衛儀忠之者と存候ニ付 家来ニ仕 方々へ使者等ニ遣シ申候 無用と候 御氣毒ニ存候由也 此方より申分尤ニ候 併最前西京より国々へ礼ヲうり度」
とて願御座候節 尤勤兵衛知せ申候得者 西京ヲやめさせ 勤兵衛德分ニ可仕与催たて申候 勤兵衛ニ候 尤知せ申候処ハ忠の様ニきこへ申候得共 忠とは申かたくと 段々使基七ニ申きかせ候処ニ 能々合点仕候 方々へ使者ニて遣シ候事はいかゞと申候 外之者ニて御やり候事不苦儀ニ候 然者先々ニ永々逗留仕 かとノ勸進ハ成申間敷候何事も随分ノ御慎被成 御勤可然旨申渡ス也

一 三月十四日より何茂奉加帳出シ初候也 宮仕隨林 能松 能音三人 今日江戸へ罷下り申候也(以上)

資料20

〔表紙〕

御寺務 御記録之写

天満宮八百年御忌

元禄十三年より十五年ニ至

元禄十三庚辰年

二月九日 来ル午年天神八百年御忌ニ付 祠官中 宮仕中 目代友世文字 旧例之通奉加仕 先例相勤候儀共 此度も其通ニ相勤申度之由 以口上書 此間御願申上候ニ付 先例有之事ニ候間 相勤可申之由被仰出候故 則申渡候也 祠官中口上書如左

(10)

口上之覚

一 来ル午年 当社八百年御忌ニ付 如先例以旦縁」諸方奉加仕度

一 奉存候 執行之趣ニ者

一 法華經奉納

一 連歌

一 大々御神供

右之通ニ而御座候間 御前可然様ニ御取成奉願候 以上

辰二月

北野祠官

妙藏院

御寺務様御内

同

玉松院

御坊官中

同

德勝院

御家老中

宮仕書付如左

口 上

(2)ト小異アルモ、ホボ同文ニツキ略ス

北野天満宮藏。写本一冊。卷末二年次・筆者名アリ。

(3)

年忌之古例御座候旨也 左候ハ、旧例御座候間 今度も以旧例相動
申度との口上書指上ケ申候様ニと申渡ス也

二月四日ノ朝 御子 半太夫来ル 口上書持参ス 写

差上申口上書

一 来ル壬午年 当社八百年御忌之節 大神楽御湯等」差上ケ度奉
存候ニ付 先例之通 諸方へ奉加仕 其助力ヲ以 右之儀相動度
奉願候 被為仰付被下候者難有可奉存候 以上

元禄十三年辰ノ二月四日

文子

御寺務様御内

御坊官中

御家老中

(4)

一

右一乗寺へ上ケ候 尤文 半太夫も召運候也 松林坊参ル
同日 徳勝院 妙蔵院 玉松院より奉加之願書 一乗寺へ上ル 写

口上之覚

一 来ル午年 当社八百年聖忌ニ而御座候ニ付 如先例以旦縁諸方
へ奉加仕度奉存候ニ付 如此以書付御願申上候間 御前可然様ニ
御取成奉願候」以上

辰二月三日

北野祠官

妙蔵院

御寺務様御内

同

玉松院

御坊官中

同

徳勝院

御家老中

右之同通指上ケ申候処ニ 請取申候旨也 則祠官中へハ西池和泉守逢
被申候也 綾子ノ事先例有之旨 左候ハ、旧例ノ勤方 以書付ヲ申上
候様ニと被仰付候也

松梅院より之御返事

今度御年忌之節 此方之儀ハ奉加仕間敷候間 左様御心得被下候様ニ
との口上也

(5)

二月五日 御子 半太夫書付持参之写

七百五拾年御忌之時相動候覚

一 二月朔日より同廿五日迄毎日」大神楽一座 御湯亭釜ツへ差上申
候 此度茂右之通ニ相動度願ニ御座候得共 奉加より之多少難計
候ニ付 座敷之義如何程共謹ニ難申候 以上

元禄十三年辰二月五日

文子

御寺務様御内

御坊官中

御家老中

(6)

一

右受取 二月六日ニ一乗寺へ使にて上ル
目代より之願書 二月六日ニ使にて上ル 写

指上申口上之覚

一 来ル午年 天神八百年尊忌ニ而御座候ニ付 如旧例以旦縁奉加
仕度奉存候 意趣ハ

一 御神供

一 連歌

一 灯明

右之通被為仰付候節 万端慎之相動可申候 以上

辰二月五日

北野目代 友世

御寺務様御内

御坊官中

御家老中

一 同月九日ニ松林坊一乗寺へ参ル 宮仕より能楽 能玉参上也 則一乗
寺にて山本大次助殿御逢 被仰渡候趣

今度 天神御八百年忌ニ付 旧例之通 以旦縁奉加願之儀尤ニ存候
申上候処ニ無別儀思召候間 勝手次第ニ奉加可仕候旨被仰出候 其通
何茂可被心得候 随分ノ諸事慎 云分無之様ニ可被致候

過ニ可然申候得共 何とそ申上度旨也 左候ハ、先御内証にて目
代計參可申上之旨申渡ス

一 同十二日ニ目代松林坊 一乗寺へ參 家老衆へ申候ハ 宮仕中より申
上候 尤近日表向ニテ可申上候得共 先御内意申上候 来ル午年
天神八百御忌にて御座候 先例之ニ通以且縁奉加可仕候旨也 家老
衆被申候ハ 祠宮中ハ如何被致候哉との事ニ候 其段不存候と申候得
共目代ニ 祠宮中へ參 今度 尊神八百御忌ニ付奉加被成候哉 如
何宮仕中より御内意申上候と申候得者 松梅院申分 此方奉加可仕も
仕間敷もいまだ知不申候 近日相談仕可申との事也 妙藏院へ參候得
者申分 祠宮中相談仕可仕との事也 德勝院へ參候得者 妙藏院奉加被
致候ハ、此方ニも可仕候 妙藏院不被致候ハ、仕間敷との事也
一 正月廿一日ニ宮仕年預能觀へ何茂寄合相談有之 連衆 目代友世 松
林坊 宮仕能順 能東 能觀 能実 常久 能榮 能什 能通 能竹
也 相談之上 今一往祠宮中へ使遣シ相尋可然ニて則ニ能通 能竹而
入 松梅院 妙藏院 德勝院へ參候処ニ 先達而松林坊へ被申候通也
正月廿六日 宮仕中より表向ニテ御門主へ申上ル 則能実 能通參
松林坊同道也 口上書之写

(1)

口上

一 来ル午年 尊神八百御忌相動申候ニ付 如先例以且縁奉加可仕
奉存候 意趣ハ
一 御神供 大々百味
一 連歌 万句
一 灯明 多少ハ奉加寄次第相動可申奉存候
右灯明之事 尤火用心 別而慎可申候 及其刻重而御断可申上候
此趣公儀へも可申上奉存候 以上
辰正月廿六日 宮仕中
御寺務様御内
御坊官中
御家老中

(2)

口上

右之書付指上ケ申候処ニ家老衆被申候者 書付請取申候間 宮仕ハ帰
シ申様ニとの(事關カ)也
一 廿七日ニ外御用有之參候処ニ 家老衆被申候ハ 昨日之書付心得かた
く候間 かき替可然旨被申候ニ付 書直シ申候
一 二月朔日ニ右書付改 常久 随林持參 則目代松林坊同道也 口上之
写
一 来ル午年 天神八百御忌ニ而御座候ニ付 如先例以且縁奉加
仕度奉存候ニ意趣ハ
一 御神供 大々百味
一 連歌 万句
一 灯明 多少ハ奉加寄次第相動可申奉存候
右灯明之節火用心尤慎可申候 尚及其刻重而御断可申上候 以上
辰二月朔日 宮仕中
御寺務様御内
御坊官中
御家老中
一 右指上ケ申候処ニ 書付隨ニ請取申候 何茂相談之上可申上之旨也
同三日ニ目代ニ參候様ニとて御門主より呼ニ来ル 參候処ニ 祠宮中
ニも奉加被致候哉 不被致候哉 承届ケ申候様ニとの事也
則松梅院へ參候処ニ 奉加仕間敷候間 其段申上くれ候やうニとの事
也 妙藏院へ參候処ニ 此方奉加可仕候 定而德勝院も奉加可被致候
松林坊同道仕德勝院へ參 同道可申とて則妙藏院同道ニテ德勝院へ參
候処ニ 德(勝院)も奉加可仕候 猶々晩来寄合相談可仕候由也
同日夜ニ入綾子 半太夫ニ參候 目代松林坊逢申候処ニ 半太夫申候
ハ 今度 尊神八百御忌ニ付一社中奉加被成候御願 御門主様へ
被仰上候由 左候ハ、此方ニも諸旦方之以寄附ヲ 神樂少々指上ケ
申度奉存候旨也 松林坊申候ハ 松梅院へも其段被申候哉と申候得者
成程申候処ニ 別条無御座候と申候故 松林坊申候ハ 七百五十年忌
之節左様之旧例候哉 先例無之候ハ、如何と申候得者 成程七百五十

〔23日〕一（会所）春朝を当坊しかり候て 会所ニ置申間敷由申出候へは
三中以 色々侘言仕 誓帟仕御侘言可申由申により 先被慮申

〔25日〕一 徳善院御女中より連哥ノ儀申来 十匁到来

一 原後室より連哥申来 銀子三匁来

一 山岡道阿弥より帷子二つ 百疋持せ給 御返事申入 連哥ノ儀も承候

一 稲葉右京殿より両度迄状来 明朝 妙心寺にて御振舞候はんとの事候
又近日連哥被遊候はんとして 我等申上の儀承候 則御仕候て参候

〔27日〕一 昌叱へ参候へ共 留主にて帰

〔28日〕一 庭田殿後室より連哥之儀申来 銀子九匁来

廿九日 少雨降頓而晴 稻右京殿へ早天ヨリ連哥ニ参 今朝（社頭）不参
妙心寺にて会有 連数十人有之 竹和御発句〔下略〕

六月

朔日 天氣能 参勤ス 今日 当坊連哥有之 京衆御出 喝食執筆

五日 天氣快晴 今日 連哥仕 早々参勤ス 能三香をモル

一 寿齋来義

六日 天氣快晴 今日 山岡道阿弥 江雪へ連哥持せ遣 返事有之 今朝
参勤ス

〔8日〕一 会所坊主春朝湯治仕 当坊へいとまこい入申候 法華堂ニ居三
中を以申□（候）間入申度由此中申 当坊同心申 跡ノ留主 片山と
申者置申由申候 当坊より見廻二人遣 ねさせ可申候間 ゆるくゝと
入候へと申付 忝由被申

〔12日〕一 松田勝右衛門参 昨日 伏見にて御礼申たる由申渡 宮仕はて
れんニ成たる由御尋之由御申候 宮首を能存ぬすみにけたるを 八右

衛門おつかけたゝき申由申事 昌叱 昌塚 友益被聞候

資料18

北野天満宮蔵。〔預能長記録〕

一 慶長七年二月廿五日当社七百年式 宮仕中より万灯 御連歌進上申也
御発句ハ御寺務竹内殿也 其時預能長法橋成申也 御寺務様よりけさ
ちやうたい申也 忝候とて御たる代参貫文ニ銀子卅目進上申也

一 内会所松朝あひはて候て 会所ニ人なく候所ニ 松梅院より預能長へ
種々ことほり候へハ 衆中へ預申候て 三中与申者 先へをき申所ニ
衆中御れいを申候て 会所ニをき申 後日にも如件也
〔コノ項〕慶長十一年八月 日 預能長法橋（花押）

資料19

北野天満宮蔵。半紙横折ノ覚帳一冊。
筆者不明ナルモ、当時の目代友世力。

〔表紙〕

松梅院ハ不被致候

奉加仕分

祠官 妙蔵院

玉松院

徳勝院

天神八百年御忌之事記

正月四日

目代 友世
宮仕 惣中
文字 文子

覚

一 元禄十三庚辰年正月四日ニ宮仕能東 能観両人来ル 友世逢被申候処
ニ両人口上 来ル午年 天神八百年御忌にて御座候 一両日中ニ御
門主様へも申上度旨也 目代申候 十五日より内ハ如何ニ候 十五日

能泉きにちかい申時 当坊よりおさへ 不参候 其後 当坊檀那片岡
新大夫殿を以 色々侘言申付 同心申由 禪興常々被申置候由 禪
昭物語也 とかく向後 神事奉行ニ何ニても無案内者 一切社頭□き
事 官仕共仕間敷由申付 其上位まゝて右之通候也

四日 雨降 大仏徳善院見廻申 会所一順持参申 徳善院第三被遊候へと
申 酒有之 竹門と我等と中惡由物語申 御縁起ノ儀申入 当坊申分
出候由也

V 八日 天氣快晴 盛法印へ参 玄仍へ酒肴遣

V 十一日 天氣快晴 今朝能三来 御湯被進度と被仰候檀那御座候 神前御
庭御かし被成候て被下候へと申 御子無之間者 めんくの檀那を以
其方より進之候へ 当坊より御子屋やかて申付候時ハ 何も当坊へ御
初穂不取候ハ、進間敷由申付 先今日者進之候へと申付 忝由申帰
き衣にて来

V 十四日 雨降 御ちやのへ参 ます魚一つ遣之候

今日 御ちやのにて藤見有之 当坊返寄

一 藤波をくゝれと袖のぬれぬこそあまりてかつく花見な□□□ 禪昌
一 幾千年間ともあかし郭公初音のやとの雨の夕暮 同

V 十八日 御講有之

〔同夜、能椿等四人ノ宮仕、妙蔵院ヲ切殺ス〕

〔5月〕

三日 天氣快晴（参勤ス）政所様より御夢想 今日興行仕

一 賀茂ノ神光院 大炊御門殿 各当坊へ御出也 連哥濟候て振舞出

V 〔4日〕一 今夕栄任へ礼ニ参 帷一つ 百疋 明日祝義として持参申 幸

□□同道申

一 はう庵ニ懸御目 様子承事有之

一 政所様へ御夢想懷帛 当月ノ御祈念ノ巻数一帯一筋上申 香蔵主 わ

きやく人へも同前ニ候 政所様よりすゝし一 帷一 懷帛箱ノお紅ノ
を被下候

V 十三日 天氣快晴 木村宗豆^カ御湯参候 銀子一枚当坊へ到来 御子二十五
匁遣 ミこにハ從昔檀那方より来三分一と申候へ共 昔之書付見申候
へハ 昔ハ当社御湯百廿貫にて候 十（とう）いちと申事有之 御伝
も有 五靈より御供参たる事有之 十のいちと申ハ 都七つ之口
より関を取 其代にて御供そなへ申事也 当坊より申付事也 当坊家
之書物共ニ一々有 当社ノ御湯ハあやこ絶申後ハ 西宮ノ彌きをよひ
申進之候 御子ニ湯ノ代遣事 從昔定一貫二百と禪興被申也

V 〔14日〕一 御子屋ノ事 五郎左へもんニ申付 何も宮ノ惡所直候事申付

V 〔16日〕一 今日昼より 御子屋ノ道具しかけさせ申

△絵写真參照▽

V 〔19日〕一 八嶋来て 明日 御湯進上仕度との檀那御座候間 当坊様へ御
申上候て 庭上かり申度由申 則稻波左近使 御湯之御義 近日 如
先規あやこ筋目をすへ 御子屋を立置候間 御子之取分何も究可申候
間 先今ハ其分ニも仕候へと申付 八嶋忝由申由 いなゝミ申

V 廿日 早々参勤ス 天氣快晴 今日 昨日申来候 御湯進上申 御子ハ例
ノ五靈殿也 御子ノ方より 西田蔵介を以 当坊江侘言申事有之

V 一 今日 昨日案内ノ御湯参候由也

V 廿一日 雨降 能存来而申 檀那方より御湯被進度との儀候間 庭上御か
し被成候ハ、可忝候由申来 心得たる由申遣 き衣にて来 二かま進
上申由申候也 御子も如例五靈ノ御子候也

V 〔22日〕^カ山岡宗兵へ殿より連哥あつらへニ参 銀子七匁来 則今夜連哥仕
御使へ渡

例 御縁起禁中ニ候を 今日ニ御返し候へと申遣

一 巢松軒へも鈴一雙 爪十 海雲遣

一 甚四郎所にて 小皇御縁起ノ使ニ参 様子申渡 急御返し候へと申
又甚四郎年頭ノ礼ノ事被申を 小皇申様ハ 何とて松梅院へ門跡より
御渡候物を御延引候や 其を先々御済候て 其後可被仰事候ハ、被仰
候へと申候由申候也

V
〔30日〕一 今夜 ミな月祝義 各よひ申 祝義後 則行水仕 会所へ籠

七月

〔2日〕一 浮田殿御女中より銀子五(三)枚給 御手洗進上申せとの事也

一 上田武兵へ連哥あつらへ来 銀子

一 西京神人衆見廻ニ来 指樽毫荷 青大豆一はち ゆふから二つ(持来)
五人来 酒円(椽カ)にてのませ申

三日 天気快晴 竜山様 奈良一条院様 一条様 天満門跡 大炊御門殿
御出也 則白砂ニたミ敷 御酒上申 別火ノさかな出

一 我等法印成之儀 一条様へ申 御同心也

V
一 正益見廻ニ御出也 正益御出故 端座へ出

四日 天気快晴 少つゝ霧雨降 智積院見廻ニ御出也 ほしいひ袋十
ふ三束 樽二御持参也 縁起懸御目候也

〔資料16〕

北野天満宮蔵。禪昌日記七冊ノ内、六。標題ハ、
『引付 慶長六年三月／卯月／五月／六月 禪昌』

〔慶長6年3月〕

〔2日〕一 柴野采女殿より連哥あつらへニ来 十匁 五十疋」到来

V
〔3日〕一 観音薬師衆とすまう見物ニ参候

六日 天気快晴 拝庵へ振舞ニ参

一 今日 禁中御能見物ニ参

V
〔11日〕一 紹巴へ玄仍同心仕参 振舞有之

十二日 曇 今夜 禁中ノ花見仕 唐橋殿にて大酒有之 当坊供ニ能満」
召つれ乗物ノ先へ遣

V
十五日 しゝ舞見物に参 名人也 唐人にて候

V
十七日(天氣吉) 今日 本能寺へ参候

一 今日 松勝右夢想ひらき 能札所にて有之由 礪辺宗色より人来 帰
ニ御立寄候へと申遣

V
十八日 天気快晴 参勤ス 妙蔵院いミ故 御講無之

廿五日 天気快晴 能瀬宗左 つし各御出」振舞申 堀狩ニ参

廿六日 出京申 天氣吉 紹巴へ樽一つ遣

V
廿七日 紹巴へ連哥ニ参 如水興行

晦日 会所春朝振舞 当坊家中衆不殘参 当年祖父死去故 火のさし合候
つる故延引にて 今日参」当坊会所拝処故 毎年振舞被申 則会所弟
子之儀 当坊さまより被仰付何成共被下候様ニと 春朝今日申

〔4月〕

二日 天気快晴 出京申

一 盛法印同心仕 干本念仏見物仕 晚降

三日 雨降 参勤ス
一 神前御庭ニ□□(赤)土有之 当坊へ無案内 湯参候としらへ仕候間
曲事之旨申付 其赤土を社頭きたはしの下地のくほし処へ入させつ
かせ申 稻波」奉行ニ申付 当坊へ湯立無案内候へハ 湯中ノ不進
之候 当坊へ案内申 庭上を御かし被成候へと申候へハ 其時ハかし
申 当坊氣にちかい申 宮仕なと申候へハ 中ノ同心不申候 昔も

六日 天気快晴 伏見へ参 伊侍従殿へ礼ニ参 大谷刑部殿へも参 渡部

久左へも参 匂袋共持参申 侍従殿にて使清心也 百足遣 三浦十左

衛門尉殿連哥御あつらへ也

七日 天気快晴

八日 天気快晴 連哥二百韻仕 宮仕共来

十一日 雨降 兼如へ連哥ニ参

十二日 雨降 兼如へ連哥ニ参

十三日 雨少降 伏見へ参 政所さまへ参 巻数上申候

一 德善院殿へもせつくノ礼 今日参(百足菊持参)

十七日 天気少吉 山々城 早鳥ノ宮ニ先度懷帟をはり付候とて 今朝祝

義せらるゝ 能札檀那とて取持 社なと少も宮仕ニひらかせ候ハす候

へ共 是ハ懷帟を内ニはり付させ候故 能札ニ申付 はり付させ候

山々城同道仕 はい屋承由 宗務 同道也 懷帟清書ノ人数 紹巴玄

仍ノ連衆也 当坊一ノ折裏也 能札なとニハかゝせ申間敷候へ共山々

城檀那ノ事 当坊を頼申候間 此度之儀ハ法

度ニ被仰候故 無異儀 此度之儀ハ申付

十八日 御講也 加陀松梅院 式妙藏院 天気快晴

〔21日〕一 石と伊賀殿御息女より連哥あつらへ 人給 〔19日、月次ノ記事ナシ〕

廿七 千句今朝より仕 兼如各入来

廿八日 兼如待入候て無御出候

今日昼過二千句果申

一 〔昨日大谷刑部殿ニしかられ申 此方へ来

廿九日 御ちやの煩見廻ニ参 兼如 正益 清閑三人 海雲桶一つゝ遣

一千句清書 春朝 可雲 似云 能存 能盛 能称 惠覚 右之衆也

六月 大

朔日 天気快晴 石川伊賀後室へ 伺息女へ礼ニ参 千句持参ス

一 一条殿へ御礼ニ参 折持参ス

八日 雨降 兼如千句ニ参 〔第二花〕発句仕

九日 雨降 今日も兼如へ連哥ニ参

十九日 会所月次頭人我等也 景敏来臨 先月ノ月次当月ニ延

風ならて竹の葉分る螢哉 禪昌

帰さニ当坊へ各御出也

一 会所乗海死スル故 春朝なとも出座無之

一 毛利六郎左エ門尉殿より懷帟神前へ籠ニ来 銀子一枚到来 芸中納言

殿御親類也

廿日(雨降)玄仍 景敏 弥七郎 弥四郎 慶純 各今日 拙子所にて振

舞申 河狩仕 西京堀にてタウアミウタセ申 鯉鮒をひたゝしき事有

之 各機嫌不及是非候 玄仍鈴一雙持来

廿一日(少降)葛西太所へ見廻申 花山院 大炊御門殿へ参 一条殿御出

にて大御酒有之 花山院へおとりかけ申

一 エト中納言殿より折念連哥あつらへニ来 銀子一枚到来 使渡部

〔三左〕殿

廿二日 天気快晴 連哥興行

廿三日 天気快晴 久我へ参

一 毛利衆へ懷帟遣 盛法印へ帰さニ参

廿四日 天気殊勝 町へ参 御ちやのへも参

一 今日 大阪へ人を御下候由候也

一 衣 三匁にてあつらへ申候

一 大すゝかい申 七匁なり

一 德善院殿女中より連哥あつらへニ参 銀子一枚

廿五日 天気快晴 参勤ス

一 芸中納言殿より毎月折念料九貫文来 牛王 巻数 あらいよね遣〔略〕

〔28日〕一 今日 花山院殿ニ和漢候て参候

廿九日 天気快晴 臼隼人殿へ鈴一双 爪十 するめ三れん 音信遣 非

大平記 禪永 禪祐 我等西三人ニ被仰出 書申也 我等へ参候ハ

此先ハ第四ニて候つる」今度者 四十番めニて候

十八日 御講也 社参之時 能養西(土)戸迄おり 頭を地ニ付札を仕也

天氣快晴

十九日 雪降也 社参同

〔会所月次ノ記事ナシ〕

廿五日 連哥ニ参候也

〔12月〕

五日 今日晚 養命坊へ茶の湯ニ参候也 中納言殿御社参候也

七日 □□□ 今日 梅庵御かくれ候也」

十一日 禪永二年忘有之 天氣快晴

十二日 今日 年忘我等仕也 そ庵も御出也 今日 浅野たんじやう殿へ

禪永礼ニ被参也 紹巴へも禪永被参候」

△資料14▽

北野天満宮藏。目代〔昭世〕ノ日記。『文禄二正月 日々記シルス』

〔文禄2年5月〕

廿三日 喜十郎申来候様 先度のつるき舞舞ヲ我等せとにて仕候間 其由
申候て給候へと候まゝ 則竹門様へ申上 とゝのへさせ申候也

六月三日ニ一寸女礼ニ来 持参ハ帯一束也 さけのませ候ておとらせる也

又四日ニ竹門様へ小女御礼ニ参 持参なし そうしや所にて かへつ
て御酒被下候也

△資料15▽

北野天満宮藏。禪昌日記七冊ノ内、五。
『社家引付 社務ノ神人ノ宮仕引付 慶長

〔慶長4年〕

卯月

朔日 天氣少曇 宇治へ参

一 田丸中人殿へ懷帯持参ス ほしいひ袋廿持参ス

十一日 山々城 俄ニ能札所を借 連哥興行有之 当坊第三仕 出座之衆

京衆也

十七日 天氣快晴 紹巴へ振舞持せ参 昌叱尽一類衆ふるまい申 能札供

ニつれ参候也 紹巴我等ニさらしかたひら一つ給候也

十八日 天氣殊勝 豊国明神 今日 せん宮在之 盛法印へ参 咄有之

一 相国寺へ 杉越後御出ニて跡より参 通主所ニて振舞」

十九日 天氣快晴 会所月次有之 伏見やの殿出座候也 玄仍婦ニ御出也

廿一日 曇(晚雨降 盛法〔印〕へ参)能三申来 当社へ湯進上申願人候

間 神事御奉行様へ御理申上由申来 則奉行を出申付候ハん由申 忝

由申婦 弥五助使」

廿二日 盛法印 □□各入来 振舞申

〔5月〕

〔3日〕一 くまの本宮浄楽寺御出也 夢想」連哥二百韻御あつらへ也 一

つハ内府様御内渡部久左エ門尉殿御夢想 百疋持来 銀子十匁 同一

枚折帯せられ候也

一 当社材木ノ約束仕

一 昌叱より能札を以 散止給ノ事御申越 心得申由申

四日 天氣快晴 昌叱へせつく祝義 鈴一双 両種遣

一 本宮浄楽寺御帰也

出候ハ26ページ写真参照V

V

廿八日 天氣快晴 今日迄やゝ子おとり仕候 今日者我等ニ佗言仕候間「
禪永へ申届申候 今日計と申事 今日一日覽海御ふるまい也 進藤弥
平次殿 松梅院へ御出也 今日 やゝ子おとりニおひ遣候 □□も同

V

〔6月〕

二日 朝天氣快晴 昼夕立降也 うたひかう有之 禪昭頭人也

V

九日 天氣快晴 養命坊へ尺八ふきに參候 北山東坊 我等ニ尺八給候ハ
んとやくそく也

V

十五日 天氣快晴 昨(今)日 禪永内之者共七人はしり申候 覽海ニか
ゝへおかれ候也 下すいさかひ候て出候間 下すも いなせ申候下す
も 二日也共三日成共いなせ候ハ、罷帰候ハんと皆々申候也 今夜
□□淺野左京大夫殿 浮田殿 松梅院へおとり御かけ候也」松梅院
留主と申候へ者 天神之前にて御おとり候て 御帰也
十六日 天氣快晴 淺野左京殿へ 夜前のおとりの礼ニ參候
十七日 天氣快晴 簀へ上様御鷹尋ニ參候 そ庵御出也 ちゝ男礼ニ參候
十八日 天氣快晴 觀音今日「かいちやう也 觀音寺〔覽海〕參候 今日
十八日 御かうにて候へ共 禪祐御煩故 しき無之 かた計よみ申也
觀音寺ニても同前 家康殿おとり 天神にて御おとり候也

V

廿三日 民部法印〔玄以〕屋敷之儀ニ御出也 つきぬけ道の事も相済申候
則松梅院 經堂にて 法印 五兵へふる舞有之 内衆迄ニ とかく北
野ハ松梅院次第と被仰出也」〔中略〕妙藏院 觀音寺地子之事も相済
申候 西京出口之地子之儀も一円ニ我等ニ被仰付候也」則かさい殿と
申合 能々取候へと被仰付候 北野内会所も 民法あそはし候ハんと
の事候 やうかう松 いかきハ 野々口五兵殿めされ候ハんとの事候
とかく北野ハ松梅院次第と被申候 竹内殿〔門跡〕よりも使者參候て
其分尤候由申候〔下略〕

V

廿六日 天氣快晴 今日 禪永ニふる舞仕候 花山院殿へ千句たい 禪永
より被遣候 松梅院之馬 ちを取申候

△資料13▽

北野天満宮藏。禪昌日記七冊ノ内、四。
『天正十九年 拾月日ノ十一月ノ十二月
社家社務引付 付宮仕事 禪昌』

〔天正19年〕

十月

十九日 関白様より大平記被仰付 三日之内ニ出来候様ニと御意候間 書
申也 民部法印より金六殿御使也

V

廿二日 今日 大平記書済申候」民部法印へ持參仕候也 禪永と竹門〔竹
内門跡〕との公事今日相済 松梅院りうんニ罷成申也〔下略〕

V

〔11月〕

二日 昨夜 大雨降 今日 能林 松梅院へすゝ仕候て參 明日 天神御
湯をたんな被參度由被申候 則松梅院御かつてんにて候ハ、御湯可
參由申 松梅院へ」ことハり申来候 覽海も其時御出也 松梅院かつ
てんにてなく候へ者 湯參候事成不申候 則能林と申者 松梅院へ參
候てことハり申候也

三日 雨少つゝ降 今日 御湯參候也 我等覽海兩人 清水願へ參候」関
白様 きうへ 御たか野ニ御なり候也 今夜 連哥仕也

V

九日 今朝社參候時 けいたいうちなかしのつの見え不申候条 当番能金
をせいはし仕候ハんと申候へ共 種々」禪興法印へ佗言仕候条 ゆる
し申候 梅庵へふる舞ニ參也

V

十七日 天氣快晴 村幡へ禪永 読合ニ御出候也 今日 又関白様より

一 (三月十一日) 西京之著 神人ニ成候様とのきたうに れんか百めん仕候也

一 三月廿八日より 日吉大夫 北野ニて能可仕と申候へとも 四月朔日までのひ申 (朔日より) 五日仕也

〔4月〕

一 十四日より げ百日の間 哥をけいこ仕也

一 十六日 松梅院禪永 東国ちん御見舞ニ罷下候

〔23日カ〕

一 桑山修理殿より松梅院禪永へ 連哥御あつらへ候 昌叱第三あしきと被申候て 禪永ニと被仰候へ共 陣へ禪永参候故 我等仕候て進之候 式百足参候

〔以下三行、原ノママ〕

廿四日ニ仕候連哥を

一 廿四 (五) 日ニより紹巴へ連哥参候

一 廿五日 今晚 大政所さまより 連哥あつらへニ参候

一 (廿八日) 大政所さま連哥 廿七日ニ仕候て 今日進之候

〔5月19日〕

一 (同) 今日 会所月次有也

一 (同) 昨日京へ出也

一 (廿五日) 今日 千句もたせ候て参候

一 (同) 昨日 法印ニ連哥候つる

一 今日 紹巴へ連哥ニ参候へとの事候へ共 不参候

〔11月〕

一 (同) 廿五日 今日 当社へ御湯参候 七かまニて候つる 関白殿御子

若君さま御煩御きねん也 吉将院のみこニて候つる 関白様より小袖めうと参候ニ 二人ニ被遣候由承候 時四ツ時ニて候つる

〔12月25日〕

一 (同) 今日 母者人御煩之時立願の連哥 今夜仕也

(いく千年句ひハつきぬ宿の梅)

一 此月十八日 (より) 山吉内殿千句有也 十九日の日 一日千句也

(第十) つまゝを雪のかさめる軒は哉

〔天正19年正月〕

一 (同三日) 今日 裏白連哥 一二三付」にて昼前ニすミ申候 関白殿へ

礼ニ 紹巴 昌叱も被参候 禪永も被参候へ共 関白殿 内里様へ御参第二て 御礼なく 各被帰也 今日 うたひ初也

一 (同十一日) 今日 ゑへすかき参て 禪永ニてまはし申候 二百文被遣也

一 (同十一日) 我等所ニて同今日 百文 扇五本遣也

〔23日〕 一 (同) 今日 昌叱へ会所月次発句持候て参候 さけ うを一尺参候

〔コノ月、19日ニハ月次ノ記事ナシ〕

一 廿五日 天気吉 能札所ニ連哥有

一 廿八日 松梅院ニ連哥有也 晩ニ雪雨降也

〔資料12〕

北野天満宮蔵。禪昌日記七冊ノ内、三。『杜家社務宮仕事ノ天正十九年ノ五月日ノ六月ノ七月 禪昌』

〔天正19年5月〕

廿四日 天気快晴 乗海 (会所坊主) へかたひら遣 やゝ子おとり 松梅院へ参」おとり申候 百足被遣候 明日廿五日にくわんしん仕たきとて参候 則覧海いはのきハを (茶ののうしろにて) つかまつれと被仰

候 是も吹候て上候」

一 七日 天気吉 今朝 閑齋へ朝めし有

一 閑齋シテ玄旨ニ後藤はり申候かねのかうかい覽する也

一 八日 天気吉

一 観音寺へ参候へ共覽海留主ニ而閑齋同道仕罷帰候」

〔21日「閑齋御下也」マデ、閑齋ノ記事アルモ略ス〕

一 十五日 天気吉

夜前 会所月次〔19日ノ分〕一順さいへん参候を 今日仕遣候 乗海

〔会所坊主〕して紹巴へ」

V

一 十九日 朝めし過 会所月次連哥ニ参也 禅昭我等兩人出座仕候 紹

出座也

V

廿五日 天気吉

一 今夜 北山ニ神事能候て やだ仕(候)を見物仕

V

〔9月1日〕

一 今日 禅永へ紹巴よりほつく参候 わきめされ候へとの事

すみにける人の心を宿の月

紹巴

△資料11△

北野天満宮蔵。禅昌日記七冊ノ内、二。標題ハ、

『天正拾七年拾月(十一月ノ十二月)日記 禅昌

(天正十八年ノ二月 三月 四月 五月 六月ノ七月

八月 九月 十月 十二月ノ天正十九年正月)』

〔天正17年10月〕

一 十八日 天気吉

一 紹巴より 昨日 禅昭我等兩人を」能舜よひに参也 今日 参候へ共

紹巴留主ニて 玄仍ニ合候て帰也 さ衣の本 我等禅昭兩人ニ 第二

を半ふんつゝ書候へと申され候

一 十九日 雨降

一 今日会所月次有也」昌叱御出也 おそくはて申 溝江大炊殿発句候也

〔21日〕一 能札か所ニて 三上越前興行連哥ニて参也

V

〔25日〕一 今日 会所連哥ニ侍從殿我等参

一 廿六日 紹巴へ 狭衣のほん 今日 かきたて申遣之候 能舜シテ」

V

一 十一月朔日 雨少降

一 保元物語 関白殿様より又参 まへのあしき所をよくめされ候へと申

来候間 一兩日禅祐(禅永にて)とめされ候

V

〔2日〕一 紹巴より我等方へたる給也」

V

〔3日〕一 今日 関白殿 保元物語之本 玄以へ作内持遣候 禅永(禅祐

兩人)より」

V

〔19日〕一 会所月次 紹巴被参候也 禅祐とう人也

一 我等句 紹巴きんし返し おもしろしと被申 三句ほめられ候」

V

〔12月2日〕一 今日 千句 津はいとう(津田隼人)殿女房衆 禅永ニ御

あつらへ候て 今日 発句くはり仕也

V

〔6日〕一 津田隼人殿御女房衆より 禅永ニ千句御あつらへニて 今日

かきたて参候」

V

〔天正18年2月〕

一 (二月) 廿五日 会所連哥ニ参 山中吉内殿連哥也」

一 (二月) 廿四日 桑山修里大夫殿より 禅永へ連哥御あつらへ也

V

〔3月〕

一 (同四日) 禅興へ関白様御夢相参候て ぎん三枚 びた百疋参候 御ひ

かし殿使

一 (三月) 近衛殿様きやうきに」御成候 れうさん様の御子さまの事也

△資料8▽

北野天満宮蔵。目代〔昭世〕日記ノ内

『天正拾参年五月廿九日ヨリ色々引付』

〔天正13年6月〕

一 同廿四日ニ貝川与五郎 六十六部つれ候て 札一枚持候て来候 右子細ハ 明日廿五日ニくわんしんを仕度候間 奉願候由候間 則心得候返し申候

一 廿五日ニ松梅院ヨリ中間与二郎ヲ以新平殿ヨリにて候 あの八からかねの六十六ふヲハ是ヨリ置候哉 案内申候つる由申候か 中く我等へ案内申候間 我等置申候由申候也 使申様ハ さりながら何も坊へ御出候て御申候へ由申候間 やかて参候て様子有やうに申明候ハん間と申候へと申返し候也 しはらく不参候間ニ西田右近被来被申候様ハはや内衆シテすまし候つる間 坊へ参におよはす候哉と被申候間 さりながら先参 新平殿へ成共 せんきの有様ヲ可申候ハんと にしたに申候へハ 其も可然候ハんと候間則「御たひ所参 新平ヲ尋候へハ留〔主殿カ〕にて候由被申候間 尋候つる由申候て給候へと申帰候其云次ハいなゝミおたきり也 此兩人ニ申置帰候 さて其はんニ新平殿ニ東のちやの元にて相候間〔有やうに〕つふさに申渡候也 さりながら御腹りうなき様ニ奉願候と申 さて帰候也

一 廿五日ニ朝貝川与五郎 彼六十六部ノ上人又同宿二人同道申来 彼八からかね一まはし御目にかかけ候ハんと 彼上人被申候間 我等返し昨日忍に一へんみ申候間 同事にて候由申帰し候

一 七月一日 御手〔て〕 水不参候

一 〔明日〕十三日ニ秀吉 大里様へ御能を御目にかけられ候ハんとてこしらへ候 是付はしかゝりの松松を□切に□せうへもん殿より折かミにて 松〔はい〕院へいからし甚へもん兩人して 秀吉からも北野ハ竹木はんきせいにて候へ共 さりながら是ハ王さまノ事にて候間〔下略〕

△資料9▽

北野天満宮蔵。目代〔昭世〕日記ノ内

〔天正15年正月〕

内「天正十四年九月七日ヨリ日記」

六日ニせんす万さい来候 いつもハ五日成共 ひやさけのませ候

△資料10▽

北野天満宮蔵。禅昌日記七冊ノ内、一。

原表紙ナシ。〔天正16年6月ヨリ〕

〔天正16年7月〕

廿六日

一 妙藏院〔禅祐〕へ連哥ニ参候 ひるめし有也 連哥五十ふん書也 夕立少する也 禅永ほうしんたん薬御あわせ候也

廿七日

一 連哥候也 あきの森殿よりぎん一枚にて御あつらへ候

廿八日

一 禅興法印ニ連哥三百ふん 秋助右「御座候 朝からニ而八ツ時ニはて申候 又妙藏院ニ而夜半迄大酒有也

廿九日

一 小島新平 西田蔵介 畠屋しきニ大ミやう衆御取にて候間 我等ニ参玄以法印へ申候てくれ候へ之由にて参候 御留主ニ而則罷帰也 大和大納言殿へ秋之森ふるまいにて 見舞ニ法印御出候由候也 能も大和衆仕候也」

〔8月2日〕

一 禅永〔禅昌祖父〕へ秋の森とのより連哥 ぎん一枚にて さきの月連哥御座候 連哥御やり候へ者 又礼ニ三百疋 禅永へ給候

廿四日

一 雨降 夜前 八ハたより さん之祈禱ニとて 二十疋にて 連哥あつらへニ下人参候 するくと子生候時者 天神さま鐘のおゝ主おちて参候ハんと申文来候也 禅永返事有

一 今日朝

内之物共ニ汁給也 七度参有也」

一 大里ニ能有由聞 二日より今日四日迄のふる 音聞 めい人共しのきの音也 なり物以下 一番ツ、かける也

〔6日〕

一 今日 丹後より閑斎御上洛也」

一 玄以法印より梅軒状参候 関白様御用とて 松虫 すゝむし 吹候て上候へと申来候 則吹候て あくる日遣候 又宮仕中へも虫かゝり申

永正八年六月九日 当社御神楽事 如往古三千疋可下行之由被仰出也 此

神楽事者 禅光曾祖父禅能僧正時 案人懸目者也 於八幡過分祿物等給之処 於 当社「指祿物不給之由致訟訴候処 無異儀旨申 然者三千疋宛兩季可下行之由申候処 福田庄代官方より 執度之由申条折帶出畢 然間于今福田為料所由申也 是者当坊私之敬信ニ最初申付儀也 福田御寄進状ニ相見者也 雖然 毎度一方向御下知お給 如此申間只今之儀も先応 上意申付也 案人中役者不足之由申候 公家中綾小路殿父子其外又兩人被出畢 神木者当坊令頂戴也 公方へハ不進上也

〔永正10年6月〕

九日 御神楽料十五貫文下行 庭火料百疋從案人方公人方へ下行云々 曉天神木送之頂戴如例

〔永正12年1月〕

三日 裏白会 懷帛八枚 如先々連哥在之 珍重々々
□□る日や又若水の音の庭 禅光

八月十五日 於会所 高国連哥御興行之間 為□合三荷進之 房州被出也 冷泉井殿宗□〔石偏〕被出也

よしや□こよひの秋ハくもるとも

月のたゝちハ神をみるらん

高国

よしやこよひくもりはつとも秋の空

月と心の君かひかりに

禅光

観世大夫罷出うたいあり

〔資料6〕

太田武夫氏蔵。紹巴書状。内容ニヨリ天正5年。

返々 銘のある茶臼求出候を 昨夕開候 内々つり物我等へくれらるへきとの儀候故にて候 此由菊右へ御伝所仰候 徳順へハ齋名拙者昨日出候 仁流齋と号ス 仁の徳八嶋の外までなかるゝ事 順

なる故候 古今常々明にて候 猶仁流齋より菊右へ可被申候 以上

今度者初而对談少々申入故 御心安仕立 却而御心中難測候 無異儀御下国候哉 御遊興共奉察候 拙者所持之水さし御開敷 御下向已後 出所相伝之事及承候とおしく成候 御秘蔵あるへく候

随而富松菊右衛門殿へ申候 去月於北野鳥居祈禱候次ニ 内会所無縁所之儀候 為修理万句執行之事 從社家被頼候条 来春より可相始 御発句之事 御家中へ被仰勸候ハ、可為本望候 於様子徳順可被申上候 神非例をうけずと申候間 公役めきてハ無詮候 此題のかすよりまさりても 又不足もくるしからず候 五ヶ年已前 非分礼物を人の寄進候て加修理候へハ 結句焼失候キ 被成御分別 御奉加所勞候 拙者本願に成候 瓦葺にと存儀候 旁奉期来便候

将亦不入儀ニ候へ共 筆次候 先度御覽候 和州片岡之城 去廿八日ニ惟任殿 長岡殿白中ニのりとられ そのきほひにて 信貴城(あくれ)

ハ十一日夜半 松永殿父子腹をきられ候 五日ニハ孫十一(十二歟)歳の若衆うつくしきを車にてわたされ候て 六条河原にて生涯候(同亦十三今一人) 両車にて候 我等ハ聞さへにて候つる 徳順昨夕招候て一程近日所持候物を開候へハ つり物被持候てくれられ候 徳公ハ河原之車見たると被申候 去廿四日夜より 客星近年不出見え候 禁中にて仁王会御行候 猶書而可申述候 恐惶謹言

十月十三日

(花押)

忍川殿参 人々御中

〔資料7〕

北野天満宮蔵。目代〔昭世〕日記ノ内、『天正拾貳年正月一日ヨリ引付 目代 相模昭世』

〔天正13年正月〕

五日ニせんすまんさい三人つれにて来候 庭ニ庭ヲ敷候て まはせ申候

(能徳来ることハおち候間 おくに書候)

さてあからせ 神く御きまいらせさせ申候 銭十六文 扇一本 ひしはなひら三重とらせ候 さてひやさけをのませ申候

△資料5

北野天満宮蔵。松梅院禪光ノ拔書一冊。標題「社家条々引付
拔書也」但永正元年ノ八月ヨリ也ノ永正十二年迄 禪光

〔永正4年4月〕

廿日 銘玉房被來也 兵法虎巻相伝申也 珍重

廿一日 殿中御能御座云々 翠簾可被借召之由 為伊勢右京亮承進上申也

廿六 銘玉房被來 虎巻被行借物事

一白米六升 小豆用意 赤飯ニ申付也 髪入ニ廿 はおもる也

一白餅數百 一酒百文

一のし百本 一饅三ふし

右魚物ヲ除テ飯酒餅ニ二分テ備進之 口伝在之

五月一日 香西弟順藏主方 丹後立陣夫申懸之間 先規之様雖申之 既就

此儀 今度賀茂発向之条 重雖申之 不可承引之由候間 不及力者也

〔中略〕一社令談合之 令出錢者也 当坊斗除之

永琳院 貞福院 盛輪院 勝藏坊 観音寺 永国寺〔百廿文宛〕

会所庵 目代 八嶋庵 阿弥陀堂 宮仕中〔十一間〕維那二人 主典

西田 野村 中間弥二郎 亀若六郎 与次郎 各六十文 西田被官二

人 成孝被官二人 出錢也〔下略〕

〔8月16日〕

一 臨時御供下行次第

米一石 代毫貫五百文 但代千時寄也

雑用钱 毫貫五百文 衆人録物 先々五人分雖令下行 人数當時不足

之条 三人分三百文只今下行也

〔永正5年正月〕

三日 裏白之会如例

〔3月〕十一日 御判御礼参上 式千疋 太刀持進上之 然而御会之時分

致参上之間 一首可仕之由 寄花述懷御題お被下 当座之儀令迷惑者

也 殊早速可仕之由 冷泉殿被仰之間 任口畢

数ならぬ身をもなけかしちる花の隠を枝の春の夜の色

V

〔永正6年11月〕

廿五日 衆人筑前守神樂事申間 以千疋可執行之旨種々申付 令領掌也

請取申御要脚事

合拾貫文者

右為当季御神樂下行物 且所請取申狀如件

永正六年十一月廿四日 〔山井筑前守〕景通 判

一 千疋下行之時者 五十疋簀料 公文承仕ニ申付也 当坊可出仕哉之由

及案内云々

V

〔永正7年3月〕

一 当社そうの一事

うり申北野ノ御かくられうの事 毎月十八日ニ一貫文あり 此外正月

一日一貫文 六月九日ニ一くわん文 八月一日二貫文 御むまの上二

くわん文 此分うりわたし申うり文也 しろハ永代五十くわん文也

文安二年二月十五日

八まんのそうとのへ

此状をもつて 二所八幡の御子申といへとも 一向無跡形申事也 殊

文言相違等在之 旁以不信用之由申者也

当社そうの一あやこ諸神役事 八まんのそう文安二年のうりけんとか

うして子細お申といへとも 彼せうせき分明ならず 又社家ニおいて

一向無其沙汰者也 殊あやこ事ハ 神たくニより其職ニ任する間 他

ニ異なる上者 向後他のさまたけなく さんきん相違あるへからず

如此さり状如件

永正七年三月二日

V

六月九日 神樂事 福田庄 畠山上野介代官存知之处 在所百姓不致承引

不致所務云々 然間無料簡之由申候間 大藏寺殿御進上之折帛錢千疋

在之 衆人中へ被下 以此千疋参勤云々 役者中へ簀料百疋 自衆人

中下行云々

V

おことわり △資料3▽と△資料4▽の間に左の「引付」二冊が未翻字です。

A 松梅院 禪予の日記四冊の内、四 △延徳4年8月△同年9月分▽

B 松梅院代禪慶の日記二冊の内、一 △明応3年3月△4年6月分▽
前者は禪予の最晩年（明応3・正・14歿）の一冊。後者の禪慶は連歌が不得手か、その日記には連歌記事に乏しい。神楽料の記事、「境内舞猿樂以下勸進」禁制の記事などが三、四ヶ所あるだけのようです（続稿）。

△資料4▽

北野天満宮蔵。松梅院代禪慶ノ日記。標題ハ「引付
明応八年十一月ヨリ／同九年二月迄儀 此帖在之」

〔明応8年11月〕

九日 天氣吉 今日於当坊御連哥在之 明珠院 永琳院 貞福院 勝藏坊
卿公 御連枝此等也 執筆海老名也 雖夜入御懷帟奉納 梅寿殿様御
杜参 御伴衆梅香院 御同道海老名 太田 御中間小者 近比珍重々々
々々 杜頭御番衆能玉也

〔12月〕

一 今日〔2日〕八ヶ所日供分先昨日以到来 如先年備進珍重々々 下行
分之事 米五斗三升（西京升定）七百七十文 御雜用錢三百文 樂人
三人分 何時も依人数下行之 一人拾足宛也云々

十三日 天氣同前 今日吉日間 御連哥一折興行 但四十四句也珍重々々

〔明応9年正月〕

一 今日〔3日〕御祝 御門弟中御出在之 詠初如何在之 成孝モ参上仕
詠之〔下略〕

一 今日 千秋万歳 出仕申 祝言申 二帖一本金二十足被下之

一 今日〔11日〕就吉日 一折御興行 当坊御発句也

一 今朝 杜頭御事始 如例年在之 珍重也

一 今日〔12日〕八ヶ所之御供申付備進下行如何 樂人四人参 四十足下

行之

V 一 今日〔29日〕会所坊主 江州ヨリ上落^{（マツ）}在之 〔14日、禪予七年忌トアリ〕

〔2月〕

一 今日〔10日〕公方様当所へ御成在之 於馬場御馬被召之 其以後杜頭
御前へ御参候テ則御下向在テ会所へ御成候 於会所御 一△参当坊為
御礼御出仕在 柳五荷御取居五種御持参在之 上意ヨリ題御給在之間
一首被遊則於御前自筆 梅寿殿被書進上之 当座^{（マツ）} 不過之珍重々々
々々 宝成院モ柳三荷ニテ出仕 題被下也 其後「御所様夕六時前ニ
十一日 天氣雨降 面番内田

一 就昨日御成 今朝又当坊御出仕在之 金一腰御持参 次ニ今日之誦經
進上之 上意神妙被思召由候也

一 如此儀公私目出度由ニテ 今晚ヨリ夜深迄 於御上御酒モリ在之 卿
上座坊梅香院以下其外会所坊主其外内衆悉大酒共也 弥珍重々々

V

一 今日〔14日〕於当坊御連哥在之 但月次分ニ今月ヨリ相定者也 当坊
御発句 脇永琳院 執筆松菊丸

V

一 今日〔15日〕於会所連哥興行 宗匠兼載発句也
松のミか花も一夜の朝開也

〔26日〕

一 松田豊前方ヨリ雜掌一人可参由候而中間来 則内田申付参処
当杜御神楽六月霜月両度分退転 無勿舛通 依樂人等申 子細等被相
尋也 豊前以見参被申云々

一 此御神楽之儀 自当坊返答之趣ハ 古当坊富貴之余 一度分三千百足
分 然者両度ニ六千足分下行仕 此神楽申付訖 今ハ当坊無力過法候
上者 千足分ニテ此間モ執行訖 如此依無力之儀共 近年千足分ニテ
執行在之間 此分者何時モ可申付候処 樂人等以古之引懸 三千足分
ニト雖数度申 当坊無承引 此趣彼等ニ可被仰聞分也 能々被分御沙
汰御成敗可爲肝要由被申也

〔23日〕一 就当所舞 近衛殿様上臈御方 御棧敷在之 仍御量簾障子等事

被仰聞 御成間進上之 以西洞院殿被仰出也

一 今日於明珠院 舞聞之 門弟衆被出也 柳二荷着色々為当坊持之也

V

廿四日 天氣曇也(自己刻快晴) 今日 東山殿様 御折 唐餅 麩 柿以

上(此柿ハムキテ積也) 一

一 自波兵書狀在之 即返事遣也

上様并御寮 今夕有御入 以成胤 宗祇上洛由言伝云々

廿五日 天氣快晴 日連哥所庭松久枯 近日根朽倒聞 今日 參詣人可出

入候間可申付由云々〔下略〕

廿六日 天氣殊勝(終日曇也) 房民部千句沙汰 初百韻発句事申間如此

陰たかき松のあらハす千秋かな

進上 為後証註置者也

V

廿八日 天氣殊勝 荒神清水江一七ヶ日參詣 今日結願 皆令満足珍重々

々 成就房へ布施十疋遣之 於清水 御幣奉之 十疋也 連哥百韻未

果云々

V

〔10月〕

六日 天氣殊勝 但自未刻少時雨也 宗祇今朝來臨

五日 天氣快晴(但自未刻少時雨也) 宗祇今朝「來臨也 明日一座興行由

自今日相触也〔下略〕

六日 天氣殊勝 今日連哥在之 人數ハ(上) 冷泉殿(為広) 西洞院殿

(時頭) 葉医之 茂(重) 長 寿印 湯河 浜豊後(同源六) 一進

藤 波々伯部 宗祇 肖柏 玄清 一寛 同弟子 蘭仲 嶋津内村田

父子 此外宗祇弟子一人

発句 木枯をよそけに菊のにはひかな 宗祇

庭をさかりに紅葉ちるころ 禪子

しつかなる山した水に月すみ(さえ)て 冷泉殿

冷泉殿御太刀(金) 被持 茂(重) 長(組卷) 持參也 及夜陰酒在之

V

〔12日〕一 加州所々御下知 今日書出也 并八坂庄同前「珍重々々」〔八坂

庄分ノホカ省略〕

北野宮寺領近江国八坂庄事 去々年以来乍令致代官 年貢難波候

以外之次第也 因茲四季御千句令退転之条 神慮巨測者哉 所詮未

進以下嚴密沙汰渡 松梅院可被執請取由被仰出候也 仍執達如件

(延徳元) 十月二日

(山徒) 大蓮坊

長秀(判)

為規(判)

一、八坂庄の御下知、今日書出也。并八坂庄同前「珍重々々」〔八坂庄分ノホカ省略〕
北野宮寺領近江国八坂庄事。去々年以来乍令致代官。年貢難波候以外之次第也。因茲四季御千句令退転之条。神慮巨測者哉。所詮未進以下嚴密沙汰渡。松梅院可被執請取由被仰出候也。仍執達如件。
(延徳元) 十月二日
(山徒) 大蓮坊
長秀(判)
為規(判)

V

廿七日 天氣快晴 自今日於住坊千句以隱密興行云々 子細在之

V

廿九日 雨降也 今日御千句結願 御發句脇第三注進上仕也 同御卷數進上仕也

一 教春御出也 自冷然御房 盛輪院事被仰也

卅日 雨降也 自今出河殿若公様 当社諸神通夜事次第具可致注進由 以大館治部大輔被仰出也 即五ヶ日神事檢「末社之本地一夜宛通夜由言上仕也 有御意得由被仰出候 又昨日進上仕候御發句脇第三 近比面白被思召候由被仰下也 面目之至也 今日 御卷數所々進上也

V

〔6月〕

一 今日〔9日〕御神樂關意 加州諸神領一所も不入杜家之手也 言語道断次第也

V

十七日 天氣快晴 浜殿來臨 今日 慈清院借会所觀音懺法在之

V

〔21日〕一 会所九日会 今日在之

〔18日、御講ノ記事アリ〕

△資料3▽

北野天満宮藏。松梅院禪予日記四冊ノ内、
三。標題ハ「引付 長享三九 同十月」

〔長享3年9月〕

一 自今日〔16日〕於今少路盛輪院坊地香若大夫勸進在之

十七日〔自今日土用〕天氣快晴 清春ト云願主 杜頭ヘ灯呂寄進也 灯明

料卷貫貳百文到來也 珍重々々 小袖屋取続也 同千句奉納

一 自舟井庄就相懸陣夫注進在之 即上原方ヘ以而使申遣也

一 当所舞勸進事ニ付て杜家奉行方ヘ如此遣状

於杜家境内舞勸進事 諸家被官人等致張行候条 不可叶由雖度々加問答候 不能承引 自昨日〔十六日〕及其企候 新儀上者神慮難測 候 早々被成御下知 被停止候者可目出候 此旨宜預御披露候 恐

々謹言

九月十七日

松田丹後守殿

禪予

V

一 〔18日〕畠山中務少輔政近代謹言上

加賀國福田庄并山代等事

右子細者 鹿苑院殿様御代 至徳二年ニ 為長崎四郎跡被成下

御判知行之處 勝定院殿様御代 曾祖父將監入道御折檻之刻 一端

北野杜家ニ雖被寄之 聽而被召出 則被返下 四季之神樂於被定置

以來 令全知行訖 然仁去長祿二年 不預御糺明 松梅院申掠直務

仕候段 不便之至也 所詮神樂料者如先々致其沙汰 於下地」者任

支証之旨 如元被返下 弥為致奉公忠節 粗言上如件

長享三年七月 日

飯尾加賀守殿奉行也

一 北野宮寺雜掌謹言上

加賀國福田庄并山代半濟等間事

右彼庄者為重色御願之御料所 去応永廿五年十二月十八日御寄進御

判炳焉也 其後一旦雖令不知行 御申開 去長祿二年四月十六日」

重被成下 還補御判干今知行無相違之處 畠山中務少輔政近号旧領

被及訴訟云々 既当杜領事者有本主 雖及訴訟 有其理者可宛行替

地於宮寺領者永代為不易之地 可專神用之由 御判并御教書等明

鏡上者早被弁捐彼濫訴 弥可奉致御祈禱精誠之者也 仍粗謹言上如件

長享三年九月 日

以倉本遣之

V

一 〔19日〕一 就福田庄事飯加ヘ支状遣之

V

一 今日〔21日〕御供備進珍重候 仍案人筑前來而申様 今日御供〔笙〕

役者依傍□不參勤 殊非作病間 以格文ヲ可為如何由申之返答者 笙

役者 有數輩者以代官參勤可然候 但於無代者 委細者近筑申處」代

無之云々 然者不限此事 無了簡問 不可苦由返答在之

V

廿五日 天氣快晴 今日於密乘院 連哥在之 猶就御手水事 百足壺石札

ニ遣之 其連哥也 發句禪予

結ふ手もすゝしき水のなかれ哉

△資料2▽

北野天満宮藏。松梅院禪予ノ日記四冊ノ内、二。標題ハ『引付 長享参卯月日 五月 六月 同在此帖 禪予』

〔長享3年4月〕

二日 天氣快晴 今日少々上様へ御訪被申云々 南御所様へ御別物□懸御

目也 次御陣 御所様御詠

藻(も) 塩くむあまの袖たれ浦浪に

やとるも心あり明の月

事外之御自贊之由云々 此御詠ハ已前被懸也 余之殊勝皆書付置者也

一 常清院殿与申也 御道号ハ(悦山と申也) 道治と申也(ハ御名也)

春の野のつくくしをハまた見ねと

ほうけはてたるをれかつらかな

此御詠ハ御自筆にて被懸たるを 上様めされて御上のよしなり この御心も六角か事おほしめすまゝに御対治もなきよしを 御秘下の御心又御述懐の心なり いよゝあはれなる御事也」

一 当年正月朔日 御所様被召御垢離 天照太神を御拝ありて 六角か頸

を御覽せずハ則御命を召て給候へと御祈精あり 其夜の御夢ニ 朝日の出るを御拝あれハ 此朝日地におつると御覽しつるか かゝる御歎楽になるハ御祈精とゝきぬると 御所様上様へ御病中に御物語の由沙汰あり 毎事時節到來不及力次等歟

V

〔18日、御講ノ記事アリ〕

十九日 天氣快晴 今日 永大夫汁在之 自浜殿状在之 上様御発句 湯

河方申請 名号連哥致沙汰云々

なからふる身をうの花のさかりかな

むへほとゝきす月になく山

政春

V

廿八日 天氣快晴 自今出河殿若君様(義材)以御発句脇 於当坊御千句

可致沙汰由 被仰出候也 無御要脚而例式御太刀一振御寄進 申次者

大館治部大輔(視綱)也 即於当坊千句沙汰也

余の木ニハ勝てたかし夏の松

しけりかうへの山そまきれぬ

見 吉

出るより四方にすゝしく月はれて

禪予」

廿九日 則写御発句 脇 第三 大膳(館カ)方へ遣也 今日天氣快晴

五月分大

朔日 天氣快晴 今日 千句結願

V

八日 天氣殊勝 今日湯河房州(政春)寿印 浜豊州 明智兵庫頭 同右

馬助 永運有来臨 而百韻興行在之 發句ハ政春也 柳三荷 折三合

被持也 終日有一会 殊大酒在之 政春打刀仰也 即又出也 明智殿

金覆輪 浜殿三百足折席同金

またるなよ初音ハすきつほとゝきす

政春

軒はつたへてにほふたち花

禪予

V

〔8日夜、京大焼亡、自室町南角、御靈辻子角迄〕

十二日 天氣快晴 但申刻夕立降也 今日 今宮殿御父子遷御也 千秋宮

内少輔殿へ加州書状遣也 朱番帳改而参社頭也 会所留守珍海今日死去也」

十三日(省略)

一 細河殿鴨居方より 会所坊主可定置由使在之 為当坊相叶之處 坊主事 為其方可被定置由承候 無覺悟由申遣也

V

廿六日 雨降也 今日自今出河殿(義規)為御千句料 御馬一匹(鶴毛印

雀目結) 御太刀(則宗)被下 御発句在之 即致沙汰也 今日竹田

法印方より樽一荷 密館 柑子被送也 即南御所様へ除館進上 自春

寿院殿御文給也 面目至也

五日 天氣快晴 今日於会所 宗匠始之連哥在之 人數十八人 種々奔走
雖三百足持參之 何も被返之間 不能是非 発句

あらぬ名をかるや天ひこほとゝきす 宗祇

たゝうの花ハミねのしら雪 (湯川) 政信

夏山ハこそあゝのほかに月を見て 禪予

五日会罷出事 雖無先規 宗祇別而云知音 結城越州副狀在之間 旁
罷出也

六日 天氣快晴 今日宗祇へ罷出 昨日三百足 重雖持罷出候 不被請取
種々申問 百足分被納 残被返畢 酒在之

九日 天氣晴也 今日 盛輪院法案在之 (於御陣御発句)

花の名の卯月ハ雪の夕哉

御庭ハ梢の若葉そふ比 宗祇御脇申云々

十三日 (夜) 雨降 今日於盛輪院 為当坊法案在之 今日相園坊千句 三
十足相副奉納之

十八日 天氣快晴 今日 以卅三人三千三百卅度之奉廻 御殿皆令満足
此外立願千句在之 (下略)

十九日 天氣快晴 今日於盛輪院 富田法案申也 発句事申問如此

松ひとり草木にもれて夏もなし

今日 就八坂庄事 自七郎殿書狀在之 宝泉使也 領掌云々

廿三日 天氣曇 今日密乘院連哥在之 長源招請 奔走在之

晦日 於鉤御陣御懷帝同宗匠始懷帝 今日奉納之 為後証注置者也 (下略)

(5月)

十九日 天氣快晴 今日 雞頭院所望之間 御縁起於当坊奉読之

廿一日 天氣快晴 御供不備希代重事云々 今日 御陣へ富田下之 御誦

經進上之 自七郎殿被誦新古今今日書出遣之

(6月)

四日 雨降 案人筑前來 々九日御神案事申云々

九日 天氣快晴 今日御神案如近年以千足不可致參勤之由案人筑前守申之
既近年為如此之処 及違乱之条不可然 殊加州神領共 依国々動乱社
用無納之由 雖令問答不致參勤也 惣而此御神案事 已往者以千足内
參勤云々 禪能法印時 案人等八幡宮神事祿物等過分由申之間 然者
以案人扶持儀 一季以三千足沙汰之云々 福田庄此在所由 案人雖案
人申 御判等無其御文言 富墓庄ヨリ永享比者此祿出云々 此分社
家奉行松田丹州へ致注進者也

今日 法案在之 発句ハ

影うつす御池ハ神の泉かな

松にすゝしき夕くれの月

禪予

松寿丸

十一日 天氣快晴 御陣へ御誦經進上之 使中間右衛門二郎

今日於密乘院 連哥在之 二百韻 発句

山風よこえて世にふけ雲の嶺

禪予

十四日 天氣快晴 今日於密乘院 百日連哥結願在之 千寿殿代発句沙汰
之 (今日朝五打過ニヤ子ノ石ニテ軒ニ懸止 可占者也 石河申旨在之)

にほひけふ満て秋まつ花野かな

今日 丹波衆三荷上 東山殿様へ一荷 御陣御所様へ一荷 結城七
郎殿一荷 次就禪椿事 社家五人連署取之 堯慶 明順判形也

廿二日 天氣快晴 永琳院連哥出之

廿三日 雨降 於内会所如於 (日) 連哥所 近年笠置連哥在之云々 不可
然由各沙汰在之間 留守坊主 玆海召寄相尋之処 更無其儀由申問
所詮於自今以後者猥不可有其沙汰由堅申付者也 為後証注之

V

廿二日 天氣快晴 今日永琳院連哥在之 其婦 密乘院ニ酒在之

V

廿六日 朝天氣快勝 夕雨降 今日 光乘坊來對面 富田御陣へ遣 松田
對州方へ井上遣之 伊右可來由就被申也 今夕盛輪院卅六句連哥在之
明雅 禪慶衆也 四打時分終被掃也 爰今夜八打過「程 永琳院へ強
盜入也 北面垣切破也 近比事也 但皆無為珍重々々 當時不及了簡
次第也 物少々取之云々

V

〔3月〕

四日 天氣快晴 今日 旧冬順廻返 於盛輪院沙汰之 門弟衆悉被出也
連哥在之

V

九日 天氣快晴 今日 盛輪院法案在之 又今日 自鼻山殿 菅原庄笠間
保代官事 服部方ニ就契約儀 御悦喜之御状在之 面目至也 仍自御
陣 御所樣御夢想御懷帋到來 即奉納申 自二階堂書状在之 返事如
此 御発句
かすミはれさくらはかゝる梢かな
そてにあまきり月のあさ風 御

一 御法案御懷帋為御礼拝領仕候 即令奉納候(御祈禱之事) 別而奉
致御御禱禱(精誠)候 此旨可然之樣可預御披露候 恐々謹言
三月十日 禪予

二階堂殿

十日 雨少降 教春御寮今日御帰
十一日 雨降 親世四郎二郎礼來 連哥他行之間 重而可來由申之

V

十三日 天氣殊勝 於御陣 御夢想懷帋 自結城越後守 可寫給由被申間
今朝寫遣之 密乘院へ有連哥 罷出 柳一桶遣之

V

十六日 天氣殊勝 今日密乘院へ罷出 連哥在之 終日酒在之

V

廿一日 天氣快晴 今朝八坂庄初納千疋 御樽一 餅百五十枚 自大蓮坊
到來 返事遣之 但重々子細在之云々 又自香嚴院殿(清晃) 百疋御
寄進 御使松阿弥云々 明珠院ニ連哥在之間 即御返事不申入候 又

□地方福田年貢千疋割符到來 次今日禪椿致社參也 其次ニ当坊へ來
堀共見廻云々言語道斷次第也 但明珠院連哥罷出留守之間 一向不能
是非也 余之上意蔑恕之条希代事也 次東山殿御誦經進上 又今日御
供關怠 神慮難測淺増々々

廿二日 天氣殊勝 今日永琳院連哥在之 今朝香嚴院殿昨日百疋就御寄進
御卷數進上之 使江村

廿三日 雨降 今日 御陣 御卷數 社家奉行へ遣之

廿四日 雨降 東山殿樣へ進上御折 椿餅一折 暑預一折 海苔一折
以上堀河殿御房申次 使安原 今日於明珠院連哥 柳一桶持參 今夕
真福院上洛由申 椿片持參 又組卷一腰 禪慶出仕礼云々 有子細不
能對面云々

廿五日 天氣晴 但曇也 今日法案申也 発句
花ハ世にちりてもぞそき深山哉

今日 光乘坊來臨

廿六日 雨降 七郎殿へ卷數遣之

廿七日 天氣快晴 今朝 永密大夫汁在之 御す丸今朝招請

廿八日 天氣少曇 今朝自結城越後守 会所奉行事 被仰出種玉庵宗祇之
由 書状在之 并宗祇状在之 珍重々々

廿九日 天氣殊勝 今朝宗祇來臨 又今日已刻 禪椿為 上意可召進由
在之間相語人遣処 其身沒落 若党兩人 法師一人 井上下人生涯希
代事也 禪椿者清大寺殿へ逃入堅申間 被拘置被落畢 然間一社集會
在之也 以連署申上 連署人數十七人

V

〔4月〕

三日 雨降 大風吹也 今日 密乘院ニ持寄連哥在之

四日 天氣曇 今日宗祇來臨 明日会所連哥所用共被申 肖柏 全藤同
道也

- 2 北野社引付(禪予日記) △長享3年4月△同年6月△
 3 〃 (〃) △長享3年9月△同年10月△
 4 〃 (禪慶日記) △明応8年11月△9年2月△
 5 〃 (禪光拔書) △永正元年8月△12年12月△
 6 紹巴書狀忍川殿人々御中 △天正5年10月13日付△ 太田武夫氏藏
 7 目代(昭世)日記 △天正12年正月△13年2月△
 8 〃 △天正13年5月△16年11月△
 9 〃 △天正14年9月△16年3月△
 10 北野社引付(禪昌日記) △天正16年6月△同年9月△
 11 〃 (〃) △天正17年10月△19年正月△
 12 〃 (〃) △天正19年5月△同年7月△
 13 〃 (〃) △天正19年10月△同年12月△
 14 目代(昭世)日記 △文祿2年5月△同年6月△
 15 北野社引付(禪昌日記) △慶長4年4月△同年7月△
 16 〃 (〃) △慶長6年3月△同年6月△
 17 〃 (〃) △慶長7年6月△同年7月△當該記事無シ
 18 預能長記録 △慶長3年11月△15年11月△
 19 天神八百年御忌之事記 △元祿13年正月△同年3月△
 20 御寺務御記録之写 天満宮八百年御忌△元祿13年2月△15年3月△

△資料1△

北野天満宮藏。松梅院禪予ノ日記四冊ノ内、一。標題ハ『引付 長享二年正月 二月 三月 四月 五月 六月 禪予』

〔長享2年正月〕

〔10日〕今日 東山殿様 并長谷上様へ参上 其外東山所々 南御所参上
 静住坊百足折掃持参 今日密乗院連哥在之 罷出 直出京 御房達悉
 参也 今日 佳例事始 大工来 方々参上 御礼之間 松寿丸対面沙
 汰之 珍重々々

廿日 天氣雨降 今日 天神講行也 餅散在之 門弟来臨 以次御縁起読
 之 今日 自右馬頭殿 佳例円鏡一面到来 珍重々々

廿二日 天氣殊勝 今日宇都宮殿来臨 依有永琳院(禪慶)連哥 不会被
 掃云々 仍今日 永へ梅一荷召寄也

〔23日〕一 毎月十八日御神楽銭 両月分今日下行 五貫文請取到来 自
 惣一方出之

廿八日 天氣殊勝 今日盛輪院法案在之 発句被申間沙汰之

世にほふ梅ハ此野をはしめかな 禪予

今日(目) 松田丹後守方 畠山左衛門佐殿へ被成 御奉書 但去年三

月日付也 去年引付注之

今月廿五日 渡部孫左衛門尉発句事申間 遣之

松にそふ梅も千とせの句かな

祝言計也

同廿日 小島六郎申様 自当社被下梅之由蒙夢想間 為法案発句由申

間 遣之

神風の告ある梅の句かな

比興々々

〔2月〕

三日 天氣快晴 但昼程少霽降 晩景即快晴也」今日 吉祥院へ参詣 人

数 幸充 永承 明雅 禪慶 禅果 禅快 禅任 玄禅 盛祐也 金

覆輪一腰 燭燭一丁持参 連哥八句法案 発句

けふことの春をとひけり神の梅 禪予

八打過掃路 小島 渡辺 柳出之 酒在之 出立者自門弟柳一荷 是

者参籠中可被出梅之処 以代参籠之間 今日其酒被出云々 珍重々々

宇都宮殿来臨也

七日 天氣快晴 今日 法案始在之 今日 服部礼ニ来 補任遣之 式百

疋 太刀持来 諸人同百足持来之 今日 波庫中日 吉原御経在之

燭燭五丁出之

北野社古記録(文学・芸能記事)抄(一)

△昭和43年10月20日受理▽

棚 町 知 弥

Excerpts from the Diaries of the Priests

of the Kitano (Temmangu) Shrine

concerning Literature (Renga) and Theatricals (Kagura)

— Part One —

by Tomoya Tanamachi

はじめに

本編は、北野天満宮所蔵の古記録十九冊のうちより、文学・芸能に関する記事を、年次を追って抄出したものであるが、筆者の別稿

北野社家の連歌生活 —— いわゆる「北野の連歌師」について ——

北野社の文字について 附・近世初期北野社頭の諸芸能の資料篇(一)にあてて意図をもって編集した。連歌関係の記事のうちには、大日本史料に収められている部分もかなりあるが、同史料の収録方法では社家の連歌生活の通観には不便なので、それらの部分を省略しなかった。

実は、北野天満宮所蔵の、いわゆる「北野社引付」についてさえ、四冊分の調査を残している(宝徳元・寛正2・延徳4・明応3)。東京教育大学所蔵の同類の記録ならびに裏白連歌もまだ調べていない。かたがた、本稿の拙速を恥じるが、紙面の都合もあって、次号で補うことにする。

北野に写本(昭和)のみある年預坊能哲の日記二冊は、永禄四年三月十七日より十二月晦日に至る僅か十ヶ月間ではあるが、宗養・紹巴との交渉も含めて社家の連歌生活の記録としては、本稿に収めた松梅院禪予や禪昌の日記よりもはるかに密度の高いものである。次号までに原本を見出しく願っている。

(6)の紹巴書簡は太田武夫氏御所蔵のもの。紹巴と北野の関係が表われているので、ここに収めた。太田氏に深謝申し上げる。

なお、末尾の二点(9)(10)は、本紀要創刊号に紹介した、太宰府天満宮における大御神忌の資料と併せて検討すべきものである。

(一)は原本の書入れまたは細字の部分、「(一)」は編者の註であることを区別する。上欄のVは抄録の切れ目を示す。漢字は当用漢字に改め、また、句読点を施すかわりに一字分の空白を設けた。

本資料の調査・紹介を許された北野天満宮香西大見宮司をはじめ、お世話になった同宮の方々に深謝申し上げます。昭和41年秋俳文学会(京都府大)の翌日はじめて訪れた北野社でたまたま御一緒になった伊地知鉄男先生より「引付」のことを承ったのが本稿の発端であった。宰府連歌史研究の当初より御指導いただいている中村幸彦先生・島津忠夫先生、また今回も解説に多大の御教示を賜った川添昭二氏に厚く御礼申し上げます。(本稿は昭和43年度科学研究費による研究の一部である。)

目次

- 1 北野社引付(禪予日記) △長享2年正月〜同年6月V

有明工業高等専門学校紀要

第4号 (1968)

昭和43年12月28日 印刷発行

編 集 有明工業高等専門学校紀要委員会

発 行 有 明 工 業 高 等 専 門 学 校

大牟田市東萩尾町150

電 話 大牟田 ③ 1 0 1 1

印 刷 西 田 印 刷 所

大牟田市小浜町25

電 話... ② 3 4 3 3 - 2 0 8 0

CONTENTS

A Report of the Results after Three Personality Tests Masaaki Teramoto and Shozo Arao	1
Numerical Solution of Root Locus (Part 1) Gozo Kimura	21
On the Current-Voltage Characteristic of Fe_3O_4 Yasutaka Nakamura	23
A Consideration on the Chemical Education of the Basic Process Hiroshige Higuchi	27
Experimental Study on the Flow at the Suction Side of Multi-blade Fan (Part 1) " (Part 2) Konosuke Kiyomori	37
<i>Four Quartets</i> : An Interpretation (I) "Burnt Norton" and "East Coker"	55
A Pattern of the Disintegration of the Southern Gentry — In the Case of Faulkner's <i>The Sound and the Fury</i> — Seiya Nishi	71
Excerpts from the Diaries of the Priests of the <i>Kitano</i> (<i>Temmangu</i>) Shrine concerning Literature (<i>Renga</i>) and Theatricals (<i>Kagura</i>) Part 1 Tomoya Tanamachi	81
Adaptation of Data : " <i>Sotan Hokku</i> " (a Collection of <i>Haikai</i>) A History of Renga in the Province of Higo : for a Reference to a Biographical Study of <i>Sakurai Sotan</i> (Part 1) Tomoya Tanamachi	93